

奇譚クラブ

1958年 8月号

入懸
選賞
作品
原稿
「身悶える妖精」 路加比利
実話小説「バーナナの人々」 南時夫



8月号

昭和三十三年七月三十日印刷 (第十二号 八月号) (毎月一回一日発行)
昭和三十三年八月一日発行 (毎月一回一日発行) (毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年八月号

8

奇譚クラブ

昭和三十三年七月三十日印刷 (第十二号 八月号) (毎月一回一日発行)
昭和三十三年八月一日発行 (毎月一回一日発行) (毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

臨時増刊号

集号 限定版



限定版SADO特集号発売中 売切ぬ中、直ぐお申込下さい！

秘蔵豪華口絵 (二十七点)

- 四馬孝・画名場面集
 - 別れる女 (八尾幸道作)
 - 夜汽車で逢った美人 (木堂 一作)
 - 危 遇 (富士宮義作)
 - 玩 具 (東風二助作)
 - 屠殺者 (宇間一夫作)
 - 変な奴 (宇丸一平作)
 - 或るスクリーン (浜田太郎作)
 - あの時の事 (土井敦子作)
 - 蜘蛛 (若木実男作)
- 滝 れい子・画名場面集
 - 移り香 (藤川力行作)
 - 若妻と黒牛 (西重三郎作)
 - 口説責 (正木真龍作)
 - 華やかなる制裁 (辻村 隆作)
 - 蒼白き抵抗 (辻村 隆作)
 - 非情の部屋 (辻村 隆作)
 - 夜の舗道 (南俊二解説)

▽皆様待望の責画責写真集△
マニア垂涎の傑作満載
遂に完成す。異色特集号

表紙 四馬孝・画 オフ色刷
口絵 写真版印刷 二十四頁
グラビヤ印刷 二十四頁
本文 口絵説明解説 百十頁

奇々編集陣が自信を以て皆様にお贈り出来る限定版特集号第一号です。座右に置かれて日夜倦みず眺めることの出来る可憐愛すべき皆様のお宝としての価値を十分に發揮することと信じます。

限定版のため、数に制限があり、ますので、その意味からも貴重品としての稀少価値を近き将来に於て生ずることと信じます。一度手に入れた人は必ず手放さない筈で

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします。故、何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持ちで御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

賞金

佳作 各 三千円 若干篇
優作 各 五千円 若干篇
秀作 各 一万円 若干篇

種目

小説、創作、告白、手記、体験、等
本誌に適合した題材を扱ったもの
枚数 三十枚乃至五十枚程度(四百字詰)
但し多少の増減は差支えありません。
締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿

「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表

入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以て報告します。誌上では入選作の掲載を以て発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用いて第五種開封便(百円につき八円)にて御送付願います。

読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

〔体験告白手記〕読者皆様の傷りなき現実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

〔映画、雑誌〕通信 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出題は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。

〔アイデア〕将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に、採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

〔レポート〕新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。

〔読者通信〕編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思ひ出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

○本誌月極購読料○

一月分 一冊 (送料共) 二百円
三月分 三冊 (送料共) 六百円
半年分 六冊 (送料共) 千二百円
一年分 十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方は景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十二巻 第十号
毎月一回 一日発行
定価 二百円

八月号

昭和三十三年七月三十日印刷
昭和三十三年八月一日発行

編集者 人 箕田 京二
印刷兼発行人 吉田 隆
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号
発行所 天星社
阪神口座大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手)等、どんな方法でも結構です。送り先は必ず指書でつきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

◎ 絶対に、他では入手できない責絵と

奇譚グラス

SADO 特

【 内 容 】

◎ 杉原虹児・画名場面集

○ 宿命の鞭

(住谷猪一郎作)

○ 女賊捕縛

(南 俊二解説)

◎ 南村俊平・画戯画傑作集

○ 大王様への貢物 水 槽

○ 戦友救出 いけにえ

○ うさぎの波乗りごっこ

○ 鞭を提げる女 四馬 孝・画(表紙裏)

○ 洋髪と日本髪 杉原虹児・画(目次裏)

秘作グラビア写真(八十一葉)

○ 緊縛艶姿十四態 田中 芳代嬢

(うつくしきいましめのかずかず)

○ 拷問・囚衣・懸崖 大塚 啓子嬢

○ 床間の花 花坂 道子嬢

○ 蠟 滴 愛川 悦子嬢

○ 白蝶の舞踊(連続写真)大塚 啓子嬢

○ 長襦袢 花坂 道子嬢

○ 野外ヌード・スケッチ帖

撮影・塚本 鉄三

すから、一旦品切になりますと、入手が非常に困難なことになります。只今、発売を機会に今すぐお忘れにならない中、お申込下さるようお待ち致します。

この華麗な縛り絵集だけでも、又、八十数葉に亘る緊縛写真集だけでも、十分に値うちがある筈です。それに加えて、詳細なる口絵の解説がついているのです。

どうか、この機会をお見逃しなく、先ず何をおいても一冊御注文下さるよう、お勧めいたします。

限定版特集号

定価 三百五十円(送共)

お申込は……

大阪市阿倍野郵便局
私書函 第十四号

天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番

奇譚クラブ 復刊第三十一号 目次

八月 号

四馬孝傑作集 拷問倉 提供・榎月太郎

緊縛映画名場面集
新東宝「朱・桜・判・官」 (若杉嘉津子)
新東宝「毒婦夜嵐お絹と天人お玉」 (江見・瀨戸)

新東宝「幽霊沼の黄金」 (瀨戸 麗子)

頭 口 繪
新東宝「サタン城の魔王」
南村俊平傑作戯画集
「床の間のニューデザイン」 「ロボット」 「模型鉄道」

特写真 後手(高手小手) 縛り 愛川悦子嬢

女殺油地獄(近松のサジズムについて) 南方 純 18

映画通信 「サタン城の魔王」の縛り雑感 佐渡 完 20

浣腸と妊娠(産んだおなかについてのレポート) 羽村 京子 22

レポート(四月一日付官報号外より) 佐渡 完 26

映画に見る男性責 榎 孫一 30

「映画通信」最近の時代劇縛りシーンから 蛙峨美也子 27

「研究発表」切腹風土記 壬生 三郎 38

現代マゾヒズム芸術時評 原 忠正 45

レーゼ「読物」シナリオ 海野 繁朗 50

妖艶木乃伊地獄



残虐なる女性達 森本 愛造 64
女斗美相伝 土俵四股平 66

話の肩籠 辻村 隆 70

告白小説『屈辱の砂』 榎村 奏 74

マゾヒズムへのいざない(第十一回) 黒田 史朗 82

愛好者の記録(あるコブラロ者の手記) ともま・かつひこ 86

鎖夏もやま座談会

「腰元女の吊責」と題して 牧 高志 90

魔教圈 No. 8 (その六) 土路 草一 96

「私の体験」鼻いじめのこと 花房 孝子 110

マゾヒズム百景 馬場 好男 112

「女性切腹並に自刃」特集号に関するアイデア 南方 純 114

「体験記」バー「ナナ」の人々 南 晴夫 116

碟シーンの役割 奈加田 須磨尾 123

E・Gクラブ撮影会報告 泉 かつ子 138

「風俗資料」 菅 良太 134

歌舞伎にあらわれた権美 三条 卓史 134

創作「紅山彦」 小野 猛 134

私の女性下着コレクション 路加 比利 144

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品 辻村 隆 158

創作「身悶える妖精」

妖虫は夜にうごめく 読者通信 164



〔新版女体緊縛フオト分譲〕

RRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR
2019181716151413121110987654321

柔肌と荒縄（須川令子）
海浜の緊縛（萩千恵子）
床間の飾り（佐賀美智子）
高手小手（花坂道子）
海老縛り（萩千恵子）
後手猿轡（須川令子）
後手足縛り（村田那美子）
鏡うつし（伊吹真佐子）
股間しぼり（須川令子）
鎖縛晒責（萩千恵子）
股間縛正面（伊吹真佐子）
女学生縛り（須川令子）
尻立縛り（萩千恵子）
開股しぼり（川辺砂登子）
猿轡の魅力（伊吹真砂子）
トイレ縛り（須川令子）
立木しぼり（村田那美子）
緊縛横臥（厚狭春江）
足揚梯子責（伊吹真佐子）
いたぶり（春日、伊吹）

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

各組一枚一組（全部送料共）

【新版】女体緊縛フオト

◎分讓◎

R組
九十組

(印画紙の大きさ 9×13 cm)

RR
545352515049 484746454443 424140393837 363534333231 30292827262524232221

帆立縛 (萩千恵子)
強烈梯子責 (伊吹真佐子)
椅子責め (佐賀美智子)
逆さ吊り (伊吹真佐子)
後手吊責め (伊吹真佐子)
股間縛後手 (中塚文子)
逆海老責め (伊吹真佐子)
高小手 (加賀利江子)
変型しぼり (萩千恵子)
松樹後手縛 (村田那美子)
くさり責め (伊吹真佐子)
薄羅の緊縛 (加賀利江子)
股間縦縛り (中富綾子)
首繩股間縛 (坂口利子)
手足逆吊り (伊吹真佐子)
和装責め (藤田節子)
仰向悦唐責 (川端多奈子)
後手首繩締 (加賀利江子)
乳房下緊縛 (村田那美子)
肉体美誇示 (伊吹真佐子)
お灸責め (春日、伊吹)
後手猿轡 (萩千恵子)
松樹しぼり (村田那美子)
コルセツト (中塚文子)
股間しぼり (萩千恵子)
手足緊縛 (萩千恵子)
後手しぼり (加賀利江子)
御開帳 (萩千恵子)
くさり責 (川端多奈子)
折檻の魅力 (須川令子)
雁字搦目 (津森静子)
股間緊縛 (津森静子)
のぞき見 (津森静子)
引き裂き (津森静子)

R
909988878685848382818079787776757473727170696867666564636261605958575655

後手しほり
猿ぐつわ
苦悶の表情
あきらめ
強烈しほり
トッブモード

全裸股間縛 (愛川悦子)
逆立折檻 (大塚啓子)
開股椅子責 (大塚啓子)
振袖緊縛 (花坂道子)
腰元吊り責 (村井知可子)
ヌード縛り (愛川悦子)
本縄しほり (愛川悦子)
股間しほり (田中芳代)
落花狼籍 (田中芳代)
ハリツケ (川辺砂登子)
帆立舟責め (益田房子)
逆エビ責め (愛川悦子)
変形三線股間縛 (愛川悦子)
ヌード縛り (花坂道子)
全裸横臥緊縛 (花坂道子)
ピクニック (村田那美子嬢)
ハイヒール (萩千恵子)
湖畔の宿 (須川令子)
尻立逆縛り (須川令子)
下着色模様 (須川令子)
目隠し開股縛 (大塚啓子)
後手高小手 (田中芳代)
乳房しほり (愛川悦子)
開股ベッド縛 (花坂道子)
全裸床柱縛り (愛川悦子)
亀ノ甲縛り (萩千恵子)
ヌード股間縛 (愛川悦子)
全裸乱れ髪縛 (大塚啓子)
ガンジガラメ (川辺砂登子)
腎羞責め (愛川悦子)

◎今月の新版 分譲品◎

益田房子嬢股間縛五態

五枚一組 四百円

本月号の口絵にて初めて登場
 した新人益田房子嬢の股間縛を
 今月の新版としてマニヤ諸氏の
 コレクションの一端へお贈りし
 ます。

全裸高手小手猿轡

モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 二百五十円

高々と首筋近くまで吊り上げられた後手縛り、頬もくびれよとばかり締めつけられた猿ぐつわ、全裸高手小手縛りの最優秀品。

女学生凌辱凶

モデル
川辺砂登子嬢

(略号)りよ

品。 五枚共全部緊縛ボーイズの逸
セーラーの制服を着用した川
辺嬢の背後に迫る怪し気な男の
姿。

賭犧 (かけにえ) 三態

モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 二百五十円

全裸の女体として祭壇に置かれた奇妙な
縄。9×13cm判です。V

拷問倉

四馬孝・傑作集(4)

花模様のワンピースを脱がされ、手と足を麻縄でぎっちりと括られ木の台に坐らされた美しい女。男は傍のハンドルを操作して調子を見ている。鎖に吊られた革のベルト、女は猿ぐつわの下で呻きながら、この異様な雰囲気の中で喘いでいた



四馬 孝・画



新東宝 朱桜判官 (若杉嘉津子)



新東宝 毒婦夜嵐お絹と天人お玉 (若杉嘉津子、江見渉)



新東宝

幽霊沼の黄金

(瀬戸麗子)



新東宝

サタン城の魔王

(本号20頁「サタン城の魔王の縛り雑感」参照)

ニューモデルの緊縛模様

—＜前と後＞—





すらりと伸びた脚線、柔肌という名の通り柔軟な姿態、ここに未発表の新人、
益田房子嬢の二ポーズを紹介します。

モデル (益田房子嬢)

床の間のニューデザイン

下手なものを飾るより、声も出せば表情の変化を見せる生きた花を飾った方が面白く楽しめるでしょう。

ロ
ボ
ツ
ト

「キヤー助けてエ、止めて、止めて、小父さん、助けて、ウアー、キヤー、小父さんたら止めて、キヤー」いやはや五人分位の騒ぎです。

飾 櫓

或る貧乏な町会で山車を造る予算がありません。そこで考えたのが町内の美少女を集めて飾物にすることでした。これは大変な評判だったそうです。

模型鉄道

兄ちゃんの模型趣味にも困ったものです。近頃はすっかり凝ってしまって、こんな汽車を考案しました。おかげで私は試験台に使われてひどい目にあいました。

後 手 (高手小手) 縛 り

モデル 愛 川 悦 子 嬢





新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1958年 8月号

(第十二卷 第十号 通刊第百十一号)

女
殺
油
地
獄

|| 近松のサジズムについて ||

南
方

純



享保六年、近松門左衛門は大阪天満で起つた油屋の女房殺し事件を脚色して竹本座の舞台にかけた。イブセンが新聞の三面記事からヒントを得て名作「人形の家」を書いたように、門左衛門はこの簡単な殺人事件をすっかり彼自身の空想の世界に作り上げてしまった。彼は殺される女が二十七の商家の女房で三人の子がありながら「子持とは見ぬ花ざかり」の色香をたたえており、殺す方の男は当時の太陽族、二十三になる二枚目という役に仕上げた。この美男美女が油の中で死闘する光景は老劇聖のイメージを大いに刺戟して素晴しく官能的な名場面が出来上った。原作を抜書きして見ると。

(お吉) 「アアこんな様は小気味のわるい。必ず側へ寄るまい。」

と跡しさりして寄る門の口、あけて逃げんと気を配れど、

(与兵) 「ハテきよろきよろ何恐ろしい。」
とつけ廻し廻し。

(お吉) 「出あへ。」
と喚く一声、二声待たずとびかかり、取って引きしめ、

(与兵) 「音ほね立つるな、女め。」
と吭(ふえ)のくさりをぐつと刺す。刺されて悩乱、手足をもちき、

(お吉) 「そんなら声立てまい。今死んでは年はいかぬ三人の子が流浪する。それ

が可愛い、死にともない。金も入る程持ってござれ。助けて下され、与兵衛様。」(与兵)「ヨヲ死にともない筈尤々。こなたの娘が可愛い程、おれもおれを可愛いがる親父がいたい。金払うて男立てねばならぬ。諦めて死んで下され。」

口で申せば人が聞く。心でお念仏南無阿弥陀、南無阿弥陀仏と引寄せて、右手(めて)より左手(ゆんで)の太腹へ、刺いてはえぐり、抜いては切り、お吉を迎ひの冥土の夜風、はためく門の幟の音、煽ちに売場の火も消えて、庭も心も暗闇に打まく油、流るる血、踏みめらかし踏みすべり、身内は血汐の赤面赤鬼、邪見の角を振立てて、お吉が身を裂く劔の山、目前油の地獄の苦しみ。軒の菖蒲のさしもげに千々の病はよくれども、過去の業病遁れ得ぬ、菖蒲刀に置く露の玉も乱れて息絶えたり。

勿論これは人形芝居の為に書かれた浄瑠璃である。人形は所詮人形であり、いくら名人がつかつてもその表現には自ら限界がある。門左衛門はこの殺し場の凄惨さを人形の動作によらず、詞によって出そうとした。お吉が生に執着している心情や、与兵衛の残忍無惨な性格を詞で現わそうとした為、緊張した殺し場には不つりあいな長台詞が気にかかる。そこを「口で申せば人が聞く」と逃げをうっ

ているのであろう。

この「女殺油地獄」は近松の作中でも屈指の名作であるが、初演の舞台では余り評判がよくなかった。それは場面が陰惨すぎた為であつたらしい。

ところが大正年代になると、その真価が漸く認識され、歌舞伎化して何度も上演されるようになった。与兵衛の腹からの放蕩ぶりと殺し場の写実性が型にはまった義理人情に反感をもちがちな新しい演劇界の嗜好に適合した為であらう。

死んだ市川新之助が寿座でやったのを見たことがあるが、油にすべる殺し場がまるで鬼ごっこのように舞台がしまらず、殺した後の恐怖感の表現にばかり力を入れたような演技だった。

映画では戦前千恵蔵でやったことがあるが大いに意欲を燃したにかかわらず、検閲で大幅にカットされ、すっかり味気ないものになってしまった。

先頃東宝が中村扇雀の与兵衛、新珠三千代のお吉で映画化したのを見たが、筋は比較的忠実に原作を追い、特に殺し場に演出のポイントを合せてあって、迫真力が素晴らしく大いに感心した。本誌においては縛り映画の紹介は誠に多士済々で、むしろ重複の煩わしささえ感ずる程であるが、この殺し場について一言も触れた人のないのはなぜであらうか。今

シナリオが手許になく一度見ただけの印象だから記憶違いも多いと思うが、ざっと書いて見ると、

与兵衛短刀を抜く。

お吉(アップ)恐怖の表情。

後ずさりする。(カメラ左へ追って)

掛行燈にぶつかり灯が消える。

薄明りの中に逃げるお吉。追いつがる与兵衛。

お吉油の桶をつき倒しすべって倒れる。

起き上って逃げるお吉の背中に短刀でついた劔がくっきり浮び上る。鮮かな血の色。

与兵衛とお吉(カットバック)褐色の油、

紅の血潮。

与兵衛お吉をつき殺し、倒れたお吉を抱えて大きな油桶によりかける。下腹はえぐられて血まみれ、髪はほどけ、顔色蒼白眼は既にうつろになつてゐる。左の首筋には、むごたらしい刀劔が、はつきりきざまれ血の色が生々しい。

お吉低くうわごとをつぶやくがよく聞えない。絶命寸前の表情……

この演出はよく原作のイメージを生かしている。長台詞を全部省略したのも合理的である。この天然色映画「女殺油地獄」こそ人形でも、歌舞伎でも、又従来の黒白映画でも、表現し得なかつた近松のイメージを最も理想的に再生し得たものとして推賞したい。

又近松姦通物の傑作「堀川波鼓」が近頃取り上げられるようになった。北条秀司の改作が幸四郎、歌右衛門で上演され、田中澄江作が新劇でフットライトをあび、今井正は三国連太郎、有馬稲子で映画化した。いずれも程度の差こそあれ、封建的制度に対抗するものとしての女性の人間性を主題にし、むしろ近松の精神には懷疑的である。原作では夫の手にかかる前に自ら刃を加えるのはすまないと思ひこんで死んでいく女を描いているが、田中氏や今井氏はそんな風に安々と死ねることの出来ない女として再検討を加えている。義理の妹にせめて武士の妻らしく自分で死ねと

せめられた有馬稲子のお種が膝をしぼり、短刀を抜きはなち、胸にあてがいながらも、今一突きがどうしても出来ず苦悶する表情——それは原作者、門左衛門が予想しなかった解釈だろう。

そこへいくと同じ近松の「長町女腹切」はかたばみ座の竹若が当り狂言で時々かけているが大劇場では見られず、映画化などは出来そうにない。あまり義理人情にかたまりすぎ近代の解釈が困難なせいであろう。一尺四寸五分の脇差を抜き、押肌ぬぎ、下腹にさしこんで真一文字に引廻し、介錯しようとする夫をことわって「止めはどこじや」とききなが

ら、のどを突きさしてこと切れる気丈な女腹切は誠に崇高な風格をそなえている。

女体自刃の愛好者はなかなか多いようであるが、堂々女腹切と外題をつけて舞台にのぼせたのは近松に始まり、近松に終るといふべく劇聖の名にそむかないものがある。

未曾有の大当りをとった「国性爺合戦」では錦祥女が夫を親兄弟の味方につける為自害する場面がある。九寸五分の懐剣、乳の下より肝先迄横に縫って刺し通し、したたる血潮を黄河に流す、というのだから時代物とはいいながら、なんと規模宏大な女体自刃ではないか。

映画通信

「サタン城の魔王」の石

縛り雑感

佐 渡

完

時間待ちに、何気なく見た「サタン城の魔王」は緊縛マニアの私を喜ばせてくれた。若君漫遊記とサブタイトルを付けたシリーズものの一篇で、天下の若君松平長七郎が諸国漫遊の道すがら綴る勧善懲悪劇である。今回の舞台は肥後熊本城下、藩主細川侯の厳命で、連日キリシタン弾圧が行われているが、処刑場から信者を奪い去り、「サタン城」の洞窟の牢に入れ、キリシタンの復讐を装い細川藩乗取りを画する首領（実は家老、江川宇礼雄適役）と、ふらりと肥後にやってきた松平長七郎（明智十三郎）の闘いに、隠れた信者城主の娘雪姫（北沢典子）をからませた、例によって例の如

き映画。監督は山田達雄。

冒頭、ギリシヤンの処刑場シーンの磔の縛りはまことに良い。従来しばしば本誌上で諸氏が論じておられる様に磔場面の縛り方は実にツマライものだが、一人一人、男、女交互にアップで見せる磔柱の縛りは、両腕を水平に伸ばして、手首を厳重に巻いてあり、首、胸にかけられた本縄も満点、俳優（無名の人ばかり）のあわれな表情もよい。そして男の場合は大の字縛り（横柱が足の辺にもあるキの字型）女は十字型で両足を揃えて縛り、両股も固定するという史実に忠実な演出には感心した。ただ女囚の両足下には小さいがその他の映画同様台がある事と、白黒である事とが残念、正に画龍点睛を欠くものだ。しかしながら、両腕をW型に磔柱に縛り、手首は申訳に二巻程軽く巻き、足下には大きな台……といった磔シーンばかり見せられて来たものにはこの映画のリアルな縛りを一層美しいものにしてくれた。監督は無名の俳優なら遠慮せずに縛るのだから、スターといえどもビシビシ厳重に緊縛してほしい。

次に最近の新東宝時代劇の看板娘としてまたテレビにも出演してこのところ大活躍の北沢典子、サンタ城の一味に捕われ牢に後手縛りの儘座っている数シーンがある。

後手は見えないが、胸に掛けられた縄は、さほど強くないと見えた、姫君のゴテゴテした衣裳では緊縛感を殺れること甚しい。あの背中の大きな帯があつては、私の最も好む高手小手縛りが出来ないのも仕方のない処、ただ牢内で、格子越しに見える可憐な日本の美貌と、首領に犯されんとする時の恐怖の演技は先ず及第点か。

終末近くの火焙りシーンは、特殊撮影のうまい新東宝、相当な凄絶感、残酷感がある。ギリシヤン弾圧に協力した学者と拐された雪姫との交換条件で山腹で藩側とサターン側と相對するが、学者は奪われ、雪姫は再び牢へ……となる。苛酷な処刑の復讐にこの学者（氏名不知）首領の妻（山下明子）チヨットKKの春日ルミ嬢に似てサデイスティンらしい面構えは秀逸）に高い天井から後手縛りで吊り下げられ、足下に燃え上る焰に悶えながら「ト思いに殺してくれ」と絶叫するシーンは、男の縛りに興味のない私には面白くなかった。これが女優であつたら何度もこの映画を見ることであろうと考える。この映画で私を喜ばせてくれたのは以上のシーンではなく、ホンのワンカットだ。

それは、信者の親子三人が捕えられ奉行所へ曳かれて行く遠景で、父、母、娘が後

手高手小手に縛り上げられ、六尺棒を手にした役人にこづかれながらヨロヨロと追われて行く村の土橋の上、つまづいて尻モチをついた母娘を無情にも縄尻を引上げて立ち上らせるところ。ロングのことで、ハッキリは判らないが厳重に縛られていた様でロングとて等閑にしない、悲壮溢るる演出をした山田監督に敬服する。私は仕事の都合上あまり映画を見る時間がないが、山田監督の次作を今から期待している次第。

最後にこの映画にはなかったが、時代劇、現代劇を問わずヒロイン危うし……という時おきまりの無敵氏が救助することになっているが、縛られていた縄を解くところ、或は切るところが、どの映画もアツという間に解ける。全く以て不思議極まる話で、ああ簡単に解けるものではない。良い縛りだと感じている直ぐあとで、文字通りパラリと解けるとガッカリする事夥しい、厳重な縛り程解け難いのが当然、娯楽映画にこんな理屈は無用という訳か。敵地に侵入し捕えられた女の縄を解かんとするが思うように任せない、気付いた敵は迫ってくる……というサスペンステイクな映画を、是非この山田監督に期待したい。

（終）

浣腸と妊娠

—膨らんだおなかについてのレポート

羽村京子

一、浣腸のこと

休刊になるまえの奇譚クラブに、ときどき下手な文章を寄稿していた羽村京子です。最後に書いたのが三十年の二月号でしたから、新しい読者の方はご存知ないかもしれませんわね。奇譚クラブが復刊され、ずっとつづいていたのを知って、矢もたてもたまらなくなり、また寄稿することになりました。どうかよろしく。

羽村京子というと、奇譚クラブの読者のか

たには、浣腸専門であるように思われているかもしれません。ほんとうに、わたしは、肛門だとか浣腸だとかいうことばかり書いていたように思います。けれども、妊婦の腹割きだとか、美女、人肉料理だとかいうテーマにも、おなじように関心をもっています。ただそういうことは、肛門や浣腸について書いたことのように、自分で実験してみるわけに行きませんから、ただ空想だけのことを書いても、あまり共鳴されなかったのかもしれない。しかし、わたしはいつか、うんと思いい切

った空想小説を、かいてみたいと思っています。

今日書いているのは、そういう空想のことです。でなしに、自分で実験してみたことだけなのですが、まずやはり浣腸のことから書いてみましょう。

浣腸といっても、わたしのは、二〇〇〇から五〇〇〇くらいまでのイチジク浣腸やグリセリン浣腸ではないのです。もっとうんと多い分量で、一〇〇〇〇以上、だいたい二〇〇〇から三〇〇〇〇くらい的大量な浣腸で

す。高圧浣腸といった方がいかもしれません。空気浣腸でも、おなかをぶくつとふくらませるところまでやるのです。ですから、ふつうの浣腸マニアのかたとちがつて、やり方もうんと乱暴ですし、浣腸ということの考え方や感じ方も大分ちがうように思います。自分でも、おかしな好みだと思いますが。

二、大量のぬるま湯を浣腸しておなかをふくらませること

これからのべるのはわたしが自分のからだで実験したことの報告です。わたしたち夫婦は、浣腸することを二人だけの秘密のたのしみにしていきます。でもいつも、主人がわたしに浣腸するだけで、主人は浣腸されることを好みません。わたしもそれで満足しています

二十九年十二月号の「浣腸遊戯」に書きましたから、ご存知かもしれませんが、もう一度はじめから書くことにします。

一〇〇〇CC、つまり一リットルのぬるま湯を腸に入れると、(わたしたちは大ていエ

ネマ・シリンジをつかいます。)おなかの中がだぶだぶして来ます。あるいは、おなかの中が液体でどぶんと重たくなったような気がします。グルグルとお湯が腸の中で移動するのが感じられます。おなかは、ややぶつくりとふくらんできませんが、姿勢をかえると、お湯の重みで低い方に流れて集まりますから、おなかのかたちもかわります。姿勢にさえ気をつければ、まだ割合に排泄をがまんしやすいと思います。

二リットルになると、おなかの中のお湯がかなりの分量になりますからもうあまりだぶだぶとはしないで、きっちり詰まったような感じになります。つまり、腸やおなか全体がふくれ上って、かたちがきまってくるので何か固いものがつまったように感じられるのです。おなかの中全体が一様に内からの圧力をもってくるので、肛門も内側からおしつけられて、ば



空気浣腸
ふくらまされた
おなかは

あいによつては、かえって排泄をがまんしやすくなります。もちろん大ていは直腸にかなりの分量のお湯が入っていますから、ゆだんをすると、すぐ洩れそうになりますし、ましていきむとジャーンと噴出してきます。おなかのかたちは、肋骨などでおさえられていないところは全体がぶくつとふくらんできます。胃のところには内部でも、いくぶん圧迫を感じますが、まえにむかってもふくらみます。みぞおちから下腹まで、ずんどうのようにぶつくりとふくれ上るわけで、ちょうど、コッペパンか、紡錘のような形になるわけです。しかしウエストのところが、多少どうしてもくびれるので、上と下と二段になってふくらむように思いますからお蚕さんの繭(まゆ)のようになるといった方がいいかもしれません。

ニリットルを三リットルにし、四リットルにしても、程度がひどくなるだけで、感じはあまりかわりません。ただ、わたしたちの日常のプレイでは、三リットルまでにしていきます。一リットルを低圧流腸、二リットルを中圧流腸、三リットルを高圧流腸としています。四リットルなどというのは超高圧流腸としてまずめったには行いません。

三リットルにもなると、それだけの分量を流腸しおわるまでが、かなり骨が折れます。(つまり苦しくてがまんしにくいのです)が、

注入されるごとに、エネマ・シリンジのゴム球をおさえる圧力が、おなか全体にピンピンひびくようになります。ことに胃のあたりへの圧迫が相当つよく感じられるので、胃の中の空気や消化液、または食べたものが逆流して口から出ることが多いようです。それもガツと吐こうとすると、おなかに力はいって、おしりからもビュッとお湯が出てしまうのです。ニリットルでも多少そうですが、三リットルでは、おなかのふくらみがきつく(皮膚もはりつめてきます)、からだの前がわがふくらむわけですから、からだを前にまげることが、ほとんどできなくなってしまうし、ふくれたおなかと、その圧迫のために、姿勢をかえることもすつかり不自由になります。呼吸もおなかが使えないので、出産まじかの妊婦のように肩でいきをするようになります。胃などの内臓が痛くなることもあります。からだ全体がくるしくなると、気分がわるくなり、ふらふらして来ます。五分とか十分という長い時間がまんすることは、とてもできません。かりに肛門の方はがまんできても、くるしいので、早く出してしまいたくなります。多少危険なような感じもしますが、最初に一リットルあまりくらい一気に排出してしまえば、気分は急速に回復します。おなかの調子の方はもうしばらく、何時間かかゝらないともたになりませんし、あくる日も多

少は病氣あがりのような感じが残ります。

四リットル、あるいはそれ以上というのは大体無茶なのですが、わたしも経験したことはあります。なるべく食物がおなかに入っていないときをえらんで、最大限だけ入れることができるといふ実験をしてみたのです。グングンとお湯がからだの中に入っていくのですが、おなか全体から胸の方までが、グググとむりやりにおしひろげられ、風船玉ではありませんが、はじけそうなくらい大きくなっていくように感じました。苦しいとか気分がわるいとかいっても、もう夢中なので、ふと死んで行くのではないかという考えがうかんだくらいでした。あぶら汗をながし、まっさなおな顔をして、ぐったりとなりそうになつていても、まだがまんしようと思いました。(もう止めて)と思わず云ってしまいました。主人も、さすがにわたしの容態をみてあおくなりましたが、あくる日はあまえて一日ねていただけで、事故がなくてすんだのは幸せでした。今でも思い出すと、おそろしい気がします。もう一度やってみたいような気もしますが、倒錯趣味とはいえ、あんなことまでしななければすまないかと思うと、悲しいような妙な気がします。そのとき残ったお湯の量をはかってみたら、腸の中に入ったのは実に、四二〇〇CCでした。このことも「流腸遊戯」に書きましたわね。

もちろん高圧流腸でも中圧流腸でも、そのときは相当くるしいのです。ああ苦しかったと思うのです。しかし、何日かたつと、またやってみたくなるのです。ほんとうに自分でもかなしいと思うことがあります。

三、ふくらまされたおなかの 腹囲をはかること

脹満という病気があります。食べものの消化がわるくて腸の中にガスがたまり、おなか
がふくらむ病気です。空気流腸というのは人工的に脹満にすること、つまり人工脹満とい
つてもいいでしょう。空気流腸は液体のよう
に重さもないし、こぼれたりする心配もない
のです。簡単です。ただ、空気が腸粘膜を
刺激しますから、おなか痛くなったり、下
痢したようになりたりします。しかしかえつ
て、このために便秘にたいしては液体流腸の
ようによく利くのです。ですから、お通じを
つけるためには一番簡単な方法です。

わたしたちのばあいには、空気流腸は、よ
く子どもが自転車の空気入れで蛙のおなかを
ふくらませて、はじけさせてあそぶように、
主人がわたしのおなかをふくらませる秘密の
遊戯をするのです。自転車の空気入れもいい
のですが、他にもいろいろ方法があります。
そのことはまえに何回もかきました。今日は、
人間のおなかはどうくらくらむものか、

腹囲（洋裁でいうとウエスト）をはかってみ
た実験の報告をしましょう。

はじめにことわっておきますが、わたしは
けっしてスタイルのいい方ではありません。
八頭身などにはおよびもつかない一五一セン
チの身長で、バスト（胸囲）八二センチ、ヒ
ップ（腰囲）九〇センチ、ウエストは六四セ
ンチです。空気流腸をしておなかをふくらま
せ切ったところで（がまんできるだけのところ
で）、ウエストが大体七六センチになりま
す。思い切つてうんと入れて、七七―八セン
チくらいが最高です。妊娠したばあいには、
本によると、日本婦人の妊娠末期の最高腹囲
の平均は八五センチだそうですから、それよ
りも約十センチ大きくなるわけです。

これは、わたしのからだで実験してみた結
果ですから、人によって相当ちがう数字がで
てくるでしょう。妊娠のばあいは、わたしな
ど小柄の方ですが、（二十九年の春、長女を
産んだときの記録はないので、三十二年春に
次の男の子が生まれたときの数字で）平均以
上の八八センチありましたから、からだの大
きさに関係なくおなかが大きくなるのもし
れません。もっとも、第二回目の妊娠のとき
に、わたしはわざと水分などをたくさんとつ
て、羊水を多くし、おなかをできるだけ大き
くしようと努めましたし、うまれた子供も平
均より大分大きく、一貫目ちかくありました。

子供の大きさがおなじなら、妊婦のからだ
が小さいほどおなかは大きくみえるわけです。

空気流腸でふくらまされたおなかは、腹囲
が妊娠のときよりも十センチちかく小さいだ
けでなく、おなかのかたちも妊娠のときとち
がいます。妊婦のおなかは、よく西瓜のよう
だなどといいますが、まんまるく前につき出
して来て、からだつきやあるき方もかわつて
きます。空気流腸をして、コッペパンや紡錘、
あるいは繭のようになったかたちとは、大分
ちがうように思います。

羊水過多症という病気があります。妊婦の
おなかの中の羊水が、むやみに多くなって、
おなかのフットボールのように大きくなる病
気です。その他、双生児（ふたご）のばあい
にも、ふつうより大きなおなかになります。が、
羊水過多症のばあいには、ふつうでは一・五
―二・〇リットルしかない羊水が五―二〇リ
ットルにもなるというのですから、とても大
きなおなかになるわけです。産科の本にのつ
ている羊水過多症や双生児をはらんだ妊婦の
おなかの写真をみるとよくわかります。わた
しの超高压流腸でも、四リットルそこそこで
すが、妊婦のばあいには胎児が約三キログラ
ム（容積にして三リットル分くらいでしょう）
それに羊水と、大きくなった子宮が加わりま
すから、どんなに大量の流腸をしても妊婦に
はおよばないわけです。

ついでに、ウエストをうんときつくしめつけたら、どれくらいになるでしょうか。針金に布をしっかりと痛くないようにし、ペンを付けてウエストをしめつけてみる実験をした結果、わたしの胴は四八センチぐらいになることがわかりました。思い切ってぎりぎりまでしめつけて四五―六センチです。そこまでしめると、針金が肌にくいこんでとてもいたく、下半身がしびれてくるような気がします。手足をうごかすとおなかにひびいてよけにくいこむので、とてもたまりません。からだをすこしかがめてみると、胃のところと下腹とがくっつきます。上からみると針金はみえないで、おへそが上をむいてついている、まんまるく飛び出した下腹が、ふくれたみぞおちの下にみえます。

ウエストをしめつけることは、女のスタイルをよくみせるために広くおこなわれていまし、からだに害があることもよくいわれています。やはり下腹をまるく飛び出させることをねらっているのかもしれない。わたしたちのぼあいも、まるく固くなってぽこんと飛び出した下腹に興味があるのですから。けれども、わたしたちがしたように、針金なんかでうんときつくしめつけたら、長いあいだはがまんできません。よく強盗が家の人を針金でしばったなどと新聞にでています。ウエストをぎりぎりまでしめつけたまま朝ま

でほうっておかれたら、死んでしまうのではないかと思えます。わたしも四五―六センチまでしめつけてもらったのは一度だけで、やはり超高圧浣腸のときのように気分がわるくなり、それよりも針金のくいこむ痛さで、とても五分とがまんできませんでした。

ここまですが、わたしの実験のレポートです。これからさきはやはり告白ですが、実験というほどのものではありません。わたしはむしろ、一つの提案をしたいと思っています。す。わたしが二十

七年の七月号に「狂い咲くカンナ」をかいてから、多くの切腹（女の腹割き）マニアや浣腸マニア、肛門（アーヌス）マニアの人たちの投稿が奇譚クラブにのるようになりましたが、わたしがこれから提案する妊婦のヌード写真について、もし共鳴して下さる方が出て、奇譚クラブの口絵に妊婦のヌー

妊婦のヌード写真はモナーフ

ド写真のったり、分譲写真としても売り出されるようになれば、こんなうれしいことはないと思います。

もちろんわたし、自分が（切腹はもちろん）浣腸についても、先見の明があったとか、自分こそ最初に云い出したのだとか自慢するつもりはありませんのよ。突拍子もないことを云い出すわたしのようなものが出て、もとか人とかわった傾向をもってらした方が、安心してぞくぞくあらわれたのかもしれない



としてもけっして面白くないものではない

ありません

し、他の流腸やアーヌスのマニアの人たちが、わたしとまったくおなじ趣向だとも思いません。今度のばあいだっておなじことですね。

四、妊婦のヌード写真のこと

現在の日本では、写真がとても普及しています。多くの人がカメラをもっているし、なかには二つも三つももっていて、だれでも写真がとれます。それに戦前ではなかったヌード写真の流行もすばらしいもので、プロの作家はもとより、アマチュアでもヌードをとることは簡単にチャンスがあります。ヌード写真として芸術的に高いものもたくさんあるようですが、ヌードが芸術であるうとなかろうと、女の裸体を写真にとることは、いまではちっともふしぎなことか、いけないことか考えられていないようです。

だから、世の中のご夫婦たちの間でも、はずかしいから秘密にこっそりと、ですけど、細君のヌードをとっている人は相当あるのではないかと思えます。わたしたちだって、ご多聞にもれず、今では旧式になった二眼レフの安カメラで、わたしのヌードをたくさんとっているのですもの。

ところでヌード写真といえは、いつも乳房やおしりが大きく写っています。オッパイやおしりが好まれるのは、女の女らしいところが好まれるということでしょう。それなら分

らないのは、なぜ妊婦の大きなおなか、ヌード写真にならないのかということですね。もとをいえば、お乳は赤ちやんをそだてるための器官ですし、おしりだって赤ちやんを産むためのものです。だからうまれるまでの赤ちやんをそだてているおなか、どうしてヌード写真として人気がないのでしょう。また妊婦でなくても、ヌード・モデルが一樣におなかをへこませているのも、わたしには気に入りません。ふくらんだおなか、みにくいのでしょうか。妊婦のすいか腹だって、ほんとうにみにくいのでしょうか。わたしにはわからないことだらけです。近代人は、ヴェールをかけて美化しないと、かえって威圧されてしまうほど弱くなっているのだ、といわれるかもしれません。しかし、おしりだってグラマーになりますし、いまではバストよりもヒップの方が、流行しています。ただ、おしりのグラマーは、オッパイのグラマーよりすこしだけお下劣ということかもしれません。それに、おしりよりもおなかの方が一そうセクシイであるというのは、どう考えてもおかしいといわねばなりません。

では妊娠しているという状態は女性にとってははずかしい状態であり、特別な状態であるから、ヌード写真なんかにとるのは残酷だ、というのでしょうか。これも多少わけのわからない議論です。老人だとか孤児だとか、ヒ

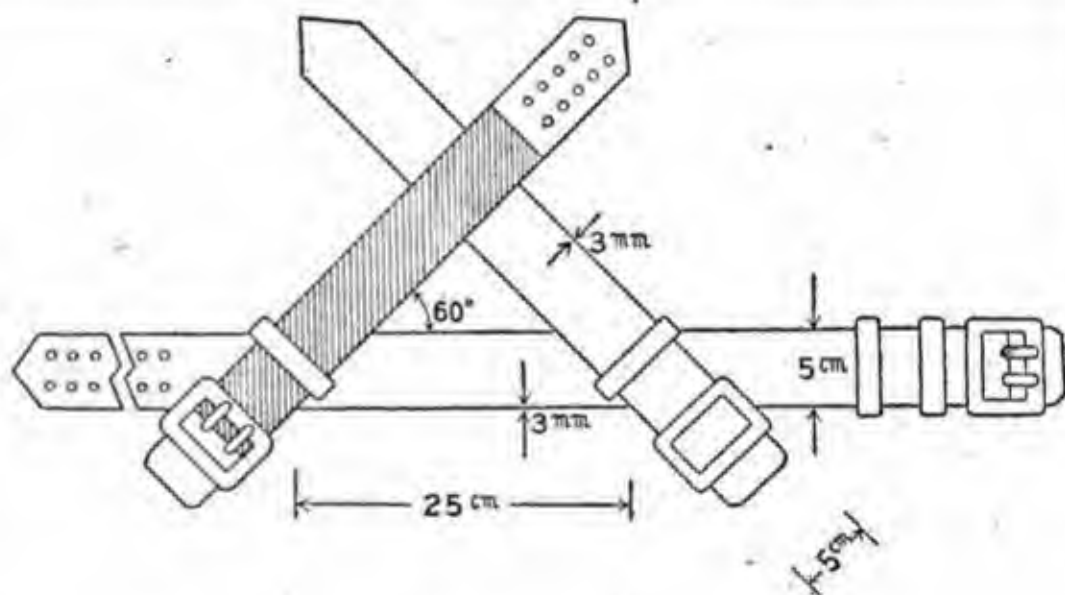
ロシマの被爆者などをうつすのは残酷でないのでしょうか。それは社会的な意味をもつか許されるというのなら、社会的な意味をもたない、被写体としての美しさの方がもっと純粹でもあるし、社会的なトラブルもおこさないではありませんか。また、社会的な意味をもつ作品は、たしかに意義は大きいのですがそういう意味をもたない、フアッションや広告の写真が、だからといって意義がないとはいえないでしょう。また女の妊娠した状態は決してみにくいものではないとすれば、それを写すことも残酷ではないでしょう。ふつうのヌードだってモデルのはずかしい状態をうつすのですから。妊婦がみにくいという先入観は、はだかがワイセツだという先入観とおなじではありませんか。

ではなぜ妊婦のヌード写真がないのでしょうか。もっともわたしは写真雑誌で一二見たことがあります、ほとんどないし、また妊婦のヌードというそのことが人の注目をひいたことにはないようです。万一、それが一般の人の注目をひかないのなら、同好者だけで、たとえば奇譚クラブなどで問題になってもよさそうに思います。モデルがえがたいといっても、写真の普及した今日、家庭でもヌード写真がとられているにちがいないことをおもえば、かえって妊婦のヌードモデルもえやすいのではないのでしょうか。プロの写真家が、

戦後間もなくのころ、自分の奥さんのヌードをとって写真雑誌にのせ、センサーションをまきおこしたこともあるのですから。また家庭外でも妊婦のヌード・モデルは案外えられるのではないのでしょうか。

妊婦のヌード写真はモチーフとしてもけっして面白くないものではありません。全身でもいいし、またおなかを中心とする部分だけでも、けっこう面白い被写体になると思います。おなかだけでなく、全身のからだつき、また乳房などにも変化があらわれることはご承知のとおりです。シュトラッツの「女体の美」にはどうしたわけか妊娠した女体の美についてふれられていませんが、高橋鉄さんの写真入りの「裸の美学」にはちゃんと「妊娠の美」の項目があります。ただそこではわずか五ヶ月の妊婦のヌードがのっていて、妊娠二、三ヶ月がもっとも美しい、とかいてあります。わたしはむしろ、妊娠の後半期（第二十一週以後）とくに最後の十週ないし最後の一ヶ月（臨月）をえらびます。臨月の妊婦のばんばんに、まんまるく張りきった大きなおなか、それだけで立派な一つの造型といっているでしょう。すこしぼってりと垂れ下りぎみになる乳房だって、被写体として興味をひくものだと思います。

わたしたちのばあい、二回目の妊娠のときにいくつか写真をとってもらいましたが、写



「ザル法案」と散々悪口をたたかれた売春防止法もいよいよ四月一日より実施され早くも偽装転業などで逮捕されるものが社会面を賑わしているが、この法律と共に婦人補導院法が施行された。同法によると、売春防止法第五条（売春の勧誘、六カ月以

レポート（四月一日官報号外より）

婦人補導院の 保護具

佐 渡 完

下の懲役、または一万円以下の罰金）の罪を犯したもので懲役または禁固の執行を猶予されたものを国立である婦人補導院に收容して、更生させることとなっている。

この法律の第十五条に收容者に施す保護具の項があるので、読者諸氏にご紹介しよ

場の条件がわるいのと、技術がまずいので（自家現像をしなければならぬので）ろくなのがないのは残念です。二眼レフの七五ミリレンズの適当な広角効果は、近いものをやや誇張して描写するのと、二眼レフのあつかいよさと6×6判の大きさは、ちょうどわたしたちに適当です。おしりや妊娠したおなかを誇張して描写すると面白い写真ができます。また逆光でとった妊婦のヌードのシルエツトもきれいです。奇譚クラブの読者の方には、縛りや吊りを併用したものもよろこばれるでしょう。またグラママーのようなぐあいに、半裸ぐらいでとつても面白いでしょう。奇譚クラブが妊婦のヌード写真という新しいジャンルを開拓できたら、すてきだと思います。きつと愛読者の皆さんの中にも、妊婦のヌード写真について、関心をお持ちの方もおられることと思います。そういった方々の感想や御意見を伺つてもたのしいことだと想像されます。或はすでに試みておられる方があるかもしれません。又わたしの呼びかけが、きっかけとなつて、その企てが実現されて誌上を賑わすようなことにでもなれば、尚一層うれしいことだと思います。女だてらに「流腸と妊娠」だなんて、とてつもないことを書いてしまいました、どうかお許し下さいませ。

う。

(婦人補導院法)

第十五条

在院者が暴行又は自殺をするおそれがある場合において、これを防止するためやむを得ないときは、法務省令の定めるところにより、保護具を使用することができる。

2、(略)

3、保護具は、被使用者の両手を腰部に抑止する構造のものとし、その製式は法務省令で定める。

(保護具の製式)

バンド及び遊び革は、表面薄水色の牛革製とし、腕に接する部分は、薄水色のフェルト張りとする。尾錠及び遊び金は、薄水色に着色した鉄製とする。

図の様に至極簡単なもので、要するに手錠つきのバンドであるが、薄水色と指定したり、手首を捲く部分をフェルト張りにしたところなどは、普通の手錠や、刑務所などで使用されている同様の戒具などと比べ、非常に物足りないものだが、当局の女囚に対する人権擁護ぶりが伺えるというものだ。

数年前の映画に、三船敏郎扮する囚人が

脱獄を画り、遂には捕えられて独房内で戒具を装置されているシーンがあったが、この強烈な緊縛感忘れることができない。

しかしこの保護具の図を見て、不思議に思うのは、第一に両手首の間隔が二十五センチとなつてゐることだ。何故もっと締めなかつたのだろうか、これでは装置された場合の両腕は、かけ足の時に両手を握つて腰にあてる形と同様になるのではないかと思う。もっとも女囚のウエストの差はあるだろうが大したことはないだろう。後ろ手縛りの様に手の甲と腰とを合わせる様に両手首の革を嵌めることもできるだろうが、これではひじと胴との間に大きな三角形が生れることになる。

次に、腰、両手のバンドを尾錠式にしてある点だ。器用な女なら外すことができるのではないかと、いらぬ心配をさせる。錠前を掛ければ……と考えるが原文のどこにもそんな語句はない。何れにしても緊縛マニアの小生には、全く面白くないシロ物である。

そこで、奇ク編集部では是非この保護具（モチロン両手の間隔を殆んどなくして）を作つて、従来の紐、縄、鎖などと併用してモデル嬢に装着して誌面、分譲フォトを飾つて貰いたいと思う。読者諸兄姉もお手製のこの保護具で悦しまれてはいかが。

映画に見る男性責

梶

孫

一



ユナイト映画（松竹配給）
ガンガデイン（ケイリ・グラント）

映画に現れた男性責について、菅良太氏が詳細に亘つてのべられ私もマニアの一人として、大変興味深く読ませて戴きました。殊に「熱砂の舞」に於けるヴァレンチノの吊し鞭打ち場面は一きわ懐しく未だ私の脳裡にやきつき、あのシーンだけは生涯忘れる事の出来ない素晴らしい責場でしたけれども氏が指摘して居られる、さまざま責場面の外に、私が長い期間に亘つてこの眼で見た、洋画邦画を問わず、

鞭打、拷問、刑罰等の好事家にとっては垂涎おくあたわざる好場面が、未だ多くあることを、ここに敢て発表し、世のマニア諸氏の興趣をよければ、無上の幸甚と推察し、遠い昔の記憶を辿りつつ、筆をとる次第です。閑話休題、古くはサイレント映画時代に想いを走らせれば「熱砂の舞」より数年を経て公開されたメトロの名作「ベン・ハー」これは最近同社に依つて、C・ヘストンの主演で再映画中であるが、当時はヴァレンチノ亡きあと、これに代つて人気上昇の美男俳優ラモン・ナバロが若く逞ましきベン・ハーに扮し、均整のとれた裸体で随所に現われ、劇中、彼が拷問を受ける場面がある。何しろ古い事なので

ストーリーもすっかり忘れてしまったが、この拷問シーンだけは鮮やかに印象に残っている。彼が官憲に捕われ、殆ど全裸体に近い恰好で、弓なりになった台の上へ仰向けに両手両足を縛られ、命令一下、両手を縛った綱が、巻車によって徐々に引張られてゆく、更にその背中の下に太いローソクのようなものに火がつけられ、その火が彼の裸の背を焼きつける訳だ。苦痛の余り、五体をのけぞらせて、悶える彼の素晴らしい肉体、盛り上った筋肉隆起、時間にして数分足らずの短い拷問シーンであったが、未だにハッキリ記憶している。筋肉隆起と云えば、素晴らしい責場があった事を思い出す、トッキー初期に公開された同じM・G・Mの「成吉思汗の仮面」である。サチス・テックなアラシオンもので簡単なストーリーを申上げると、ホリス・カーロフ扮するフリー・マン・チュー博士が、かつて全世界を征服した、ジנגスカンの宝刀と仮面を探し、再び全アジアの支配者たらんと、野望を抱き、この剣と仮面の在所を知る英国の考古学博士バートンを捕えて、さまざまな拷問を加えて自白を強いるが仲々口を割らない。この拷問場面は極めてつまらないもの、そのバートンの娘（カレン・モーレイ）、彼女の許婚テリイ青年（チャールス・スターレット）、スコットランドヤードの腕利き刑事等が、拉致された彼女の父を救助に向う。延々と続く燃える

ような砂漠の旅を了えて遂にフリー・マン・チューの豪華な館の近くに到達する。この時偶然にも、彼等がジングスカンの剣と仮面を発見してしまう。テリイ青年は二つの宝を持って、単身フリーの館へバートンの身柄引替えに赴く。

フリー博士は心よくテリイを迎え、二つの宝の内、剣を本物か、偽物かを見極める為、強烈な電力でテストしてみる。が、テリイの見ている前でみる内にとけて無くなってしまふ。テリイは顔面蒼白、偽物と知ったフリー・マン・チューは激怒し、弁解するテリイの口を二人の黒人奴隷が樹木の蔓で縛ってしまった、反抗する彼を地下の拷問室へ引ずり込み、暴れ廻るテリイの両手首を合せて綱で縛り、づるづると吊り上げてしまふ、床上二尺位の高さに宙吊りになった彼の軀は振子の様に暴れる、口をふさがれているので声が出ない、僅かに絶叫がほとぼしるのみ。そうしておいて奴隷の一人が、着ているテリイのシャツを乱暴に破り捨ててしまふ。逞しい彼の上半身が臍下五寸近くも現われる。ツボンの下にはいている白いパンツの端がチラリとのぞいているのもこの吊り責をより効果的にしている。

更に奴隷二人が黒い太い鞭を持って前後から情容赦もなく振り上げようとする、パツと画面がきれて惜しい哉カット。次の場面はテ

リイの裸身に生々しい鞭のあとがついて、気絶してしまった所をすり下す。二人の奴隷がテリイを抱えて別室へ運ぶ、そこにはフリー・マン・チューの娘ファ・ロ・シー（マーナ・ロイ）が居る、彼女はテリイを見て一目惚れしてしまう。父のフリー・マン・チューはこの男を私に呉れと言う。フリーは「よしそれでは意のままになる薬を注射してやる、テリイの傷が癒える迄待て」と娘の望を叶えてやる。数日して、テリイがもとの健康体に復すると、早速薬の注射にとりかかる。まずテリイは、日本の禪の様なもの（禪と異なる所は腹に巻いた布が五六寸の幅がある）を腰に巻いた姿のまま大きな台の上に仰向けに寝かされ、首枷、手枷、足枷に依って押えられる。テリイはこれから行はれようとする責苦を少しでも柔らげようと無駄な抵抗を試みる。全身を弓なりにして枷を外そうとするがどうしても外れない、逞しい胸には脂汗がにじみ出、腹部は苦痛の為波の様に喘いでいる。大の字に開いた太股のまぶしい許りの輝き、それにも増して加虐感を誘うのは盛上った素晴らしい筋肉の隆起である。素晴らしい快感が全身を走り廻ったのは言う迄もない、やがて注射器を持ってフリー・マン・チューはテリイの首筋に、プツリと刺し込む、突然、野鳥に似た悲鳴をあげてテリイの裸身は、最大限にそり返り次第に無我の境へおち入ってゆく。この場面はたっぷり

有って、ことごとく私の脳裡に刻み込まれたのは云うまでもない。最後には悪は滅び善が勝利をもたらした大団円となるのだが、偶然にもこの映画のプレスシートを未だ大切に保存してあるが、すっかり色あせてしまった。

マニア諸氏には是非お見せしたい。さて話が一足飛びになったが、無声映画で印象深い場面がもう一つある。同じM・G・Mの製作でサイレント末期に公開された「悪漢の唄」である。これはメトロポリタンの著名なオペラ歌手、ローレンス・チエイベットの主演で、歌手とはいえその精悍な風貌、逞しい肉体には一驚を喫し、彼が山賊に扮し大勢の部下を引連れ、従横に暴れ廻り更に得意の歌をフンダンに聞かせてくれるのであるが、劇中警吏

凱旋門

シャルルボワイエ
チャールス・ロートン
女優 名不詳



ち場面で想い出すのは邦画のサイレント版、市川右太衛門の「勿笑金平」である。この映

に捕われ鞭打たれる場面がある。二本の柱に両手を丁字に縛りつけられ両足も又鎖につな

がれている、勿論上半身は裸にむかれて素晴らしい胸板が露出している。二人の男が後から細い鞭で彼の左右の肩を殴打するのであるが、この映画はパートトーキーでこの鞭打ち場面に音響が加わりより効果的にした。苦痛と怒りに燃えたチエイベットの大笑しの顔は素晴らしい快感をよんだ。(この鞭打ちシーンも当時の映画雑誌を切りぬいて二場面保存してある) 吊り鞭打

画は若かりし頃の右太衛門が、当時のマキノプロを飛び出し、独立プロを起して十数本のフィチアを製作した内の一本で前後篇に分れ賣場面は前篇にあった。簡単なストーリーをのべると、侠客金平(右太衛門)がある下町娘と惚れ合い二人でランデブー中の所、この娘に横恋慕している悪浪人(高堂国典、これも若かった)が数名のやくざ者を引き連れ計略を以て金平を捕えてしまう。そして時代劇には珍らしい両手吊しの鞭打ちが始まる。裏門の梁に上半身を裸にむかれ、両手を吊し、足の爪先は庭石にあつて僅かに支えられ、豊かな彼の胸毛が黒々と露出し、衣服は乱れ毛深い太股や、白い禪のタレがのぞいている。浪人が細い鞭を手に持ち、之から行う虐待に舌なめづりし乍ら吊れた彼の軀を上から下へジロジロ見たす場面が極めて印象的、やがてやくざの一人が加わり二人で交る交る胸、腹を打つのだが金平は呻き声一つあげない、かすかにせせら笑っている。怒った浪人は支えてある足下の石を蹴飛ばしてしまふ。これで完全な吊りだ。「そのまま明日まで吊しておけ、少しは音をあげるだろう」憎々しげに言捨てて立去る。賣場はそれで終るのだが、彼等が立去った後、金平に同情している三下の一人が、蹴飛ばされた石をもと通りに置いてやったり、鞭のあとも痛々しい胸を摩擦したりする場面がある。

其後金平の乾分達に助けられ、駄の全快を
 まって悪浪人に復讐し娘を手中におさめてハ
 ッピーエンドになる。同じ右太エ門の主演で
 松竹と提携して公開された時代劇「三下野郎」
 にも、之に似た場面のスチールが飾られてあ
 った、上半身を裸にされた彼が、庭の立木に
 後手に縛られ、二人の男が縛った両腕に棒を
 差し込んで締めあげている場面であるが、映
 画を見るとこの場面がオールカットされ、シ
 ーンも出てこないのは落胆した。何しろ当
 時の検閲機関が現在の映倫の比ではなく非常
 に厳しく残酷シーンには目を光らせていたか
 らだろう。拷問場面だとか、姦通、軍隊や皇
 室を扱ったもの、その他の刺戟場面は殊の外
 検閲がやかましかった様だ。その網に引っか
 かったのが前記の「成吉思汗の仮面」である。
 さてサイレント時代がすぎ去るとトーキーの
 大洪水だ。読者の中で御覧になった方もある
 と思うが、昭和廿三年に封切られた、松竹の
 「緑なき島」、若き頃の佐野周二の主演で、
 彼は人も知るスポーツマン、逞しい均整のと
 れた肉体の持主でこの映画では彼の裸体を発
 揮させる場面が数ヶ所あった。ストーリーは
 「緑なき島」と呼ばれる孤島の軍工場に働く佐
 野が余りの激務と虐待に堪えかねて脱走をは
 かる。同僚の山村聡としめし合せ或る夜脱出
 する。周囲が海にかこまれている為二人共真
 白い六尺褌一本で海中に飛び込む、だが忽ち

警備兵に発見される所と
 なり、山村は巧みに逃亡
 するが、佐野は運悪く捕
 えられてしまう、次の場
 面は彼が褌一本のまま両
 手を拡げて吊され、警備
 兵達に激しい鞭を喰うの
 だが、カメラが彼の全身
 を映している、暫く動か
 ない鞭は盛んに唸ってい
 る、徐々に移動して苦悶
 する佐野の顔がアップさ
 れる所までこの刑罰は続
 くのだが、中々忘れ難い
 好場面であった。洋画で
 は、パラマウントの「最
 後の地獄船」に終戦後初
 めての鞭打ちシーンが現
 われた。アラン・ラッド
 の主演で海洋映画だった
 と記憶する。彼はこの地
 獄船に乗り合せた或る船
 会社の御曹子であるが、
 彼が船の規則を犯した為
 刑罰を受ける。上半身を
 裸にされ両手を吊され鞭
 の乱打を浴びる、凄しい
 鞭の音が彼の裸身に反響



ユニヴァーサル
 世界を彼の腕に

グレゴリー・ペック
 アン・ブライス

する度に素晴らしい快感をよんだ。戦後再公開されたノーカット版「ハリケーン」もジョン・ホールの逞しい肉体を裸のまま砲の車輪に縛りつけグッタリした所を水をぶっかける場面や、岩窟の中で鎖に吊された裸の背を鞭打つ場面とか、環状になったパイプに縛りつけられぐるぐる廻転する場面など僅か数カットシーンだが、これらも忘れ難い、これも再公開のバ社映画「海の魂」の吊り場面がある。ゲリー・クーパーとジョージ・ラフト扮する船員が、自白を強いる為、両手の親指だけで高々とマストの上に宙吊りされる珍らしい場面がある。クーパーの真黒な胸毛、ラフトの盛り上った鉄の様な胸板、苦痛の余りラフトが悲鳴をあげる。「指が抜けそうだ、助けてくれ」だが自白する迄は降されない、クーパーも始め頑張っていたがラフトの苦痛が烈しいので「白状するから降してくれ」と仕方なく叫ぶ、この映画も戦後度々再公開されたので御覧になった方もあると思う。戦後も大分落着いてくると天然色映画のハンランである。カラー映画での拷問シーンを始めて見たのがユニヴァーサル社の「アランビアンナイト」である。この映画で度肝をぬかれたのは巻頭いきなり刑罰シーンが現われた事だ。妾腹の王子リーフ・エリクスンが王位をねらい失敗した為、裸身に等しい恰好で両手を吊される場面である、七日七晩吊され、ぐったりとな

った彼を、正規の王子たるジョン・ホールが憐れみ改心する様にすすめるのだが、エリクスンは、つばを吐いて憎々しげに睨み返す。そこへエリクスンの腹臣達が忍び込んで彼を助け出してゆく。数月を経て彼の傷が癒えた頃、エリクスンが邪恋を抱くマリア・モンテスの在所をつきとめる為、あらゆる手段を構じて探し出そうとする。或る密偵の報告で、警備隊長のターハン・ベイが、こっそりと彼女を奴隷に売り飛ばしたことが解る。激怒した彼は早速ベイを捕え残酷な拷問にかける、巨大な水車を思はせる様な引伸ばし器に縛られたベイは仲々口を割らない、ギ・ギと不気味な音を響かせて両腕は引張られてゆく、むき出しにされた逞しい胸は水を浴びた様な汗でビッシヨリ苦痛が最高度に発揮された好場面だ「白状しろ、強情な奴だ、もっと引け、もっと強く」固定された両足首に大きな角石がぶら下って、それが時々揺れるのがより効果的であった。何しろテクニカラーなので、その迫力は凄しいもの。

其の後出たのがフォックス社の「海の征服者」である。これもカラーでタイロン・パワーの主演、彼が上半身裸で引伸ばし責めにかける。が、これはすぐに救助されてしまうので興味が半減した。続いて、ユナイテッド映画の「コルシカの兄弟」に於けるダグラスジュニアの両手吊りの鞭打ち、リパブリック映画「

怒濤の果て」の船員鞭打ち場面、M・G・M映画「戦艦バウンティ号の叛乱」に於ける船員虐待の鞭打シーン（このスチール保存）この映画は戦前「南海征服」なる奇妙な題名で公開されたが原型をとどめぬ迄ズタズタに切られもののノーカット版の再公開。ユニヴァーサル社の「凡ての旗に背いて」の巻頭鞭打ちの音で始まるエロール・フリンの両手吊り場面、コロムビア社の「征服者」（ジョン・ウェインのものに非ず）のコーネル・ワイルドの裸体後手縛りの鞭打ち、同じワイルドでR・K・Oの「剣豪ダルタニアン」では両手を吊された彼が裸の胸に焼鉄をあてられるシーン、フォックス社のカラー作品「女海賊アン」ではルイ・ジュルダンが気絶しても、尚続けられる残酷な鞭打ち、映配提供の「風雲のバビロン」ではメキシコ俳優リカルド・モンタルパンが腰布をまとっただけの裸身をX型の柱に吊され鞭打たれる場面、この俳優は顔はまずいが、素晴らしい肉体の持主である事に一驚した。R・K・Oの「海賊黒ひげ」ではキース・アンデス扮する若い医者が、ロバート・ニュートン扮する黒ひげの怒りにふれ、両手を吊され、鞭あとも生々しい所に塩をぶっかけられる。この映画は演出が相当荒っぽいラオール・ウォルツシュユなので、この鞭打ちシーンも、またたく間に駆け足で終ってしまう。欧州映画ではお国柄の故か、残酷面は極めて

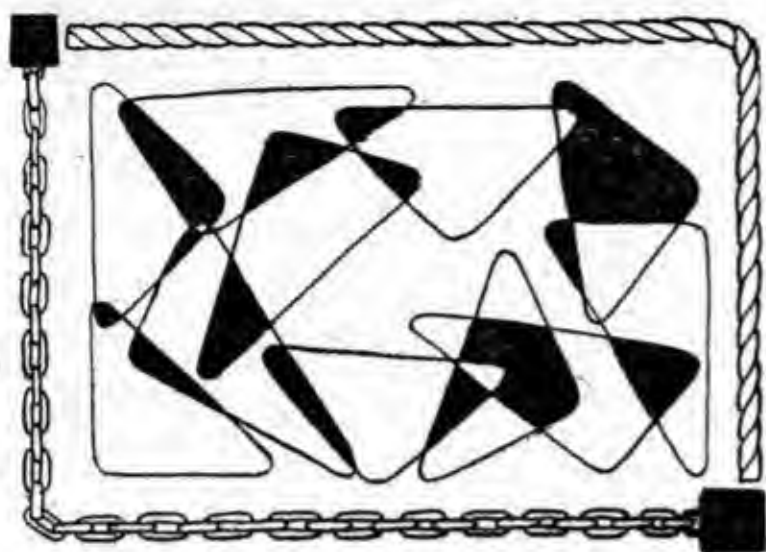


大映配給サミエル・ゴールドウィン映画
「ハリケーン」 ジョン・ホール（昭和十六・初公開）

少く、僅かに、M・C・C提供の英イリソング映画「卑怯者」東和提供の「巨人ゴレーム」仏映画「トスカ」があげられる。「卑怯者」はリチャード・アッテンボロウの若者が船の荒くれ男達によってたかって、マストの柱に吊され裸の背中を、東になった鞭で打たれるのだが、五つか六つ打った所でカット。後半に至って拷問される場面が出てくるが、これは恐怖に戦うだけで終ってしまった。「巨人ゴレーム」は戦前のデュヴィウイエの余りにも知られた名作で興味深い拷問シーンがあるのだが、惜しい哉、オールカットされて見る事が出来なかった。（偶然にもこの場面のキヤビネ保存）「トスカ」は悲恋で名高い歌劇の映画化で、ロツサノ・ブラッツィ扮するトスカの恋人が官憲に捕

われて、拷問を受けるのだが、椅子に両手を後に縛られた彼が、シャツがはだけた肩や胸に焼火箸の様なものを何本も押しあてられるのだが、少しも迫力がなく、極めてノンビリした拷問シーンであった、只はだけた白い逞しい胸が苦しげに息づいているのが印象に残った。再びアメリカ映画に目をうつすと、ユニヴァーサル「砂漠部隊」があるこれはアラン・ラッドの主演だが、彼が責められるのではなく将校の一人になった端役の一人が吊し鞭打ちを喰う、裸の上半身は一定の距離をおいて鮮かに鞭あとがきれいに付き、長時間に亘って責め通した感じを抱かせる。

いろいろと駆け足で満足な表現は出来なかったが、戦前戦後を通じて、最も興奮させられた忘れ難い映画がある。コロンビア製作の「激情の断崖（ローナドーン）」である。既に観覧済みの方もあろう、今一度あの時の興奮を味わいたいと思っている。リチャードグリーンとバーバラヘールの主演で、数度に亘って私の脳中に刻みこまれた鞭打ち場面は、生涯忘れることの出来ないものだ。簡単なストーリーは、先ずリチャードとバーバラの少年少女時代から始まる。彼は農家の一人息子彼女は城中の一人娘、憎からず思う二人だが所詮遠ざけられる恋ゆえ彼は発奮して都へ出て剣の修業に入る、十数年は流れて彼は逞しい剣士として故郷へ帰るが、父は城主に反抗



した為、殺され母と妹が待っている。城主の息子は度重ねて苛酷な課税を付した為、リチャードは、百姓達と団結してデモを起そうとする、が、城主達に発見され、捕われてしまう。そして衆人環視の中で残酷な鞭打ち刑罰を受ける。筋肉隆々の上半身を（彼がこんなに逞しいとは想像もつかなかった）むき出され、太い腕を、引きちぎれる程一ぱいに拡げられ、両手首を革紐で吊されている。警吏の

一人が、東になった革の鞭で情容赦もなく彼の裸身を打据える、その凄惨な音響が、観客席一ぱいにひろがり鮮やかな快感を呼ぶ、カラー映画なので彼の肉体は所々破れ鮮血がほとぼしっている、苦悶にひしがれた彼の顔、馬上から小気味好きそうに眺める城主の息子「どうだ改心するか、苦しかったら改心しろ」リチャードはグッタリとなった汗だらけの顔を静かにあげ、無念の形相で睨みかえす。絶対

に妥協出来ぬ無言の反抗である。「続ける」冷く言い放つ、再び鞭は唸りを生じて彼の肉体に喰い入る、この場面は割合たつぷりとあり、久し振りに楽しませてくれた。そこへバーバラ・ヘールが来て、救け出されるのだが、私の考えでは気絶したりリチャードを馬の背に縛りつけ城中へ連れ込む、そして地下の拷問室で、改心する迄、徹底的に責め苛んでふんだんに拷問シーンを、つけ加えてくれたらなと思った。

最近の時代劇

縛りシーンから

嵯峨美也子

ゴールデンウィークは、やはり時代劇ばかりで、日活を除き松竹、東映、大映と時代劇のオールスターキヤストの時代劇を出した。スターを大いに並べたが、タフ・ガイの石

原裕次郎のアップバットを喰った形だが、時代劇だけに縛りシーンの優秀なものもあった。

松竹の「清水佐太郎」では、伊吹友木子

の公卿の娘、鶴姫が密書を江戸へ届けるために女歌舞伎の美寿弥に扮して道中の途中新徴組に見付けられ引立てられる。細引で高手小手に縛られた伊吹は、屯所で密書のありかを白状せよと責められた。きつちりと後手縛りにされて、ついにローソク責でローソクを顔に突きつけられる。一寸、痛々しそうだ。高田浩吉の清水の佐太郎の化けた上使に助けられるが、それでも縛られたままで引立てられて行く。長いシーンだった。悪役の小堀明男は福田公子を犯しかけたり、佐々木京子の旅芸人一座の小娘おちせを前手縛りという変わった恰好で犯しかける。佐々木京子も「伝七捕物帖」で殺され、吊し責めにあったり可愛がられている。

東映の市川右太衛門、大友柳太郎等、顔合せの「大江戸七人衆」では、右太衛門の恋人になった花柳小菊の芸者、染吉が悪旗本に立てつき、屋敷へ拐かされてくる。芸者の粋な姿で後手に縛られて引立てられてくるが、色気と姿で仲々よいものである。邪慳に突きとばされている処など、さすがに小菊はベテランである。

大映の「命を賭ける男」は山本富士子、近藤美恵子、浦路洋子という美女を揃え乍ら、縛りシーンのなかったのは画龍点睛を

欠く。

だが、今後の作品に楽しみがある。化猫映画「怪猫呪いの壁」で浦路洋子の腰元、梢が勝新太郎の恋人、竹内喬之助と悪人側に捕えられ、木に背中合せに縛りつけられる。二人揃って地獄へやってやるといわれるが、怪猫が現われて縄が解ける。だが、縛られている不自由な手を探りあうシーンはよいだろう。

また「消えた小判屋敷」で、グラママーガールの毛利郁子の後妻お若が、月の前の松の木に高手小手に縛られ、南部彰三の黒田弥右衛門と吊り下げるシーンがある。豊満な肢体を吊られた毛利郁子は見ものだろう。「白蛇小町」では、白い肌に蛇をからみつかせて、大いに濃艶なところを見せているが、一度、吊責めを面白半分に引受け、胸、腹などギツチリ、サッポタリのようなもので緊縛され、金具で吊られ悲鳴を上げたとか。現代劇で素晴らしい縛りシーンを見たが、今度は時代劇の色っぽい縛り、責めシーンを見せて欲しい。

最近の新東宝映画に楽しい縛りシーンがある。「若君漫遊記・サタン城の魔王」で、北沢典子の菊姫が悪人共に捕えられ、サタン城の牢屋に入れられるが、牢中でも後手縛り、そして挑まれ、縛られたままで横に

転がされた姿は一寸、痛々しそうである。

この作品の最初の火焙りシーンで、二人の女性が十字架にかけられる。白の囚衣でキツチリ縛られている見ごたえのある磔姿だった。名前も知らぬ新人だけに、演技も一生懸命で悲壮感を十分出していた。

「朱桜奉行」では、先の「鬼姫街道」で吊責にあった、お伝女優、若杉嘉津子の君奴が、遠山左衛門尉のために秘密を探りに入り捕えられて、柔肌に吊責の拷問にあう。「江戸群盗伝」の福田公子の大阪屋花鳥の吊責と違った惨たらしさを十分出していた。

しかし最近の吊責めのヒットは、何といっても洋画の「熱砂の女盗賊」の王女、エリン・スチュワートと、ハジ・ババのジョン・テレクの吊責めだろう。二人が女盗賊、アマンダ・ブレイクに捕えられて山寨へ連行の時に吊責めの男を見せる。エリン・スチュワートは二回にわたり長時間、両手首を縛られ吊られる。女優もまた辛きかなである。

【註】

本誌口絵、楓月太郎提供「緊縛映画名場面集」御参照下さい。



△研究発表▽

切腹風土記

壬 生 三 郎

一 腹を剖く習俗

昔は脳の機能や血液循環などは全く知られておらずに、胸腹にある五臓六腑が生命に最も重要な機関だとし、生命の根源は正しく腹に在りと考えられていた。

頭部は頭蓋骨により、胸部は肋骨によって保護されているのに反し、ひとり腹部のみは骨組織の被覆がないから、最も損傷を受けやすいわけである。鳥でも獣でも腹部臓器を去ると残りの大部分は筋骨だから、腹部をもつて生命の原動力の所在と考え、ここを損傷することはとりも直さず死を意味すると考えら

れたものであろう。

戦場や闘争などで、兇器を振って相手の腹部を刺せばこれを斃すことができるという事実を見聞していたればこそ、今度はそれを我身にとり行って自殺をはかったのが切腹の起源であることは云うまでもない。即ち切腹という自殺方法が案出されたのは決して偶然ではなかったのだ。

腹部を切り開くのは自殺の場合は切腹を成立させたが、他人の生体または屍体に対しては昔から知られているように、刑罰、復讐、或はサジズム、ルストモルドの興味から出発したり、或は全くの迷信的な動機もある。こ

れが解剖や外科的開腹術、とりわけ帝王切開のごとき医学的方面に発展してきて、殺人剣は転じて活人剣となるに至った。

二 腑分け

伝え聞く殷の紂王、姐己、周の幽王、褒姒、漢の呂后、魏の曹操、齊の宝卷、梁の郗后、唐の則天武后らは殺戮をほしきままにし、或は屍体を支解し、或は妊婦の腹を裂いたという(尚書卷六泰誓上、資治通鑑前編六ノ一六)また聞くシナの姦通者は六所刑とて、姦婦姦夫を裸体にして大きな柱に縛りつけ、先ず左右の乳房を切断し、次いで腿臀腹に及んでこ

れを割き、最後に急所をえぐって命を断つたという。この刑は清朝末まで行われ、場所は町の人通りの多い十字街で公開し群衆はわれ先きにと四圍をとりかこんで見物した(グロテスク二ノ一他殺考、編狂学人)

その他敗戦者や罪人の屍体を解剖した例は古書に多く散見するところである。わが国でも叛臣逆徒などは屍体を幾つかに截断して各所に分葬した記録がある。

例えば物部守屋の資人なる捕鳥部萬が官軍にそむき、自ら頸を刺して死んだのを八段に斬り、八ヶ国に散梟し、平将門もまた首胴手脚等を分断して各所に葬られ、安部貞任は四段に斬られた。これは悪逆の徒が再びよみがえって来ないようにとの民間信仰的な意味をもっているのだが、中山太郎氏はかくの如く屍を截断することが即ちハフルであつて、しかもこの役目は神主がつとめたもので、古く神主を祝と呼んだという(本朝変態葬礼史)奥羽永慶軍記卷三三によると、柳田治兵衛尉の城が落ちたときに

「湯沢豊前守、蛙登典膳頭彼箕浦三郎真先に立て乱れ入れば、城中の女童愛かしこに逃隠るるを追懸追詰散々に切捨る。せめて助るかと女童の類天井に上り梁に取付うら板の上などに忍びけるを鎗にて突落し、又は柄長き熊手にかけ引落し突殺しするものもあれば、或は女下部の老人杯助給はれとて手を合泣悲

しむを取て押へ、手足を引張胴引などにするもあり、或は衣裳を剥取裸にしてさらば助けもせよかしと、仰けに踏返し腹を裂き首を切とつと笑う」

世界大戦のときは、もっと残忍なことが行われたろうが、戦争ほど人を悪魔にするものはない。

国枝史朗氏の小説「あさひの鎧」には活体解剖として漢権守が生体を解剖したり、移植術を行ったり浮藻という美人の頭を割つてその脳を山羊の脳と替えようとする場面がある。

この空想が現代医学では現実になって組織器官の移植が研究されている。

医家の解剖が上述のような機会を得て行われたことは古今東西その軌を一にしており、その証をあげると

漢書王莽伝に「芥翟義の党を誅し、太医尚方と巧屠とをして共に之を剝割せしめ、五臓を量度し竹筵を以て共豚を導き終始するところを知る」

資退録に「広西欧希範を戮しその党に及ぶ凡そ二日に五十有六、腹を割宜州推官靈管皆詳に之を視図となして以て世に伝ふ」

晁公武郡齋讀書志に「崇寧間泗州の市に於て賊を刑す。郡守李夷行医並に画工を遣はし往て視る。腹を決し膏盲を摘し曲折之を図にし尽く纖悉を得たり」

張果医説に「無為軍張濟よく鍼を用ふ。訣

を異人に得たり。よく親しく人を解きてその経絡を視る」

赤水玄珠に「何一陽云ふ、余先年精力時医を以て師に従い南に往く。賊の腹を歴剖し蔵府を考驗せう」

明程式に「嘗て倭人を解き蔵府を檢視す」以上は多紀樸蔭の医臚上巻、今村了庵の医事啓源、山田正珍の敗鼓録による。

漢方の医書に解剖の語の記載されたのは靈樞經水篇に「その死するときに解剖してこれを見るべし」とあるのが初めてである。もっとも解剖といっても四肢筋骨には及ばず、主として胸腹腔内のいわゆる五臓六腑を剖見するにとどまっていたようだ。かようにして、ともかくもシナでは古くから存真図、欧希範五臓図等の解剖図譜が作られたが、半ば想像を以て五行説に符合するように捏造され、事実をまげたことが多かった。

わが国で医家の実験による解剖図や模型が作られ、科学としての解剖学が基礎づけられたのは江戸中期のことで、宝暦より少し前に長門藩で姦賊を死刑に処したさい、侍医が請うてこれを解剖し、画工をして図せしめたがその図は秘して世に出さなかった。

宝暦四年二月七日、京都で山脇東洋、小杉適らが刑屍体の胸腹を解剖し、蔵志を著したのが公表された最初のもので、その後京都で解剖を実施しようとする場合は先ず山脇家に

具申し、更に同家から江戸の閑老に具状して刑屍の下げ渡しを受けるのが例となつたので手続の繁瑣にたえず、実施はなか／＼容易なことではなかつた(医海時報第二、一〇九号京都に於ける解屍 竹岡友三)

東洋の蔵志が出るや相ついで宝暦八年栗山孝庵の観臓図巻、明和七年河口信任、荻野元凱の解屍編などが続出し、明和八年三月四日杉田玄白、前野蘭化、中川淳庵によって千住小塚原で死刑にされた五十余才の通称青茶婆なる者の屍体解剖參觀に端を発し、解体新書の著述となり、ここにわが国解剖学の第一期集成がとげられたことは、あまねく人の知るところである。(日本解剖学文献集、日本医学史)

ここに注意しなければならぬのは小塚原観臓の事情で、杉田玄白の蘭学事始によると「解剖分の事は××の虎松といへるもの此事に功者のよしにて兼て約し置くよし。此日も其者に刀を下さすべしと定めたるに、その日其者俄に病氣のよしにて其祖父なりといふ者老屠齡九十才なりといへる者代りとして出たり。健なる老者なりき。彼奴は若きより腑分けは度々手にかけて数人を解たりと語りぬ。その日より前迄の腑分といへるは××に任せ彼が某所をさして肺なりと教へこれは腎なりと切り分け示せり。夫を行き視し人々看過して帰り我々は直に内景を見究めしなどいいし

までの事にてありしとなり。固より臓腑に其名の書記してあるものならねば屠者の指し示すを視て落着せしことにて其頃までのならいなるよしなり。其日も彼老屠が彼れの此れのと指し示し心肝胆胃の外に其名なきものをさして名は知らねども己れ若きより数人を手にかけて解き分けしに何れの腹内を見てもかやうの物あり彼処に此物ありと示し見せたり。図によりて考れば後に分明を得し動血脉の二幹又は小腎などにてありたり。老屠又曰唯今まで腑分けの度々其医師がたに品々をさし示したれども唯一人其は何此は何々なりと疑れ候御方もなかりしといへり」

すなわち杉田玄白らは直接手を下して腑分けをしたのではなく、屠者のなすところを傍観していたにすぎなかつたのは、そのころまで自ら執刀して解剖しえた医者がなかつた(中外医事新報第一二一六号小塚原観臓記念碑建設願末、富士川游)ことを裏書している。前記の王莽伝で知られるように屠者が腑分けに習熟していたことは看すことができぬ。学究的な興味も良心も持たない屠者がなぜ腑分けをしつばし行い、これに巧者になつていたか、それは必ずしも猟奇心のみで解すべきことではなく、何かの興味か利益があつたに違いない。

そのせんさくは暫くさし控え、話題を転じて首斬役人の山田浅右衛門のことに及ぼう。

伝える所によると同家には山田丸、浅右衛門丸、人丹など称する有名な家伝の薬があり、これは山田家にとって経済的に重要なものだった。永島孫一氏の研究によると

「こは犯罪予想のかどで発表出来かねると思ふ故、一切書く事を憚るが、所謂人丹で肺病薬として名声があり、一般売薬ではなくて懇望に依る頒布網を持ったものである。江戸土産として諸国へ流行して行つたのは参勤交替の制が便した所であると同時に該薬の価値を証する所以でもある。薬価は丸薬で浅銅貝より大きい程度の貝殻一杯が明治の初年に於て金五円と驚くべき価額を有した。更に伝説に近いかと思はれるものに刑死人の小指があり之を吉原女郎の需要に任せて供給したと伝えられても居る」(伝記二ノ六首斬浅右衛門吉利)

三田村鳶魚氏の捕物の話(三四〇頁)には江戸時代には金二分で分けたというが、いずれにもせよ、前の小塚原の屠者のことと、浅右衛門が人丹の原料をどうして手に入れたかを思いあわせると、屠者が腑分けに習熟した理由と動機の一斑をうかがい知る手がかりが得られそうな気がする。

人丹や靈天蓋(頭蓋骨を薬用にした)の迷信はむろん人道に許すべからざる不徳行為だが、昭和の今日もなおその迷信が遺っているを知って身ぶるいがする。

昭和八年四月十六日から二十三日に至り東京日々新聞に報導された相生市宮火葬場人夫数名の死体遺棄事件で、火葬を托された遺骸二百五十以上を附近に埋没したり、他人の骨を遺族に渡したり、その上同市の小倉某(五七)が屍体の一部を買取り乾燥粉末にして薬用に供せんとした憎むべき悪業である。

さて江戸時代の解剖の模様を詳しく描写した記録があいにく手許にないから、文政五年三月に仙台藩で佐々木仲沢が執行したときの記録を引用しよう。

「仲沢江戸にて親しく解屍を観る前後十余度に及びしが婦人刑死絶少で未だ親しく其真に徴するを得ず。今茲に文政五年三月余支封医官を以て之を宗国医学教授に承く是歳六月念九一婦人北郊に磔せらるるあり(割註、婦人の名泊欲年三十六、其夫を妬殺す事発はれ罪状明白終に及ぶと云ふ。泊欲はさよと訓むべきか)有司刑屍を割剝するをゆるす。蓋し医学総督渡辺氏之を請へる也。總督乃ち余をして其事を典せしめ且曰く方今暑暑やくが如し。屍の腐敗僅に一日を保つ可し。もし全軀を解観せんと欲せば一物も詳悉恐くは得可らざらん。況んや頭顱と下腹とを除くの外鎗痕摩爛し(磔にて逆槍を受けるため)臓象或は完形無らん。婦人刑屍及び得易らず。今日の政宜しく専ら其の男子に異れる者を究尽して止むべきのみと。期に及んで總督属官を率い

北郊に至り学生を指導して各事に従う。乃ち屍を盤上に置く。剖手刀を奏でて腹皮を割開し十二指腸際と結腸下際とを緊札し更に腸を循らして腸間膜を截る。腸を去つて後陰具連属歴々睹る可し。斯くして内生殖器の外観大さ等記述しおはつて乳を解く。刀を下す念九已牌に始まり翌晦未下牌に終る」(中外医事新報第一二二三号佐々木仲沢著存真図腋解題長谷部言人)

当時の解剖用屍体の入手難、解剖のものもしさ、わずか婦人の内生殖器と乳の解剖に数時間を要し、深夜に及んだ慎重さ等、全く今昔の感にたえぬものがある。

江戸時代の解剖術式は新宮凉庭訳の解体則などの本もあるが、いま本間玄調の内科秘録巻一によつてその大要をうかがうと

「先づ快刀を把て鳩尾より軽々と浅く割て臍に至り、岐して臍間を截廻し亦臍より割て横骨に至り、横骨に従て横に左右に割くこと三寸許、又鳩尾より肋骨に従い横割して左右の季肋に至り、次に腹皮を刺で左右へ展開し五対筋及白条等を見る」

第二刀は胸部正中線切開、第三刀は恥骨を截開して骨盤内臓器を観、第四刀は四肢、第五刀は頭部を十字形に切つて皮膚を四方へ翻転し耳上より横に鋸で切廻し頭蓋骨を開く。

これを現代の術式にくらべると大いに異なるものがある。現代一般に行われる術式は頸窩

から恥骨縫際まで一直線に正中線皮膚切開を加える。但し臍窩は左方に迂回する(近世病理解剖方法、佐藤清、病理解剖術式、柏木正俊)内科秘録のように恥骨部を左右に切開したり肋骨弓にそう皮膚切開は加えない。頭部も耳上に於て環状に皮膚切開を行う。

解剖は普通の外科手術で出来るだけ小さく切て狭い視野の内どこまこと細工をしていゝるのに反して喉もとから恥骨上縁まで大きな解剖刀で一氣にすうとと截開するのは森教授が語っている如く(解剖台に倚りて)何となく壮烈な派手なものである。

三 帝王切開

シナで妊婦を剖腹したことは前にあげた尚書や資治通鑑をはじめ読書にその記事を見るが、わが国では日本書紀武烈天皇の二年秋九月孕婦の腹を剖きて其腹を観たまうとあるのが文献上では初見である。しかしこの記事は真实性が疑わしいという学者もいる(歴史公論二ノ七武烈天皇 滝川雄)

殺伐な戦国時代にはこの種の話が若干ある「又去年の事とや上杉の將の取手を見て帰ける道に傍に齡三十計なる懷胎の女二十許の男をつれて世にもくるしけにて光安の行過給ふを見て傍にそかしこまる。光安是を見給ひて二人共に召せよ男をば手つから首を打、女をば人をして腹を裂しめ胎内の子を引出し夫を

も其まま殺されたり」(奥羽永慶軍記卷四武藤駿河守光安悪行の事)

また最近出た加賀淳子氏の「小説の材料袋」の中の百姓兵法の原本になっている甲越軍記には武田信虎の悪業として

「大永七年五月上旬鷹野先へ案内もなく出られたる田裡の農民大に周章われ一にと田畠より駈上り蜘蛛の子を散すが如く家々に逃帰る。此時一人の妊婦ありしが人並に走らんとすれども腹の重さに引れ心ならずも逃げおくれいよいよ周章て足もとを踏たがへ草野の上に倒れたり——信虎女を顧み今汝腹を見るに甚だ膨らかなるは何に依らず懷中に盗み隠したる物ありと見えたり。女答て妾は懷胎仕りしものにて臨月ゆえ如是嵩高に候。全く懷中には一切も隠したる物候はずと帯を解き身を払ひ見せけるにぞ、忽ち快然として笑を含み屈竟の者こそ得たれ、我思ふ所あり其女先づ館へ連帰るべしと館中に遣はし、狩場より帰りて後申されけるは、予常に思惟するに男女媾合し胎中自ら子を生ずる事天然とは云ひながら何かなる道理ぞと、今に至りて案に落ちず折に触れなば胎を開き仔細に臓中の模様を見んと思ふ所図らずも今日妊娠の婦人を見付たり。速に庭前へ引出し胎を開くべしと申されければ残忍を好む近臣彼女を庭前の樹木に縛り忽ち腹を割りけるは目も当てられぬ有状なり。是より後はひたすら面白きことに思

ひ、折々胎を開かれけるほどに凡そ六、七人に及びぬ」(初編卷一信虎縦逸の事)

百姓兵法は五人目の被害者の息子が母の仇を報せんと苦心武術をみがいた話である。

その他、殺生関白秀次(太閤記)や越前宰相松平忠良(野史)などもやったことは周知の通りである。

妊婦の腹を裂くのは多くはルストモルド又はサジズムからやることは東西を通じて共通するが、その他迷信、治療からもこれを行うことがある。

治療方面からみると帝王切開術がこれである。この術式は妊婦の下腹部に於て正中線切開を加え、漸層的に腹壁を開いて腹腔内に入り、子宮体を切開して胎児を取出し、切開線を各層ごとに縫合しおわるので、母子をともども救う極めて仁道的な、しかもすこぶる華な手術である。

帝王切開は西洋では古代エチプトから行われていたといい、またギリシヤ神話にアポロが息絶えたコロニウスを裂いてアスクレピオスを生れさせたり、同様にして生れたディオニウスの話がある。ユリウス・シーザーも同様で、シーザーとは切開されたものとの意だという。

ドイツでは中世紀の初期までは母体が死亡した場合に限られ、之を行うものは主として産婆で、十五世紀のアレクサンドロ・ベネツ

チーの著書にはこれを助産婦の義務だと書いてある。近世初期からは産婆の免状を持たなくとも、特に修養をつんだ婦人はこれを行うことができ、しかも生きてゐる母親に対して実施するようになった(中外医事新報第一二四五号抄録帝王切開の前史、エルゼルイゼ・ハベルリング)

現在のように医者の手でこの手術が行われたのは一六一〇年四月二日ウィッテンベルグの外科医トウトマンが初めて(治療学雑誌四ノ一帝王切開 横山茂樹)この時、母親は二十五日めに死んだが、取出した子供は九才まで生きたという。

(日本の帝王切開術は嘉永五年埼玉県大宮の医師伊古田純道が行ったのがはじめてで、その後の例もかなり詳しくわかつてゐるが略す。)

西洋には難産のため医者の手を借りずに妊婦自ら帝王切開をやった例がかなりある。

「セルビア国境に程遠からぬブリッチに於てさる日稼人のおかみさんが三日間も激しい陣痛に苦しんだが子供が生れない。絶望の挙句自ら亭主の剃刀を執つて帝王切開をやった。そして近隣のおかみさんに傷口を縫つて貰った。二ヶ月の後には母子共に健康になつていた」(犯罪科学一ノ五帝王切開 巴陵宜祐)

日本でも同様の例が近年あった(拙著、切腹七部集のうち女性切腹史)

小説では馬琴が書いている。それは椿説弓張月統編第四十三回の阿父くまふちという悪婆が

「三十みそじを越えたる難産は大方は生みがたし。

長く苦痛をせんより無き身と思ひ諦めて腹を裂かして児をたべ——痛うは殺さぬしはしが程ぞ辛抱あれよ新垣（妊婦の名）が胸前撫んで仰けさまに突倒し、玉散る刃を閃かして脇腹浅くかき破れば、ああと魂消る傷口へ手をさし入れて引出すは思ふに違はず男児なり。

胞衣切放てば高やかに忽ちあぐる産声も此世の風の吹きもて行きて、聞く人もやといふせくて、緋の衣かいたりとつつ血に塗れたる手を拭いて襦袢もたえて亡骸の袖引き裂ば草の花もほろ／＼と散る母の衣——やがて上の子供が迎へに来ると）母はそこにはおらずして、右辺なる叢の中に仆れ腸長く出て鮮血に塗れたり——やがて左右より抱起すに腹を切裂れて死したれば、絶えて救うべくもあらず」

この前で馬琴は大いに妊娠浮腫、催生湯の講釈をしている。

、宮武外骨氏の奇態流行史によると

「明和初年の版本小松屋百亀の肉蒲団という春画（尾崎久弥著増補艶本目録によれば枕本三冊墨絵）には婦人胎内図としてマヂメの彩色絵も出て居るが此胎内図の流行は人形細工にもうつりて薬店の軒頭に腹内を露出せる人像を置かざるはなく、又一方には絵草紙とし

て歌川派浮世絵師の筆に成れる一枚版行の彩色絵が盛んに流行し、飲食養生鑑とか体内覗機関とか題して艶男又は美人を大きく画き其体内の五臓六腑を色別にし——天保末年後四五十種も出版され云々」

同書には別項半裸体の胎児図と題し、懐妊の初月から十月まで、の胎児図が刊行されたことを述べ、明治十三年版の懐妊写真鏡の図を転載している。

藤沢衛彦氏は変態資料に於て懐胎十月の見世物と題し、昔仏家が仏具を見世物にして宿胎十月の理を善男善女に説き示し、安永天明以後には宿胎擬様人形の興行物に於て説明者が御開帳起を物語るような妙な節をつけた口上で説明したと、医心方にあるような懐胎図を掲載している。

仏教でも立川流などは布教の必要上胎生学を説いていたようだ（邪教立川流の研究水原堯栄）

安永といえは賀川玄廸の産論翼が出版されて産科学に劃紀的な啓蒙をなした時代である。またその頃はようやく解剖学が隆盛におもむかんとし、諸種の解剖図譜も出版され、当時の民衆は猟奇の眼をみはつたのであった。それで上記のような版画、人形等が流行したものである。

蘭医日本婦人を解剖する図とて変態趣味を

狙った版画も作られている。この図は解剖学的にはでたらめで、婦人の体を布片で緊縛して吊下げ、胸腹部に正中線切開を施して内臓を露出した状を描いたもので、全くサジスチックとしか思われない。

薬屋の解剖人形を利用したのが女帯系織八丈（鶴屋南北著、英泉画、文政七）である。左手に解剖人形の図とあやしげなオランダ文字が画いてあり、右手よりには取上げ婆の老樹が磔さだという孕み女をとらえている構図で、詞書には「泰西の医のつねなれど、こころさま惨しみしともかわゆしとも云ふことを知らず、いまだ懐胎せし婦人の解胎をせしことなければ」云々とある。

これは石のあもんという人が名も知れぬ乳の下の悪瘡にかかり、あらゆる治療を尽したが治らぬため、友人の悪医者城齊のすすめによつて取上げ婆に孕み女をとらえさせたのだ。磔は後に虎口をのがれる筋になっているが、解剖人形の図を利かしたところに当時の流行と画家のみそが認められる。ちなみに同図は怪奇双紙画譜（尾崎久弥著）に収載されている。

浄るりの奥州安遠原にもあるが、芝居の方で妊婦の腹を剖くのは南北の独道中五十三駅三幕目小夜の中山夜啼石の場で、むろん古浄るりや伝説の雛案である。

非人の江戸兵衛が三十両の身代り金で買っ

てきたおまつという妊婦が辰の年月日揃った生れなので、その生胆を自分の金創の薬にしようというのだが、江戸兵衛は実はおまつの父の仇である。

「たとへ泣かうがわめかうが、後さき遠き一軒屋、牛馬を剝くは常ながら、ちっと手馴れぬ女の生胆、稽古のためにしてみる仕事、痛いめこらえてくたばってしまへ」と、とど女を板にかすがい留めに縛りつけ「縛りからげて腹を裂き、その生血が薬となる、敵のおれを助ける良薬、みすくここで返り討いや返り討も多く見たが皮干し板でのこのざまはハテ珍らしい」とばかりアレい／＼ともがくおまつは胸元を出刃を以て突込む。これにて苦しみ身悶えするを江戸兵衛よろしくこなし。

この時腹の中より赤子出て泣くのを引出して門口へ捨てる。次に生胆を出し素焼の壺の中へ入れ片口を出し懷の薬を半分引明けて血を浸し一つにしてこいつは余っ程飲みにくからうと顔をしかめながらグツと飲む」(日本戯曲全集鶴屋南北怪談狂言集)

南北一流の殺し場で、せい／＼すごい所を見せたことだろう。初演は江戸兵衛を七世市川團十郎が演じた。

妊婦ではないが、清水浜臣の遊京漫録白髮畑の帷に紀の川のほとりで二十才ばかりになる村長の娘が怪人のために爪で胸から腹にかけて引きかれ、血を吸われ、はては腸をかき

出してくわれた話が出てくる。

次に迷信的な面での帝王切開は巴陵氏の集録された所によるとボムペイでは妊婦が死亡すると屍体を沐浴させ、花やかざりをつけた後火葬場へはこび、夫はそこで鋭いメスを用いて妻の腹の右側を切り開いて胎児を取出し、その跡へは乳とバタをつめ木綿糸で縫ってから普通の通りに火葬に附したという。

中山太郎氏は本朝変態葬礼史(犯罪科学二ノ八)に於て、福島県では昔妊婦が難産のために死ぬとその腹を裂き胎児を引出して母体に抱かせ(愛媛県では妊婦と胎児とを背中合せにした)それを一つ棺に入れて葬ったが、この習俗はアイヌのウファイが残存したものでアイヌは難産で死ぬと墓地に於て老婆が鎌を以て妊婦の腹を切開してから葬ることがアイヌの足跡という本に詳記してある。福島県の安達ヶ原の鬼婆はこの習俗が伝説化されたもの(日本民俗学辞典)と推定している。

また全くの迷信から、例えば胎児の屍体を携えて泥棒かせぎをすると発見されないといつて妊婦の腹を裂くとか(前記巴陵氏の研究)胎児は悪瘡の薬だとして

「今は昔、平貞盛朝臣と云う兵有けり、丹波守にて有ける時其国に有けるに身に悪き瘡の出たりければ——我子の左衛門の尉維衡といふを呼で、我が瘡をば疵と此の医師は見てけ

り。極しき態かな、まして此の薬を求めば更に世に隠れ有らじ。然れば其妻こそ懐妊したなれ。それ我に得させよといふを聞くに維衡目も暗て更に物不思議」

とせがまれて困ったが、わが胤は薬にならずと逃れ、その代りに妊娠六月の下女の腹をさいたら女の子だったので棄てたという(今昔物語巻二九)

高田義一郎氏はこの説話を評して「此の本の性質から推せば此療法は当時實際に行はれて居たものと考へられるのであつて、稗史小説のそれとは異つて特に意義がある」(日本文学講座の内、日本文学に現れたる医学)

と云われたが、我国の医書にはさような惨逆無道な療法は幸いにして見当らない。

八犬伝の難衣が山猫の化けた舅から眠病の薬にするからと迫られて自ら腹を裂く話は女性切腹史で述べた。

生胎を服用すればらい病が治るとて明治三十八年長野県上伊那郡で馬場某がよしの(二五)その乳児よしみ(一)子守女の三名を殺害した例を沢田順次郎氏が例証している(変態性医学講話)

(この頃 完)

現代マゾヒズム芸術時評

原

忠 正

復刊第六十項月刊誌新生五月号第四一頁

「エロ・サーカス」

「新生」は、最近売出した綜合誌であるが、「小説公園」に範を採り真中針金綴じのB6判で、我国の雑誌の新しい方向を熱心に追究していることがはっきり読みとれる。戦後一時、代表的大衆雑誌であった「りべらる」の一部をとってきた様な部分が、毎号必らず何頁か見られるが、ここに紹介する「エロ・サーカス」なども、その類別に入れるべきものである。

内容は、米国のバクロ雑誌からの翻案らしく思われる。或る娘が、金儲けの為にエロ・シヨウに出演し、手入れに遭って検挙されたいきさつを、極く簡略に約四頁に拂って述べているが、彼女のさせられたシヨウが、「踊

れなくてもよい」種類のものであり、「獸以下」のシヨウであることを暗示的に述べており、その上演外題に「サイクリング」、「乗馬」、等のあったことに触れている。この種のエロ・グロ・シヨウと云われる偏向的な性格を持つシヨウが、可成り大規模に実施されていることに注目すべきであろう。アーヴィング・クラウ社の如き「鞭持つ美女の踊り」などの類でさえ相当に愛好者の多いことから考えても、この様なエロ・グロシヨウに相当の顧客が招致されたことは想像に難くない。

更にここで触れるべきは、シヨウ・サーカスのみならず、偏向性愛専門雑誌たるビザアル誌や前記アーヴィング・クラウ社の出版物に見られる通り、アメリカに於ける此の種の公開物が全体に極めて明るい表情と雰囲気を持つていることから推して、我国の一部に見

られるエロ・シヨウの持つ何か一種薄汚ない印象を全く排した明るいシヨウ形式によってこれら性愛劇が上演されたことは想像に難くないのである。若し許されるならば筆者は我国でのエロシヨウが明るい雰囲気を探入れることによって、新しい段階に到達し、グロテクスと称されるサド・マゾ・フェティッシュによって、新しい内容を持つに至ることを希望する次第である。

「新生」誌のこの小さな短文は示唆する処、甚だ大きいとせねばならぬ。

復刊第六十一項

米映画「決闘オレゴン街道」

主演 エリクソン

新しい企図や心理追究などといったものは全く見られない、十年一日の如き娯楽活劇

西部物であるが、それだけに本項で採り上げるには恰好である。

インディアンとの混血の米軍将校が、インディアン酋長の許婚者を掠奪結婚から救った為に、酋長と決闘してこれを抬すという大筋に、その救った許婚者が将校に恋情を持ち更に隊長の妻との三角関係に至るといふ、まことにややこしい梗概であるが、すべての出来事は見せ場を作る為に甚だしく無理を感じさせ、隊長の妻などは有っても無くてもよい様な有様で、お寒い限りの娯楽作品のCクラスである。併し本項では、その最も御都合主義に見られる隊長の妻が一番大切である。

彼女は、用もないのに蕃地に遠乗りに出かける習慣を持つ。彼女は、粗野な西部に似つかわしくない華美な服装をして野外に出かける。良人である隊長は妻が混血将校に惹かれてゐるのを知って態々妻を苦しめる様な仕打を繰返す。最後にインディアンが隊長の妻を生捕って殺す場面があるが隊長は単身、妻を救うべくインディアン部落にゆき、妻を助ける心算で反って射殺してしまい、自分も又インディアンの為に虐殺される。こういった多くの断片的な引用によつても想像に難くない様に、サド・マゾヒズムを直接、間接に、刺戟する構成や、場面が屢々現われるのであるが、余りに必然性の少い組立て方の故に断片的な集合としか解されない。如何に有効な場

面も、その前後の伏線とその誘導の良否によつて、全く馬鹿らしい結果をしか生まないことがあるといふことの立派な証明である。四月中旬ロード・シヨウ。

復刊第六十二項

仏映画 「非情」

私は不幸にして本映画を見ていない。しかし、私は本映画が心理的に女のサディズムをはつきりと基盤としてゐることに注目する。良人にかけられた保険金ほしさに、すでに死体となつた良人を、人為的に事故死に見せかける為に、叙智の全てをそそぐ、中年の美女は、まことに凄絶そのものといわねばならぬ。読者諸君が是非、一見せられること希望する次第である。

復刊第六十三項

米映画 「海の壁」

この作品については、植民地に於ける西欧婦人の在り方について、現代の一つの見方が注目される。沼氏が非常な興味を氏の手帖に示した植民地病について、私達は新らしい知識を得ることが出来る。西欧人が示す不撓の建設、稀に見る烈しい生活の連続、その結果多くの植民地都市が建設されるに至る。私達はアジア、アフリカの各地にその実例を数限りなく見ることが出来る。南アフリカのヨハ

ンネブルグ市は、我國の何れの都市よりも優れた近代都市であるといわれる。その繁栄は、たしかに白人の努力の結晶であるといえよう。すでに、白人同士の争いがこの町を中心として繰返されてきた。有名なポール戦争がその現れである。名優エミール・ヤニングスの演ずる映画「世界に告ぐ」は戦時中、最も感動的な宣伝映画であつた。この作品は、偏った主張に基いて製作されたきらいはあるとしても、ポール戦役の細大を洩らさず伝えていたと解される。

私達は現在、アジア・アフリカ・グループと呼ばれる諸国が示している力強い発言力を、必らずしも其のまま黄色、黒色人種の地位の向上とのみ解釈してはならないと思う。現在、有色人種が獲得した地位は、尊敬と理解に依る結果とはいひ難いからである。米、ソを始めとして各西欧諸国は、有色人種の数とその居住地に天然に与えられた地の富の故に、譲歩しているにすぎないからである。

有色人は白人にとつて未だに小さなキングコングの成長を見るのと大差ない一種の好奇心と漠然とした恐怖心による対象でしかないのである。本作品はこんな事を考えさせる。

復刊第六十四項

「ネオ・ナチズムの抬頭」について

最近各種の実話雑誌が、米誌の翻案らしいネオ・ナチズムの抬頭、を記事として載せ始めた。アリアン人種優越の主張に基いたナチスの思想は、再び黒いキュロットと、黒い乗馬靴で象徴されるサディステイークな色彩を以って、西独各地に抬頭を始めたらしい。女性黨員に対して課せられる私刑や、女性黨員によって実行される乱交と残酷な鞭打等が、センセーショナルに描かれて人々の興味をひいているが、筆者はナチズムに含まれるサド・マゾヒズムやフェティシズムに疑いを持ち得ない。アドルフ・モトラの指導理念は、正しくこの様な変態的な性心理の効用によって支持されていたからである。

性愛上からの理由にのみ偏するならば、ナチズムが今に、第二のアウシュヴィッツやベルゼンの収容所を作り上げる日があるということも、又興味あることではないかと思う。

復刊第六十五項

出版物 「カメラ毎日」

六月号所載

同誌のカラー・ページに六葉の石井周二の「作品」が発表されている。尤も筆者は、こうした写真が「作品」などと、おこがましく批評の対象になっている風潮に反感を持って一人であるが、本項では便宜上「作品」という呼称を使っておく。この写真は一連の

題名の他に総称として「遠乗り」という題名が付されているもので、総天然色野外写真である。解題によれば、青山学院馬術部の女子部員の外乗を撮影したものの様であるが、些か背景等から考えて、同一の機会に撮ったものとは思われない。併しそういうことは本欄にとつて重要なことではあるまい。

女性乗馬と淫虐性との関連については、すでに本欄でも再三に渉って述べたし、更に詳細な点については沼正三氏と乗杉貴代子氏とが綿密な記事を書いて居られるので、再びここでそれを繰返して述べることは止めることにするが、唯、マゾヒストの側から見ると興味のある一つの実例を、ここに紹介しておく次第である。

昨、三十二年二月より九月の間、都内の明治神宮西参道に近い「乗馬倶楽部」このクラブは同種のもの内、都内最大と考えられている伝統の永いクラブである。Ⅱの馬場での出来事である。筆者はその実況を見出し、係員の証言に依れば、その出来事は毎日慣例の如く繰返されたという。

その出来事というのは、三十五、六才の色黒のやせた男が夕刻になるとトランジスタ・ラジオを持って現れ、観覧席の向い側の埒（馬場を区切る柵を云う）に寄りかかって暫らく観ている内に、女性、それも美しい若い女性が練習を始めるとその近くにゆき、それ

を眺めながら恍惚境を呼び起すための行動を繰返し、満足すると素知らぬ顔で帰ってゆくというのである。筆者も偶々、その現状にゆき合せた事があるが、女性乗馬が如何にマゾ・フェティシストに刺戟を与えるかのよき実例と思い、ここに掲げておく次第である。

復刊第六十六項

交響詩 「家庭交響曲」 リモアル

ト・シュトラウス作曲 *Ein hard Straus*
%: Tondichtung: Sinfonia Domestica.

リモアルト、ヴァークネルが創始した音楽演劇、哲学、宗教及文学等の総合芸術たる楽劇が、西欧楽壇を徹底的に破壊し、又支配したことは余りにも重大な出来事であった。芸術のナポレオンと異称されたヴァークネルは彼以後の、すべての芸術に何等かの強い強い影響を与えたのである。即ち、ヴァークネル崇拜者と反ヴァークネル者以外は、芸術界に存在しなかったのである。フランスに反ヴァークネル派としてのドビュッシイ一派が、そうして、ヴァークネル崇拜者としてドイツにリモアルト、シュトラウスが現われた。ドビュッシイに就いては、筆者は曾って本項の初期に毛髪フェティシズムのよき対象として「ペレアとメリザンド」を採り上げたし、シュ

トラウスについては、最もサディテスウィークな女性を描いた肉感的な傑作「サローメ」を紹介した。

然し乍らここに採り上げた「家庭交響楽」は、その内容に何等アブノーマルなものを含んでいるわけではないが、後に書く様に性的な交渉を直接的に驚くべき綿密さで描いた、よき実例として採り上げたわけである。

先ず第一に私達は、シュトラウスの自信満々たる言葉に耳を傾けよう。

私は、ベエトオヴエンがエロイカ(第三)交響曲でナポレオン、ボナパルトを描いた如くに、偉大な英雄が、音楽を以て描かれる価値があると信じている。私は、かつて「英雄の生涯」(Ein Heldenleben)に或る英雄を描いた。(筆者註)シュトラウスはこの「英雄」が自分自身であるとして作曲した。その明かな証拠として、彼は同曲の第三部「英雄の平和事業」に、自己の作品の断片を数多く挿入している。Ⅱ)私は、此の度び、或る曲型的な人間も又音楽の描写の対象たり得ると考えて此の曲を作った。

此の交響曲は、所謂シムフォニーではない。交響詩を便宜上、四つの部分にわけたものにすぎない。その最大の特長は、男、女、子供の夫々のテーマが終始変つていず、一貫して用いられていることである。この作品に

ついて、音楽的には語るところが尽きないのであるが、今は本題に余り遠ざかつてしまうので割愛する。第一部で、登場する各人の説明が行われ、朝の家庭が描かれ、第二部で、夫婦の愛が語られ、第三部、夫婦の性的交渉が微細に描かれる。男女の各テーマはもつれ合い、次第に高潮して遂に結合する。そうして、つづいて夢の交錯の美しい緩徐調、更に翌朝、子供の生き生きとした情景と、幸福な家庭が語られて第四部を終るのであるが、性的交渉の部分はリルケの「マルテの手記」よりも更に細かく描写がつづけられる。この驚ろくべき描写、豊かな音色、花火工場と悪口を云われた豪華な色彩は、この今は故人となつた大作曲家が、よりフエティシステイックな作品を作つたとしたならばという、空しい期待を抱かせるに充分である。この作品は性的なもの描写が、音楽によって、文字によつてよりも更に明らかに伝え得るということのよき証左となつてゐる。猶、この作品は最も簡便に、故クレメンス・クラウスがヴィーン・フィルハーモニー管弦団を指揮した名盤が手に入るのので、実際に當つて御鑑賞下さることを切望する。

復刊第六十七項

西独乙映画 「拳銃地獄」

ベルンシュタイン・プロ製作

併映用の映画ではあるが、戦後の各種の独乙映画とは又、一寸違つた雰囲気を持ったスリラー映画である。

概要は、東西ベルリンを股にかけた紙幣偽造団を纏つて米国から偶然、法律手続の爲めにやつて来た弁護士ロバーと、偽造団によつて酷使されている元独乙国立銀行の造幣局の技師長とその娘のバレイリナの三者が特異な環境の中で動く。技師長はナチスの強制収容所に理由なく拘禁されて居たのだが、父を求め娘には空襲に依る死亡の通知しかなかった。併し映画の進むに従つて巧妙に技師長が収容所から抜け出され、更に悪質な偽造団によつて地下工場に幽閉されている事、偽造団のボスが、娘の許婚者であることを知る。結局は悪玉が滅び、弁護士と娘が結ばれ、父は救出されることによつて解決するのである。が、この本筋と関係なく私達の注意は、弁護士が偽造団によつて、東ベルリンに誘い出され、気絶した儘、河に抛り込まれるエピソードの部分で、突然登場するソ連看護婦に惹きつけられる。彼女がチエスをする場面を着用して居る軍服は、女性軍人が平時に着用する軍服の中で最も魅惑的なものの一つである。女性の軍服に就いては、第一次大戦以降について別に項目を設けて詳しく述べる心算であるが、本映画に出てくるソ連看護婦は、一見の要のあるものと考えてよいと思う。

復刊第六十八項

米映画 「情婦」

主演 チャールズ・ロートン
マレーネ・デイトリヒ

ビリー・ワイルダーの監督した傑作推理映画。この作品は原作の面白さに加えて、二大名優と共によきディアログによって異色ある作品となっている。

本欄ではこの作品の梗概やロートンとデイトリヒの白熱的な演技について触れることは避けよう。彼等の演技は、求め難い程の完璧さを持って居るとのみ記して置く。

デイトリヒのベスト・ドレッシングアとしての好例として、よく新聞雑誌上にこの映画の中でのシンプルなスーツが挙げられているが筆者はそうしたよき着こなしを、むしろこの作品の中での西独の酒場の場面でのセイラー服に見出すのである。台詞によれば、この衣裳は戦前のものであるというが、独乙では戦前から女性の男装が屢々見られていたらしい。ダス・レエベン誌やユーゲント誌、更にダス・マガジン誌(Das Leben: Jugend-Das Magazin.)等の戦前の諸雑誌が、その掲載するグラフ・ページに必らずといってよい位、男装、又は男装に近い女性の写真を採り上げている事は、充分に注意を要すると思われる。前項にも記した様に、女性用軍服と共に女子の男装について記す機会に、これ

に触れる予定ではあるが、ここに最上の好見本があるので御紹介して置くわけである。

復刊第六十九項

出版物 「わが心に、

鐘は鳴り響く」

フオン・ホルト著 村木象彦訳

戦時中ダツハオ(Dachau.)強制収容所に収容されてその苦澁を嘗めた著者が日記体で綴った記録文学。此の訳書は一九四九年二月暁書房から発行されたが現在絶版である。

本書のあとがきに拠れば、「第二次大戦後の独乙では、ナチスの残虐を曝く多数の報告文学書が出版されたが、特に政治犯収容所に關するものが多く、読書界にはいわゆる「収容所ものの流行時代を現出」し「独乙人をして云はしむるならば、残虐目を蔽わしめるほどの写實的な報告書であるが、訳者はこれを採らなかつた」とし、訳者の関心が「ナチスの残虐性そのものを知るよりもむしろ敗戦の独乙人の精神的なあり方に向けられているからである」と書いてある。

併し併し筆者は本書がそうした皮相な時代順応を主とした観点から読まれることに感心できない。虚飾や社会通念によって人間が如何に極げられる事が多いか、その改善され進歩した人間の感情が果して悉く正しい方向にのみむけられて変化しつつあるか、私はポー

ランドIIアウシュヴィッツはポーランドに在った。IIの最近の政変、洪牙利に於ける虐殺、又朝鮮戦後に於ける双方の秘められた一面を知るが故に、これらの惨虐が国家社会主義の特産物でもなく、ましてや不正な主義主張の特産物でもないことを確信を持って信じるものである。サド・マゾヒズムの観点から私はトルーマン一派の原子爆弾事件を採り上げない。併し、アウシュヴィッツで幼児を焚殺した罪に問われたヘスの罪科とトルーマンの為した行為と一体どれだけの差異が在るというのであろう。ヘスは六年間かかって上官の命令で二五〇万人を殺したが一方は何十分の一秒に無慮数万人の不特定多数の人命を奪った。ヘスは命令に従ったし、又ナチスにはユダヤ人抹殺に就いての確信を持ち得る哲学的根拠があつたのに対して、トルーマンにはさし迫った理由はなかつた。最早冗舌は必要ではあるまい。人間の心の根底に秘む加虐と被虐との本能は性的な観念を伴って特定の環境の下では必らず発現するのである。

この著者は大した理由もなくダツハオに送られる。その生活は実体よりも幾分美化されたきらいがあるとも思われるが、十分ゲシュタポの残忍さに触れているといえよう。この著作は、独立してマゾヒストに訴える力は弱い、収容所もののシリーズの中で、特異なケースを物語るものの一つとして、鑑賞に耐えるものと思われる。

レーゼ(読物)シナリオ

伊賀左近捕物帳

妖艶木乃伊地獄

海野 築 朗 作

仮想配役

(大映)

伊賀左近 妹浪路 大岡越前守 佐竹修理介 石田万之助(白頭巾) 黒装束一 同 呉服屋内儀 菊

市川雷蔵 山本富士子 長谷川一夫 柳永二郎 高松英郎 黒川弥太郎 千葉敏郎 三田登喜子

〃番頭巳之吉 半玉 回漕店娘綾 瓦版売 露天商一 同 同 岡 將軍吉宗 大目付

梅若正二 中村玉緒 小野道子 林 成 年 見明凡太郎 沢村国太郎 杉山昌三九 清水元 南条新太郎 南部昌三

腰 元 一
同 二
駕 籠 昇 一
同 二
大名達その他町人大勢

阿井美千子
朝雲照代
上田寛
香川良介

◎大名行列

幾組もの参勤交代の大名行列が出る。

◎江戸城

それにだぶってT(字幕)

徳川三葉葵の金紋六十余州に輝き、三百有余の大名を抑える。時に享保五年。

◎日光東照宮

絢爛たる美術建築である。

それにだぶってT。

徳川幕府が、外様大名に対する政策の一つに、日光東照宮の大修営があった。

◎江戸城の太鼓が鳴っている。

◎桜田門

各大名が、格式を見せた供揃いで登城してくる。

◎城中御本丸大名詰め間

長袴に袴の大名が不安気に詰めている。

廊下に当って、茶坊主の声

「佐竹修理介様、お上がり——い」

緊張した顔をして入ってくる佐竹修理介。着座すると、四方から

○「佐竹侯。貴殿らしいぞー」

△「貴殿は北国随一の大藩じやから喃——」

×「今年の日光修営は佐竹侯だぞ——」
佐「何を云われる。聞くだけでも不快で御座る」と沈痛な顔になる。

◎大広間

將軍着座して大名達平伏している。

将「本年の日光造営は、秋田佐竹藩に申しつけるぞ。名譽に心得えろ」

佐「ハ、ハッ——」

佐竹修理介、顔面蒼白——

◎一室(佐竹藩上屋敷)

修理介、平服で蒼白のまま坐っている。

のっそり入ってくる男。白頭巾を着用している。

白「殿。如何めされた？」

佐「本年の日光修営が当たったわ……」

白「はっは、は、徳川の難題、とうとう番が参りましたな」

佐「笑い事ではないわ。日光の大祖廟を修営するには百万や二百万の金では済まぬぞ！」

だが依然として、白頭巾は落着いている。

白「風には木立ち、雨に風、物にはそれぞれ防ぎ手があるもので御座る」

佐「何と？」

白「百万や二百万、なに恐れましょう。かかる時にと、我が祖先が隠したる金子、何千万両とも知れず……殿には、院内銀山記」を読まれましたかな？」

佐「勿論の事じや、だが隠したる金は何処にある？ 其方は知っているとも申すか——」

白「はっ、は、は、それは何人も知りません。唯、我が祖先が知るのみです」



佐「木乃伊にどうやって訊くのじゃ?」
白「その方法は……」

と、白頭巾は修理介に近寄って何事か囁く――。

佐「ううむ――」

腕、拱ねいた修理守。

佐「それで木乃伊が生き返るか?」
白「信ずれば即ち生き、信ぜざれば即ちそのままなり、すべて疑う事は失うに通じる路で御座いますぞ」

佐「ううーん」

半信半疑の修理介の目が、一瞬残忍な光を帯びて光った。

佐「路は一つらしい。甲賀者を使って、早速四人の女を連れて参れ!」

◎浅草観音境内(夕方近い)

大変な人混みである。露天が出ている。

○「どうだい景気は?」
と隣りに話しかける。

△「まあまあて所だな。それにしても観音様の願掛けは、今頃迄続くのだから大したもんじやねえ――か」

と感嘆した様に、人波も見ている。

○「だがよ、近頃、その願掛けに悪戯をする奴がいるって話した」

△「へえ? 何だい、その悪戯ってえのは?」

○「何でも昨日掛けた願結びの文が、次の朝にはすっかり解かれて、散らばっているそうだ」

△「へえ――。何だって、そんな真似をしやがるだろう?」

○「さあ、そいつは判らねーな?」

◎浅草観音(夜)

格子に無数の文が、願を掛けて結んである。それを提灯を持った黒装束二人と白頭巾が、一々とって解きほぐしている。

白「む、一つあったぞ!」

と文の字を読んで

白「甲子きのえねの女だ。菊。日本橋呉服問屋の女房だな……」

◎上野不忍池端（夕方）

上野の森が墨絵の様。寛永寺の鐘の音。

よりそう様に一組の男女くる。

菊「ねえ、己之吉。お顧客廻りのお前を誘って、こうやって二人だけの道行を楽しんでいる妾わたしの気持、判っておくれだねッ。妾は願掛け迄してるのだよ」

己「はい、お菊様。しがない奉公人の私に、勿体のうございます」

二人が池端の樹木のかげに立止って唇をふれ合おうとした時、二人の前にばらばらッと馳け寄った黒装束——

男には目もくれず、女の二の腕をぐいと掴んだ。

菊「あれ——」

己「な、なにをなされます……」

黒「騒ぐな——」

と、男には飛拳一閃——不意に地に這う男。女には手拭の狼轡——荒々しく肩にかつくと、パッと走り出した。

◎浅草観音（夜）

文を開いている白頭巾

白「む、緑河岸回漕店の娘、辛酉かのさきり二十二才……これで二つ、あと二つだな……」

と次の格子に結んである文を順々に開いて見るが……ふと、人の気配に慌てて姿を闇に消す。

姿を現わしたのは武家風の娘（浪路）である。闇夜に娘一人が臆する色なく押んでから

「観音様のおかげで、兄が南町奉行所へ勤める様になりました。

これが願仕舞いで御座います」

と、文を結んで去る——

白頭巾出て来て、その文を解いて見る。

「四谷伊賀町、浪路。戊午つちのえうま十九才か。こいつは願ったり叶ったりだ」

と後を追う。

◎路 上

浪路が歩いていく。

◎路 上

白頭巾が追っている。

◎路 上

歩き乍ら、浪路の目がちらッと輝いた。

白頭巾が追っているのが判ったらしい。

◎分れ道のある路上

浪路の足が一方に曲る。白頭巾の足が追って来て、急に立止る。

浪路の姿が見えないのだ。忌々しうに舌打ちをする白頭巾。

◎一寸離れた塀の上

浪路が其処に身を伏せて、白頭巾の様子をうかがっている。

◎大名屋敷の前の路

黒々と続いた大名屋敷の塀

月光に冴え渡った路上には、犬一匹の影さえない。

静かな足音が聞えてくる——

と、塀の間からひよいと姿を現わした立派な駕籠に徒侍（左近）

一人

◎塀の角

月光に徒侍の持った提灯（火は消してあるが）の紋所は剣輪違——今一方の路上を、たったッ、と呼吸をそろえて一挺の四つ手駕籠がくる。

担ぎ手は黒装束である。

二挺の駕籠は角ですれ違った一瞬、目を光らした徒侍

左「待て——」

と一喝するが、お構いなしに走り去ろうとする黒装束。

左「おのれ、えい！」

と手裏剣を投げる。

すると、後棒の黒装束が、パツと正面に向き直るや、ひよいと肘を上げて小柄を撥ね返した。

左「お——」

と目を瞪るすきに、黒装束は駕籠を路上に捨てて一目散——

「左近。何かあったかの？」

金紋の駕籠の中より静かな声。

左「は、御前。おさがせして、誠に申訳け御座いませぬ。実は、只今すれ違った町駕籠に血の匂いが……」

「何？」

駕籠の扉がするりと開いて、熨斗^{のしめ}目の袴をつけた武士（越前守）が、すつと立つ。

◎捨て去られた町駕籠

近寄る左近と、越前守。

越前守の眼が、きつと睨んで

越「血を見るのは嫌だが、開けて見い」

左近が、バラリと垂をはねると

白い女の裸身。顔は手拭の猿轡で覆われている。島田の鬚は乱れて肩に垂れ、後手に縛られ乳下から下腹部にかけて縦に割られた傷口がある。そして冷い骸^{むい}である。

思わず二人が目をもむけると……はや、野犬が吠き出している——

◎浅草観音附近の盛り場

瓦版売りを囲んで、大変な人混み

売「瓦版く。さあ、たった今、刷り出した大椿事の瓦版じや。江

戸は南の名奉行大岡越前守様が、昨夜遅く女の死骸を見付けたと云う……さあ瓦版く。ところが、その女とは駕籠の中で縛られて、腹を割られて肝をとられていたそう。うそか誠か、詳しくはこの瓦版に書いてある。さあ、瓦版は十文、たったの十文。さあ読んでごろうじろ——」

◎奉行所の門

江戸南町奉行所と書かれた門札がかけてある。そこを同心、岡っ引が慌だしく出入している。

◎奉行所の一室

越前守と左近が話している。

越「女の身許は判明したか？」

左「はっ。日本橋呉服問屋の内儀で甲子生れ二十五才。三日前より浅草観音に願を掛けにいつて、それっ切り行方不明になったと届出があった者で御座います」

越「うむ。で、黒装束は？」

左「はっ。私の手裏剣を打ち落した術は、まぎれもない甲賀者の秘伝、銀杏返しと存じますが……」

越「甲賀者と云うと、其方達の伊賀者と並んで世に知られたる忍^{にんじや}者じやな」

左「御意。元祿以後、世は太平になり、我々伊賀者、それに甲賀の忍^{にんじや}者たちは生計^{たつみ}を求めて四散いたしました。その内の者に違いありません」

◎江戸の夜

軒並の町家は大戸をおろしている。

定廻り同心と、三・四人の岡っ引達が歩いてくる。ふと一人の岡っ引が、

「おや？」

と前方に目を凝らす。

◎路上に置かれてある町駕籠

ばらばらと馳けよって垂をあげて見ると、血にまみれた白い女の裸身が、駕籠の中より路上に横倒しになる。後手に縛られて、頸には狼轡の布がはずれてかかっている。

◎江戸の辻

人混みの中を瓦版が唸鳴り乍ら通る。

◎奉行所の一室

越「又、肝をとられた女の身許は？」

左「はっ、緑河岸回漕店の娘、辛酉二十才で、同じく観音に願かけにいつて行方不明になっていた者で御座います」

越「観音に願かけの者が？」

◎浅草観音の境内（夕方である）

露天が並んでいる。人通りが少い。

隣り同志の露天商が話している。

一「おう、そろそろお仕舞にしようじゃねえか。夕方になると滅法、人通りが少くなるぜ」

二「あんな事件の無え前は、夕方がかき入れ時だったが、肝をとられてまで願を掛けようと云う酔狂な女もいねえからな——」

などと、店を仕舞いかけている前を、芸者の半玉らしいのが通る。

一「おい、見な。あの半玉は事件があっても、一日として欠かした事はねえぜ」

二「娘十六、七と云えば色恋いの願かけだろうが、もっと大事なものを取られなけりゃいいが……」

◎格子の前

半玉は懷中より文を出して、格子に結びつけてから一心にお祈りする。

◎路

ようやく人通りが絶え様としている。

半玉急ぎ足でくる。町駕籠が一挺、半玉を追って来て

「姐さん、戻り駕籠だ。安くしておきますぜ」

と半玉を誘っている。

少し離れて、その様子を見ている深編笠。

◎路上（漸く暗くなっている）

半玉を乗せた駕籠が走っている。

と——その行手を塞いだ黒装束がある。

◎路上 上

駕籠昇が二人ともものびている。

◎路上 上

その駕籠が走っている。かつぎ手は黒装束に交っている。

◎駕籠の中

縄を掛けられた半玉。嚴重な狼轡の下から恐怖の目を見開いている。

◎大名屋敷の裏門（佐竹藩上屋敷である）

其処へ吸い込まれる様に駕籠が消える。後を追って来た深編笠が、大名屋敷を見てハッとするとする。

◎屋敷の一室

中央に半玉が引き据えられて、両腕を背後から黒装束がとらえている。顔は狼轡のまま。その前に白頭巾がいる。傍の腰元に向つて

白「何をしている。はやく剥げ」

冷い声

腰「心得ました」

腰元達は、半玉に近寄って帯に手を掛ける。身を揉んだ半玉の顔から狼轡がすべって

半「お許し、お許し下さい——」

腰「さあ、おとなしくしや。いくら逆っても裸にされる身じや。お

となしくしていた方が痛い目をみずに済むぞえ……」

扱帯がとかれて、畳にくねった。帯も——

「た、たすけて、そ、そのような——お願いでございます——」
と必死に腕える半玉。

腰元の手が、如何にも手馴れたらしく、半玉の身体に巻きつけた紐の数を、つぎつぎと解きほぐしていく。

半「ゆ、ゆるして——」

長襦袢の襟を引きはだけられ、脱がされ上半身が露わになった半玉を、黒装束がギリギリと容赦なく後手に縛り上げる——。

半「ヒューッ」

白「それも剥げ」

腰元が左右から、半玉に手を掛ける。

半「ヒューッ」

必死にうつ伏せそうとする半玉に、黒装束は再び荒々しく狼嚙を咬ませると、

黒「立て——」

ぐいと、縄尻を絞った。

◎長廊下

白頭巾を先頭に、半玉がよろよろと黒装束に引き立てられていく。その突当りが、地下に続く階段である。

◎地下室

祈念の場らしく、注連縄、護摩壇火鉢、燈明などの中央に、大きな俎がある。

其処に仰向けに縛り付けられている半玉。鈴や鼓の鳴物にまじって呪文なども聞える。白頭巾が、うやうやしく礼拝しているものは——白い繃帯に巻かれた仏像らしきもの。その仏像には、墨で字が書いてある——石田治部少輔三成。
と、天井でかすかに物音がする。

きつとして見上げる黒装束。

◎屋敷の庭内

忍び装束が身軽に飛んで来る。

後を追う黒装束。

忍び装束がパッと塀に飛乗る時、

黒「えい——」

と黒装束が手裏剣を投げるが、忍び装束の懐中より一条の縄が伸びて、一瞬手裏剣を叩き落した。

黒「おう——秘伝。伊賀縄術——」

黒装束は、ぎょつとしたように呻く。

そこへ、慌てて白頭巾くる。

白「曲者はどうした？」

黒「はっ、残念乍ら……」

白「取り逃がしたか、馬鹿者。手文庫の中から、院内銀山記、が盗まれて居るぞ——」

黒「えっ——」

驚く黒装束。

白「追え——一大事だ。後を追え——」

激しく叫ぶのを、引きとって

黒「石田様。目星しはついて居ります。曲者は四谷伊賀屋敷に住む伊賀者。今、あの縄術を使え得る者は一人しか御座いませぬ。明

晩にでも必ず取り返して御覧に入れましょう」

◎伊賀屋敷（粗末な建物である）

◎その一室

行燈の前に忍び装束の左近と妹浪路が、緊張した面持で坐っている。二人の前に、院内銀山記と書かれた古びた本がある。

浪「お兄様。それは誠に御座いますか？」

左「うむ。奇怪の様だが、まず誠じや。まあ聞け、今を去る百三十

余年前、即ち天正十年の昔、織田信長公が本能寺に於て明智光秀に弑せらる時の事だ。其時、我等伊賀国の者、及び、近江国甲賀地方の郷士等が、辺路をかためて、一団の今後の去就を謀議したものだ。折から東照宮様（徳川家康）は、大阪にあって京に入らんとする途中であつたが、本能寺の変を聞き、難を避けて泉州堺より、伊賀越をするとの情報が入つた。此時、我等伊賀郷士の一団は、東照宮様に忠誠を誓い、伊勢白子浦迄救護し奉つた。然るに甲賀の郷士は二派に分れ、東照宮様を明智方に警導せんとする者もあり、遂にその一部は、後年関ヶ原の戦いには豊臣方に付き、石田三成の本陣の警固に當つたものである」

浪路、うなずいて聞いている。

左「扱、その関ヶ原の一戦に敗れた三成は一旦、血路を開き伊吹山へ逃がれてから、田中吉政公の陣に自首致し、六条河原で斬首された事になっている……然し之は事実ではない。斬首され、三条大橋の上にさらされたのは、三成の影武者の首だったのだ」

目を睜みはつた浪路。不審気に



浪「でも兄上様。日本外史などに依りますと、石田三成様に干柿をすすめた、元橋村の農夫の史実などが残っています……」

左「うむ。斬首の前の三成が、干柿を食うと腹を壊すと云って断つた話であるう」

浪「はい」

左「そんな話が残る程、三成は生に執しゆう着的強い男だったのだ。どうしてオメオメ自首など出来ようか……」

浪「で、でも……」

まだ不審気に小首をかしげる浪路

左「ハッハッハッ……」

浪路の様子を見て一笑したが、ふと語調を変えて

左「浪路。伊賀者は物の表だけを見ていては、如何に忍びの術に長けていようと役にたたぬぞ。物の裏の裏、眼光紙背を徹してこそ始めて伊賀の忍者といえるのじや」

浪「は、はい」

左「良く聞けよ。浪路。敗軍の将とはいえ石田三成は、関ヶ原の山野に西軍二十万の大軍を集めた天下の器量人である。影武者の一人や二人いないはずはない。当時、北国には徳川の威光の届かぬ所が多くあった。万一、負け戦に

なつた時は北国に逃れ、時期を待つて再挙を計る……この様な事を智者の三成がどうして考えぬだろう。まして秋田佐竹藩などは豊臣家、盛んな時は徳川、毛利、上杉、前田、島津と並んで六大名の一つに数えられた程である。時の藩主、佐竹義宣は三成の取り成しによって二十五万石の封地より一躍、五十五万四千石の大々名に成り上つたのだ」

浪「すると、佐竹藩が活路になつて……」

左「うむ」

と大きく頷いて

左「敗戦後、三成は影武者を田中公に自首させると、そのすきに、兼ねて打ち合せて置いた数人の甲賀者に護られ伊吹山を出で、近江から出羽米沢を経て佐竹藩に入つたと思われる。一方、佐竹藩は世間の風評をおそれ、秋田城外に「帰命院」という寺を建て、京より長音と云う名僧を招いた」というふらした……そしてこのままではいられ、その事実は洩れなかつたであろうが、三成程の者、どうして日蔭者の生活など何年も続けられ様か……とうとう帰命院の近くで銀山を見付け、発掘したが、何とその鉱山より金を含む数千万斤の銀を掘り出したのである。その一部始終を書いたのが、この「院内銀山記」という古文書として世に一冊だけ残っているのだ」

浪「まあ——」

愕然たる面持の浪路。

浪「それにしても、地下室に捕えられている娘を、一刻も早く救い出さねば……」

左「それが、出来ぬのじや……」

浪「えつ——。何故で御座います？」

左「大名屋敷に入るには、それだけの手順がある。町方役人など二歩たりとも入れぬのじや……」

浪「でも、みすみす」

左「止むを得ぬ」

浪「お奉行様でも……」

左「江戸町奉行は祿高一万石。格式が違う。とても叶わぬことじや……」

浪「では、どうすれば？」

左「越前守様より、大目付へ申し上げ、老中、若年寄、三奉行の評定を経てからでないと、大名には手が出ぬ……」

浪「でも、その間に娘は？」

左「うむ。腹を裂かれるかも知れぬ……」

浪路は袖で顔を覆うが、やがて恐る恐る顔を上げて

浪「それにしても、女の肝がどうして入用なので御座いますしょう？……」

左「うーむ。それが判らぬ。単なるいけい、えとも思えぬ……きつと深い謎がかくされているのだ」

と腕を組む左近。

◎地 下 室

俎上に縛られている半玉。

護摩壇に四つの壺がある。鼠と兎と馬と鳥の形をしている。

白頭巾が、その兎の壺のふたを開ける。

◎上野寛永寺

鐘がつかれて鳴っている。六ツ

◎伊賀屋敷一室

左「お、明け六ツだ（午前六時）出仕いたそう。越前守様に申し上げ、登城していただかねばならぬ」と古文書を懐中に入れる。

◎地 下 室

白「明け六ツか。定め時刻だ」

と兎の壺を持って廻に近づく。

半「う、う、うッ」

烈しい戦慄に半玉の喉が上下する。縛られた身体を蹴く。

白頭巾の片手に短刀が握られている。

◎南町奉行所（まだ閉じてある）

通用門を急いで入る左近。

◎同

門が大きく左右に開かれ、馬に乗った越前守が馳けて出る。続いて左近。

◎江戸城長廊下

小走りて奥へ急ぐ越前守。

◎一室

大目付と越前がいる。

大「町娘一人や二人の命が何じや。評定は月の五日と決っているのじや」

越「然し……」

一膝進める越前を、ジロリと見て

大「町奉行の分際で、御政道に口を入れる気か——」

一喝するが越前はひるまない。

越「一町家の娘ばかりか、はばかり乍ら徳川のお家にも関する一大事で御座りますぞ——」

大「何を申すか。徳川の一大事などと、軽々しく……口をつつしめ——」

越「一刻の猶予はなりませぬぞ——」

大「何を証拠にその様な事を申すか？」

越「証拠はこれで御座います」

と、院内銀山記を出す。不審気にそれをペラペラとめくって見た大目付。

大「これは何じや。一銀山の出来事ではないか。何でこれが証拠になる」

越前はキツとなる。

越「もはや……是非ない儀。御免——」

と本をとって立上る。

大「越前——何処へ行く？」

越「上様へ直々に申し上げます」

大目付、啞然と見上げる。

大「な、何をいうぞ。越前……戯れか、狂気したか？」

越「いや、かりそめにも天下の御法令にたずさわる判官越前です。左様なおたずねこそ正気とは覚えませぬぞ——」

といいすて去る。

◎奥の一室

吉宗と越前守がいる。

吉「何——、石田三成の子孫が佐竹にいと申すか？」

越「はっ、伊賀左近なる者の見聞した事より判じますれば、異国の邪教お才利順神なるものを信じ、佐竹侯をたぶらかしているものと思われます。その為には江戸庶民の迷惑は如何ばかりか……」

「よし、墨付きを与えよう。其方よきにはからえ——」

「はっ——」

◎奉行所（夕方）

大勢の同心、与力が手下を連れて門に入ってくる。

◎一室

越前守と左近がいる。

越「襲撃は九ツ（夜十二時）を合図に行う。わしが直々指図しよう」左「はっ」

◎奉行所の庭（夜になっている）

同心、与力、手下達多勢が捕物道具を持って待機している。かが

り火に一同の顔が緊張している。鐘が五ツ（八時）聞えてくる。

◎一 室

すっかり身仕事をして、越前と左近いる。

左「御前。此の度の事で一つだけ、最も大事な事が不審なので御座いますか？……」

越「何がじゃ」

左「はっ。女の肝が何故入用なので御座りましょう？」

越「そうか。其方、お才利須神なるものを聞いた事はないか？」

左「小耳に一度ばかりはさみましたが、詳しくは……」

越「では、話そう。お才利須神とは、遠く絵血布（エジプト）なる国に起きたもので、そのお才利須神の信仰によると、人間が生れると同時に目に見えない霊が生れて、人間が生きている間は体内に宿っているが、死によって霊は体内から脱離するといわれている。しかし脱離した霊はいつか、又もとの体内に戻ってくるので、死んだ身体を保持する必要がある。故に体内より五臓六腑を取り出し異国の薬品にて乾かし、身体に繯帯を巻いて置くといわれる……」

左「としますと、私が見ました仏像の如き物は石田三成の？……」

越「うむ、多分そうであろう。そして又、それをお才利須の信者は木乃伊と呼んでいるそうじゃ」

左「みいら——……と」

越「うむ。そして、その木乃伊に霊が戻る為には、東西南北の四方を司る神の形をした壺に、女の肝を入れて祈念するそうじゃ」

左「然らば、あの白頭巾は三成の子孫であり、あの地下室はお才利須の祈念の場——」

越「そうじゃ。しかも壺にいれる肝は、東西南北即ち、卯・酉・午・子年の女でなくてはならぬという事もあるのじゃ」

左「それで一切が判明いたしました。今迄、犠牲になった女三人。

最初は甲子二十五才、次は辛酉二十二才、今一人は乙卯十六才、残るは……」

と指を操って見て

左「戌午の者十九才」

大きく頷いた越前守。ふと

越「左近。其方に妹が一人いるとか申したな……」

左「はっ。浪路と申し当年……」

ここ迄いつて左近は、ぎくツとする。

越「どうした？」

左「当年十九才、戌午で御座います……」

越「何——。それで、その浪路は観音に願掛けなど致さなかったであらうな……」

左「は、はっ……」

左近の顔は、見る見る蒼白になる。それを瞋める越前守。

◎伊賀屋敷の塀（夜）

その塀の上に飛上る二人の黒装束。

周囲をうかがって、中に降りる。

◎屋敷の一室

寝ていた浪路が、何かの気配に夜具より身を起すと、長襦袢の上から羽織をまとう。

浪「どうなた？」

矢庭に障子を開け、黒装束が躍りかかる。

浪路は、首を腕で巻きつけられたまま、夜具に押しつけられる。

黒一「女——。院内銀山記は何処だ——」

ぐいと小突く。一人が手首をぐいと捻じ上げる。

片手で、夜具をかきむしる様に身悶える浪路。

黒二「本を何処へやった。左近が持って来た本だ——」

浪「う、う、うっ……」

黒一「いえ——。しぶとい。いわぬか——」

黒二「おくれては面倒だ。本はこの家の中にあることは分っているのだ。女は縛っておいて探した方が手つとり早いぞ……」

黒装束はうなずきあって、手早く後手に縛り上げ、口には猿轡を

◎掻き廻される屋敷

「ないか？」「ないぞ——」

口々に喚いて、浪路の所に帰って来て、いきなり足蹴にする。

裾を乱して転がる浪路。

黒一「おい——。本は何処だ——」

と又蹴る。

黒二「やれやれ——。もっとやれ——」

室内を右に左に、髪も襟も乱れて転げ廻る浪路。

黒一「しぶとい女郎だ。連れて行こう」

浪路を軽々とかかえ込む黒装束

◎伊賀屋敷の裏木戸

浪路をかかえて出てくる黒装束。

◎大名屋敷の裏門

入って行く黒装束。鐘が四ツ（十時）鳴る。

◎庭 先

縁に腰掛けた白頭巾の前に据えられている浪路。後に燭台を持った黒装束。

白「この女が伊賀左近の妹浪路か？」

黒「はっ」

白「猿轡をとって見い」

解かれた手拭の下から浪路の鼻と唇が出る。
白「うむ。美形じやな。いずれは一責めせねば、院内銀山記」の所在など白状はせぬだろうが、絶世の美女とは責め甲斐があるというものじや」



と、にたりにたり頭巾の下で笑う。

白「まず、松葉いぶしがよからう。丸裸にしては興が薄い。一枚だけ残して、松の枝に吊し、松葉の煙で責めて見い」

次々と黒装束の手で、裂かれむしりとられる浪路の羽織、伊達巻、長襦袢。

白「ふふ、よき眺めじや。女が良いだけに一段とたまらぬのう」浪路は抵抗しない。ただ堅く眼を閉じている。

黒「来い——」

湯文字一枚の裸の上から後手に再び縛り上げた浪路を、黒装束は引つ立てていく。

扱帯で松の枝から吊り下げられた浪路。

その姿に妖しい目をそそいでいる白頭巾。浪路の足下に集められる生松葉。

附け木で火を移す黒装束。

モクモクと煙が立上る。

その煙の中に白い裸身が揺れ始める。

浪「えへっえへっ」

煙から顔をそむけようとして、こらえきれずに咳をする浪路。

浪「う、うッ、えへっ——」

もくもくと上る煙が、湯文字の裾に、乳房に纏いつく。

ギリギリと枝がしなって、乱れた髪と湯文字と肌がぐねり、躍り、翻転する。

◎一 室

酒盃をかたむけている佐竹修理介。

脂ぎった顔を歪め、目を細めて一点を見付めている。

白い裸身の浪路が転がされている。

その縄尻を掴んで白頭巾が立っている。

白「殿。これはまた得難き女でござりますぞ。伊賀者だけあって、

躰の鍛え方が違っておりすが、責められて責め抜かれた暁には、必ず責めを喜ぶ女となりましょう。そして、嵐の様な、けものの様なありのままのさがにのたうつ女性で御座りますぞ」

佐「うむ」

修理介は生唾を飲んだ。目が妖しく輝き始める。

白「そして更に、四つの壺の午に当る年の女でも御座います……故に思う存分、責めて責めて責め抜いても……」

とニタニタと不気味に笑う。

佐「うむ。どうしてもいわぬなら、牛割り、車裂き、杭殺、鋸挽き、釜入り、火磔け水磔け、逆磔け……にしてその白い身体をさいなむのも一興じやろう。まず手はじめに……」

修理介、いきなりフラフラと立上ると、浪路の傍へ来て

佐「誰か、この女の鼻を縛れ」

腰「はい」

と腰元の一人が、胸の扱帯を解いて浪路を抱き起した。

佐「早くしろ。口は縛るな、鼻の孔だけ縛るんだ。鼻から呼吸が出来る様、力一ぱい縛れ——」

ぎりぎり巻かれる扱帯。何をされても観念の目をじっと閉じている浪路。

浪「……はあ……はあ……」

と自然、花の唇が開いてくる。

佐「よし。酒を存分に飲ましてやれ……」

腰元が銚子を口に押込んで逆様に流し込んだ。

一本——二本——三本。

たて続けの流し酒である。

浪「げぶッ！ げえーッ——」

とむせる浪路。

◎屋敷の前

ひたひたと囲む捕物陣

◎一 室

嗜虐のシーンが続いている——
余りの苦しさに身を揉み、必死にかぶりを振っている浪路。

◎屋敷の前

馬上の越前守。

九ツの鐘が響いてくる。

「かかれッ」

采配を振る越前守。

どつと屋敷へ乱入する捕方達。

◎屋敷の中

随所で、烈しい乱斗が起る——。

白頭巾と修理介は、黒装束にまもられて逃げ廻るが、左近の縄術に——遂に捕えられる。

◎日本橋

黒山の様な江戸市民が見物している。

橋の中央で切腹する、佐竹修理介。

検使は越前守と大目付。

◎日本橋附近

見物人を分けて左近と浪路、出てくる。

浪「こんな所で切腹した大名は初めてね」

左「庶民へのお詫びの積りで、越前守様がはからったのだ」

浪「白頭巾は？」

左「いずれ市中引廻しの上、獄門になる。お前もひどい目に遭ったが、何にしても無事解決して良かった」

二人頷き合って、人波をよけて去っていく——

(完)

△手帖速報欄▽

沼 正 三

二〇八 李漁作・辛島曉訳註『十二楼』（全訳中国文学大系第一集全二三冊の中） 短篇集である。中に、高官の横恋慕（男色関係）から去勢されて宦官になった美少年が、その地位を利用して仇敵を陥れ、頭蓋骨を手に入れて髑髏尿瓶にして復讐した話がある。手帖新稿で髑髏便器を一項にして扱っておいたから、その方に詳しく附記しよう。他に、結婚前から妻に降服してその出す条件を呑んで契約書を作る女上位的な男女関係を扱った短篇もある。——なお、中国古典文学全集全三二巻中にも面白いものが多い。現在出ている今古奇観にもアブノーマルの味のあるものがある（女装の美少年）が先に速報欄であげた兒女英雄伝などは甚だ期待されるものだ。

番外 一九五で報じたアフリカ遠征隊が帰国。ピグミーと並んだ鈴木（女子）隊員の写真など、興味がある。いざれ記録映画の発表が期待できよう。一七五で報じた「月光のドミナ」は同名の短篇集に収録された。

〔代理部だより〕

○従来代理部の分譲品として広告しておりました左記の品は、只今分譲中止となっておりますので、御申込下さらないよう願います。

「女体切腹構成案図譜」「女体自決悦虐図」「女体風流アラベスク」「美しき女体家畜飼育室」「女学生の羞恥責め」「ハートの的、女体洗滌室」「緊縛ヌード十六ポーズ」以上七点。

○尚、分譲品には毎月変更がありますので、最近号誌上の広告により御注文願います。

○長らくお待たせいたしました『代理部分譲品総目録』は近々完成する予定ですので、出来次第予約下さった方々へ急送することいたします故、左様御承知願います。

Das Gransamd Weib

Dr. Yhannes R. Birlinger

☆ 殘虐なる女性達 ☆

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森 本 愛 造・訳

独乙では、死刑の執行は日常的な出来事であつて、婦人客が多数その観覧席に現われることも慣習的なことであつた。この事は、詳しい図解や挿絵を以つて多くの文献が実証しているところである。支配階級の婦人達でさえ、「訳者註」当時の極めて厳格な道徳や戒律にも拘らず「他に憚るところなく姿を現して、彼女等の意地の悪い慾望を満足させたのである。私達は、「ヴァルデンゼル」又は「ビエモントの谷の福音教会一般史」の中に当地の王ヴラディスレイの妃、ベエメンが一五〇六年数人の福音教会信者をオーフエン市で死刑に処する際、その処刑を見る為に彼女が態々遠路を出向したこと、彼女がこの悲しむべき処刑を見る喜びを抑え切れずに示した狂態について知ることが出来る。シュティツヒアルトの著作に従えば、一五六八年に生れたザクセン公国のクリスチアン一世の妃ゾイ・フォン・ブランデンブルグが、当時プロテスタント教国であつたザクセンにカルヴィン派の宗旨を拡めようとして捕えられたニイ・クレルが死刑に処せられたとき、歎びの色を秘すところなくその処刑に出席すると主張してきかず、私の良人を斯様に陥れた犯人の末路をよく見極めたいのです」と語つたと云う。

T抹のフリドリッヒ五世の二度目の妃であつたユリアーネ・マリイ・フォン・ヴォルフ

エンビュッテルは前に掲げたゾフィ・フォン・ブランデンブルクよりも更に甚だしく露骨に振舞つた。クリスチアン七世の治世下で急激に権勢を整えたシュトルエンゼエ(閣僚)の死刑に際しては、妃は自ら望遠鏡を携えてクリスチアンズブルク城の城壁に聳える塔に昇り、終始刑の執行を観察したのである。シュトルエンゼエが台上に引き出された時、妃は思わず傍を顧して、さあ、いよいよあのデブの番です。

バセドウの教本の第三巻中、第三十四図表の左下に一人の跪いた囚人が將に斬首されんとする処を描いた一つの図が掲載されている。右側の背景に車輪に縛り付けられた二人の囚人が描かれ、左側には一基の絞首台と三人の絞首された死刑囚が描かれている。死刑場のすぐ前には一人の母親が子供を抱いて立つて居り、その右わきに扉を開けた馬車の中に一人の貴婦人が見える。この図は当時のありふれた情景を伝えた絵画の典型的な一つであると考えてよいであろう。問題はこの図が、一般的教本の中に現われていることであつて、決して、偏向的、又は専門的な著作に揭示されたものではないことである。従つてかかる刑場の上流婦人が観覧の為に姿を現わすことが日常的であつたという推論は正しいと思われる。

〔訳者註〕原著者ビルリッゲル博士の推論

は原氏がその時評でザッヘル・マゾツホ教授の不朽の名作たる「毛皮を着たヴキナス」の佐藤春夫訳について述べた批評とその軌を一にしている。如何に特殊な事例であつても、精神病者や、其の他の特定の事情の下での実例は、その引用の基礎が甚だしい偏向を持つ場合が多く、引用の適、不適は別の問題として、社会一般に通用するものという結論は少し早計である場合が多い。「ヴキナス」は、我国での大手筋出版社たる講談社の主力雑誌の一つである「群像」に掲載された。更にその訳者は、仮令名義借しとしても佐藤春夫という我国での文豪と称される大家の名を冠して居る。原氏はこの事実に深い感銘を述べて居るのである。後に論争の的となった治州訳と佐藤訳の訳文の正否は最早、この驚くべき事実の前に甚しく光彩を缺くものと云わねばなるまい。偏向した内容の禁忌の書が大衆の面前に明らかに提示されたこと、本誌の寄稿者のすべてがより大きな感動を以て受け入れらるべき事であろう。何となれば、この事態の遠く暗示するところは、変態的娼家とも云うべき、偏向者を対象した職業的ドミナの出現を夢想させ、更に、より多くの新しい写真図絵著書集の商業的出版を示すからに他ならない。最近の外誌はドイツに早くもネオ・ナチズムの抬頭を報じている。そこに嗜虐的私刑の存在をも報じているのである。そうし

て、アドルフ・ヒトラーが、その指導力の原則としてサド・マゾヒズムを如何に重視していたかを私達は各種の真面目な評論によって知るのである。アウシュヴィッツ、ダッハウ、ブッヒェンヴァルトに示されたドミナの種々相は、再び此の世に花開くかも知れない。」

現在も猶、英国婦人にとって、死刑が興味ある見世物である事をシュレジンゲルが注目すべき報告をしている。

或る、私の知り会ひの英国女性との対談中、私は「貴方は私達、英国人の民衆的なお祭りが何であるかを御存知ないのですか」と訊ねられた。彼女は永い間、海外を旅行して来たので、決して自国の缺点や汚辱を無差別に覆いかくす事はしなかった。「私共の民衆のお祭りが行われるかを御存知になりたいのですか？教会堂開基式、ブドウ収穫祭、復活祭のカルナバルでの道化芝居などでしょうか。貴方達の陽光の豊かな国では、酒と踊りと娯楽に民衆が酔うのでしょうか、英国では一寸違ひます。ニュウゲイトの前で一人の囚人が絞首されると、又は、ホースマンガ・レイン等の美しい広場や貴族の荘園の刑務所の前などで死刑が行われるというとき、当日の日の出から、獄吏が恐ろしい義務を果す瞬間まで、人々は活気づき、生き／＼と活動するのです。その時の英国人の熱狂に比べたら、貴方達の御国のお祭などは歳の市の様なもので

問題になりません。刑場をかこむ窓という窓はすべて高い料金で貸切り、広場には観覧台が臨時に設けられ、飲食店の仮小屋が周囲に立ち並びます。ビールやブランドーが何時もよい高い値段で売られるのです。人々は数マイルの遠くから恥ずべきこの見世物を見る為に或は徒歩で、或は馬や馬車で続々と押寄せらるのです。見物の最前列は女です。それも卑しい身分の女達の中に美しいカールした金髪の貴婦人の姿も見られるのです」と語った。

この叙述が真実を伝えているに他ならないことは文豪ディッケンズが、当時のタイムズ紙上に発表した論文によつても明らかである。ディッケンズはこの中でロンドンで行われたマンニングの死刑の際の観衆の振舞について批判しているが、この論文によつても、「民衆のお祭り」に當つて、無数ともいふべき多勢の女性が観覧し、刑の執行に際して歓声を挙げ、歌を唄ったことが述べられているのである。又、同様にホルツェンドルフもその論文「死刑の無目的性について」の中で、英国に於ける死刑についての部分も同様の事実を証明する。即ち、若い男女が死刑見物の為にピクニックに行くことが記されているのである。

併し乍ら、こうした心の硬化と残虐本能とは時代の一断面であるにすぎず、現代ではこうした現象は見られまいと考える懐疑的な読

者の為に次の例を記しておきたいと思う。女が残酷な行爲を見たいという本性は、こうした死刑執行が公開されぬが故にのみ一時休眠しているにすぎぬ事を、はつきりと知ること

が出来ると思うからである。最近の雑誌に見られる死刑の詳細な報告が現実か想像か何れの産物であるかは後に判断するとして、死刑に際して、これを観覧し、カメラを以て撮

影する英米女性を決して珍らしいものではないが、矢張り私は確固たる文献による引例を試みようと思う。

以上

女^メ斗^ト美^ミ相伝

生粋の京都人四股平が生んだ女斗美
それを継承する京娘侘子との対談

土 俵 四 股 平

女斗美の家元だ？と人に云われて、そんなのかなア、そうかも知れぬなど思う。
最近、映画や小説に、そう云ったものが、

色濃く取扱われだした。それは、私の主張と相当かけ離れてはいるが、また何かソコに時代的な流れを見ることが出来る。

私が女斗美なる創語を発表してから、ハヤ三十余年になる。随分、永い幾春秋だった。その永い年月の中で、私の気持とビッタリ来る知己は、残念ながら指を屈するほどしかない。まして四股平の後継者として、この女斗美の道を相統する者は、暁天の星にひとしい。

一世で終ることは、四股平にとって、たいした悲しみではないが、やはり共に女斗美を讃え、女斗美を楽しみ、そこに女体の生命美を知る同志が欲しい。これは人の願いとして当然のものである。

かくて不図も、私の本職である芸道方面の門弟中から、世にも得がたい女性をキヤッチした。いや、それは神仏から恵まれ、つかわされた者と信じている。女斗美二世、かく呼ぶに相応しいソノ門弟は、当年二十歳の生娘だが四年間、私に師事して不退であるだけに、家元の私が、立派に折紙をつける名取なのだ。土俵侘子と名乗らせて、後顧の憂いがないと思う彼女である。

『おい侘子、女斗美の三心と云うのを知って

「るかい？」私は不意にこう尋ねてみた。

「そんなムツカシイこと知りません」

「教えなかったかも知れぬ。だが信子の心には、浮ぶ何かがあるだろうに」と誘った。

「それはあります。肉を切らせて骨を切ると云った、勝抜く女心の美しさですわ」

「それから……」とたゞみかける。

「それが対応の動作を通じて、肉体の若さを太陽として、ソコに輝く光だと思っています」

「そうだね。だが勝抜く心には、負けたくない我執がある。自己防衛の綱でしばられている。危惧と劣等感が働くね、負けるかも知れないと云った」

「それは誰でもじやありません？よほど相手との力量差がないかぎり……」

「では、これはどうだ。自分は負けても、相手を負かす斗志……」

「……何だか頭が、こんがらかって来ましたわ。自分が負けても、相手を負かす？では誰が勝ちますの？」信子は小首をかしげる。

「自分が負けてもと云った方がだよ」

「自分が負けたら、もう勝負はついているんじゃないやありません？」彼女は卓へ手について考え込む。

「自分が恐れるのは負だ。だから自分自身を負にほりこんでかかったら、もう恐いものは消える。そこで相手を負かすことに専念出来るのだよ」

「禅問答みたいですよ……でもその気持は、信子にハッキリ理解出来ます。悟り切ったスバラシイ斗志だと思います」

「えらい！次ぎへ行こう。二は、何だと思う？」

「そうですね……女らしさを失わぬ心だと思います」

「そうだ。女斗美は、どこまでも女性が持つ美なんだ。女を失って女斗美は成立しない。だが、その美はドコにあると思う？」

信子は、やゝ眼を伏せて考える様子だったが、やや充血した顔を上げると、私の眼を睨み据えるように見入りながら、

「美しい乳房と、ゆたかな腹」と一氣にいいはなった。

「よく云った。心が肉体を形成していて、女だと思ふ念力が女らしい容姿を育成してきたのだ。ゆたかな腹は骨盤の広い女体でなくては持てないゆたかさだし、そのすべての曲線と色調が女の綜合美を奏でるんだからね」信子は、うなずきながら

「先生、第三は何ですの。教えて下さいな」信子は媚をふくんだ目で、かえって私へ詰めよる。

「いけない。教えない。今の調子で最後の第三も、信子自身の力で考えるのだ。それは最も重要な心なんだ」

「何かしら……力？」

「いいや、違う」

「まことの心」

「それにも関係がある。だが女が、一生一代の斗志を燃やす一瞬、その力と決意がほとぼしる根元が何であるかが問題だ」喫煙しない私は、手持ぶさたを紛らすために、指のやり場にこまっていた。すると信子は、ゴトリと椅子を前へ寄せたかと思うと、いきなり私の手先を掴んだ。そして指相撲でも取るように、指と指を組ませてきた。

「先生、愛ですわ。そうです、キツトそうです」

「そうだ。信子は賢い。賢いと云うよりも、女斗美の真髄を把握している」私は信子の手を膝へ引寄せて、もみくちやにするのだった。信子は椅子から滑るように膝を床につくと、私を見上げるようにして、

「女斗美は、お金や名誉で取組む相撲ではありませんわね。世に一人しかない敬愛する方のために、そして自分が敬愛するその方からこよなく愛される自分であることを知った時、喜びと誇りと愛情に燃えて、二人の花園を犯す同性に対して、命をかけて挑みかかるその勇猛心、愛に目覚めたひたむきな勇猛心が、乳房を鋒として、美しく輝くと思えます」

「信子の云う通りだ。金や地位や名誉、それは一時失っても、又取戻すことが出来るだろ

う。だが自分が、女が真心から敬愛する人は一度去ったら二度とは取戻せないものだ。たとえ再び取戻しても、ソレは既に心も肉体も穢れた空蟬にひとしいものになっている」

信子は強くうなずいて、優しい頬を私の手にすりつけながら静に立上った。

『女土俵に恋を賭けない相撲は、本尊さまのないお寺の住職みたいなものですわね』

『ウマイことを信子は云う。その通りだ。王将のない将棋同然だ。愛人を賭ける以外のことで土俵に立つ女は、愛情と呼ぶインキの入っていない万年ペンで字を書くようなものだ。ペン先がゆがみ、紙は破れるが、美しいものは何一つ残らない』

『ペンは自分の情のない心、紙は冷え切った肉体でことでしょうか？』

『そうだ。愛情のインキを失っては、心も肉も亡びるより外に前途はないんだ』

『よく分りましたわ。女斗美の美しさは、愛人のために死斗する女の全姿から発するコロナのようなものですわね。裸の若い姿が、乳房もおっぱり出して、たとえ自分は負けても、必ず自分の目で、憎い相手の負けた姿を見る。自分の耳で、相手の負けた声をきく。それ迄は、殺されても死なぬ斗志だと思えます。どこまでも相打ちの相撲ですわ』

蟬の声はまだ聞かぬが大田山を背にした山荘の濡縁は、銀色の葉の照返しを写している。

『信子。君はその女斗美の莊嚴を、地で行くことが出来るかい？』

『出来ますわ。先生さえ、お許しになれば』

『誰を相手にとって？』信子の口許がグッと引締まった。

『分り切ってるのじやありませんか。順子が相手です。幾度も順子さんから挑まれながら、いつも先生に止められて、素直に控えている信子の立場を御存じのくせに、憎くらしい先生ったらありませんわ』

順子と云うのは、信子より七つ年上の門弟で、入門も五年の先輩なのだが、後の鳥が先になる譬にもれず、今は信子のために追抜かれ、同時に師である私の愛情も失っている彼女だった。

その順子の逆恨は、罪のない信子に集中され、ことごとく挑戦されてきた。そして私の女斗美を逆用して、信子に肉弾相搏の相撲を挑む順子だった。だが師たる私は、自分の研究と夢は、どこまでも筆と色の世界から脱出せしめないものだった。

信子と順子は、一度取っ組合ったことがある。それは不意打ちだったので、卑怯な順子に頭髪を掴まれて、若い信子は半泣きにされたが、勝気な彼女は、きわどいところで組直して、高慢な順子を其場へ組伏せた。幾度か順子はハネ返そうと力斗したが、遂に其目的が達せられない内に、私に見つかって引分け

られてしまった。それからと云うものは一層、信子を仇敵視して、その復讐戦を挑む順子となった。

『怒るなよ。もうその話はよそう』と話を打ち切ろうとすると、

『先生は卑怯よ。信子が順子と組もうとすると、やめる／＼と仰言って、そのくせ内心では、組ませたくてウズ／＼していらっしやるんでしよう』

『怪我をさしたくないからさ』

『だから卑怯だと云うんですわ。信子を、そんなに弱いと思っていられっしやるの？』

『じやあ、大丈夫と云うのかい？』

『ええ、相撲では五分々々と思います。もし立業で負けても、寝業ではキツト勝って見せます。何となく、その自信がありますの。一べん順子と二人きりで、しどろもどろになる迄組合いたい。誰一人、入って来ない場所がいいわ』

『どんな服装で？』

『裸がいいと思います。信子は、サアとなれば度胸が出ますのよ。順子なんか負けるものですわ』

『じやあ、順子を出してやろうか？』

『どうぞ、ちっとも恐れませんか。望むところって申すことよ』

『大した元気だね、この頃は』

『先生。そう思いにならなくて、女斗美

つてもものは、生々した女体を丸出しにした最も烈しい組姿だと……。信子の若さは、その烈しい感触を求めています。自分が生きている若さを、自分の肉体からたしかめてみたいの」

『女斗美を通して、信子が信子を見詰めたいんだナ』

『女斗美の三心。先生のその仰言る事は、相打ちの相撲、女体の完全な表現、愛念の守護、信子はどこまでも先生を守って、宿敵順子にあたります。順子もキット、同じ思いで挑むと思います』

『女斗美は夢の芸術だと思ふんだ。現実には、世の闇にかくれて、そここに行爲化されているかも知れないが、私は絵画に彫刻に、そして文芸に、その多彩な夢を描いておればいいと思っているのだ。信子も今迄はそうだった。デッサンに短歌に、女斗美を描き、女斗美を歌ってきたのではなかったか』

『いけません。それはお家元らしくない先生のお言葉ですわ。先生は今となって、信子への愛情にひかれて、信子を安全地帯へ移そうとなさる、それは男のズルサですわ。利己主義ですわ。もっとも卑怯なエゴイストですわ……。先生が一番愛していると仰言って下さる信子を、先生の潜在的な欲望と、女斗美に対する熱情のまゝに、女と女の死斗の場へ、サア行けと投出して下さらないんです。今日

まで信子を、女斗美の道一本で育ててきて下さいましたのを、信子を黽つていらつしやったと思いたくありません。先生！』

信子は、常に見ない殺氣と斗志をもって私へ迫るのだった。

『分るよ、信子の心は……。それは信子へ女斗美を伝えてきた私に対して、弟子である君が、最後の仕上げを見せる場ともとれるし、私の一生涯に於て、後にも先にも一度しか見ることの出来ない組姿、キザな言葉で云えば、師を守りぬく愛弟子が世紀の死斗を、私の網膜へ焼付けようとするマコトだと思うよ。有難う信子』

『お礼なんか仰言らないで、伺いたくありません。信子は云います。信子は、どこまでも先生のたった一人の弟子です』

『そうだ。もう何も云う必要はない』

『信子も……』

『女斗美の三心は、清浄、順応、寂靜になるね。分る？』

『分ります。先生それを、信子の心のままに諷刺させて下さいな』

信子の顔は輝いている。吉祥天のような彼女の容姿は、けだかくも美しい。

『云ってごらん』

『捨身。乳房。先生！もう一度申しますわ。捨身。乳房。先生。これは信子だけにしか通じない三心かも知れませんけど』

『誰にも通じなくていいよ。私が生んで信子が育てた女斗美なんだから、世間に遠慮すべき筋合いはない。捨身ほど清浄な心はないし、乳房にまさる順応の美はない。また信子としては、先生！と私を呼ぶところに、すべての安らぎと寂靜があるのだ。女斗美の真髄は、掴ませて掴む、組ませて組む、倒させて斃す、捨身の清浄心に勝が輝くし、豊満な乳房の躍動は、女体の順応心をひたむきに表現すると云えよう。そして最後の最後、窮極に於て発する一声が、恩愛のマコトからほとばしる。先生。であることは、寂靜の境地を充分に示すものだと思う』

『先生。信子は先生のお許しがある迄は、絶対に順子と組みません』

『どうして？』

『信子は先生のお心を苦しめることが出来ませんもの。感情に走って、先生を罵ったりして御免なさいね』

『女斗美は、そう云った優しい心の娘であつてこそ、真実の美が発揮されるのだよ』

『そうかしら？』

『信子は女斗美中の女斗美だよ。強い者は最後に斃れる。優しい者は最後の一线を踏み越えて勝つ。そこに女斗美の華が開くのだ』

『信子の女斗美を見る眼が、一段と磨けたように思いますわ』

とニツコリして団扇を取るのだった。



話の屑籠

辻村 隆

角田喜久雄氏の、時代妖奇小説、伝奇小説には、その殆んどといってよい程、美女の責めが出てくるのである。とりわけ、雲助や、非人、乞食に責められる窈窕の美女の表現が、氏の最も得意とするところらしい。角田氏が果して、サジストなりや否や、誰か氏の人間探求をしてくれないものであろうか——

谷崎潤一郎氏の一連の作品が、氏のアブニストとしての生きた実例の産物である事が、中河与一の『耽美の夜』によって曝露されている。氏の夫人又、従妹、姉妹といったものに迄、アブ探求の手を伸ばして、それを美文

に綴った氏の半生は、我々にとって至上の得がたい手本である。大文豪のアブの一端を中河与一の麗筆によって知り得た事は、近來にない収獲であった。同様にアブの世界を逍遙し乍ら、脳味噌の違いが、かくも隔世の感を抱かせるのである。無名の三文文士が『鍵』を奇巧に発表したとしても恐らく世間は絶対騒がなかったに違いない。

『耽美の夜』この題名の何と奇巧なことよ映画や小説から題名を求めても、如何にもアブの世界を描くにふさわしい題が転がっている。

『悲しみは女だけに』(大映)
責めさいなまれる女を描写するにうってつけの題である。
『非情の庭』(樋口茂子著)
夫に責折檻される妻は、雪の夜の冷めたい庭に曝されて松の樹に縛られているといった感じ……。
『地獄の喝采』ふんだりけったり。
『夜の豹』
『血だらけの腕』
『よろめき休暇』
『夜を逃れて』
ETC (何れも洋画) 何と血腥ぐさく、物

騒な題名であることか、題名を綴り合せただけで、奇ク向の小説が出来上りそうである。

処刑の部屋 (大映・石原慎太郎著)

サドにとって、ピタリの題名。説明不要の結構な、こんな適切な表現を、何故今迄なし得なかったか残念でならない。

悔いなき愉快 (丹羽文雄著)

ふんでも、けられても責めさいなまれてもマゾの彼にとって、それは最高の悦びであった。といった内容に使って見たいような題名。

× × ×
題名に捉われ過ぎて、内容の空虚なお粗末な小説程、味気ないものはない。私の書くもの、その典型的な題名小説。

何時も私(辻村隆)が出て来て、さも知ったかぶりに、本当らしい嘘を書いている。筆者の体験談の様式のものばかりで、何時かは大ロマンを盛った、雄大な後世に残るサジスチックなものを書きたいと思っても、ボキヤブラリも経験も乏しい私には、同巧異曲なところを空廻り許りしている始末だ。新らしいアイデアもなければ、嶄新な思い付きもない。ハイド氏許りが焦って、案外本人は巷の片隅で、ヒソソリと善良に暮らしていたのかも知れない。

× × ×

その癖、私は私なりの奇ク読者諸氏への提案をもっている。昨年の秋、箕田氏と一緒に大阪の南郊、Y温泉へ、大阪の或るヌード・スタジオ主催の、グラマーガールを写す会に出席したことがあった――。

閑静で都心を離れた、このY温泉の地で、我等同好の士が相寄って「緊縛モデルを写す会」を開催したらどうかという事を思いついたのであった。

広い庭、立木、噴泉、池、等を自由にとり入れての緊縛撮影――。夫々アイデアを持ち寄って、各人に構成して貰い、銘々の特色を充分生かしてカメラに納める。

箕田氏も、その節、私の立案に大いに賛同してくれたが、多忙の氏の事でもあるし、現在までその儘になっているが、若し、同意の方は、その企画なり、開催の手筈等を、箕田氏の手元迄連絡して頂ければ私の方でなんとか恰好のつくように纏めあげてもよいと思っている。

× × ×

それにしても、当日出席したところのヌード・モデルは非道かった。グラマーガールと銘打ったからには、少しはましかと、心の片隅の何処かに幾許かの期待を抱いて、箕田氏の運転する車に同乗して出掛けたのであるが、そのグラマーガールたるや、一人は痩身のガリガリ、もうひとりとは、体中に南京虫の

噛み跡のある、頭のてんべんの毛が薄い女、工員上りらしい風情の品のない娘(だろうかどうか?)で、これらの女のポーズする処、餓鬼の如く、五、六十人に近い、当日の参会者が群れ集るのであるから、全くお話にも何もない。箕田氏も私も、ホンの一、二本のフィルムをとっただけで匙を投げてしまった。あわよくば、緊縛への誘いという、私達の願望は空しく消えて、その瞬間から、先にいった様な、同好者のみの『緊縛モデルの会』を思い立ったのである。夢々、ヌードスタジオの野外撮影会に行く勿れと忠告したい。

× × ×

福岡で、妻の全身に針で五十三個所もイレズミした男が、妻の訴えから明るみに出た。藤井シズ子(三一)という女性が、警察で恥ずかしげに脱いで見せた膚には、首、胸、背中、腕など一ぱいに「岩夫」岩夫の命のイレズミが彫られてあった。

彼女が岩雄(四〇)を知ったのは三十一年二月の初めの頃だったそう。先夫に死に別れ、二人の子供を抱えて、貧しい農家の父親の許に身を寄せていたのである。

顔見知りの紹介で、ヤミ米売りの岩雄を知り、彼にも三人の子供があったが、金もうけのうまい彼は、事実生活力も旺盛で、食うや食わずの彼女達にとっては、全く命の綱ともなあって、二人は相互の連子をともなあって結婚

したのであるが……。

岩雄は変質者であった。

その年の十一月半ば、夜の十時過ぎに、横になった彼女の傍らで、彼は一心に墨をすっていた。

——今ごろ何をするのだろうッ……

と不審げに問う間もなく、彼はジロリと彼女をにらんで、

「お前が、俺と別れないつもりなら、俺の名の刺青を彫らせろ——。」

といって道具をとり出す。長さ四センチぐらゐの絹針五本を竹箸に結びつけ、それに墨を含ませて迫って来た——。

(筆者想定——。恐らく、シズ子は、恐怖に逃げまどい、岩雄は彼女を追って、ハダカの妻を緊縛し、相当の責折檻を加えた事であろう。でないと、この激痛を伴う素人彫りを、マゾヒストでもない、その女が到底その儘じつと甘受出来るわけがない)

彼女は恐怖の余り、夫の家を逃げ姉の許に隠れたが、その都度、血眼になって探され、連れ戻らされては、刺青の数が、逃避と反比例して次第にふえていった。殴られ、縛られ脅迫され、強要されて、彼女の肌の腫れのひく間もなく、凡ゆる個所に刺青はほられて行った。

(筆者想定——。妻の肌に永久不滅の刺青をする程の彼だから、連れ戻した時の、彼女

に対する責めは、恰度私の書く小説そっくりの狂態を羅列していた事であろう。刺青以外に肌一面の青あざや、傷痕はそれを如実に物語っている。

心理学者は、人間はだれにも、多少ながら異常者の傾向がある、という。私自身もその一人かも知れない。だが、これは一寸非道い行き過ぎではなからうか。五十三個所に刺青を彫られる迄辛抱した彼女自体も、或程度マゾ傾向に陥入ってはいなかったか——。何故もつと以前に阻止出来なかったか——。これはあく迄、当事者同志の夫婦の嗜虐と被虐の感情の相剋である。その女性が生命の危険を感じて訴えたはよいが——。「カタキをとつて下さい」と警察で泣きぐずれたのは解しかねる。

何故、岩雄が、妻に刺青をしなければならなくなったか——。逃げるのを何故おそれたのだろうか——。愛情の極端な発露がイレズミとなって現われたが、妻自身、全身に刺青される迄忍耐した、その原因は奈辺にあるのか——。本人同志に精しく聞けば、異常性愛学に貴重なデータが得られそうな気がする。四十の中年期に入った男と、三十一の爛熟期を迎えた女と、これが急に夫婦になった時、激しい感情の燃焼が、こんな結果となつて現われたのではなからうか——。

シズ子が、岩雄の潜在した嗜虐性を誘発す

る導体となつて、イレズミ自体の行為を憎み乍ら、全身をけいれんさせて突っ走る、瞬間の痛みに、恍惚となつていなかったと誰が保証出来るであらうか——)

世の中には身を以て体験する男女もあるといういい一例である。

四月二十二日付の大阪新聞に掲載され、週刊サンケイにも収録されていたから一寸ここに掲げて見た。

× × ×

世の中には、案外、嗜虐を好む者が多い。男女同権とはいいい乍ら、男はやはり能動的であり、女は受動的である。人類始まって以来、陰陽の構造がそうであれば仕方がない。緊縛の構図も案外な処に転がっている事がある。

近鉄大阪線の八木駅で降り立った際、ふと便意を催して這入った駅の公衆便所。御多聞に洩れぬ猥せつな稚拙画の花盛りだ。

その数ある画の中に、際立って大きく、殆んど前面の壁の半分を占めて、縛り絵が丹念に描かれてある。恐らくは一人の人間が描いたに違ひなからうが、数種の絵は、何れも縛りを基幹にして描き、それにSEXを加味していた。あちこちの公衆便所を利用したが、縛りプラスSEXはここが始めてであった。今は既に消されたかどうか——。同好の方は折あれば一度八木駅の公衆便所を使用なさ

れは如何?——。

× × ×

本年の新年号に掲載した私の愚作「夜光る」の冒頭で、一寸触れたあやめ池の、東洋民族博物館の九十九氏(小説では津熊氏)から、先日突然御便りを戴き、会員の方から仄聞したが、自分の事を書いた小説が出ているそうだが、貴君が書かれたのではないかとの御訊ねに、私はすっかり恐縮して、過日お詫び旁々九十九氏を訪れた。

さして悪い事も書かなかったせい、氏は意外に上気嫌で私を招き入れてくれた。

そこには珍らしくも、この家にふさわしくない外人の女客が、日本人の通訳をつれて、訪れていた。

例によって例のものを氏は開陳し、混血と思われる美しい小麦色の女は、聞くともなしに、時には「ホウー」と呆れた感嘆の声を放ち乍ら、手にとったりして、異様に大きく描かれた、あぶな絵の日本の男にびっくりしている様子であった。私は素知らぬ振りをしながら、その癖、激しい好奇心で、女の横顔を見つめている。

「この方は、もっと刺激の強い、アブノーマルなものが好きでしてね——」

九十九氏は、皮肉にもそんな口調で私を紹介する。照れて私はいやあと、女に興味もなく笑いかける。

「アブノーマル? コレ、ミンナ、アブノーマルデシヨ。マダアルノナニカ?」

「イエース、これ、これですよ——」。

九十九氏は得々と、秘中の秘をとり出す。成程、それは私も嘗て見なかった、錦絵の肉筆による責絵画集であった。

「オー、ノーグットネ……」

女はちらつと両手で顔を蔽い、しなやかな指の隙間から私を窺って、その絵からソツと眼を離した。

しかし、やがて射る様な眼ざしが、画集を追っている。彼女の顔は紅潮する。豊かに盛り上った胸は弾んで、激しい動悸が私の耳まで聞えてくる様だ。

× × ×

絵は、娘の死屍を啖う隠亡——。

逆吊りの妊婦に、刃を研ぐ鬼婆——。

(但しこれは以前、奇クで発表した)

牛裂きになった娘の、裂かれた血のほとばしる凄まじい光景——。

武將に暴行され、血ヘドを吐く城の女——
同じく縛られて、雑兵の槍に逆さに吊差し
になった女——ETC

通訳の説明も、途もすればヘドモドと途絶立勝ちだ。彼女は息をひそめて凝視する。私と視線が合うと、微笑もうとして、反って眼が鋭くキラキラと光って、怒った様な顔になる。見終って、女はフト腕時計を見ると、そ

れを機に立上った。私に軽い会釈を残して——。

外人の混血美女だけに、私の好奇心は弥が上にも昂まる。

九十九氏に、彼女の事を執拗く問い訊ねたが、秘密を固守する氏は遂に何にも打明けなかった。

慌てて私も立上る——。

門を出ると、恰度、スタートしたクライスラーが、彼女の運転によって、ゆるやかに、坂道を下って行くところだった。バックナンバーの「兵」の字だけが、辛うじて彼女が神戸に在住しているのだらうということを匂わせていた。

神戸から遙々と——。

私は直感によって、彼女が緊縛や責めに強い関心を持っている事を知った。

× × ×

私の小説なら、差し当り次の章から、フィクションのものとして始まるのであるが、それでは又しても「夜光る」の亜流に過ぎないものが出来上ってしまう。想像を発展させれば、ここから小説は始まるかも知れない。だが、やめておこう、徒らに奇クの洛陽の価値を下げるのみだから。私のとっておきの題材は、こうして話の肩籠に捨ててしまったのである。

(この項終り)

『告白小説』

屈辱くつじよく

の砂すな

青檣まさ

木村むら

審画奏そう

一

太平洋戦争も末になって、S県H浜に急造されたH団は、海水浴場の建物・設備を接收して当てたお粗末なもので、兵舎の足らない分は、防空壕をそのまま使うといったひどさである。

軍艦はおろか、訓練用の舟艇さえロクに無い、この海兵団に私は、海軍予備役見習尉官のレッテルを貼られて放り込まれた。

昭和二十年の春なお浅い、二月下旬であつ

た。

入団第一日。私は生涯忘れ得ぬ人となった。浅羽兵曹長の貌を先ず脳に刻みつけねばならなかった。

長身の彼が、骨ばった広い肩を多少いからせて我々の前に現れたとき、そこには一種異様な緊迫した空気が醸成された。それは決して、我々が緊張しすぎていた故ではないことを、私は断言できる。

細い、針のように光る三白眼。蒼白いと云うよりは、灰色に見える、削ぎとったような

頬。殆んど赤味の無い薄い虚無的な唇。そういう貌の造作だけでも、何か不気味な、鬼気のようなものを人に感じさせるのに、骨太の岩乗な軀幹に、固く締った筋肉を持ち、(まったく、裸になった彼の脚は、筋の一つ一つが見える程であつた) 恰度、剣道の達人などが、何時でも隙の無い態度をとっているといった感じの、彼の身のこなしは、殺気といつてもいい程の緊迫感を、人に与えないではおかないのだ。

浅羽兵曹長は、一わたり新入りの若者達を

見わたしてから、私の処で視線をとめた。

私は、冷い戦慄が背筋に走るのを覚えた。

「片桐か——貴様、仲々いい軀をしてるな。」

よく鍛えて、立派な帝国軍人になるんだぞ。

俺が筋金を入れてやる。しつかりやれ」

咽喉の奥でものを云っているような、彼の低い声が、その瞬間、私の脳髓を痺れさせた。

私は宿命ということを、信じてはいられない。私と浅羽兵曹長との出合いは、そうなるべくしてなったのだと、私は思っていた。

初めての土陸（外出）日が来た。

同期生達は、一装用の軍服を身に着け、喜々として出ていく。私も、口笛を吹きながら、ゆつくりと身形を整えた。昨夜念入りに磨いておいた靴を穿こうとすると、不意に背を指で押された。振り返ると、立っているのは浅羽兵曹長である。

私は、周章でて不動の姿勢をとった。

「片桐。一寸、俺の室へ来い」

「はい……」

と答えると、私は探るように兵曹長の顔を見た。しかし、彼の顔は何時ものように無表情で、そこからは何も読みとることはできなかった。

室に入ると、浅羽は椅子に腰を下した。

私は勿論、直立不動で立っている。

浅羽兵曹長は、煙草に火を点けると、静かに吸い始めた。吐き出された煙が、スーッと窓から流れていく。寒いのに窓は開けられていた。

私は直立したまま、彼の顔を盗み見た。

片側からの外光で、太い鼻梁がクッキリときわだっている。細い眼が一層細められて、半ば閉じているように思われた。

私は、自分の存在が忘れられているのではないかとさえ、疑った。

煙草を一本吸い終ると、浅羽はやっと私を見た。

私は妙にホッとして、更に姿勢を正した。

「片桐。今日の貴様の上陸は、差し止める」

「は……？」

私は咄嗟には、相手の言葉を飲み込み兼ねた。

「上陸禁止だ！」

「はい——」

「何故だか判るか——？」

「——口笛を吹いていたのが、悪かったのではありませんか」

「何イ。貴様、俺にからむ気か？」

「いいえ。そんな——！」

「貴様。どだいたるんだぞ！」

私の頬が、したたか鳴った。

何時の間にか、浅羽兵曹長は立ち上っている。

「オイ、片桐。昨夜云った言葉を覚えているか？」

「は……！」

私は、自分の顔から血の引いていくのが判った。

明日は初の土陸だというので、夕食後、ウキウキと躁んでいる同期生に混って、私もつい気の弛みから、偶々「何故、志願したか」が話題になったとき「只、現役を逃れたい為さ。徴兵で苦しめられちアたまらんからな」と、いい気になって云ってしまったのだ。勿論、云ってしまったから、ハッとした。皆の顔を見ると、複雑な表情をしている。しかし私は、すぐに多寡をくくった。（何アに、聞いているのは、同期生だけだ。上官に聞かれたいわけじゃない、どうってことはありやしないサ）そして、そのことは、ケロリと忘れていたのである。

私が甘かったのだ。誰か、忠義面をして報告したのだから。畜生！そんな奴は、犬に喰われてしまうがいい。しかし、そんなことより、私は当面の危機を何とかきりぬけなければならぬ。

「どうだ。忘れたとは云わさんぞ！」

浅羽は、シリッと一歩近寄った。

駄目だ！あるのは絶望だけだ。

「はい。覚えております」

私は、観念して、眼をつぶった。

「フン——」

浅羽兵曹長は、鼻先でそういうと、ガタリと椅子を鳴らした。

すぐにも、往復ビンタが飛んでくるものと思っていた私は、少し拍子抜けがして、臉を開けた。

「貴様は、どうやら、思想矯正の心要があるようだな」

浅羽は、椅子に背をもたせて、長い指をポキポキと折りながら云う。

「はい——。お願いいたします」

私は、後の言葉に殊更、力を入れていうと



媚びるように兵曹長を見た。そんなことで、いくらかでも彼の心証を良くしようとする自分が浅ましかったが、私は神妙に頭を垂れた。

「ようし。今日から貴様の軀は、俺が預かった。いいな」

「はい」

これで、もう完全に、私の自由は無くなった。私の一挙一動は、すべて彼の意のままになされ、生殺与奪の権さえも、握られてしまったといっている。

この絶望的な環境の中で、私の保身の術は

只一つ、今後あくなき残忍性を發揮するであろう

浅羽兵曹長の前に身を投げだし、被虐者として、

加虐者である彼の意を迎えることだ。

私は、己の卑屈さに、

ふと涙ぐましくなりながら、潮騒を聞いていた。

「貴様。今日は仲々めかし込んだナ」

「はア。いいえ……」

「フフ。そうしてみるとどうして相当な色男だ。

シヤバじや、大分女の子を泣かした口だろう」

「いいえ。それは……」

「違うというのか？ まアいい、どうせ俺にやア興味のねえことさ。」

浅羽兵曹長は、ズボンのポケットに両手をつっ込むと、一瞬俯向いた。

そのとき、何故だか私には、彼のうなじの辺りが、妙に淋しげに見えたのである。

「おい、片桐。上陸を止めたとなったら、その服装はもう用がない。室へいって着更えてこい。イヤ、襦一本になってくるんだ。」

「はいッ」

急いで戻ると、室には未だ三、四人残っていた。

私は、そしらぬ顔で服を脱ごうとしたが、

「オイ、どうしたんだ？ 片桐——」

と一人に声をかけられると、思わず釦から指を離した。

「上陸せんのか？ お前——」

「う、うん……」

「あんなに楽しみにしてたのにか——？」

「うん……」

「ヘンな奴だな。まるっきり元気がないじゃないか。気分でも悪いンか？」

「いいよ。ほっといてくれ！」

早くしなければ大変だと思うと、イライラして、私は大声をだした。

「俺は、お前達とは違うんだ。かまわんでくれよ——！」

私は腹立しげに叫ぶと、そっぽを向いて荒々しく服を脱ぎ捨てた。

外出をやめるといふのだけならまだいい。上陸日に、襦一本になって又、室を出ていく異様な風体を、私は誰にも見られたくないのだ。しかし、グズグズしてはいられない。私は、可能な限りの速さで襦を締め込むと、怪訝そうな眼付きから逃げるように、室を駆けだした。ドツと涙があふれ、私は拳骨でそれを振り払いながら、一目散に駆け続けた。

二

「遅いぞッ！」

浅羽兵曹長は、室の前に出ていて、私の姿を見るや一喝した。

「申しわけありません」

「従いて来い」

建物を出ると、激しい西風がまともに吹きつけた。あまつさえ、H浜の空の風は、兵達の唄になる程の名物である。私の肌は忽ち鳥肌立った。

「寒いか」

「はい。いいえ」

「よし。すぐに暖くしてやる」

前方百米位の処に、海兵団の境である有刺鉄線の柵が見通せる地点へ来ると、浅羽兵曹長は足を止めた。

「いいか。あの柵迄駆足でいって、戻って来

る。俺がよしと云う迄続けるんだ」

「はい」

「では、行け！」

駆足の姿勢をとると、私は駆けだした。

三回往復して、四回めに又、柵へ向って駆けしていくと、有刺鉄線へ殆んど軀をつけるようにして立っている人影を認めた。私は思わずハッとした。その男は、柵の向側からジッと私のほうを覗めているのだ。私は俄かに羞恥に襲われたが、駆足の姿勢をくずすことはできない。私は内心泣きたいような気持ちになりながらも、表面は堂々(?)として、襦一つの全身を限なく晒しつつ、しかも、その男にどんどん近づいていかなければならなかった。

男は、私より一つか二つ若いように見え、カーキ色の学生服を着ていた。彼は、憐憫と嘲笑の入り混った表情で、滑稽きわまる私の姿を眺めた。彼の眼に、私の胄毛の一本々々が見きわめられる近さになった。私は眼を逸したい筈なのに、どうした訳か、彼の顔を見て笑ってしまった。しかし彼には、私の表情が、おそらく泣いているように見えたであろう。向きを変えて引き返し始めても、私は、臀部に焼きつくような彼の視線を感じていた。

浅羽兵曹長の処まで戻ったが、彼は未だ、「よし」とは云わなかった。

私は、五度目の柵へ向って駆けだした。

それを待っていたように、学生は、同じ処に立って此方を見守っている。最初のときよりも、更に私は苦痛を覚えた。(畜生!何を面白がって見てやがるんだ。帰れ!帰ってしまえ) そう叫びたいのだが、口へは出せない。私は、激しい憎悪で軀中が火照った。それなのに学生に近づく、私は又泣き笑いの表情を浮べてしまったのだ。

そうして、とうとう十回めになったとき、私は、息切れと疲労で脚がもつれてきた。普通なら千米位走っても何でもないのだが、異常な環境が、不自然な体力の消耗を要求するのかもしれない。

私の困憊ぶりを見た浅羽兵曹長は、その前から、もう駆足などという単調な懲罰には飽きてきたらしく、

「よし。やめい」

というなり、ズボンのポケットに両手をつっ込んで歩きだした。

松林へかかる処で、浅羽兵曹長は足を止めた。私は急いで彼の前へいき、不動の姿勢をとる。

「オイ。両手をだせ」

兵曹長は、ポケットから細引を取り出すと端のほうで私の手首を揃えて括り、松の枝に二巻きしてあまった端で、もう一度手首を固く縛った。それから、彼は、偏執的な熱心さ

で、吊り下った私の足許の砂を掘り始めたのである。

それまで私の足を支えていた浜砂は、次第に崩れ、それにつれて手首の結びめが喰い込んでくる。あまり太くない松の枝は、私の体重で撓んだが、それでも爪先が離れそうになった。

「あっ！……」

私は手首の痛さに思わず叫んだ。

浅羽兵曹長は、やっと掘るのをやめると、一寸私の顔を見てから、あたりを物色して、手頃な竹の棒をみつけた。

私は、恐怖に蒼ざめて、兵曹長の手許を見た。

答が唸る。私は危うく悲鳴を泳えた。松の枝がユサユサと揺れた。

答は、正確な間隔をおいて飛んできた。

私は、もうどこを打たれているのか判らなかつた。全身が激痛で痺れ、どんなに泳えようとしても、咽喉を搾るように呻き声がでてる。私の軀は、無意識のうちに答を避けようとしては跳ね上り、キリキリ舞いをした。全く不意に、私はもんどりうって投げだされ、頭を砂中にめり込ませた。口の中を砂だらけにしなから、恐る恐る眼を開けてみると松の枝が折れている。

私は、手が括られているから、起き上がるこ

とができない。足を蹴かせながら、我にもなく、哀れみを乞うように兵曹長を見あげた。いや、見あげようとした。それより先に、私は答に打ちのめされていたのである。

枝が折れたという誤算が、それまで殆んど無感動に答を振っていた彼を、突然怒りに駆りたてたのか、獣のような息使いと共に、答は乱打となって降ってきた。

私の軀は、もう身動きする力も無い筈なのに、打たれる度に反射運動を起し、砂を飛ばしてのたうち回った。

翌日、私は発熱して一日中、呻吟していた。

同期生達が見舞に来ては、何かと訊きだそうとしたが、そうすると私はきまって腹を立て、彼等を戸惑わせた。私は何故だか、浅羽兵曹長のことを誰にも知られなくなかったのだ。浅羽と私と二人だけのこととして、誰にも介入されたくない思いであつた。

私は兵曹長を恐れた。しかし、憎んではいなかった。といって、私はマゾヒストと呼ばれる性向の所有者ではない。駆足のときも、答で打たれたときも、苦痛と屈辱を感じこそすれ、いささかの快感も無ければ、まして被虐の喜悅など、みじんも起りはしなかつた。

仮に、もし対手が浅羽でなく他の人間だったなら、私は或いは、恐怖と絶望の余り、脱走を企てたかも知れない。とすれば、浅羽兵曹長そのものが、何等かの心理的影響を私に与えているに違いないのだ。私は過去に於

て、同性に恋愛感情を持った記憶が無い。だから、浅羽を愛していると思うには、抵抗があつた。只、一つだけ云えるのは、彼から受けるものは、愛撫でも虐待でも同じだということである。もつと端的に云うならば、私は彼になら殺されてもいいと思つたのだ。こうして私は、分隊の中では自ら孤独の殻に閉じ籠り、すべての志向を浅羽兵曹長にのみ向けていったのであつた。

三

四月に入ると、水泳は勿論のことであるが、その他の訓練でも屢々、渾一つで行わせることがあるようになった。

全員が裸だけの裸で行う海軍体操はまさに壮観である。海軍独特の激しい体操は、若者達の筋肉を逞しく躍動させ、咆哮のようなかけ声は、太平洋の荒波に叩きつけられる。

全員が裸だから恥しいとは思感しない。それに馴れてくると、清澄な空気に全身の皮膚を晒す爽快さが、誰の心をも子供のように無邪気にしてしまうのだ。それに、男ばかりの世界が、実に愉快でもある。

私が、浅羽兵曹長の裸身を見たのも、体操のときからであつた。

兵曹長の軀は、胫毛はもとより、殆んど全身が濃い体毛に覆われ、殊に胸板から腹部にかけては、長い胸毛が風に戦いでさえ見え

る。海兵団中でも、彼の右に出る胸毛の持主は、さすがに見当らなかつた。

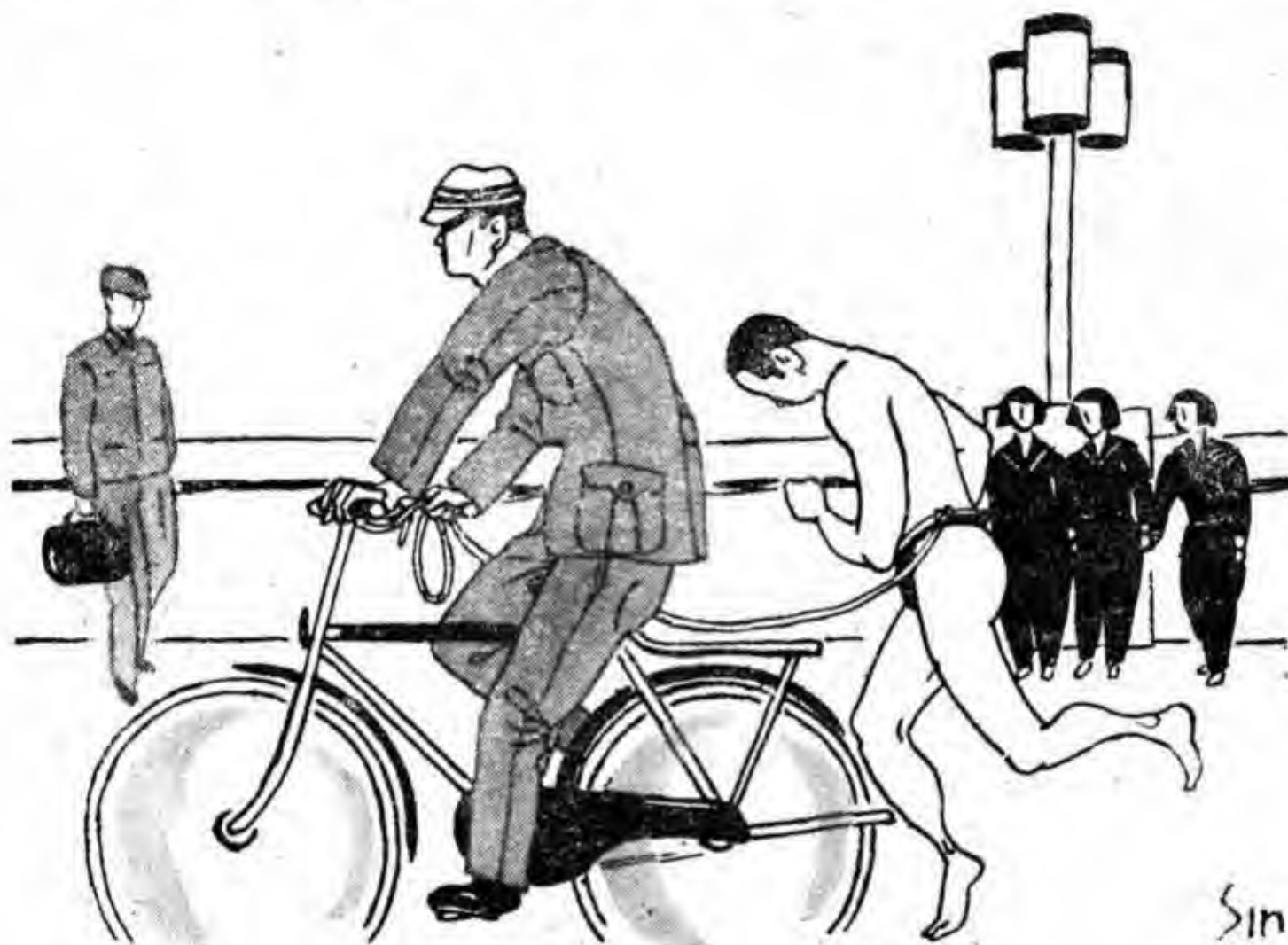
私は、この日、又も黒星をつけてしまった。二度も体操を間違えたのである。

浅羽兵曹長の眼が光ったのを、私は見逃がさなかつた。(これはやられるな)と思うと、兵曹長の方を見ていることができなくなつた。

果して体操が終ると、兵曹長は分隊士に何か耳うちした。大学出の分隊士は、二、三度肯くと、私のほうは少しも見ないで、肉づきのいい白い軀を振りながら、サッサといつてしまった。

「解散!——片桐。貴様だけ残れ」

浅羽兵曹長の眼は、ジッと私にそそがれている。私は、そのままの位置に俯向いて立っていた。



Sin

二人だけになると、浅羽は静かに近寄つて来た。私は観念の臍を固め、真直に顔を上げた。潮風に混つて、爽かな汗の匂がたつた。

「片桐。貴様、二度も間違えたな」

「はい」

「貴様。大体やる気が無いんだらう」

「いいえ!」

「フン。じゃ、何故間違えたんだ?」

まさか、(兵曹長の軀に気をとられていた)とは云えない。

「申しわけありません……」

私は神妙に頭を下げた。

「ところで、片桐。今日は、貴様に特別上陸を許すことにしたよ」

「は、はア……」

椰揄されていると思ったから、私は曖昧な返事をした。

「俺も一緒だ。こないだは、俺も貴様も上陸できんかったからな」

「はい——」

「どうだ。嬉しいか?」

「は、はア……」

「ハッハハハ——さア、いこう。外出の支度もある」

私は、狐につままれたような気持であつた。「上陸」というのを額面通りには受取れないにしても、それが甚だ意地の悪い懲罰であるとは、気づきようもなかったのだ。

私が、その日の外出用に決められた服装は、何と遠泳に使う赤褌一本である。私は、本当に泣きたくなった。白い褌ならまだ我慢できる。真ッ赤な褌を、地方人の眼に晒して歩くのは耐えがたい。しかも私は、只歩くのではなかった。自転車に乗った浅羽兵曹長（勿論彼は着服している）に、腰にうった縄尻を取られて引かれていくのだ。

「さア、出発だ。しっかり走れよ」

浅羽は、口笛でも吹くような調子で云ってペダルに足を掛ける。

国道へ出るまでは、幸い人通りがなかった。周囲は殆んどが芋畑である。駅の跨線橋が見えてきた。駅前から国道へ折れるのだ。

私は足が憚んだ。しかし、走り続けるより仕方がない。自転車は高らかにベルを鳴らして駅の前に出た。驚いた人々が、一齊に私を注目する。駅から飛び出して来る人もあれば、通行人は皆、足を止めて見送った。私は、屈辱で軀中が硬わばり、眼がかすんだ。それなのに、通行人の姿はよく見える。前方から、セーラー服にモンペをはいた女学生の二団が来た。彼女等は、私の姿をみると、合唱していた「予科練の歌」をビタリとやめ、上気した顔で眼を瞟った。死ぬ程の恥辱を舐めている私の気持など知る由もなく、赤い褌がよほど可笑しいのだろう。女学生達は、私が通り過ぎた後、休えきれないように笑声をあ

◆新版マゾフオト分譲◆

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフオト。本来、某氏の求めにより個人的に作成したのですが、特に御希望の方にのみ焼増いたします。尚従来分譲中のマゾフオトは全部、分譲打ち切りになっております。

第一組 凌辱篇

大中判印画紙焼付、五枚一組

七百円 (略号 ま1)

第二組 屈伏篇

大中判印画紙焼付、五枚一組

七百円 (略号 ま2)

第一組、第二組共、いずれも特に春日ルミ嬢を煩して最近作成した新しい作品で、第一組（凌辱篇）では足を舐めさせられたり、足で踏みつけられたり、足を洗わせられたり、大の男が精神的に凌辱させられているポーズ、或は後手猿轡に苛められているもの等を選びました。第二組（屈伏篇）では尻の下敷になつて屈伏している奴隷の姿、股の間に挟まれて呻吟したり、首の上に尻を乗せられているもの等に狙いをつけて選んでみました。

げた。（畜生！女の子まで俺を馬鹿にしているやがる）私は不意に口惜し涙がこみあげてきた。

それから、海軍のクラブである場所までの、二百米余りの橋が如何に長かったことか。このときばかりは、私も浅羽兵曹長をつくづく恨んだ。一対一で責められるなら、死んでもいいと思っているのに、大衆の面前に生恥を晒させるとはひどすぎる。私は悠然とペダルを踏んでいる浅羽の、巾広い肩の辺りを、はじめて憎悪の感情で眺めたのであった。

クラブへ着くと、派手な銘仙で作った防空着を着た女が、頓狂な声をあげた。

「まア、この人、どうしたんですか？犬や猫じやあるまいし、可哀そうじやアありませんか——兵曹長サン。あんたも随分ひどい人ネ」

「フン——俺に水を一杯くれ」

「ハイ、ハイ。上げますよ。それから、こちら、赤褌サンに上げてほしいんですよ」

「お前がやりたいんなら、好きなようにしろ」

「ええ、好きなようにしますとも」

女が奥へ入ると、浅羽兵曹長は、何のつもりか、肩を怒らせてその辺をいつたり来たりしはじめた。

私の縄尻は、自転車のハンドルに軽く結ん

であり、私はその側に立っていたが、水などはほしくない。一刻も早く海兵団に帰りたいと、そればかり考えていた。

第一期訓練期間が終ると、我々はO海兵団に移ることになった。

明日は愈々、H海兵団を去るという日の夕方、夕食後、浅羽兵曹長の姿を探したが、何処にも見つからない。ふと思いついて、暮れかけた海岸に出てみると、波打際に例の如くズボンのポケットに両手をつっ込んだ彼は、一人佇んでいた。

「浅羽兵曹長殿！」

私は、思わず足早に近寄ると声をかけた。

「片桐か……」

「はい！明日は愈々お別れであります」

「うん」

「色々お世話様になりました」

「皮肉か」

「いいえ！」

「片桐——」

「はい」

「貴様は軍人には向かない」

「申しわけありません」

「戦争だから仕方がない」

「……」

「Oに移ったら、軀を大事にしるよ」

「はい……」

「ハハハ、俺が、こんなことを云っちア可笑しいかな」

「兵曹長殿！」

「もういい。何も云うな。帰れ」

「ハイ——」

「……」

「そうして、俺のことは、忘れてしまうんだ」

責められる男性 虐められる男性

十態 「マゾヒズム画廊」 分譲

淹れい子画 大中判印画紙焼付 十枚一組 千二百円 略号(ろう)

一、屋根裏の妖女 二、黒帯と雪の足 三、御寮さんと丁稚 四、女学生と中学教師
五、輝かつぎの受難 六、二号さんと重役 七、従姉と中学生 八、愉しい苦行 九、
衣桁の蔭に舞う鞭 十、土牢の女王とスパイ
◎絶対他では求め得られないマゾ画集。分譲中止にならないうちに是非一組お求め下さい。
詳細解説は本誌33年2月号一六二頁、一六三頁御参照願います。

ぞ。いいか」

「……！」

「判ったら、早くいけ！」

「いきます……」

「よし」

私は、もっと何か云いたかった。しかし、結局は何を云ったらいのか判らなかつた。私は、黙って敬礼し、回れ右をして歩きだした。少しいって振り返ると、浅羽兵曹長は、元の処に元の姿勢で立ったまま、暗くなりはじめた海のほうを向いていた。

(浅羽兵曹長！……)

私は、そう心に叫ぶと、もう二度と振り向くまいと思いつきながら、ずんずん歩いた。

何かに躓いて立ち止ると、そこは過ぐる日、松の木に吊り上げられて、浅羽兵曹長に鞭打たれた処であつた。私は蹲むと、あの日屈辱の涙を吸った砂を手に掬い、そっとポケットにしのばせたのである。(完)

あとがき

この作品執筆にあたり、資料の提供を受けたM氏に深く感謝します。物語中にあることはすべて事実ですが、M氏の要望もあり、登場人物の氏名及び地名は仮名を用いました。尚現在浅羽元兵曹長の消息を知る由もありませんが、もし健在でいられるのなら、M氏同様、筆者も是非お逢いしたいと念じています。



マゾヒズムへのいざない

(第十一回)

黒田史朗

とやま、かづひこ氏を私はいちはやく注目していた。それより早く、沼氏がそのフェティシズムをマゾの立場からとりあげられ、本来あなたはマゾヒストでいらっしやるというふうに断定された。全く同感であるし、とやま氏自身そのことを自認なさってるのだろうと、私は私なりに解釈していたところ、六月号の「愛好者街を行く」でとやま氏自身それを否定なさった。自己分析の結果、それはMというより、むしろSではないかとさえおっしゃる。そこで私は私なりの判断から、とやまかづひこ氏に一言申し述べたくなった。

とやま氏のこれまでのフェティシズム談議

は、ひとしく私の興味と共鳴とそれにとまなう感動をそそるに充分であり、又教示されるところもすくなからず、心ひそかに脱帽し、拍手を送ることを惜しまなかった。勿論、今だってそうである。氏の目のつけどころの私におけるそれとの関連性、乃至はその共鳴の度合は非常に低からぬものがある。私はそれら一切をすべて氏のマゾヒズムの物において考察してきた。マゾヒスト、とやま氏を考えていたのである。しかり、いちはやく沼氏がそのことを指摘された。

いつか、朝日新聞が「あいまいな言葉」というテーマを、相当期間連載記事として扱っ

たことがある。△不安▽ △運命▽ あるいは△アリズム▽とかいった外来語を含め、あらゆる言葉というものが持つあいまいさを端的に分析説明した好記事であったが、言葉とは単にお互の経験によりかかり合っている符号にすぎず、同じアリズムという言葉が、その人の経験・立場・性格によってさまざまなうけとり方がされるのをみてもこれは納得出来ることである。

さて話をマゾ・フェティシズムの関係に戻して考えよう。御本人の、とやま氏は六月号において次のように分析考察される。

——むしろイヤがって逃げようとする

相手方から、その「液体」なり「固体」を、自身の口の中に向けて放出させる。そのことにスリルを感じ、対象者をおどし、すかし、力をつかい、追いつめてモノにする快感、そして相手そのものを自分の体内に入れようとするその意慾は、むしろ私のSと考えますが、如何ですか――

相手そのものを自分の体内に入れようとする、という部分の意がよく呑みこめないままなのだが、そのことは別に私の解釈の主筋に支障はきたさない。しかし、とやま氏のこの発言はすこし意外だった。かく問いかけられた沼氏もおそらく意外に思われたことだろう。先に述べた如く、本来の立場から言えばM、F、あるいはSといった言葉自体、確固不動のものでなく、その人の立場、経験からそれらは実に種々様々な解釈を下され得る。まさに言葉とはあいまいなものであり、複雑微妙な人間心理をそのように一つか二つの単語で規定しておわれりとするの意は、今更申し述べるまでもありますまい。というようになことを前提条件として言葉はなりたつ。とすればマゾヒズムという言葉自体がマゾと一言のもとに言い捨てるには、あまりにも多様な矛盾葛藤するの心が内にふまえられていることを忘れてはなるまい。マゾヒズムという生きた心の傾倒は、それはそれだけで独立した

ものでなく、他の資質をも合せも同じ人間の心理の一部として成立することにも意を向けていたきたい。それらを口の中に放出させることを強制する、そのことのスリル、それにいたるまでの過程だけを区別してみればとやま氏の言の如く、それはS過程と言うことも出来得る。しかしこれは一種の言葉の遊戯、あるいは思いつきの奇抜さという以外に意味はなさそう。そういうS的過程なぞをすべて踏まえてマゾヒズムという全体的な傾向があるのだから。過程は過程だけで成り立つものではない。過程は目的と結びつくことによって始めて意味がある。言葉の定義にこまかくこだわるのあまり、全体の姿を見失ってはいけぬ。百人のマゾヒズムがあれば百様のマゾヒズムがあるのだ。それが同じマゾヒズムの言葉の中に統括されるのは、ただ一点、凌辱への願望（意識的無意識的たるを問わず）に集約されるが為ではなからうか。それらを相手の口の中に放出することは如何なる女性もそれを拒むが当然だ。それをしも強制する。S的過程をたどるわけだ。しかし、最後の決定的瞬間、放出する幾瞬間の女性の立場こそ興味深い見ものであるわけだ。強制の為とはいえ、とにかく相手の口中に放出するのだ。行動で以てそれを立派に承諾しているのだ。受ける側の男性からいってもそのことを強制した立場からいって、余計に恥かしい

ことであるにちがいない。その心理的基盤の上に、実際に放出された、（のまされた）というそのはずかしめは、まさに全体の行為の頂点をなし、その頂点をなす地点において、マゾヒズムという全体的な意味が成立するのである。糞尿は凌辱のための最大のシンボルであり、その背後にある女性心理と相まち、とやま氏におけるフェティシズムはまさしく沼氏の見解の如くマゾヒズムの一要素として判断されうるものであると思われる。親愛なる、とやま氏よ。そうそう意地の悪いことはいわれずに、我々Mフアンの仲間ですんではないられんことを。これは私の氏を愛するが故の願望だ。ところで私は幻炎の紹介を例の如くつづけるつもりだが、今回はいつものそれよりすこしばかりながい引用を試みたい。

年頃の女の子が、男達にあたえるあのふんわりとした感じは、一体どのように説明したらよいのか、誰しも首をかしげて困惑するだろう。彼女達の声は澄んでいて、それ自体一つの音楽でもありうる。私は貪るようにその音楽に聞き耳をたてる。私は飢えていた。

……………（略）……………

私は、ながいこと飢えていねばならなかった。智慧の木の実を食べた瞬間、アダムの心中をかけめぐったであろう、あの灼くような飢えが徐々に私を苦しめ、さいなみ始めた。

私にとって、それは、誠に遠い音楽ではあった。彼女達の肌は磨きたての大理石のようにつやをおび、まだ嗅いだことのないその吐息は、きつと素晴らしい香りを帯びているにちがひなかった。

……………(略)……………

私は辛抱することが出来なかった。私は、彼女達の好んで通りそうな公園の木の下道とか、ミッシヨンスクールのモダンな校舎が、繁みの向うにチラチラ見える岡の麓のあたりとかを、私はよく臆病気な目付きで歩いたものだ。

多くて六、七人、すくなくとも二、三人連れだって彼女等は歩く。私は用ありげに彼女等とすれちがう。

「そう。で、あの人、どうなさったの」

「ところが、それからが面白いの。何ていったらいいかしら。そうそう、断然これなのよ」指で何かのかたちを真似る。と、どっと上る笑い声。あたりの空気をそよがせ、木々の若葉のような若やいだ香りが、一どきに私目がけて押しよせるあの流れは、まさに私を塵かなにかのように、すつとばしてしまふのだ。

私の傍を、かぐわしい花電車のように彼女等は通りすぎる。彼女等の通りすぎた後の道傍、かすかに漂っている温かい空気、彼女等の靴先に蹴られた石ころ、靴底にふみしだかれた草の根、私はそつと、それらを指先でい

つくしむのである。

ある日、私は浄水場の高い土堤を取り巻く公園の道を歩いていた。堤のやわらかい青草をふみしめてすこし上れば、浄水場のプールの水が嚴重に張りめぐらされた鉄条網ごしに見える筈であった。すると、そこに若い女が一人坐っていた。私は急に顔の火照りを感じ、じつとその場に立ち止まった。彼女は左側のゆるい傾斜地に両膝を立てて坐っていた。膝の上に本を置き、それに読みふける彼女の顔が、黒い髪の間で白く見えた。

……………(略)……………

私は、なかなか言い出せなかった。私の髪は蓬々とのびていたし、無精髯に汚れた顔の中で、変に輝く目の光は濁っていた。変に用ありげに歩きまわるだけでさえ、訝しく思われるのに、此の上、妙なことを口走るとなれば、彼女はびっくりして逃げ出すか、あるいは人を呼ぶために悲鳴をあげるか、でないとしても、私の必死なおもいなど全くよそに、そそくさと此の場を立去ることは間違いない。私はいつもそう力めるように、彼女を安心させる必要があった。そして問題は、ただそればかりではなかった。私の蓬々とのびた髪、薄汚れた顔。それらが証明するように私の普通人としての虚栄が、私の行為を怕しい力でセーブするのであった。私のせめてもの虚栄、それが私にみじめな容姿をとらせて

いた。先ず普通の服装で、私は私の思いを述べるなど到底、出来得ないことであった。

普段の私は、存外のおしやれであるにかかわらず、私は思いきり見すばらしいなりをする。すると不思議に気持がやわらぐ。

……………(略)……………

彼女が怪訝そうに、私の様子を注意し始めたのにたまりかね、私は一歩近よった。このふんぎりには、かなりの決意を要した。

……………(略)……………

私はしかし、このときばかりは今迄と全くちがって実に勇敢だった。目をつぶり、水にとびこむときのような緊張で顔があからんだが、もう引き退るわけにはいかなかった。

「ぼ、ぼく、Kちゃんっていうの」

(それがどうしたの)とでも言いたげな、しかも多分に警戒をこめての、つぶらな瞳が私を凝視した。

「ぼ、ぼく……こわい。お姉ちゃん、そんなに睨まないで」

彼女の顔に、戸惑いと同時に説明のつかないにが笑いが、かすかにうかんだ。

「ぼ、ぼく……何も悪いことなんかしないよ。だから、ぼ、ぼくをぶたないでね」

「わたしが？」

彼女は笑った。

「ぶつたりなんかするもんですか」
ぶつということ、その言葉が肉感あるもの

として人を感動させることがあり得るのだ。
私は顔をあげた。

「ほく、お靴みがくの。とつてもうまいよ」
「そう」

それから口調がすこしきつくなった。

「お姉ちゃん、今、御本読んでるところだから、邪魔しないであちらに行きなさい」

暖かい日和だった。私は、臆病な小犬だった。すこすこと立上り空を見上げた。尻尾を

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに三十号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
復刊第3号 (昭和31年4月号) 定価二百円

巻いて引き退るより外に術を知らない小犬、まさしくそのとおりだった。

以上、幻炎第二回の中からの引用。

私はとやま氏とちがって、それを強制によらず誘導によることを手段としておしえてきた。しかし、私の誘導の目的は奈辺にあったのか。糞尿につけるのだ。いや、そういう形ある物をおして把握出来るところの凌辱感

をこそ。マゾヒズムは形而上学的本質から成り立つ。マゾヒズムを言いかえれば、これは一つのロマンチズムを生み出す母胎でもあり得る。マゾヒズムとは即芸術する心でもあり得る。

(未完)

復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽
復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽
復刊第8号 (昭和31年9月号) 定価二百円
復刊第9号 (昭和31年10月号) 定価二百円
復刊第10号 (昭和31年12月号) 定価二百円
復刊第11号 (昭和32年1月号) 定価二百円
復刊第12号 (昭和32年2月号) 定価二百円
復刊第13号 (昭和32年3月号) 定価二百円
復刊第14号 (昭和32年4月号) 定価二百円
復刊第15号 (昭和32年6月号) 定価二百円
復刊第16号 (昭和32年7月号) 定価二百円
復刊第17号 (昭和32年8月号) 定価二百円
復刊第18号 (昭和32年9月号) 定価二百円
復刊第19号 (昭和32年10月号) 定価二百円
復刊第20号 (昭和32年11月号) 定価二百円

復刊第21号 (昭和32年12月号) 定価二百円
復刊第22号 (昭和33年1月号) 定価二百円
復刊第23号 (臨時増刊号) 定価二百円
復刊第24号 (昭和33年2月号) 定価二百円
復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円
復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円
復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円
復刊第30号 (サド特集号) 定価三百五十円

〔代理部だより〕

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。六冊以上一緒に求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキヤビネ版写真三枚贈呈いたします。
○休刊前の本誌は全部売切れてしまいました。今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。

愛^マ好^ニ家^アの記録

—あるコプロ者の手記—

とやま・かづひこ

畏友、沼正三先生にならって、自分の記録を本誌につけてから、ここに三十六話を累ねた。今月は又、三十七話からつづけるわけだが、この小文も尊敬する友人はほめてくれる。ただ片よりすぎているから、もう少しバラエティがほしいという声もある。

実は、百話か、百五十話だけの腹案もありあと、材料は続々集まりつつある。

こんなもの—と半分のけんそんをまぜて、読者諸兄からの高評を得たいと考えている。

尚、つけ加えておくが、この記録がひとつとしてウソはない。みな、ちゃんとした出所はある。ただ、多少のフィクションは許してほしい。みなさんからの感想がいただけたら大へんありがたいと思う。

(37) あたしの足をお拭き!

五月はじめのある日、フト見た新聞の片すみに、ドキリとするキャッチフレーズが、私の眼をするどくとらえた。

『齊藤、あたしの足をお拭き!』

ひところ問題になった『千葉銀行事件』に登場する美しい女主人公の、私生活をバクロする『実話』という雑誌の広告である。

この美しく誇り高く嬌まんな女性性は、事件発生と同時に大々的に新聞や雑誌でクロージアップされたので、知っている人も多いであろう。

自分が召使っている男の秘書に、足を拭かせて平然としていたこのドミナの生活振りはいろ／＼と楽しい空想をもたらせてくれるのである。

たとえば、入浴の世話、着がえの世話、肌の手入れ、髪の手入れ、その他、細々とした身辺のことに、おそらく『ヤブー』をコキ使ったであろう。

以下は、断っておくが、かづひこの空想によるこのような貴婦人の私生活を描いてみたのである。

そのひとつ。

用便のときに、トイレに秘書を伴い、すべての世話を召使いにさせたことであろう。

生理の処置、出たものを流し去ること、トイレット・ペーパーの使用、おそらく誇り高い女性のことであれば、あらゆる場合、自らの手を下すことなく、平然と他人の手を使うことであろう。更に又、冬の寒い夜や、酒に酔って、トイレまでゆくのも面倒とあれば、

私室のベッドの上で、ポットを使うこともあれば、数歩進めて、その代用に召使の口を使い、処理させることも考えられる。

金のあり余る、この世のことすべて自らの思いのままになる、遠慮気兼ねを知らぬ、気心のたかき女性であれば、恐らくトイレの問題など、虫ケラとも思わぬ召使を使い、人間の口や舌を、手を、器物のごとく扱うことにひとときの快感を、味わっているかもしれない。

『まったくお金持のひとの生活なんて、吾々の想像もつかないことがありますよ』

むかし、ある富豪の小間使いをしたという老女が、かつて、かづひこに、そうした上流社会の人々の常識では考えられない生活を語ってくれたなかに、これに近い話があったが、このような『金持ち階級の快楽』は、現代にも残っているかもしれない。

皇族をまねて、子供たちに自らを『タータン』と呼ばせ、自動車が欲しければ自動車を、ダイヤが欲しければダイヤを、洋服は一〇〇〇着、パンティまでクリーニングに出したというこの金におごった女性。

あたしの足をお拭き！と命令し、その命のままに、床にひざまずいて、舐めるようにして（同誌の表現通りを転載）丁寧に足を拭いたという若い秘書。そのような人々の生活をあれこれと思いめぐらせると、かづひこの

胸はおどるのです。

(38) どんなことをして呉れますか

以下は東京の国電山手線新大久保駅のトイレのらくがきから採集。

ボクは十九才、女のひとからいじめられるのが大好き。パンティを口に押し込まれると嬉しい。その他、どんなに苦しめられてもいいのです。御婦人の方よ、ボクを責めて下さい。どんな方法でいじめてくれますか、返事を下さい。なやめるボーイより。

x x

アンケートという、らくがきとしては面白い形式をとっている。

これに返事が添えられている。

『ピンで身体をつき差してやるワ』

『ハナ汁をかんだ紙を食べさせてあげる』

『妾の馬になリなさい』

『あたしの便器にしてやる』

ETC……。面白半分の返事が、一つ一つ変った筆跡で書いてある。

このようならくがきは、書く人、読む人にとって、モヤモヤした感情を発散させる効果は大きかろう。

新大久保と云えば、新宿に近く、温泉マークも多い町。赤線区域がなくなつて、何となくモヤモヤしている人も多い昨今に、せめてこのようならくがきによるアンビは、大目に

見られてもよいであろう。

(39) アルバイト

友人からの又聞きをひとつ。

『世の中には、面白いアルバイトがあるんですね』

とその友人は前置きして、次のような話しを聞かせてくれた。

友人、Tのいとこの女子大生が、ある人からの依頼で、半年ばかりやったアルバイトで、何とかいう薬の研究所からの話で、自分の尿をそのままフラスコにとって持ってゆく。但一日置きで、持ってゆく日は、朝一番に出たもの全量と、目黒にある研究所へ必ず午前十一時に着いて、その医務室で、別のフラスコにまた取って、それを提出する。

一回が三〇〇円。

アルバイトとしては、ワリがよいというので希望者が多く、フラスコを若い所員に渡すのに、はじめの頃は、はさしくてイヤだったが、しまいは、すっかり馴れて、

『きようは、たくさん出たワ』

とか、匂いや色のようなまで、先方の所員と平気で話し合うようになったとか。

尿の使いみちについては、特許を取るためにくわしく話はしてくれなかったが、ホルモンの研究上必要だといひ、それには未婚の若い女性のものが、特に要求されたという。

空想症に取りつかれたかづひは、ここでこう考える。

研究にことよせて、尿や便を手に入れる方法が、ここにもある。

一回三〇〇円で、あこがれのものが自由になるなら、お安いもの。しかもそれが、相手に迷惑をかけず、喜ばれるのであれば、一石二鳥ではないか——と。

(40) 踏み台のおとこ

『サンデー毎日』四月二十日号グラビア読者応募作品の写真、に素晴らしいのがある。

どこかの撮影会で、モデルが台の上に上るのに、地面へ両手両足をついて四つんばいになり、吾と吾が身を踏み台にしている男。

モデルの片足が、男の左腰にかけられ、モデルは両手を正面について、

『よいしょ!』

と高いところへ上ろうとするところ。

モデルの体重もかなりあるらしく、クツのつま先やヒールが、グツと男のからだを踏みつける様子が、男のからだへの食い込み方が、上衣のキレのしわの様子でアリ／＼と分るのである。

同誌のキャプションによると、

このフミ台の役を買ってでる男性が殺倒、やはり時代ですなア。

とある。地面にひざまずいて、喜々として

女性の踏み台にされている男のポーズ、更に又、平気で男を踏んまえている女性の美しい横顔、体のこなし、それを見ている二人のおとこ。このシヤシンは、切り取っておく価値がある。同好の方々には一見をすすめたいと思う。

(41) その匂いを

バスは、かなり混んでいた。

運よく、かづひは座席のはじに座り込んで、となりに立つ婦人の横顔をながめながら、じっとしていた。

バスが銀座四丁目の交差点を通り、車内も大分すいてきて、となりに立つその婦人だけが、かづひこの丁度、顔の近くに腰をふれるポーズで、立っていた。

進行中のバスが、新橋を渡るとき、道路に一寸した穴でもあったのであろうか、ガクンとゆれた。

そのときである。

その婦人のおなが、バスのゆれるシヨックのためであらうか、グーツと鳴ったのである。ただ小さな音で、御本人も気づかぬ様子。よく空腹のときに鳴る、グルツというような音、生理のガス音だったかもしれない。

(あれ?)

かづひは、あるいは、その怪音は婦人の尻のあたりから発せられたのかもしれないと

ある期待から、ハナに神経を集中していると、案の定、婦人のお尻のへんからガスの臭いがして、人のいやがるくさいにおいが、かづひこのハナをつんと刺戟した。

そのとき、かづひは、この横顔のすばらしく美しい、細身の上品な婦人の、ガスのにおいに、文字通り陶醉している自分を発見したのである。

美しい女性も、ついガスを洩らすことは当り前だ。その匂いも、とくに変ったところはない。それなのに、美しいひとのものなるがゆえに、よい香りと感ずる、

だが、このガスの匂いをハナに感じたとき、かづひは、さながら、その婦人から無理矢理、固体を口に落されたような気もちを味わい、その名も知らぬ女性の生きた便器にされた心持でいる自分に気づいたのである。

(おくさま。その匂いを、どうぞ私めの口のなかへ……)

心のなかで、そうくりかえしながら、まだあたりにただよう、その女性の匂いにむせるのだった。

(42) クツをはかせる商売

かづひこの学校友達に、岩崎隆二という好漢がいる。

語学の才能を買われて今、東京ヒビヤの外相手の婦人クツ店で販売主任として厚遇さ

れている。

『外人は、大体あけっぱなしだよ』

と彼は云う。

あけっぱなしとは、性格がフランクという意味らしいが、クツを買いにくる婦人客の中には、文字通り下着なしの、あけっぱなしが多いと彼は云う。

高級品店なので、ブルジョアが多く、気位が高く、販売主任をアゴで使いまくる。

店へ入り、気に入ったクツを半ダースほどケースから出させて、高い腰かけヘドツカと座り、あのクツ、このクツと、はきかえ、はきかえ、気に入るまでクランクの店員たちの手をかりて、はいてみる。

『そんなとき、イヤでもあけっぱなしなのが判っちゃうんだよ』

彼は苦笑まじりに云う。

店で物色するだけでなく、自宅へ来てほしいという客もあり、そうしたお客は、特に上客なので種類をたくさんえらんでゆく。

『えらい目にあつたことがあつてね』

えらい目とは、いきなりベッドルームへ通され、ねころがった客の、目のまえにつき出された素足を抱えて、クツをはかせる。両足はきおえると、そのままムツクリ起上つて室内をあるき廻り、はき心地をためす。日本人なんかサルとしか思つてない、気位のたかい女性が、もと／＼サディズムの性格をムキ出しに、からかつて、露出癖を満足させようというのだから、日常お目にかかれぬ吾々にとつては、眼のさめるようにすばらしいエピソードにぶつかるのである。

それにつけても、世の中はよくしたものでMの人にはそれ向きの職業があるのだから楽しいものだ。

(43) 節ちゃん

かつて知り合つていた、節ちゃんという女の子。

かづひこが、手を合わさんばかりにたのむと、はずかしそうに、やわらかい落し紙に包んだ自分の固形物を、ソツと呉れたつけ。

『こんなもの、かづひこさん、何処がいいの。あたしはべつにかまわないけど、毒じやないの』

美しいマユを、よせ、苦笑まじりに、ズツシリ重い、そのものを、かづひこの掌のひらにほうり出すように渡すと、

『はずかしいから、あたしの前であけちやいやよ』

と云つて逃げていったつけ。

あれから三年。

ついこのあいだ偶然、国電の高田馬場駅で見かけた彼女は、すっかりからだを売る娼婦になり、荒れた生活をおもわせる肌のいろ。かづひこの顔をみるなり、

『どこへでもお供するわ』

と、からだを投げ出した。

云うことをきくかわりに、今スグ五千円ほしいと云う。

悪い男にあやつられてゐるらしい。

すっかり魅力を失つてゐる節ちゃんに、げんめつを感じたかづひこが、ちゆうちよしてゐると、更に耳もとへ口をよせ、こうささやいた。

『ネエ、おぼえていらつしやる？、あの味思ひ出してちょうだい』

このひとことに、かづひこは、ひきつけられた。五千円と引きかえに、彼女からのプレゼントをひと山貰い受け、久しぶりに、その味に酔つたことだった。昭和三十三年五月十九日夕方のこと。

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円(送共)

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左エ門と腰元、八、小紫と悪旗本、以上八場面。

『腰元女の吊責め』と題して

——鎖夏よもやま座談会——

牧

高 志文・画

出席者

及川善兵衛（書店主、59才）

佐藤 妙子（旧姓磯村—新婚主婦、23才）

水島道一郎（カメラ屋勤務、34才）

樫井 邦子（主婦、29才）

司 会

牧 高志

於 柳川亭

牧 どうも皆さん、お暑い処を有難う御座いました。今晚は御常連として紅二点の佐藤

さん、樫井さん——樫井さんは後でお見えになります、それに黒三点、計同好者五人……冷めたいビールをあふった処で思う存分、夏向きに放談して頂きましょうか。

磯村さん、いや佐藤さん、今日はまた細の薄物を召して一きわあでやかですね。それこそピンクの下着が透けて見えますよ。冗談は兎も角としまして、先般目出度くゴールインされたことを改めてこの席で御披露して、お祝いの言葉を——。

佐藤 まあ、ホホホ……

牧 笑う処ではありませんよ。新婚早々まだ半年にもならないんですから。そのうちに、よか話をうんと承りますよ。お覚悟の程を……（一同笑う）

さて、これからいろいろとお話を願う表題が少しばかり古めかしくて、お気に召さないと思いますが、昔から弱い者の代表者として一先ず腰元を挙げて見ただけで、要は女であればいい訳なんです。さしずめ映画や芝居が主になるでしょうが、こう云う点では庶民文芸の諸雑誌を売っておられる及川さん、皮切



りに話の緒口をお願い出来ませんか？
 及川 御指命と云うか、まあ歳の多い順で
 お先きに御かんべん願います。そうですね、
 「奇譚クラブ」などと云う専門雑誌は別格と
 して女の責め、とり分けて吊責めと云った情
 景を書く文士は大体限られてますね。銭形親
 分を操る胡堂さんだって案外お好きじやない
 んですか？ シュミューズ一枚の女を吊るす
 にしたって、今の憲法が許しませんから、ど
 うしても時代物——講談本になっちゃいます
 よ。

しかし、やっぱ
 り活字になる市販
 物である以上、リ
 アルには書けない
 でしょうね。性雑
 誌にいくら未成年
 者お断りと書いて
 も、親が連れて行
 けば子供が成人向
 の劇映画を観るの
 と同じで、性に悶
 えたら結構、未成
 年者がストリップ
 ーの赤い腰巻を盗
 み出して喜んでい
 る世の中なんです
 から……。

ですよ。確か神田の何んとか云う本屋から二、
 三回持込まれたことがあるんですが、マニア
 の材料にされただけで、お終いですよ。近頃
 は専らスナップ撮りです。

牧 演劇をですか？

水島 時間と金の余裕がつけば芝居を、手
 取り早い処でシネマなんです。

佐藤 映画と云えば、わたくし、この間統
 けて暇つぶしに主人と日本物を観たんですの
 よ。それもチャンバラ物ばかり……。場末の
 三流館で三本立五十円と云うお寒いもの。え
 え……と映画の題名は（とノートのメモを調
 らべる）ちゃんとメモしておくんのですのよ。
 感心ですよ。後々の参考のために……（一同
 笑う）今晚のテーマに合うものは「危し伊達
 六十二万石」と、それから「江戸群盗伝」そ
 れと「朱桜判官」位なもんでしょうか。

及川 仲々御熱心ですな、文学者夫婦らし
 い……（一同失笑する）

佐藤 だって女の私が率先して皆さんのお
 株を奪ったりしちやお困りでしょう。文献だ
 け御披露したまでなんですのよ。ウフフフ……

水島 丁度牧さんの挿絵がピタリですよ。

牧 僕のはいつもその場限りの座興ですか
 ら問題になりませんが、責めの極致美は女を
 吊り下げて折檻することでしょうね。少くとも
 坐ったままの平面感より、吊り下げた立体
 感の方が迫力がありますから……。で——佐

牧 どうも初鼻から色っぽい処をお出しに
 なって恐れ入りました。腰巻と吊責にあう女
 は何らかの関連がありそうですが、自由に発
 表出来る専門誌「奇譚クラブ」あたりは、ま
 ず以て高級誌の部類に入ると云っても御異存
 はないでしょう。終戦直後は、晴雨画伯も云
 われる通り描も杓子も女の責め写真が雑誌に
 載ったんですが、水島さん、あなたの御道楽
 の一端が作品として当時、頻繁に載ったんじ
 やないんですか？

水島 飛んでもない、載る処か断られたん

藤さん、映画の方はどうでした？

佐藤 スクリーンから洩れる女の悲鳴って云うんですか、苦しむ声と云いますか、あの独特な哀れな声が耳に残って……私、男見たいかしら？ 心の中は……ウフフフ

水島 どう致しまして……、男のわれわれが拝聴したって一瞬、堪まりませんよ。

ヘウヌ、誰に頼まれたか云え、云わぬか白状せいッ。云わぬと……えいッ、ビシヤリ、アッ、ウーン、これでもか、ビシヤリ、ヒエーウー。なんて真に迫ってますからね。あれは実の処、責められている御本人の声か、遠景だと泣き上手のスタンドイン女史の録音が判らんのですが、眼と声で訴ったえられちゃ、こっちが興奮しちゃいますからね……。

牧 新東宝の「朱桜判官」のポスターは極彩色で、緋縮緬の若杉嘉津子が吊られていたから新東宝の株は上るかな。くだらない筋だけれど、スチール写真は効いていましたっけ。

及川 この間も或る性雑誌社の臨時物が馬鹿に売れると思ったら、銀幕にあらわれたサデイズム名場面集がちゃんと仕組んである。丹念にスクラップすると消えてなくなる映画と違って、結構楽しめますよ。

水島 それなら一ついかがですか？ 僕のスナップ物は……（と風呂敷包みの中から黒表紙のアルバムを取り出す）同時録音説明付ですよ。その内、映画や芝居をムービーで撮っ

てテープで声をお聴かせします、アハハハッ……。

牧 これはみんな貴男が撮られたんですか？ 驚いたなあ——どうして撮るんです？

水島 訳やありませんよ。その代り、欲しい場面は勿論、逃がさないようにして最初の字幕から撮って行くんです。でないと、そばのお客さんから変だなんぞと怪しまれますからね。それと、さっき及川さんが云われた絵のスクラップより一寸スリルがあるようで……。

及川 結論は娛しめばいいんですよ。変だと云う奴が蔭でいたずらをやってますよ。ずっと前の話ですが、浅草の小屋で腰巻一枚のストリップパーの吊責め芝居を観た中年の紳士が、娘さんの袂を汚したなんて云うのはその部類ですよ。

佐藤 主人と映画を観ての帰り途、とうとうおねだりして西陣から矢絰を取り寄せましたのよ。裁っちゃったのを着て来ればよかった……。

牧 そりや是非拝見したいですなあ。序でに黄いろい縄ですか？

佐藤 アラ——そんな物……、その内、この絵のようなモデルになって……お描きになりたいでしょう？ こちらの鞭のような物で指している場面はどう云う処ですか？

牧 ツプトウシロウの僕の絵ですから、い

ちいち註訳が付かないと判らないでしょうがつまり映画の「危し伊達六十二万石」の可憐な腰元、北沢典子嬢——顔は梅幸に似ちやっただかな——が嵐寛の原田甲斐に折檻される。

映画じゃ家来がへ御家老さまが呼びびです……と云って北沢がハイと答えながら手紙をかくす処がありますね。それからあとが略されて、いきなり松の木に吊るされちゃ、折角のリアル監督、山田達雄、第一回作品は随分遠慮したことになる（ように思ったんで）原田甲斐の部屋に呼ばれて一応、詰問される処があつていいんじゃないですか？ しかし彼女は白状しないへこの女を縛って家来の一人が後手に縛った腰元は当然、庭先で折檻しなければならぬ。そこで、ロングから廊下伝いに足袋はだしのまま庭先に、せかれて曳き出されて来た。勿論怖ろしい折檻が待ちかまえているんだから素直に、ここまでは歩かないでしよう。肩や帯の所を突かれ突かれて哀れっぽく来た処を、ぐんとたたかれて松の下に立たされたから、雷から櫛が落ちる……。

へどうじゃ、この吊り縄を見る。もうすぐ、そなたの美しい身体が吊り下げられて痛い目に——と責役が云ったかどうか。これは僕が勝手に作った脚本になりますけどね……。

水島 同じ吊責めでも「朱桜」の若杉嘉津子の吊られた姿は天下一品、玄人女優の感じがしますね。フエースにも凄味があるし、あ

の重苦しい悲鳴、苦悶の声は鬼々迫るものがあつた。あとを曳いて、ローソクの焰をふるわせるあたり、時代劇の王様東映は負けですね。お蔭さまで僕の方は、フィルム代がかさんで悲鳴物ですよ。

佐藤 主人は伊達六十二万石の北沢の長襦袢は白っぽいし、朱桜の若杉が折角、長襦袢で吊り下げられたんなら、裾前からはみ出す赤い腰巻が何んとかあったらうに云ってました。事実、この水島さんのスナップ写真でも、そうなっていますね。

及川 いや、どう云う具合になったらいいのかな？ 江戸群盗伝の福田公子は、とうとう湯文字を出さなかったし、牧さんの絵は御自身がお好きなんだから、いつでも出せる。(一同失笑する)

水島 どうかすると、折目のついた腰巻が引伸して判るのは嫌やだなあ——。女優さんだって穿き慣れてない証拠ですよ。

牧 まあ、吊り下げられてクルクル身体が廻ったら、腰巻が見えるチャンスがある訳ですが、絵の下描の材料の一つ、水島さん、カメラのコツを皆さんの前でいかがですか？

水島 困りますね、僕の専売特許を狙われちゃ……。(一同笑う) 大いに資本が要りますよ。云うなればキヤノンかニコン級の長焦点レンズ付一〇五ミリ程度かな？ これで客席の一番後の壁にもたれて撮るんですが、背の

低い僕は天気の良い日でも高下駄で入るんです。もつとも客席の中央部に座って、座ったままで撮ってもかまいませんが引伸の際、一寸技術が要ります。大体、女の責めは蔵の中とか庭先きで画面が暗いのが相場で、レンズは一・八位でないと五〇分の一では切れない。25分の一で切ったら肝心の後手の処が流れちゃいますよ。それともう一つ、速写の効くカメラでないといと10秒間に10枚は撮れませんね。先んだって、これ(と新東宝の「サタン城の魔王」の印画を指して)をパチパチ撮って場内が明るくなった途端、隣の男が「御熱心ですなあ——と冷やかすんですよ。

「いや、漫画雑誌の材料に撮ってるんです」って咄嗟に胡摩かしたんですがね……。いや早やどうも——。

及川 案外、気がつかないんじゃないですか。シャッターの音より煎餅の音の方がうる

さいですよ。

牧 いや、どうも御苦心談、有難う御座いました。処で——話が吊り責めの女性を如何に我物にするかって、ついカメラの話になっちゃいまいたが、こうして責められたり斬られたりした女優が、一週間経って次の映画でピンピンして出る位、興冷めなことはないと思うんですが……それから撮影所の助監督に訊いた処によると、女をたたく時はそばに牛肉をぶら下げて同時録音するんだと云っ



てましたが、牛肉の音にすり換えられちゃ、水島さん、よく音をわきまえなくっちゃテープが泣きますぞ。(一同失笑)

水島 伊達騒動の北沢典子だって大写真の際は脚立(きようたつ)(踏台)をどうも使っているらしい。後手に縛った白布が胸を巻いてるはいいが、吊るために帯に掛けた白布は死んでいますから臭いと思ってました。ただ一秒間に20駒も飛ぶ映画フィルムを、客席からいちいち注目しませんでしたね。

佐藤 でも何か一つ、是が非でも売出さなけやならない女優さんは、少々痛くても進んで後手に縛られるんじゃないかしら？ あたしのお友達で端役なんですけど、カメラが二、三台あると本当に後手に縛られるんですって……。

ホラ、よくあるでしょ。一緒に鎖(くわ)ながれて役人に追われて歩く人が——。

及川 雑誌の挿絵はその点、ルーズだ。時々、本文と違ってる……。

水島 一言に云って、縛りマニアを購(か)うな映画は撮って貰いたくないですな。「サタン城の魔王」なんてひどいですよ。北沢の姫は、帯の下で縄を握ってるとしか見えませんよ。一番しやくに触るのは、カット、カットで掛けた縄の数が違う、本当なんです。何しろ、こっちは一本連続撮影で比較検討するんだから……。

牧 責め場はカラーがいいか、黒白がいいか、芝居だと嫌になしに色物になっちゃいますけど、この処日本映画も大型スコープ、カラーの流行なんですが、時代劇はどうしてもカラーでしょうね。

及川 例えばですよ。度々、下品な事ばかり申上げますけど、折檻される女が裾を乱して苦悶するあたり、緋縮緬の蹴出しが出ると出ないとは大分違うと思うんですよ。帯から下を解放して羞恥の腰巻が真赤に出て御覧なさい「明治天皇と日露大戦争」じゃないが、血が湧き立ちますよ。水島さん、カラー映画だと画面が明るいでしょ？

水島 明るいですね。ただ、そうするとスパーアンスコクロームを使わないと惜しいから、またまた資本がかさむんです。どっち道、ボーナスを注ぎ込まなくなっちゃ駄目ですな。(一同失笑)

佐藤 皆さん、存外女の着物にお詳しいんで困っちゃうわ。吊責にあった腰元のお腰で、そんなに魅力がありますかしら……？

水島 知ら、処の騒ぎじゃありませんよ。腰巻は僕等のパンツと変らんでしょうが女の脛の白さと腰巻の赤さでヤキモキするんです。

—— 樫井邦子、漸くにして到着——

牧 丁度いい。只今、樫井さんが来られました。樫井さん、今晚は一つ夏向きに云いたい放題、お喋りして暑さを蹴飛ばそうてんで、

目下論戦中なんです。早速で恐縮ですが、また腰巻が出ちゃいました。一寸お聴きになったでしょう？

樫井 どうも皆さん、遅く上りまして——ええ？ まあ、何んですの？ ホホホ……嫌やですねえ。この間もそんなお話が出ましたね。で、今日は吊責めの女ですって——少々古くさいんじゃないやありませんか。同じ吊るんでしたら、縫ぐるみでなしに裸でお吊るなさいよ。腰元だったら夜伽の身体検査が出来ますわよ。もっとも宵だから判んないと思って赤いのをしめて来ちゃった……あたしは別、別格稲荷大明神ですもの、で——どんなお話、今晚は？ お揃いで……。

牧 要するに、腰元なり女を吊責めしたらどうなるか、と云うことを中心に映画や芝居の話を出して頂いている処なんです。挿絵でも結構です。あなたがお見えにならないと終着駅に到かない。(一同大笑)

樫井 また私を悪者におさせになるんですよ。どの道、女魔王なんですものねえ——。女を吊責めなさるんなら情があっちゃ駄目。こんな(と吊られて折檻された女が降ろされる挿絵を指しながら)丁寧な紐の掛け方をするから眠むっちゃうんですよ。本当に折檻をする女を眠らせちゃ、味もそっけもなくなるじゃないませんか。カットと眼を開けさせて苦しむまなこを見ながら、折檻しなくっちゃ皆

さんが承知しない（一同大笑）いや、承知なさらないでしょう。牧さんは女に甘いから、こんな画をお描きになる——

牧 僕は本職じゃないんですよ。

樫井 そうそう……この間、観た映画は歳末の鮭見たいに、ぶらっと垂れ下ってしましたっけ。あんな女優さんはスターになれないわよ。本番が泣いちゃう……何故あたし、青竹の太い奴でたかかないのか不思議だわ。鞭位で女の背中やお尻をぶったって、三枚も四枚も着物を重ねてるんですもの、耐えないわよ。吊下げた女が生娘か上り立ての腰元だったらよろしく裾前を開らくこと。わたし見たいな主人持ちは、遊戯になっちゃう……遊戯がお嫌いだったら、思い切って荒縄で高手小手に縛上げて、一寸二寸と吊り上げて御覧なさい。鞭は裾をひらく道具で沢山、五、六尺上げたらヒョって泣くわよ。何故って、フフ……、でしよ。粋を効かせなさいよ。皆さんその道の権威の癖に……ホホホ……。

牧 いや、どうもお話がひどく色っぽくなっちゃいましたね。だから樫井さん、本会のためにわざと赤いのを締めていらしたんじゃないですか。

樫井 だって皆さん、落ちつく処は女の下着なんですよ。吊ろうと吊るまいと——。

牧 どうも飛んだ処に結論が落ちつきそうで申し訳ないんですが、今晚お話願った吊責

めにあう女も、今様浮世絵と思えば道義から脱ぎれないでしょうし、また一服のホルモン剤ともなることでしよう。時間もありませんから最後に皆さんが一つ、映画や舞台の監督になったら、どのような演出が効果があるかと云ったようなことを——どんなものでも結構です。例えば折檻場で改めて縛り直おすとか……。

水島 僕なら伊達六十二万石の北沢腰元を大スターにしてみせる自信があるなあ……。牧さんの脚本を更に補色して、つまり最初は腰元の矢絣のまま、次が長褌一枚にむく、最後に朱桜の若杉見たいな上半身を裸にして伊達巻なんか取っちゃう。

及川 私だったら責められる女優さん——芝居の女形は一寸苦手だが——を一カ月ばかり本場に檻禁して、座敷牢かなんか薄暗い処に縛っておいて、本番の時にみっちり責める。江戸川乱歩がローソクの灯で怪奇小説を書き上げたのと同じで……少々空想してみてるかな。

牧 女の側として佐藤さん、同性をどうなさいます？

佐藤 さあ——責められる女の姿態は、お二人のお考えで結構でしょうけど、本当の女の心理から申し上げますと、相手役に毛虫見たいなぞとするような男が効果があるんじゃないでしょうか？ 悪役中の悪役から折檻さ

れてみたい……。

樫井 みたいって……されたらどう？ 思い切り気が遠くなるまでたたかれるのよ。大丈夫、死にはしませんから……。失礼だけど、女ってものは両手を縛られると葉度胸がつくものよ。うそだと思ったら、あたしを縛って御覧なさい——。

牧 まあまあ……（一同大笑）そう興奮なさらずに——、これじゃ座談会を開くたび毎に、縄を持参しなくっちゃ……（全員失笑止まず）

水島 あなたを縛る役はいいでしょうが、あなたが監督だったらどうするか、と云う話なんです。お許しが出たら佐藤さんの矢絣を着て下さい。すぐにも縛って差上げます。青竹は及川さんのステッキで我慢して下さい。

牧 まあ、まあ、お二人ともお静かに……ここは御家老さまの庭先きじやないんですから——料亭の床の間じや、どうにもならんじやありませんか。だけど樫井さんも佐藤さんも御主人は幸福だなあ——、男役の皆さん、いかがです？ ワハハハ……。

（及川、水島両氏とも拍手止まず）

いや、今晚は色々有難う御座いました。いずれまた機会を改めて御案内申し上げますから、その節はどうぞ宜敷しく——ではこれを以て一先ず閉会と致します。

（編集・文責……牧）

魔^マ教^{キョウ}団^{ダン}N^{ナンバー}o8^{エイト}

(その六)

土 路

草

一

(一) 謀 略 追 求

新宿駅南口。甲州街道の陸橋下にある暗い谷間の一角、此処は東京のダーク・サイドの一つである。

軒が傾しいで、煤けた羽目板がずり下っているバラック。腐って、踏みつけられ、ぼろっと割れ落ちそうなドブ板。ぶっぶっとメタンガスの汚臭が漂っている泥水。道端に放り出してある猫の崩れかけた腐乱屍体。狭苦しくて深い谷底のように人の顔もさだかでない薄暗い街。あらゆる禁制品が流れこみ、売春

婦が徘徊し、犯罪者が群がる闇のタウンである。

名古屋健平は立止って見廻す。ずらりと並んでいる飲食店。だが表向は別として裏は淫売屋であることは云わずもがな、雑貨屋も駄菓子屋も勝手口から上れば、二階は薄いベニヤ板で仕切ったパン助ドヤである。

白粉も口紅もつけず、どろっとした濁った眼にむくんだ媚笑を浮べ、黄色い歯をむき出して、病毒に潰れたしわがれ声で、
「いいこい一個でいいよ」

と、しどけなく、しかしお世辞にも綺麗といえぬくろずんだ肌を押しつけてくる女。

健平は、ベ一の注射で静脈に青黒い痣の染みついたぶよぶよした腕を絡ませて擦り寄ってくる女の耳許に囁いた。

「ヒマラヤの紅子を知らないか？」

女は歪んだ笑いで、男の横顔をじろつと舐めながら

「警察の旦那かい？」

「こんな色男がかい？」

「ふん！」

女は鼻を鳴らして、男の足下にべつをく

れてから、ちらつと周囲に眼を配る。

「リヤンコの姐御に教えられてね」

健平は野暮ったく口を曲げた。

「新聞記者でもなさそうだね。あんたもやるんかい？」

女は胸の前で注射の真似をする。

「俺じゃないんだ」

健平は千円札を丸めて、そつと握らせる。

「あたいのドヤ(宿)はこっちさ」

女は、赤い提灯の下った飲酒店の蔭で凝視している浮浪者の眼を意識してか、聞えよがしに云って、雑貨屋と煙草屋に挟まれた狭い露路へ健平を引張りこむ。人一人、やつと通れる袋小路だ。

「あたいが云ったなんて密告はしないだろうね」

「気にするな、お前の名も知らねえよ」

「青線のアラジンに六時頃来る筈だよ」

「間違いないだろうなあ？」

「ふん、疑うんなら聞かなきゃ、いいじやないか」

女はふてくされて、煙草の煙を横へ流した。

「悪かったな」

「あんた！あたいを掴えたのが良かったんだよ。此辺じゃ、近頃、紅子のペーを買わないのはあたいがぐらいだもん。誰も命のつるを教えやしないわよ」

「有難う。どうだい、明日、土地の外で会わないか。お礼したいんだ」

健平は、崩れた口調の裏に、女の素直さを感じたのだ。

「よしなよ。それより、時間はたつぷりあるじやないか。色男、遊んでくれない？」

男の胸にしまだれかかって云う。

健平は喫い残りのピースの箱を女の懷へ突こんで、明るい通りへ出た。

ふうと青空を見上げて息を吐く。人間の最も醜い場面を見せつけられたように、やりきれなかったからだ。彼が横浜からの情報で、先週入港したT国船ウルルオ号の荷揚品の一部から新麻薬が発見され、大半は東京方面へ流れたとキヤッチして来たのだ。

新麻薬？ペロナール、ルミナール、パノドロン、ノクタール、スピパン、モルヒネ、ヘロイン、オイコタール、デイコデイツル、アヘンなど世界の麻薬市場を賑わしている麻酔薬とは違う、新しい麻痺剤である。

これを分析解明した学者の話によると、○・一グラムの微量の血液混入をもって、直ちに意識を混乱させ、羽化登仙の境地に達すると云う。

発見の端緒と云うのは、どうした手違いだったか、倉庫に荷積した内の一個が(それはゴルフ道具だった)他の荷と混同し、某商社に引渡され、偶然、その社長がゴルフマニ

ヤで、クラブを振廻している内に柄が折れ、中から麻薬が転がり出たと云う次第なのであった。だが、ウルルオ号は既に出港し、領海外にあるので何ともなし難く、荷受人は直ちに搜索され、注文主迄は解ったのだが、その住所はすでに藻抜けの殻であった。併し、その調査の中でふと名を覗かせたのが、ヒマラヤの紅子である。健平は麻薬取締官事務所を訪れ、麻薬違反者の国籍別、男女別、学歴職業別、生活状況別、住居別、麻薬種類別、中毒別、違反区分者別、年令別などと詳細にとつてある統計を調べてみて、地域的に分類した処、新宿地区に最近、新しい傾向が生じていることを発見したのだ。そして、情報と照合してヒマラヤの紅子の出現を予期したのだ。

医療機関は奇病の蔓延と共に急激に殖えて来た麻薬中毒患者の数に愕然としていた。どうしてなのかわかり、中毒患者自身が意識しない患者になつていくことが屢々なのである。

そして糺明して判ったことは数軒のパチンコ屋の景品煙草に微量の麻薬が含まれていたこと。ビタミン強化と称される舐め味噌の中からも発見されたことなどであった。

警視庁の予備員は総動員された。勿論、麻薬Gメンを先頭に立てて……。併し、現場を押えなければならぬ捜査方法では仲々実績が上らず、又、逮捕しても拷問が禁じられて



いる人権擁護の取扱いでは被疑者は一人に留まって、芋蔓的に組織やルートを掴むというわけにはいかず、それに、最高罰則は十年の懲役、五十万円の罰金だが、実際は二、三年で済む刑罰では麻薬売買は募る一方であった。人心の腐敗に迫車をかけている状況と云っていいだろう。

健平は歯痒ゆい程の焦燥を覚えていた。日本人の身体が蝕まれてゆく。やがて、総ての日本人が麻痺されてしまうかもしれない。現に、黒霊教と何等かの連がりがあるらしい政党、衆人党が誕生し、盛んに保守政府を攻撃している。

衆人党はそのスローガンで、紐つき政治からの完全独立と国情の安定を謳い、議会闘争を目論んで、活潑な運動を展開している。

一方、国民大衆に阿諛するような言辭を並べ、個々の生活機微に迄立入って、人心を収攬している。時折、党員の口から洩れる言葉が黒霊教を日蓮宗の如く、鎌倉時代の国情と現代の世情を比較同視して、救国の宗教に擬えるのだ。黒霊教に帰依した者は不思議と奇病から救われている所為もあり、人々はその宗旨教儀に耳を傾け、又衆人党の党方針にも共鳴するようになった。

信仰に便乗した党勢の拡大、彼等は互につかず、はなれず、巧みに党と宗教を操つり大衆を味方に引込んでゆくのだった。

健平には彼等のやり口が見え透っていた。政權を獲得する迄の巧言令色なのだ。内閣調査室へ入ってくる情報を総合しても、世情不安は彼等が醸し出している節がみえる。手段方法を選ばず国民の激昂を煽り立て、その責任を現政府になすりつける。その隙に乗じて政權をかちとろうとしているのだが、しかとした確証はない。おそらく、彼等が政權の座に坐った時は、ナチスのように全体主義的な強権と弾圧を持って国民に望むであろう。彼等に乗じさせてはならない。事前に犯罪を摘発し、叩き潰すことだ。

内調一の敏腕家はあせっていた。

それにつけ津田の報告が待たれてならなかった。津田の手腕に期待をかけると共に、狙った穴が外れない自信もあった。

それに又、手配の遅れてしまった城美加子と比奈地路子のこと胸が痛んだ。

津田に云い置かれて、早速美加子を訪ね、路子宅を訪れてみた。が、二人共、家出の書面を残して行方不明になっていた。

打明けることが一つある。

比奈地路子。その名は健平にとって忘れ得ぬ名であったことだ。女学生だった路子と毎日のように通学電車に乗合せ、その美貌に心惹かれた一人であった。偶然のきっかけから話しあうようになり、令嬢の名と素性を知った。彼は激しい想いを心に燃した。だが、自分の貧しい生家を顧り、ひそかに秘めて胸の裏に疊んだ。

これは彼だけのことだ。路子は知らない。清らかな乙女は、只、町で知り合った好感の持てる青年ぐらいいにしか思っていなかったのだ。健平は彼女の行方不明を知った時、烈々たる闘魂を燃やした。よし、必ずその所在を突きとめてみせると……。

(二) 狙われた観客達

青線のアラジン。——それは花園神社の近くにある、ちよっとしたキヤバレーである。

健平はボックスに腰を据えて、シンフイズを口に運んでいた。

喧燥なドラムが終ると、トランペットが立上って天井を向いた。キューと腹の窪むような音が飛び出ると黄色いラッパがくるくると輪を描いた。ピアノが躍るように鳴り出す。ヌードダンサーの銀紙のバタフライがきらきらと床を這って、白い身が撓った。

健平の眼がぎろつと光る。

ストリップバーの背後から、きっちり真紅の支那服に身を包んだ美人がフロアを通り過ぎたからだ。

「ほう、ワンダフル・ボディじゃないか？」
聞き咎めて寄り添っていた女給が、健平の視線を辿る。

「あら、駄目よ。眼をつけるのに事欠いて、あの女に色眼を使うとはね。駄目々々、あなたなんか足下にも寄せつけないから……」

「ほう、気高くっていらしやるんだな」

「そうよ、紅子さんはブルジョアで凄腕で此処のマスターだって頭が上がるんだのよ」

「併し、女心ってものは微妙なものでね。毎日来て口説けば、こんなやつがれにも靡かんでもないだろう」

「お気の毒様。紅子さんは此処の人じゃないから、気が向かなけりや来ないわよ。待ち呆ける顔が見たいものね」

「こらっ！」

とおどけて拳を振上げてから、思い入れよろしく

「じゃ、内緒で教えないかな、時をよ。夜這いするからさ」

「ふふふふ、残念ながら私は知らないの。それより、この代用品でどう？」

と女は自分の顔を指す。

「そのお面じゃなあ？」

「まあ！にくらしい。でも、ボディは誰でも同じことよ」

健平は酔った素振りて話を引出してみたがそれ以上のものは得られそうもなかった。

紅子は奥まったボックスに近付くとにこやかに会釈した。

相棒は誰だろう？照明が暗い為、はっきり見えない。健平はふらりと立上った。

「おい、踊ろう！」

女の手を取ってフロアによるけ出る。

曲はブルースに変わって、イブニングドレスの歌手は感情を籠めて胸を抱いている。

健平は、ゆるやかに女の躰をリードしながら、すうっと紅子の前を通り過ぎて、ターンした。相手の男の顔が視野に入った。

何処かで見たことのある顔だ。誰だったろうか？

健平は思い出せなかった。二人は何やら談笑している。

健平は踏み違えた振りをして、いきなり、

パートナーの靴を踏んだ。

「いたっ！」

女は眉を顰めて跼まった。紅子と男が此方を向いた。

内調員の、胸の飾りと見せかけた隠しカメラのレンズが音もなく、二人の容貌を映し撮っていた。

誰だったろう？健平は女給に詫びながら自分のボックスに戻ってからも考えていた。

紅子のボックスに又一人客が殖えた。

精悍な面魂の男だ。二人はその男を待っていたらしく連れ立って、楽団の傍を横切る。

あっ！そうだ！健平は彼の歩き方で、記憶の画が現像された。

あの男は、T国大使館書記官タツマだ。

健平が横浜情報で、ウルルオ号のことを問い糺しに行った時、面接した相手だ。

すると麻薬はやはり？彼は周章で三人の後を追った。

タツマと勝谷と紅子は、いや、黒山谷子

と云い直そう。紅子は麻薬を取扱うときの仮の名だから――。三人はネオンの瞬きに明滅する都電の通りを横切って、盛り場の小劇場、最近開場されたチャーム映画劇場へ姿を消す。健平は身分表示の手帳を見せて、続いて入り込む。

館内は最終回が映り始めたばかりなので、勤め帰りの観客達で身動きの出来ぬくらい混み合っていた。

健平は三人を探し求めて、まだ暗さに慣れぬ眼をきよろつかせ、ぐいぐいと人の波の中に割りこんで行った。だが、相手の姿は人垣に隠れているのか一向に発見出来なかった。

健平はここで重要な齟齬をしていたのだ。その一つはモギリの女に身分証を見せたこと、もう一つは三人を単なる観客と判断していたことがそれだ。

獣人達はその時、舞台の袖裏にいたのだ。所謂、彼等はチャーム映画劇場の影の実権者であったのだ。

身分証を見せたのは、入場券を買っている間に見失うことを恐れた措置なのだが、この為には相手はいち早く尾行されていることを知ってしまったのだ。

緞帳に空いている小さな穴から、勝谷と谷子は観客達の顔を覗いて

「前から三番目の右から四番目がいいじやないか」

「それより、オの列の十四番席がいいわよ」と何も知らず、スクリーンに熱中している女性の品定めをやっている。

「タツマさん、気に入ったのあったら指名して下さい。貴方のベットに差上げますから……」

書記官は怪訝そうに

「この映画を見ている女の一人を攫おうというのですか？」

「一人と云わず、二匹でも三匹でも、貴方のお気に入った牝がおりましたら、今夜中に檻に入れて飼わせて差しあげますよ」

彼等の組織の容易でないことは知ったので多少のことには動じなくなっている一等書記官も、流石にこの申出には驚いた。

「どうしてそんなことが出来るのです？」

「その説明はちよつと困りますが、兎に角、座席に坐っている牝達は、我々の掌中にあるのですよ」

勝谷は谷子と顔を見合せて、にやりとしながら言葉を濁した。

彼等にとつてタツマは、何と云つても外来者であり、その職務を利用するだけの存在なのだから、この大掛りな誘拐装置は洩らすことはしなかった。

が、読者の為に一応、その方法を述べておこう。

全客席のモケットに覆われたシート内部に、薬液を含んだ注射針が仕掛けられているのだ。覗き穴の脇のマイクロホンで、席番号を云うと自家発電室に設けられたその番号のスイッチ・ボタンが押される。すると指示席の針が突き上って、坐っている女の臀部を刺し、自動的に薬液を皮下に注入することができる。瞬時のことであり、細い針でもあるのだから、映画に気をとられている観客は椅子

内のスプリングの毀れぐらいにしか感じない。が、暫くすると吐気と悪感に襲われ、猛烈な尿意に坐っておれなくなる。女は周章で席を立ち、トイレに駆けこむ結果になる。

そして、そのトイレには、ドアの反対側に隠し扉があり、悪感に呻いている隙を、麻醉薬で捕えられ、拐わかされてしまうのだ。

女学生もオフィスガールもショップガールも、スクリーンに展開されている愛の囁きにそぞろ気を飛ばしている。甘く、せつない想いに胸を締めつけられて画面に夢中だ。

二枚目俳優の何と云う凛々しさ、ヒロインのなんと素敵なお衣装、ロマンチックを追うのが女の通性とは云いながら、オフィスガールは熱い恋のストーリーに、彼と彼女の華やかな装いに、胸は沸騰している。

あんな衣裳を着て、あんな恋をしてみたい——が、そのうっとりしている顔や胸に冷酷な眼が注がれていることを彼女たちは夢にも知らない。

数時間後には絢爛たるドレスどころか、今纏っているシックなスーツもレースの肌着を赤錆びた鉄鎖で装わねばならない。めったに空気に触れなかった脆弱な柔膚に、痛烈な響きを発して、黒い筈がまといつくことである。

ロマンチックな恋などはうたかたと消え去って、呻き、跳き、悶えながら畜類の有体

研鑽し、畜生の姿を動作するであろうし、無為だと思っていた日常を渴慾に似た思いで追慕するところであろう。無垢な純情な女達。

家には柔かい絹の褥が待っているであろう淡き楽しみを映画に求めた女達。

だが、その前途は、この映画館の闇のように暗いのだ。

三 鼠捕り競技

ひゆうと眼前を、鞭が空気を切り裂いて走った。美加子の虚脱した双眸は、うっすらとそれを追った。

自分を家畜体として承認してしまった彼女は痴呆のように脳髓の動きを止めていた。茫と暮のかかった思考の中で、自棄の荒みが募り、魂が喪失して、降りしきる雨を通して眺めるように、視界



がぼやけて、何の判断もつかなかった。

只、鼓膜に伝わる怒声と鞭音、時折、背をこづかれる痛感に追われて牀をまるぶように動かしているに過ぎなかった。

鞭が再び眼前をよぎり、前に坐っていた女畜が真白な純肌を震わして床を蹠った。

助手が部屋のそちこちに掘られていた直径五メートル、深さ一メートルくらいの丸い穴の一つに、豊麗な肉体を蹴落す。

滑らかな膝頭がコンクリート底で鈍い肉の音を発て、女は呻いて蹲んだ儘、歯を喰いしばった。

彼女は桜みゆき、クインレコード専属のジャンソン歌手である。声もさることながら、あどけない美貌、秀れた肢体とあいまって、テレビ、映画に、毎日に脚光を浴びてきた人気歌手である。

ライトに照し出されていても、いつもきつちり衣裳に覆われていた肌であり稜線である。肌の内奥は女の弟子にさえ秘していた慎み深い女性であったのだ。

それが今、蹴転がされて、不様な素肌の曲線を描く、それもジャンソンならぬ苦悶の旋律を咽喉で奏でながら……

穴のステージで迫真の演技が展開されようとしているのだ。彼女の肉体をかいま見たいと願うファンに、この様を觀賞させたら何と評するであろうか、或は欣喜雀躍するかもしれ

れない。

ファンと云えば、みゆきの取巻きは彼女の一顰一笑に氣を使っていた。

衣裳が皺になっていたり、靴が汚れていたりしたら、ぶいと膨れてしまうのだ。芸術家を自負し、温室育ちの彼女は事実繊細な、そして潔癖な神経の所有者でもあったのだ。

だから、彼女の氣嫌を損ねまいとマネージヤー始め女中に至る迄、痒い処へ手の届くような扱いをした。

併し、今はどうであろうか？

スケージュールを組んでくれるマネジャーもない。化粧直しをしてくれる女中もない。囲りが氣を使ってくれる処か、自分が懸命に助手達の顔色を読まなければならぬのだ。烈苦のスケージュールを、脂汗の化粧を強制されて果しなく激闘の踊りを苦悶の唄声を披露せねばならないのだ。素肌をじかに泥靴で踏みつけられて、抗議はおろか、自分の手で拭うことすら不可能なのだ。膝関節が腫れ上っていても、掌は腰の上で留って、撫でさずすることも許されない。足を一步踏み出すにしても自分の意志ではなく、他人の意志で勝手に動かされるのだ。

みゆきは胸の底で啾々と泣き、涙の波頭を臉に覗かせていた。

ばらばら、数匹の二十日鼠が投げこまれた。「きやつ」

思わず叫んで、みゆきは隅へ退^スさった。白い小さな動物がちよろちよろと艶治な腿の上を駆け抜けたからだ。

だが、驚きはまだ早い。続いて下った男の命令が恐怖を最高潮に盛上げた。

「いいか、お前に十五分の時間をやる。その間に鼠を全部、この箱に收容するのだ。お前の手は後に廻っているから、鼠を捕らえるのは口だけだ。但し、可愛い鼠に齒を当ててはならないぞ、後で調べて傷がついていたらお前は傷害罪、死んでいたら殺人罪、いや殺畜罪として処刑する。人が人に対して行った罪は罰される。だから、家畜が家畜に対してなされた犯罪は罰されねばならない。意味は解ったろうな。お前もこの鼠も俺達に所有された家畜だ。お前と鼠は同じ畜類なんだ。同類を傷け、或は殺すと云うことは完全な犯罪として成立する。野獣ならいざしらず、俺達の監督下では家畜間の秩序を保つ為にそんな無規律は絶対に許さない、解ったな！」

これが正当と云えるだろうか？万物の霊長が鼠を傷けて罪に問われる。反面、教徒と称される人間が同じ姿形を持った生身の肌肉を傷け殺害しても、家畜の屠殺と云うことで罪にならない。何という秩序であろうか？彼等の行為は神を恐れぬ悪魔の処業と云うべきだろう。

みゆきも美加子も、その言に呆然と瞳の動

きを停止したが、やがて唇から血の色を消し、わなわなと絶身を戦慄させた。

だが、魔教徒の言葉は続く。

「時間内に遂行出来なかったら、電気鞭を加えた上、繰返して実施させる。幾度でも、出来る迄だぞ。これはお前の敏捷度のテストだ。それに口の使用法を覚えさせる訓練にもなるからな」

乙女は崩れそうになる全身を漸く支えていた。屈辱と畏怖で、心は火と氷の葛藤をしていたのだ。

彼等のもっと大きな目的は女達の人間剝奪にあった。

鼠の同類として取扱ひ、手の機能を断つて口で用を足させ、人間の言葉を封ずることは、自分から人間以下の動物であると認識させる一つの手段ではないだろうか？

例えば、古代から各宗教のとっている布教方法は、教儀の深奥を説いて理解させるのは後廻しにして、先ず、形から入信させる方法をとっている。

壮大な伽藍、眩しい本尊、豪華な緋の衣を纏った僧侶、鉦、太鼓等と唱和される崇厳な儀式。——人々は圧迫され、神々しさを感じ頭を垂れ、掌を合わせる。

何となく有難くなるのだ。そして、単純な衆生済度が繰返し繰返し僧の口から耳に入ってくる人々は信徒と変わってくるのだ。

彼等も又、悪魔を奉ずるとは云っても宗教の民である。彼等の人間剝奪用式は先ず形から——囚女をそれに相応しい形にして納得を強いるのだ。

魔教徒の電気鞭が高々と掲げられる。

「そらっ！」

くるくると蛇のように長くくねって、牀を練めている純白な家畜に絡みつく、と同時にストップ・ウォッチがかちつと鳴った。

「わあっ！」

歌手は想像もしなかった激痛に、未だ且つて発声したことのない獣的な悲鳴を轟かせてきりきりと躍り立った。

続いて、又びしっ！

新畜は強烈な魂切りを声帯で切つて跳躍した。もう気味悪さも屈辱も頭脳から吹っこんで凄いスピードで獲物に突進した。

小さな同類は、ぱつと四散して右往左往と走り廻る。穴の縁には鼠返しがついていて、白い毛の動物は外へ逃げ出ることが出来ない。やたらに隅から隅へと素早く駆け通る。

歌手家畜は観客を感激させた脚線を折り、ふっくりした膝で穴底を這い、麗しの唄声を聴かせた唇をマイクならぬ、石肌のコンクリート底に触れんばかりに低く動き廻る。あのフアンを魅惑したコケトリな瞳は爛々と眩かれ、甘く、ハミングした鼻は息を詰めて、小さな四つ足を狙う。

正に獲物に跳びかかるとする猫の姿だ。

物を掴むには鋭敏な機能をもつ二つの手があるのだ。それも手入れされ、磨かれた柔かく嬌やかな掌が……。それなのに美食しか味わなかった可愛い口で不潔な細菌を媒介する小鼠を捕えろと云うのだ。走るには、靴皮に包まれていて薄く手煽やか表皮ではあるが立派に駆けられる二つの足裏があるのだ、それなのに凸凹のある石畳を雅趣ある膝を擦り剥いて歩かなければならない。

だが彼女は歎いている暇はないのだ。

この突立った臀部、コンクリートで赤剥けている乳房。世にあれば盗見さえ出来ない高嶺のものなのだ。それが、此処では踏みつけられ、蹴飛ばされて鼠と同様の価値しか認められない。その気色の悪い小獣が、さつと顔の下を通り抜けて乳首に突当る。

「ひやっ」

と虫酸の唾を呑みこんで、周章で、口を胸の下に繰入れる。が、三十六計にたけている鼠のほうが早かった。支える腕のないことを失念していた艶体は、もんどり打って宙返った。

「なんだ、そのさまは、愚図！」

びしっ！鞭が降って来た。

「わあっ！」

新畜は臍腑からの響きを噴出させ、びりびりと痛苦の痙攣を肌で搏つて、一途に鼠を追

った。

美加子にしても、教徒の畜類法規の説明とこの鞭で、虚脱状態は吹き飛ばされた。

美しく知性を煌めかせた瞳を獸光を含んだ皿のようにして、同類を睨んでいた。

頭には鼠しかなかった。

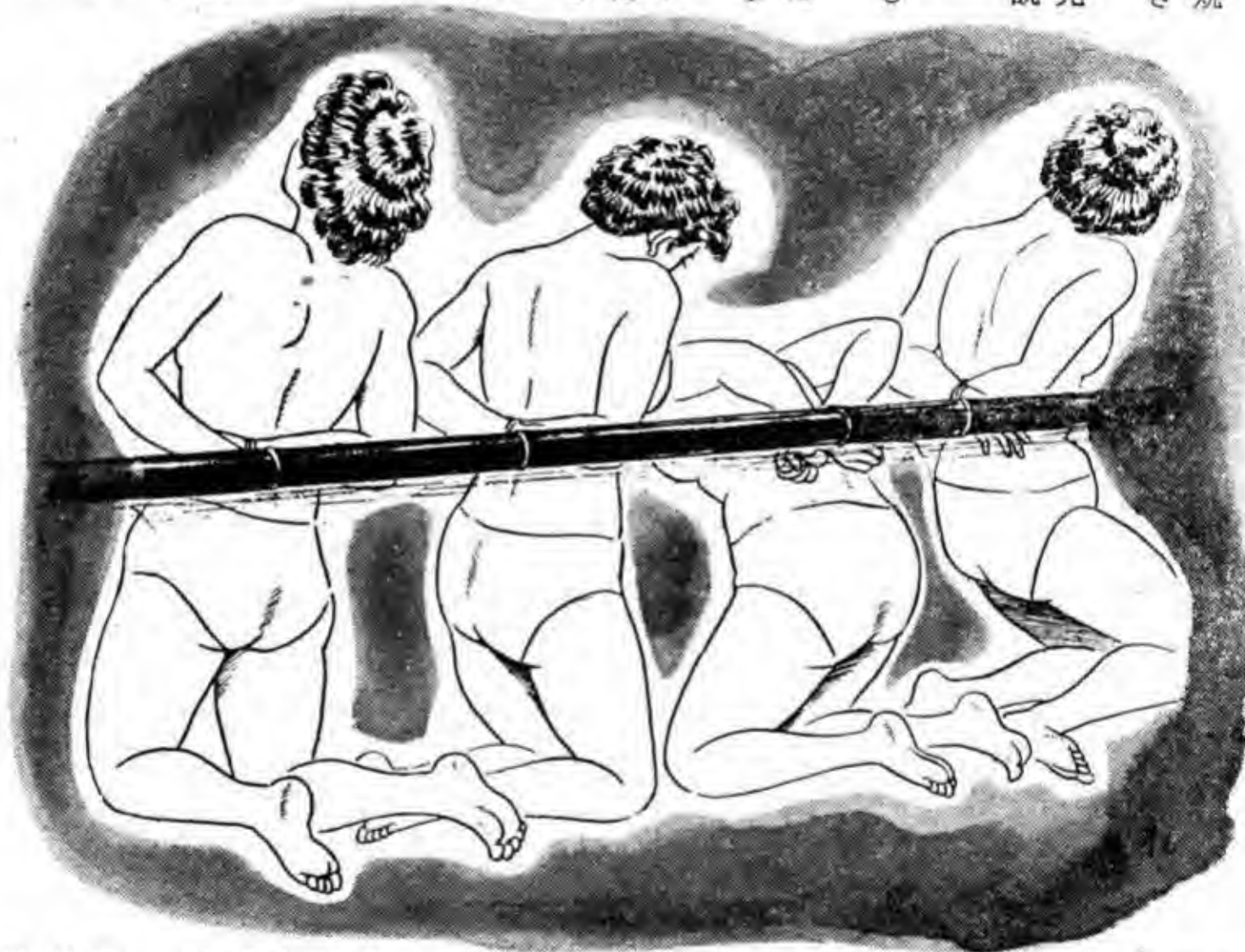
これを捕えるのだ、早く、寸秒も早く。

勢いこんで身を躲され、唇をしたたか床底にぶっつけ、織胴を拗じり再三呻いていた。

正に、ヌード・ロカビリー入神の舞台面である。だが、観客の魔教徒は冷笑を口辺に湛えながら、野次を飛ばし、近寄って鞭の演出をする。美女はのたうって、絶苦の演技を表現してゆく。

これをラジオ帝都の職員が見たら録音すると云うだろうか？アルバイト学生達が見たら、騎士を気取るだろうか？

乱暴な口を利いて活潑に仕事に立向っていた才女、明い社交とデリケートなビジネスで常に仕事をリードしていた女性、と云っても明朗で情味があり親しめた美人。それが縁の



下を走り廻る猫同様、眩しい裸身で鼠を求めて、反転を反復している。四足動物として、獲物を食む敏捷度を試されている。

津田慶介が、これを見たら、何と思うだろうか？

だが、美加子の脳裡には、ラジオ帝都のスタジオも津田の面影も宿っていない。只鼠だけが、白い小さな姿だけが折重って映像され、精魂こめて腿と眼の筋肉を緊張させているのだ。執念の虜となって……。

麗美な象牙色の肌に汗が吹き出ている。ふさふさした黒髪が乱れて頬にへばりついている。豊かな胸は激しく弾み、息を殺して低身しているのだ。

小獣が顔脇を通り過ぎる。常務のお嬢さんは、そろっと膝を曳き、動静を伺うとみる間に、気味悪さを押えて一気に飛びかかった。瞬間、大きな唇が開けられる。ぱくっ、鯉が餌を呑むように鼠は見事に美貌の口に納った。

只、凶夢に迷っているように一散に美加子は膝足で収容箱に向う、鼠が歯茎を蹴ったり、舌を嚙ったり、口の中で必死に暴れている。気色の

悪さと怖さで、彼女の胸は早鐘を打って、吐き上げそうにむかいついてくる。ぞくぞく悪感に眼を瞑って無意識に呼吸を詰め上顎で押えつけた。鼠はちゆと苦しげに鳴いた。

中国で、蜜養で育てた小鼠を生きた儘、食べる料理があるそうだが、日本で成長した女達にとって、口中に食むことは恐らく、これが始めてであろう。

美加子にしても桜みゆきにしても奢った食事しか採らなかつた豊かに恵まれた美女達である。唇を合わせることにすらしなかつた清純無垢な処女達である。芳わしい香気を息づいている若葉のような乙女達である。

それが白裸の畜類として、味覚及び口内触覚迄も猫並の動物テストを受けているのだ。羞恥や屈辱を鞭で弾きとばされた新畜達は諸々と、いや、思考を痛苦の炎で蒸発させ、制限を受けていない僅かな筋肉の機能に全力を注ぎ、獅子奮迅の努力を傾中しているのだ。

そして、傍の者と面白そうに笑いを交しながら適当に鞭を揮い、異相の美を隅なく描出させて、魔教徒はかつぱれ踊を見るように楽しんでいた。

四 失格者の狂宴

美加子の必死の努力に拘らず、ゲームは鼠を一匹だけ啜え残して時間が来てしまった。

美加子だけではない。猫代りにされた八匹の牝の内七匹迄が失格したのだ。

七匹は横一列に膝立たされて繋留された。細長い一条の綱が牝達の背後に差し渡される。

「約束通り、電流を通してやる。よく味わうんだぞ」

合図が降りた。綱の帯は同時に、華やかな汗みづくの背肌に着する。

「ぎやあ！」

十人並、否、それ以上だろう。美しい容姿を持つ花咲く年頃の娘達は、一齊に絶叫を上げる。動物的な、生れて以来、咽喉を出たことのない痛苦の絶叫を壁にぶちあてる。

云い換えれば、華美な肉魂の絢爛たる悲叫の合唱だ。

これは一種云うに云えぬ壮観な見物である。類いなき美の造化物、こよない弾力の皮膚に覆われ、暖く、生々とした血潮を流している肉体が一齊にのぞけり、髪をふり乱し、脂汗を滲ませ、涙滴を落して、苦悶の叫喚を迸出させるのだ。世間に、その美貌を羨望され、肢体を熱望され、幸せな前途を約束された筈の女性達である。三回、四回……六回。

鋼条は断続して背肌を吸いついた。

その度に空気を引き裂いて獣叫は舒し、白い群裸がぴりりと震えて、跳いた。固定されている身では所詮、襲撃から逃れる術はな

い。七匹は一樣に胸を反らし、同時にばかりと胸を伏せる。顔一杯に吹き出た汗は、顎から可細い咽喉を通り、ふくよかな二つの胸の膨らみの間を下って、床を湿らす。

美々しい群像が、一齊に揃って、筋肉を張り、そして緊め、無残な苦悶を現出する。圧巻である。ねめつけている男達の眼の中に妖しい光りが走った。

絶叫が薄れ、それぞれの精魂が枯渇してく。——綱の接触が歇んだ。

家畜達は一致して、がっくりと上体を倒す。背後で定着されているので床にのめり伏しはしないが、黒髪はぼらっと精気を失って腿に垂れ下る。……肩や胸や脇腹は、其処たけが別の生物のように生々しい喘ぎを機能全部で呼吸していた。

美加子は、ぐいと頭を掴まれて顔を起される。艶やかな髪が、可愛い耳朶の後へずり下った。

ラジオ帝都の美女は才気も潑刺もすっかり失って、困憊した瞳に怯えと哀願を湛えておどおどと見上げる。

形よい紅唇は色褪せて、貪慾に空気を吸いこんでいる。

「あ、あ」

タツマだった。傍に勝谷と谷子もいる。飼主の出現に家畜ははっとする。命令を履行出来なかつた罰として、加えられるかも知れ

ない責の宴を予想して狂気に近い恐怖が逆巻いた。恥も外聞もなかった。許して下さいと口の利けぬ女は只管、表情でみすばらしく合掌して、臉を潤ませた。卑屈の芽生えた。捕えられて一週間、彼女の心に疲労困憊した肉体が作用を始めたのだ。

「この間、ちよつと鞭痕をつけてしまいましたかね」

勝谷はそんな表情など眼もくれず、まるで机が卓上を傷けたように美畜の背や臀部に残っている条痕を示して云った。勿論、調教期間中の諒解は得てあるのだが……

「しようがない奴だな、何故、管理の方の云われることを利かないのだ」

もうすっかり所有者気取りで、書記官は豊頬に軽い平手打をくれた。

「それに敏捷度試験も不合格だったんだって？」

佳畜は弱々しい瞳で頷きと許しを願った。

飼主は紳士面を捨て去って、傍若無人に白桃の腿を踏み蹴った。そして苦痛に皺む美貌を觀賞した。此処にあるものは、あの才智溢れる高踏な女ではなく、俺の一挙手、一投足に佳姿を固張らせながら怯えている一匹の家畜に過ぎない。此奴の撓やかな腕もすりりとした脚も、俺の所有なのだ。よしんば、斬りとっても、何の苦情も出ない俺の飼畜なのだ。

タツーマの心裡に、美加子をすっかり家畜視した想念が生じていた。

飼主はネクタイピンで、ぶりぶりと張りきった乳房を刺し貫いた。

「あっ！」

家畜は唇を噛んで、低く呻きを洩らした。

「手が汚れますよ」

勝谷が注意した。女畜の肌は、苦悶の濃度を含んだ汗で、じとじと濡れていたからだ。タツーマは、べとついた手を美加子の髪で、じとじと拭いた。

前は、その髪を匂やかなものとして、鼻感覚だけで求めていたのに、今は手拭代りにする。それも柔肌の香気を含んだ分泌物を、さも汚染されたものが附着したように幾度も拭う。

併し、彼女はまだ知らないが、その黒髪が丈なす程のロングヘアになった時、ばつさりと截ちきられて、マットに編まれ、飼主の靴拭きに提供されることになっているのだ。

だが、その頃は既にそれを屈辱と感じなくなり、返って自分の身の一部を捧げ得たことに光榮をさえ覚えるようになっていくかもしれない。

「タツーマさん！、理事がお会いしたいそうです……」

扉から来た使いが知らせた。案内されてタツーマが去ると、七匹の美麗な牝猫は、又、

疲労しきった軀を鼠取り競技の穴に放りこまれた。

(五) 鮮美の驚愕

「あっ！」

比奈地路子は軀をくねらせた。

身体検査をされると云うので、バラをアブリケしてある、しやれたジャケットを脱ぎ、胸元をタックした清楚なブラウスのスナップを外し、ハンドステッチしたフレアースカーートのホックをとった。

円い肩と大理石のように白く滑らかな腕を鮮やかに剥き出したスリッパ姿で、医者への椅子に腰を下すと、背後から若い男が、いきなり、吊紐を引き下げ、ブラジャーのゴムを飛ばしてしまったからだ。

「失礼なことをなさないで！」

はつと本能的に両手が胸を抱えると赧くなりながら、それだけ云った。

若い男は無言だった。併し、案外気が強い人だなと云うような顔付を見せてから、ふふんと鼻で笑った。

医師はじろつと冷い視線を注いで、黙って聴診器をつきつけた。

何か、のしかかるような圧迫に、麗しい乙女は瞳を伏せる。悲しい諦めが胸底を吹いて恥しげに掌の覆いをとった。

ふくよかな、そして清らかな乳房である。



れ

こんもりと弾む膨らみに桃色の乳暈が優美な趣きを添えていた。

黒い医療器が、びたっと押しつけられる。

「息を吸いこんで……」

医者は事務的に云った。路子は背後に光っている若い男の眼を肌に伝えながら悲しみを胸一杯に膨らませる。

医師の冷い手が胸壁を叩く。終って、注射針が真白な皮膚の下に埋まっている静脈に刺さる。みるみるガラ

スポンプの中に理智と聰明を含んだ、匂い立つ青春の血潮が吸いとられてゆく。血液型、血成分、血沈等の検査の為だ。

身長、体重、胸囲其の他。そして、レントゲン検査を済ませて、カーテンのある台上に導かれる。乙女は唇を噛んだ。ぱちっと足首に何か嵌められた。何かしら？ 遮られた幕の向うを隙見しようとした時、さっとカーテンが開いて医者ならぬジャパンパー姿の若者が二人両脇に入り入って来た。

「あらっ！」

驚天して肩を倒し、周章てて双乳を隠そうとする手を左右から掴まれて、強引に後へ捻りあげられる。

「いた！何をなさるの！」

乙女は突如襲った暴力に、動揺して跪いた。が、若者達は、せせら笑いに口許を歪めながら、純良に張った腰の上へ押しつけ、潰んばかりに固く合せて留めた。

「いやっ、いやっ！」

蝶よ花よで育った令嬢は受けたことのない暴虐に、白眉の肩を鳥の羽搏きのように揉んだ。併し一人の若者は、嘲弄を消さぬ眼を、艶々しい香髪に移すと、筋張った手に掴め、乱暴に、頭部を台外へ引摺り出す。

足を留められている優雅な佳体は鉄寝台に、料理される鰻のように長くびくついて伸びた。そして、細美な咽喉をのぞけらせて、

伶俐な智慧を生む頭脳を空間に吊り下げる。

「あ、あっ！」

頭髮を更に後方へ曳かれて、疾風のような恐怖で呻いた唇に片方の男は球の金具を突っこんだ。

乙女は猛って足掻いた。顔を左右に振り、腰をよじった。

併し手荒く、台から引き降ろされ、曳鎖を口輪に結んで、引据えられると、覚悟してきたのじやないの、仕方のないことなのよと自分の心に、秋雨を降らせて悲しくも云いきかせていた。汚辱に狂舞している胸の内ではあったが淋しい女の性だ。

「点検報告だ」

医者は若者に検査書類を渡す。家畜管理課員は、鎖をじやらっと張り、入荷品を曳き立てた。冷い鉄鎖で拘束され、素足でざらついたコンクリート道を歩かされると路子は羞恥と屈辱で顔を挙げられなかった。哀れさが血管を駆けめぐり、臉がぶくりと割れて、涙が頬を伝わる。

それにしても、その美しさは何に例えたらいいであろうか。

玲瓏たる玉の隆起、なだらかに弾み、締まっている嘆美の曲線、そして、抜けるように白い清澄な肌色。ヴィナスにも比せられる麗容である。

その健やかに伸びた脚は、足鎖で捌きを制

限されて、螺旋階段を小刻みに降りて行く。

魔の奈落へ――。

広い部屋を通り過ぎる。雑然と鉄の檻が積重ねてある。路子は、あっ！と驚声して歩みを停めた。

そうだ、前に美加子が入れた檻だ。幾つか積み上げてある、木札のついた檻の中には、それぞれ美しい女が折疊まれて、呻いていたのだ。

「私もこのようにされるのかしら？」

彼女の心は叫び出したいような恐怖に駆られた。今、私を入れるつもりかしら、路子はちらと連行者の表情を窺った。何の色も見せず若者は荒々しく令嬢を引立てた。

これは彼等の馴致方式の一つなのだ。先ず驚愕させる。囚女に置かるべき立場を精神的に叩きこんでおくのだ。

(六) 麗畜の輸送相談

第三理事室。と標識の出ている部屋に、路子は連れこまれる。

「YA、NO二十八指令書の調達品です」

連行人は秘書の男に、幾枚か綴ってある書類を渡した。

「O・K」

秘書はインターホーンのスイッチを入れて理事に知らせる。

連れてくるように通告されて、路子は境の

ドアを口を曳かれて潜った。

理事は一人の客と対談していた。横向きになっっている為、路子は顔が見えなかった。

いや、見えたとしても恥しきで顔を挙げられなかったろう。それも寸時だ。扉が開くやいなや突き転ばされ、頭をがっちり下向きに押さえつけられてしまう。

連行者は直立して報告した。

「此処へ結べ」

理事は坐っている廻転椅子の脇の床を示した。

秘書がV型のパイプ棒を絨氈の穴に差込んで、ねじった。

路子は髪を掴まれた儘、腰を突かれて、侍が殿様の前で膝行するように、背を倒して壁り這った。

歩かせてくれればいいのにひどい侮辱だわ。乙女は頸筋の痛みに眉を顰めた。

併し、若者達にしてみたら、理事は恐懼せねばならぬ上級者であり、競々たる存在なのだ。それに比べ、家畜は下も下、人間以下の下等生物である。対面させた場合、この女体は床に額を擦りつけさせても及ばぬ、賤しい物品なのだ。それに取扱い動作を観察されているという緊張もある。

路子はV字型パイプの両端に肘関節を結わかれ、織胴を鎖で一巻きされて床に固定された。口に連がっている曳鎖が短く、膝前の穴

を潜って、理事のテーブルの鉤にかかる。

美姿は鈍く光るVを背負って、首をがくりと前に折り、床面と対峙していた。

想像を超えた苛酷な扱いに、胸は汚辱で泣き、憂悶は深く垂れこめる。

「うむ、やっぱり思った通りの肉尺度だ」

理事は呟いて、廻転椅子をぐるっと廻す。

奥深く秘めていた肌を空気の飄る外皮と代えて、竦んでいる肉体を、じろじろと観覧する。黒光りしている靴が、縮んでいる腿の上にどたりと載っかる。

路子の心は屈辱で震えた。数多の人に侍かれていた良家の子女にとって、まだ、家畜の実体を知らぬ新入荷家畜にとって、胸芯を掻き廻される屈辱だった。感情の怒濤が渦巻いて、白腿を懸命に揺すった。勿論、それは儚い努力ではあった。

「ふうん、バストは八十八で、無傷品か」

理事は書類をめくって部分を見比べる。

「タツーマさん。貴方の品物より、少しは、ましですか」

それは客に遠慮して云った言葉だ。内心では数段優れた逸品だと踏んでいた。

客は、いや書記官は、これが美加子の友達であるとは知らない。だが、その美しさは、肌の清澄や品位に於いて、自分のベットは到底叶わないと思わざるを得なかった。

「これですね、飛行便で送ってくれと申され

るのは……」

令嬢は胸をつかれた。はっと男の姿から、状況を読みとろうとして、顔を起し、鎖に強く頬を曳かれた。

幾日の出発だろう。早く助けが来ないと、私はハレムの国へ運ばれてしまうのだ。

谷子さん、早く！路子は、まだ谷子を信じていた。この恥辱も、哀憫も一時のことと諦めて、耐え難きを耐え忍んでいるのだ。救いが予期された故の忍従と云えただろう。

そして又、封建時代から受け継がれた女の性美德と称された諦めと従順が彼女にそれを為させたとも云えるのだ。

外交官は、すっかり家畜を見る眼付になつて、稀代の美女を眺める。

この乳肌の爽やかさはどうか？このいじらしく唇を噛んでいる唇の形はどうだ？この素性のよさを見せて坐っている脚の姿はどうだ？全く素晴らしいの一語に尽きる肉体に、タツーマは魅せられて、凝視した視線が外せなかった。

「本国から督促を受けてね、これだけは特別措置なんだ。さもない限りや、先日のように船にするのだけだね」

理事は椅子に背を凭れ、足を伸ばして佳品の清潔な肩へ載せる。

「文化使節の専用機じや絶対に解りませんか、御安心下さい」

充日来訪したT国のEGB交響楽団は、自国の新型航空機を羽田に乗入れて、盛んな歓迎を受けた。帰国にも、その専用機が迎えに来ることになっている。

彼等は、それに路子を乗せて運ぶ魂胆なのだ。

「頼みますよ。お礼はお好みにより、たつぷりしますから……」

金でも牝畜でも御随意なほうをと理事は破顔して、冷視を白磁に輝いている肉体に移す。靴先でほんと、鉤に嵌っている鎖を無造作に外し、乙女の柔かい腿の下にキッド皮を突っこんで、やんやり美貌を持ち上げる。

澄みきった黒曜石の瞳は、濃い茶の背広、派手なプリントのネクタイと映し上って、福々しい、頬の緩んでいる理事の顔を捉えた。

「あっ！」

路子は驚愕が咽喉に絡んだ。

黒塔会の第三理事とは……西和化学の下請会社、黒山谷子の会社、天山機械株式会社々長、天山雄吉であつたからだ。

天山理事は福相を且つて見なかった不遜な形相に変えて、傲然と椅子に反りかえる。

揉手モミテをして御氣嫌をとっていた取引先の優秀な女事務員を、細々と行届いた親切を示してくれた心やさしい娘を、見るも哀れな姿態にして、鉄で手足を拘束して引据え、冷氣に

竦んでいる玉の肌に靴を載せる。そして、口を縛って、抗議も嘆願も許さないのだ。

流石に路子も眼に憤りを浮べた。併し、思いが谷子に連がると、脳髄に夏雲のようにむくむくと不安が低迷し、問い糺そうと動かぬ舌が、もどかしそうに口の中を泳いだ。

理事は、にたりと悪魔の笑を湛えおっかぶせるように、酷薄な畜類の処遇を云い出した。

「よく聴け！比奈地路子と云う女は今から人間世界には存在しない。そうやって裸身を曝しているお前は、比奈地家の令嬢でもなければ西和化学の社員でもない。牛馬同様の家畜として我々が飼養する動物なのだ。その躰はその意志は、その生命で我等黒天使教徒の所有であり、私有財産なのだ。四、五日内に本

△私の体験▽

鼻 いじめのこと 花房孝子

私は今年二十一才になる女です。十八才の頃から鼻殊に鼻腔に対して異常な程の関心を持つようになりました。自分から申すのは変ですが少女の頃から色が白く、中肉中背で容貌も十人並以上と自惚れています。殊に鼻が良い形をしているので、卵型に二つ並んだ鼻

国へ送ることになっているので、此処では充分教えられないし、お前も納得は出来ないだろう。併し、故国に着けば、専門の調教所があり、優れた調教師がお前の心と躰を矯正してくれる。鞭や火や、其の他の器具で、お前の脂と汗と涙を絞り出してくれるだろう。お前は間違った道を生きて来たのだ。償いはせねばならないし、罰は当然受けねばならない。又それが、お前を本来の姿に還す道程なのだ。まあ、行けばわかる。連絡事項もあるので黒山谷子君をお前の運搬員として選定しておいた。今呼ぶが厳正な人だから抗うと怖いぞ」天山理事は送話器のボタンを押した。谷子さんが、谷子さんが私を拉致した黒塔会員？谷子さんが私を飼育物として扱い、魔の

腔を鏡で眺めては、自分で自分の鼻を思いきり奥の方までいじめてみたい衝動にかられるのです。

幸いに私のお友達で鼻責の相手役として私以上に立派な体格で美しいS子を得て、一年程前から、いろいろのプレーを考案して、い

国へ搬出する？そんなことが……そんなことがあってなるものだろうか。素直に育くまれて来た令女には信じられないことだった。

それが、もしそれが事実だとしたら、私の救いは来ないのだ。私は此の姿で、異国へ連れ去られ、悪魔の残虐な責苦に呻吟しなればならないのだ。本当なのだろうか？

路子の優しい心は狂乱の綾を織り、疑念の虹が交錯した。

(未完)

じめたりいじめられたりしています。

最近の本誌を読んでおりますと、読者の方々の中にも鼻責めのことについて関心を持っておられる方が相当いらっしゃるようです。これからS子さんと二人の鼻責めプレーの模様を私の体験として書き綴ってみたいと思います。

鼻を責めるにも、やはり裸の方が感じが出ますので責められる方になった人が裸になることになっています。先ず私が責める役になります。S子さんの衣服を全部脱がせ、ブラジャーとレースのついたパンティ、それにナ

イロンのストッキングだけにします。椅子に腰かけさせ、太腿を広げて足首をそれぞれ、椅子の脚に縛りつけ、両腕は背後へ回して両手首を合せて縛ります。次に椅子の一番上の横木に首をのせ顔をグイと天井を向かせ、後髪を手首のところに括って固定します。これで身動き一つ出来ず、S子さんの恰好のよい鼻の穴が奥の方まで私からまともに見ることが出来ます。

横にも縦にも動かすことの出来ない顔の真中にツンと鎮座します。S子さんの高い鼻を私の指が力一ぱいつまみ上げるのです。そしてねじられた鼻の穴へ、私は小指をグイグイと押し込むのです。S子さんは只眼を細めて私のなすがままにしています。

私は強い質の日本紙で長いこよりをつくりS子さんの右の鼻の穴を指先でめくり広げてこよりをくるくる回しながら挿し入れてゆきます。S子さんはクシヤミの出そうになるのをグッと我慢しています。その顔の表情が面白く、私はおかしさをこらえて、鼻をつまんだ指の先に力をいれて、尚もこよりを奥へ奥へと押し込んでやるのです。やがてこよりは咽までに達します。私はS子さんの口をアーンと開かせ、ピンセットで咽喉の奥に見えるこよりをはさんで口から引き出します。鼻の穴からスルスル入っていったこよりが、口から引き出されてくるのです。

次は左の鼻の穴へも同じように……。これが終ると長い綿棒を、これも咽喉に達するまで挿し入れてあげます。

次に耳鼻咽喉科で用いる器具を使って、S子さんの卵型の鼻の穴へ挿入し奥の方まで無理やり広げます。流石に辛抱強いS子さんも顔をゆがめて、かすかな悲鳴をあげますが、私は意に介せず奥の方までグイグイと広げるのです。やがて私の拇指までもユルユルに入れる程になるのです。

私はおもむろに鼻の穴の奥まで覗き、綿棒を挿し入れて隅から隅まで掃除してあげるのです。鼻の粘膜に対する刺激のためS子さんはクシヤミが出そうになるので、それをこらえるため眼を半眼に開いて唇も半ば開けています。この時の表情が私の一番好きなものです。これが終ると、象牙のパイプを鼻の穴に突込み、その一端にビニールの管をはめ、他の端を水道の蛇口へ当て、栓をユルユルとひねります。そのままだと水が食道へ流れますのでS子さんに咽喉の奥を閉じるように命じます。すると、水は勢いよく片方の鼻の穴から排出されます。

鼻の水責めが終りますと、S子さんの口の中へハンカチをまるめて入れてゴムのバンドできつく猿ぐつわをはめ、口から少しも呼吸が出来ないようにします。そうしておいて、高い鼻を拇指と人さし指でギュッとつまみます。口からも鼻からも呼吸が出来ませんので

S子さんの顔は苦しさにだんだん紅潮してきます。私の指先にますます力が加わり、強くつまんで放しません。一分近くも鼻をつまんでいみると、S子さんの鼻翼の根元までピクピクとけいれんしてきます。やっと手を放しますと、S子さんは大きな鼻息をして、鼻の穴がふくれたり、ちじんだりして本当に面白いのです。

その他、煙草責め等、いろいろ面白い鼻責めのプレーがあります。この位にしたいと思えます。鼻責マニヤの方に参考になれば幸いです。

次に鼻責めについて、S子さんも私も興味を持ち、鼻責めのおと必ず実行しています。肛門責について一寸書き綴ってみたいと思います。(註、以下編集部にて省略します。)以上で私の鼻責め、肛門責めのプレーの紹介を終りたいと思いますが、いづれにしてもまだまだ序の口のようなものです。これからいろいろ面白いプレーを考察して実験してみたい考えであります。皆さんからも、どしどし奇抜なプレーを考察されて、誌上に発表していただきたいと思います。

編集者への御願い。

是非この一文を奇譚クラブへ登載して下さい。お望みであれば、私はどこへでも行き皆さんから責められても構いません。S子さんも、私にだけでなく沢山の人から責められてみたいと言っています。この一文が若し登載されましたら私の住所本名を御知らせしてもよいと思っています。

花房 孝子



マゾヒズム百景

男 好 場 馬

第三景 青 空 娘

源氏鶏太原作の「青空娘」が、昨年だったか映画化されたが、此の映画の中で、若尾文子の悠子が産みの母を捨てた父の家に引取られて、生きぬ仲の母といわゆる腹違いの兄弟弟の中に入って虐待され乍らもその周囲にくじけず、青空の様に澄みきった広い心で生きてゆく。そして最後に倅せを撫む好篇だった。が映画の始めの方で、若尾文子と弟が庭の芝生で取組みあいの格闘を演ずる処がある。始めは若尾文子が倒されるが、やがてはね返し、仰向けになった弟の上に馬乗りになり跨って「さあどうだ！ 降参か」ときめつける。此の間の時間も可成り長く、私はこれだけでも、此の映画はよかったと思つたが、もし私が監督だったら、あの箇所だけは、もっと上手に演出するのにと残念な氣もする。（尤も自分だけの好みになるかもしれないが……）

と云うのは若尾文子が、弟を組み伏せる処が、何となく見ていて弱い感じがするのだ。動かないものにそつと腰をおろす、と云つた恰好で、之と同じ様なものに、京マチ子の「痴人の愛」があった。あれも我々待望の映画だったが、筋も変えられ、穰二を馬にする場面も、原作の様にすさまじく、どっかと跨ると云う迫力は全然なかった。上品に綺麗にと云う主旨かも知れないが、男のサディズム的

な場面は、どぎついものが多いのにおかしなものである。話題がそれだが、私は「青空娘」をみて或る姉妹を思い出したのである。それは終戦から二年位経った頃、私は其の頃K市の引場者寮に両親と共に入っていた。寮と云つても焼けビルを改造したものでそれでも各世帯毎にうすっぱらな板で仕切りをつけてあったが、隣で何を喋り、何をやっているか、一寸気をつけると手に取る様に判る様な処であった。然し当時の人心は、食べる事、住む事、着る事に追われて、他人が何をしたいやうがそんな事には無頓着だったから、我々もあゝ云う処に住んでいたのだ、と今更つくづく思っている。私の部屋の隣に、大連から引揚げた家族で年とった母と二十二年になる長女、二十の次女、十八の三女、それから十六の長男、十三の四女と云う六人家族で四女は小児マヒをやったとかで口もきけず手足の動きも不自由な子であった。汚い寮に此の家族は不具を交えて悲惨そのものの様だったが、長女と次女がとても美しく（三女は大阪の方へ女工として出ていた）市内の会社へ勤めて、此の二人の収入で一家は生計をたてゝいた。そして私達が殊更に感心したのは、此の姉妹が青空娘の様に非常に明るく、のび／＼と生きている事だった。生計の苦しさも、不具の妹の世話苦労も、彼女らの明るさで、大きな家に在って財産問題だ。浮気だと悩む家庭より

余程健康で美しく立派に暮らしていた。その姉妹の或る日の一挙手一動の一駒を拾ってみると……

明子と和子が部屋の中にねそべって話している。日曜日の午後である。母は買出しにでも出かけているらしい。

「ねええ、お姉さん、私と同じ課の人なんだけど凄くブルジョアなのよ、お父さんは新興成金なんだって、今日も馬に乗って遠乗会をやるんだなんて云ってたけど、のんきなものねえ、いゝ身分だわ、同じ二十の娘なのに身分が違いすぎるわ、私達もお父様がもつとく生きていくれたらよかったのにねえ」

「そんな事云ったって仕方がないわよ、でも変ねえ、そんなブルジョアのお嬢さんがどうして和ちゃんなんかと働いてるのかしら」

「そこなのよ、家にいたって、つまらないでしょ、私達と違って彼女は遊びで勤めてるのよ、多くの男をベコ／＼させているのが好きらしいわ。良家のお嬢様って云わんばかりに私の課の男なんか、皆おせじばかり云ってるのよ、本当に嫌らしいわ」

そこへ弟の正夫が帰って来て、

「大きい姉さん、小遣いおくれよ、ターザンのとてもし映画が来ているよ」

「駄目よ、勉強もしないで、映画ばかりみてるんだから、うちには余分のお金なんか一銭もないのよ」

姉二人と弟は暫く何だかんだと云っていたが弟はまだ諦めきれないらしく、

「ねえ、今度っだけ、僕、どんな事でもするよ、お姉さん達の靴も磨いておくよ、頼むから、ねえ、うゝん、お母さんは駄目だよ、お姉さんに聞けて云うから」

「いゝわ、映画代だけあげる、でも正夫ちゃん、お姉さんの云う事、何でも聞くと云ったわね。よし、じゃ此処へ馬になるのよ、四ツ這うのよ、そう／＼、さあ、お姉さんに乗せて此の部屋を五回廻るのよ、ホラ、しっかり／＼、ハイドウ／＼、和ちゃん、どう私の遠乗りよ」

「はゝゝ、正夫、私もお小遣いあげるけど馬になるのよ」

「うゝゝ、重いなア、あと二回だよ、小さい姉さんの馬にもなるよ、その代り二十円だよ」笑ったり、うなつたりの三人姉弟のさゝめきに私はそつと小さな節穴から覗いてみた。

いが栗頭の弟の身体に跨った明子の大柄な姿態が、殊に真白な両の素足を太腿まではだけているその白さが、私の眼に強く焼きついたものだった。そしてつくづく此の姉妹を自分の姉か妹に欲しいと思ひ、又妻だったらと淡い恋心を覚えた。それからすぐ私は上京となったが、其の後五、六年して伝え聞いた処によると、彼女らの母は亡くなり、姉妹は勤務先の上役の息子と結婚したが、一年足らず

で戻され、そして次女も結婚したもののゝうま／＼くゆかず、暴力に狂った様な男の眼を逃れて広島の方へ行つたと云う事だった。

不具の子だけが何も知らぬ氣に育っていたらしい。村松梢風の「女経」の第一話でないが、青空娘は必ずしも幸福でない、と云うわけか。

第四景 現代巴御前

渋谷の宇田川町が現在の様に明るくすっきりとしない頃で、それこそ暴力の街を地でゆく様な三、四年前の事である、此の街にSと云うバアが袋小路を入つた様な処にあった。

此処に店の名で、めぐみ、と云う二十二、三歳の現在で云うグラマー女性がいたが、之のニククネームが現代巴御前と云うわけである。始めて私が逢つた時から、此の女はすごいお転婆だぞと直感した通り、立居、ふるまい男そのもので、言葉もハッキリして、酔うと、椅子にかけている男の膝に馬乗りになつてみたり、カウスターの上に真白な腿もあらわに跨つてみたりして大声で笑うのだ。二度、三度、五度、十度とその店に通つていく裡に、全く彼女が現代の巴御前である事を知つた。大体、彼女はM型でその性格からかW型の男性が彼女の好みだった。

顔は美人で体格よく一番好きなスポーツが乗馬と云う有様で高等学校時代には弓もやつ

たと云う点だけでも、ニックネームの通りだった。私と彼女はお互いに、ウマがあつたと云うのか、始めから印象づけられて知り合つたのである。或る夜の事。相変らず私がその店に粘つてあちらの席、こちらのボックスと歩いてゐる彼女を待っていたのだが、そのM的な魅力なのか、めぐみくと彼女の身

体はいくつあつても足りない様な忙しきで待つ事には馴れていた私が、その夜に限ってどうしたのか、とにかく相当酔っぱらつてしまつたらしく、フラフラと奥深い処にいた彼女のそばに行き、めぐみの腕をとつて「俺の女だ」と言つてしまったものらしい。処がその席にいた二人の男がいわゆる此の辺の不良で

『女体切腹並に自刃』特集号

に関するアイデア

南方 純

特異な雑誌の経営に、貴社の皆様が一方ならぬ努力をはらつてゐる様子を拝見、心より敬意を表する次第です。しかも毎号拝読しておりますと、どうも同人雑誌的な傾向が強く、もっと編集部としての企画性のあるものが欲しいなと思うようになりました。はたせるかな貴小説特集の発刊あり、誠にSADO特集号の発売があり、誠にわが意を得たものと快心にたえません。そこで特集第三号として「切腹特集号」を御企画願いたく、ここに「アイデア」を提出いたします。貴小説特集に見られる如く、

旧号の再録に口絵、挿画を新にした程度でなく、大部分を新企画により編集していただきたく、原価計算して採算を考えれば、とても実行不可能との結論が出るかもしれませんが、このような内容を盛った珍書は、必ずや広く江湖の絶讃を得るであらうし、貴社の名を高からしめるであらうと信じます。

内容は切腹、特に女体自刃を主として勿論、マニア向ですが、少々固い記事もまぜて歴史的、民俗学的、医学的方面の好事家にも参考になるような研究的色彩をそえる

此処で忽ち喧嘩になつてしまつたのだ。M的女性と気が合う程だから、私の方は早く云えば、喧嘩など出来る方でない。専ら西部劇の空想は逞しく英雄的気取りになるが実際の力は全然ないのだ。それが酒の力は恐ろしいもので「何を此の野郎！」と、やつたのだから大変だ、此の辺は私の、かすかなうる覚えとあとで聞いている事だが、何処で見たものだからビール瓶を割りつけて逆手に持ち恰好だけはよかつたらしい。然し勝負は判つてゐる事だし相手は外へ出ると息まいて、私も又、もうその時は鼻血を出し乍ら上衣を脱ぎすて、外へ出ようとしたらしい。此の時、めぐみがいきなり私をつきとばし、仰向けにひっくり返つた私の胸の上に、多勢の客が見ている前で馬乗りに跨ると、

「酔うところなんだからッ、バカバカッ」と怒鳴り乍ら私の両頬を拳で、すごい勢で撲り始めたのだ。之にはみんなが、あつけにとられて、ボーイやバーテンがあわてゝ止ると、「客じやないよ、こんな奴は」と尚も撲りつけ「本当の事を云うと此の人は私の実の兄なんです。酔うと物事のみさかいがつかなくて、それに生じつか空手が強いので、喧嘩ばかりやっていただけど或る事があつて、ぶつたりとおとなしくなつたと思つたら又悪いクセを出して……嫌な事や悲しい事があつたら私に何でも話してと云つたじやないの」と彼女、

こと。編集には半年位の時間をかけ、本文は中質紙使用、通常号位のページに上げ、定価は四百円程度。

〔I〕口絵 本誌御常連。滝れい子、北原純子、杉原虹児の諸家、出来れば伊藤晴雨老の御出馬を願って、変化に富んだ女性自刃風景を描くこと。

〔II〕記事

一、切腹の歴史。中康弘通さんあたりの概論的なものを。

一、日本女性自殺史考。日本歴史に理れた女性自殺の種々相を、手段を主として概説、かくれた研究家を求めること。

一、医学より見た切腹。解剖学や法医学より見て、実例について詳説、図解など入れれば、なお良。

一、心理学より見た切腹。異常心理学者に。

一、切腹の作法。凶礼式以下、広汎な文献の研究結果を。

一、切腹と日本刀。歴史的なエピソードを織りまぜて。

一、介錯と首実験。

一、映画、演劇に現れた切腹の種々相。

歌舞伎俳優の型など入れれば面白い。
一、新聞に現れた切腹。本誌、本年四月号にのった須藤律夫氏の切腹雑感とそ

の種々相に就て」のような記事。

一、文学に現れた切腹。軍記ものから大衆文学にいたる切腹の系譜。

一、旧号の切腹もの解題。発刊以来、百号中の主なものの大要。

一、言伝えに残る切腹。古老に伝えられた切腹のこぼれ話。

一、切腹実行者の思い出。俳優、早川雪洲や先般、本誌に報道された某女の心境をたたくこと。出来れば座談会も。

〔III〕グラフィヤ

一、映画、演劇の名場面。演劇では早大の博物館。映画ではスチール蒐集家によりコレクションがある筈。

一、武道における切腹と介錯の型実演。武道家がたしなみとして型を保存しています。真剣を使用した介錯の型の据物斬りを入れると迫力が出る。

一、女体自刃十態。写真部の腕の見せ処モデル、背景、姿態とそれぞれ変えて切腹擬態写真オンパレード。その中、

二、三は連続組写真にすれば、すばらしい。

〔VI〕読物

創作、告白の類。旧号の名作を再録し新しい挿画を入れて五、六篇、それに新作を同じく五六篇。

今度は私の胸にすがって大声で泣き出してしまったのだ。もちろんこれは芝居だったわけだが、翌朝、彼女のアパートですっかり、はれ上った顔の痛みと二日酔の苦しさ、それに彼女の叱言で私は三重苦を味ってしまった。

だが彼女の「私だからあれで済んだのよ」と云う通り彼女に摸られなければもったい／＼ひどい目に遭う処だった。そして之もあとで判ったのだが、彼女が私を空手くずれの兄に仕たてたのも一応の理由があったのだ。それと云うのは彼女こそ本当の空手の名人？まではゆかないが、もう少しで段を取ると云う腕前だったと云うわけである。かつて暴漢の急所を蹴りあげてのしてしまったと云う戦歴をもっていたのである。

それからの私と彼女はマゾとサドの生活みたいで——と云うより私の方がマゾヒズムの性癖を満足させようとして、彼女に組み敷かれてみたり、脚に接吻したり、人間馬になったり、ネクタールまでもと考える様になった。然し、どっちがどうと云うのでなしに、多分私が捨てられた恰好になった様だが、それから間もなく私と彼女は別れる様になってしまった。

彼女が最後に云った言葉は私にとって、いやマゾヒストの男性にとって如何とも、しがたいものでないかと思う。

「私の様なものでも女は女よ、女は自分の良人にはひどい事は出来ないものよ」

今は区劃整理で、もうその店は勿論なく、彼女の行方も全然判らない。

体
験
記

バー「ナナ」の人々

(第二回)

南

時

夫

マダム の 話 (続き)

こうして私は、私の三十数年の人生で初めての経験をしました。でも前にお話しましたように私はそのことに何んの異常な感情は湧きませんでした。王己にすすめられるままにこの種の系統の本も読ませて頂きましたけれど、そしてそこには女というものは天性のものとして被虐の傾向を持っていると書れてございましたけれど、私は自分の身体が自由を失ったというそのことだけに關しては今日まで別に特別な情感を覚えたことではないと云つ

てもよろしいと思います。素肌を荒縄で巻かれ息苦しい猿轡を嵌められて私はもがきました。声の出せないことを知りながら呻き声を立てました。それもこれも真に縄から逃れたいという思いからのものでした。決して「飲喜のあまり」という様なものではなかったのです。飲喜どころか、興奮どころか、苦痛そのものの時が多かったのでございます。よく本には「緊縛プレイ」という言葉が見られます。プレイであるからには二人が互に飲喜を感じなくてはなりません。それを考えますと私と王己のこのたたかい(変な言葉でし

ようけれど)は、王己はどうあれ、私からすればプレイではなく、もっとも真剣なことでした。

それなら、どうしてその様な苦しみの世界に自分を置くことを許しているのか。それが苦しみを求めている証拠じゃないか。とお思いのことと存じます。当然のことと思います。私自身分らないので御座居ます。ただ分らない、とだけでは御不審が解ける筈はございません。そう問いつめないで下さい。それもこれも、みんな或る特定の人に対する余りにも強い愛情からなのでございます。白状してし

まいましよう。私は王己がたまらなく可愛いのです。たまらなく……。三十女の私が今日ある一つの生甲斐とも申せましよう。異性だけが激しい恋愛の対象となるのでないことを私は身を以て知りました。王己も本当の姉、いやそれ以上に私を慕い、そして仕えてくれます。私は王己のこの異常な要求を、それが異常と知りながら、どうして拒むことが出来ましよう。あまりにも愛し過ぎて、という言葉で御了解下さるでしよう。興奮のあまり頬を紅潮させ、力を無暗と込めて私の身体を縛っている王己の横顔、そして私の苦しみもがいている姿をうっとり見つめている王己の眼。私は自分の苦しみの中で、必死にそのことだけに縋り付き自分の浅ましい姿を忘れようと、努めているのでございます。御存知の様に王己は、お店では余り眼立たない溫和しい娘です。でも仲々頭の良い、よく気のつく娘で、あれでいて可成りの熱情をもってゐるのです。じつと胸に秘めて表にあらわさないだけに何かの機会に発散するときは激しいものとなるのでしよう。私によくつかえ、私を慕ってくれる王己に対しては、私自身の身体が、一時的にどの様な状態におかれようと、王己の情熱の対象になることだけで、私は幸福に思えるのでございます。

ミスズが外泊した夜は、必ずといってよい程、私は王己の相手をしなければなりません

でした。初回、二回、三回ごろまでは、さすがに王己も私に遠慮し、なるべくゆかたの上からとか、腰紐を使うとかして呉れましたが、度重なるにつれてその縛り方も、それに使う材料も遠慮が無くなつてゆきました。決してマゾではない積りの私でも、矢張り慣れるということがございます。ある一つの縛り方に私が慣れてくると、次々に新しい方法を考えれば私を苦しめました。

「ママ、着物ぬいで用意してね。私あと片付けしてゆきますから。今日は一寸面白いことを考えたのよ……ウフフ……」

お店から二階へ上ろうとする、私の耳もとにこう囁いた王己は、もう多少上気していました。ミスズは三十分位前に知合のお客様と出て行って、今晩は帰ってこないでしよう。私は王己のこの言葉を聞くと少し不安にもなりました。けれど、既に縄に対しても慣れておりましたし、それにも増して最近、妙に人恋しさに眠れぬ夜が続きますので、王己が多少でも側に居てくれる喜びの方が、大きく妙な興奮すら覚えながら、自分の部屋に戻りました。一人身の三十女ですもの大眼にみてやっ下さいませ。私はふとんを敷くとその上に座りました。残暑は厳しく半裸の身にも汗がにじんでまいります。整理ダンスの中から麻縄、腰紐、太目のロープ、布切れ等を取り出し、側に置いて姿見を近くに引き寄せる

と、そつと両の手を後ろに組んで座りました。これで一応用意は出来たのです。これもみな王己の命令。昼間の主人が私なら、夜お店の閉った後の支配者は王己なのでございます。姿見の中の自分をじつと見ました。私は自分の容姿を兎角云うのは厭でございますけれど、お客様の殆んどが、私を三十過ぎた女だとはみて下さいません。私自身も二十代の頃の自分と左程変わっていないとは思っております。今はまだ一本の縄も巻かれていない肉体。やがてはくびれて変型してしまふであろう乳房。ナルチシズムとまではゆかないにしても、女の本性として私は自分の顔を見るのが好きでございます。顔ばかりではございません。以前は左程注意を払わなかった自分の身体の隅々に、王己とのこのプレイが初つてからは、不思議な関心が湧いてまいったのでございます。

「ママ、どうもお待たさま。矢張り手首はこれにしてあげるわね」

シユミーズ一枚の王己が私の手を取って背後で重ね合せた時、やっとなら私に返りました。王己が「これに」といったのは腰紐のことで、夏は腕や胸が露出した服装なので跡がついては困るところから、私はなるべく腰紐のようなものにしてくれるよう頼んであったのです。私はお店では和服が多いでしょう。手首だけがどうにか無事ならば、気が付かれ

ることもありませんでした。それでも時々
は手首に絞る様な紐のあとが付いて、仲々
消えず困ることがございます。手首以外の
二の腕や胸、太股等には縄のすりあとが付
いて、お湯に入るのが恥しい程でございま
す。王己はもう慣れた手つきで私を後手に
括り、男用の大型のハンカチを私に喰えさ
せると手拭いで猿轡を嵌めました。そうし
てから、おもむろに一枚の紙を取出して私
の前に置くのです。

「ママ、いい？ これクジ引よ。番号がふ
つてあるから何番かおっしゃって？ ああ
そうそう、声が出ないのね、それじゃ——
私が一番から順に指してゆくから良かった
らコックリしてね」

王己が出した紙には、十本ばかりの線が
引いてあり、その下の部分は折ってあつて
字を隠してあります。よくアミダと云つて
皆さん方が、つれづれにおやりになること
がございませうでしょう。王己が「これ？」
「じゃ——これ？」と云いながら、順番に
指してゆくのが見ながら、私は真中辺に来
たとき頭をこっくりしました。別にどれと
いつて私にとっては何のことか分らないし
いい加減に領いたことでした。ところが、
「じやーこれね」と云いながら王己がくる
くると隠していた部分を開いて見せ、そこ
にある文句を見てびっくりしました。そこ



には、
「お願い！ 今日麻縄で手足を強く縛つ
て下さい。首縄も忘れないで！ それから
逆海老責めという型に私を縛って頂けたら
嬉しいと思います。どうかお願いします。
節子」

と書いてあるではありませんか。節子。
というのは私の名前でございます。この文
句を読むと私が王己にこの様なことを頼ん
だ様にとられます。私は、なによ、これ！
？ 私はそんなこと云つた覚えが無いわよ
！……と必死に云おうとしましたが、も
う既に猿轡を嵌められ、手首だけですが縛
られて自由になりません。

「ううう……うう……」

と呻くのを面白そうに笑いながら、
「ママ、本当にこんなこと頼んでいいの？
そんなにして貰いたいのなら私仕方がない
から聞いてあげるわ。ママが頼んだのから
あとは知らないわよ……」

と王己は私の顔をのぞき込む様にして云
うのです。もう後の祭りでした。私の身体
は私の不本意な注文のとおりに行きわた
りまして。今までのいきびしさで私は
乳房の上下を麻縄で縛られ、手首に連結さ
れると、やがて首に掛けられ引かれました。
小肥りの私はただ胸を縛られただけでは左
程の苦痛を感じませんが、手がそう長い方

ではないので縛り合された両手首が、肩の方へ引上げられると非常な痛みを襲われ、無理に突張って下へ戻そうとすれば、首がぐっと締って息苦しくなるので自然に顔を上にあげねばならなくなりました。そのうちに王己は私の両足を、足首と太股を固く縛り合せ、そこにうつ伏せに倒しました。王己は縛りながらも、

「ママって、どうしてこんなにされるのが好きなの？ 私、可哀想で見てられないわ」とか、

「私も、ああまで頼れちやあ、厭と云えないし……」

などと、わざと私の耳もとに囁くのでございます。

「さあ、これで御注文の初めの部分は出来上りよ。少しゆるかったかしら？……」

ゆるいどころではございません。大きく息をする度に、麻縄が肌に喰い入って見えなくなる程の緊縛でした。

「じゃあ、そのまま少し休けい。……」

姿見を私の見える位置に据えて、私をそのままの姿で転がしておきながら、王己は窓際でのんびり涼んでいます。この様になった自分の姿。先程までは白くふっくらと柔かな曲線をみせていた女の肉体が、今は凸凹にくびれ、時々びくびく痙攣する様にかすかにうごめくだけなのです。女の身体は柔軟性に富ん

でいるそうでございます。この様に荷物の様に括り上げられても、じっとして動かずに居ればどうにか我慢出来ます。私は荷物の様な自分を横目で見ながら、なるべく動かずに転がっていました。一服して落着いたのか王己は再び私の方へやって来ました。

「おそくなるから、次の御注文に移るわ。えーと、何んだっけ？……ああそうそう、逆海老責めね。ママさん、よく知っているのね。いろいろなこと……」

私が知っている訳はございません。海老責めというのは身体を前に屈曲させて縛り付けるのだ、ぐらい想像されましたが、その逆って何んだらう……。

「ももが縛ってあると、よく曲らないからほどくわね」

王己は私の太股の縄を解き、それを足首の縛り目に通し、更に背中に縛り合さっている手首にと連結しました。やがて手首と足首とを連ねた縄が引締められてゆくことが分りました。棒の様になって私をくの字型に曲げようとするのです。女の力では中々大変らしく、私には見えなくても、気配で王己が力を振りしぼって、引張っている様子が感じとられました。私も初めの中は、あきらめて両足をなるべく反らしてみましたが、細っそりして足の長い女ならばいざ知らず、私の様に小肥りで中背の女ではとうてい無理です。

まして手首は首縄によって背中の上部に引上げられているので、そこまで足首を折りまげることは、アクロバットのダンサーでもなければ出来ない相談でした。それなのに王己は、私の身体に足を掛けるまでにして引張り、何んとか手と足を結び付けようとしていました。

最初は王己の心を押しはかって協力的であった私の心も、襲ってくる苦痛に耐えられなくなって、反った身体を元に戻そうと突張りはじめたので、王己は一層の強い力を出さなければならなくなりました。手首が縛られているだけなら左程の苦痛ではないのでございましょう。しかし私の場合は手首の縄が首に連結しています。足首が引き寄せられると同時に咽喉が締ってまいります。息苦しさを少しでも和らげようと出来る限り顔を上向け、胸を反らして、恥しさも意識の外に置いて、下半身を前に突き出し、首が締るのを防ぐために全身を、なるべく後方に反らす様にせねばならなくなりました。はじめのように王己の力に抗って足首を突張っていれば、それだけ苦しくなるので、ますます反り返らずにはいられなくなりました。王己の強い力と私のこの動作とでとうとう私の両足は背中であつて触れるまでに近付けられ、そのまま固定されました。

「ママ！ やっと出来てよ。ものすごくたびれちゃった。折角ここまでやってあげたん

だから、ママさんもよく味つといてね。私、ジュース飲んでくるわ」

私も冷い飲物が欲しゆうございました。口の中はハンカチによって唾液が吸いとられ、ねばねばしていました。かさかさに乾いてくると私はそのハンカチの唾液を再び吸いました。もう鏡の中の自分を見る余裕もございませんでした。そり返った身体はもう自分の身体ではありませんでした。同じ緊縛でも先程の様にただ棒の様に転がされているのなら、どうにか耐えられます。けれど、この逆海老は、責め、でございました。王己が階下に取りてゆこうとしているのを見て私は必死に頼みました。でも無情な猿轡は私の意思を伝えはくれません。苦しい！ 王己ちゃん！ ほどいて！ とう云った筈でした。そう叫んだと思った言葉なのに、

「う、うう、——」という呻き声だけでした。王己の去った後、私は次第に痺れてくる全身でのたうち廻り、なんとか手首と足首との間隔を広げようとしていました。のたうち廻ったと云いましたけれど、背後で四肢を縛り合されては動き廻ることすら殆んど出来ません。顔はますます上向きになり、それにつれて口を覆った猿轡がますます強く頬に喰い込みます。私はついに「エビ」になりました。女のそり返って胸と下腹を突き出した姿がどんな

に見苦しいものか想像下さいませ。初めは熱を帯びて感ぜられた自分の身体が、やがて冷たくなる様に感じました。咽喉の縄が締るたびに頭がもうろうとしてきます。私はこのまま捨ておかれたらどうなるのだろう。首縄の掛けどころが悪かったら死んでしまっているでしょう。早く王己を呼び戻さねばなりません。私は不自由な身体をもがかせて畳を叩き、必死に呻きました。

呻く力も、もがく力も無くなって、ただ浅間しい一個の肉塊となって転っていた私のそばに、王己が立ったのは何分後だったのでしょうか。ほんの二、三分であつたのかも知れません。一時間二時間後であつたのかも知れません。すーと口の中に味のよい空気が流れ込んだ様に感じました。空気の甘さ。私は猿轡をはずされ、口中の布を引張り出されたのです。あんなに必死に叫ぼうとしていた哀願の言葉も猿轡の解かれた今、もう私の口から出ませんでした。氣力が全然無くなってしまっていたのです。

「死んじやったのかと思つてびっくりしたわ。冷いジュース持つて来たから飲んで元氣を出して！ 苦勞して括ったんだから一服したら記念撮影してあげるわね」

オレンヂジュースを瓶ごと私の口に突込み腕を私の頸に廻して温しく飲ませて呉れました。自分の肉体を襲っていた苦痛はまだその

ままでしたが、この冷い液体が咽喉を通ったその瞬間から私は又元氣を取戻しました。そして一人で取残された先程は王己のことを怨んだ時もありましたけれど、この優しい王己の仕草にもうすっかり怨みも消えました。「ひどい王己ちゃん。この恰好見てよ。私をどうする積り？ もうほめて頂戴！」

私がこう云つて不自由な身体を王己の方に寄せようとしたが、一寸も動けません。「駄目々々。煮て喰うと焼いて喰うとママの運命は私の手中にあり……と云う訳ね。うるさいこと云うと又口を蓋しちゃうから。私、今一寸面白いことを考えたのよ、ママをこのままの恰好でお店の前にぶら下げておいたらきつとお店繁昌するわよ。ママも賛成でしよう？」

四肢を背後に縛られてお店の前に吊り下げられている自分の姿を想像してみました。白い女の肉体が青や赤のネオンの灯かげにぶらぶらとゆれ動いている光景。お店の前は黒山の人だかりになるだろう。女の肉の切り売りと思うかも知れない。「ベニスの商人」ではないけれど、肉一ポンド、いくらと値段標を首に掛けて吊るされている私。ここが旨そうだ。いやここの肉の方が上等だよ。と私の肉体のあらゆる個所を手で触れてゆく多くの……そんなことを空想していると、何か本当にその様にされそうな氣になりました。



なにしろ私は猿轡をはずされたとは云え逆海老に括り上げられた姿そのまま、一寸も動くことは出来ない状態です。黒い覆面をした力強い男でも来て王己の指図のもとに私を軽々と運んで表に吊り下げることは全く容易なことでしょう。王己の突飛な提案を耳にしている中に、そして拘束の姿を意識すると直ぐさま現実になりました。私は必死の哀願を再び王己にせねばならなくなりました。

「冗談はやめて！ねえお願い！又縛られるから一寸だけほめて頂戴。こんな恥しい恰好

写真とるのも厭よ。ねえ早く……」

動かない身体を無理に動かして膝でばたばたと畳を打ち催促しました。でも、直ぐその後再び私は鼻口を覆う猿轡を嵌められ、やがて写真機の前に背中を向けて転がされると一枚、二枚と哀れな姿をカメラに収められました。一米位のところから猿轡に覆われた私の顔の表情を接写したり、浅間しい真正面の姿を撮られたりしました。

王己はとてとても可愛ゆうございます。でも、あまりにもひどい縛り方をされると、私には王己のこの性情について行けない様な気になるのでございます。それにこの種の傾向は度重なると次第に強烈になること、新しい刺戟を求める様になることは明らかなことなのです。あのクヂ引もそれから何度か行われました。本当の「海老責め」にもされました。お酒や飲み物の積んである物置きの上から荒縄で吊されたこともございました。高小手に縛り上げた私を木箱の上に立たせ、荒縄で更にきびしく身体を縛るとそれを梁に通し、手に継いでから私が乗っている箱を取り除けるのです。人間は吊られるとじっと静止していることはなく、ゆっくりですが、ぐるぐる廻ることを知りました。二階の手すりに縛りつけられたときは本当に困りました。深夜と云っても道ゆく人は皆無ではありませ

ん。私は身体を小さくして浅間しい自分の姿が発見されはしないかと怖れました。下手に動いて物音を立てたり、呻き声を上げたりして人に見付かったらどうなるだろう。お巡りさんにも発見されたら、それこそ新聞種になり、王己は犯人として連れてゆかれてしまふでしょう。

このお話の初めに、私が南さんにお聞きしたのはこの心配があったからなのでございま

す。王己は私の心配をよそにますます激しさを加えました。前には空想であった、お店の前にぶら下っている女の肉体も、現実になりかねません。でも私が相手を拒んだとしても、王己は他に対象を求めよう。私はどうしていいか分らなくなりました。

その中に私は王己が私に加える緊縛の仕方や、いろいろなアイディアから、何か私一人だけが王己のこの欲情の対象になっているの

ではなく、現在においてか、又は過去においてか私以外の或る人が王己の相手になっている様に感じました。女の「勘」はするどいものです。初秋の夜、私は自分の勘の適中を知りました。手足を縛られ猿轡を嵌められた私の眼の前にその人が現れました。その人も又自由を失った姿でした。

(未完)

臨時増刊号 『責小説特集号』 目下発売中!

売切れぬうち即刻お申込を!

定価一部二百円

大好評!

(表紙色刷、本文中質紙使用)

巻頭口絵

拷問 (片矢薫・作)

滝れい子画

吸血女流画家 (岡田咲子・作)

北原純子画

ある奇術師の恋 (吉丘垣根・作)

滝れい子画

鬼兵衛刺青異譚 (二俣志津子・作)

滝れい子画

遊女葦水の最期 (片矢薫・作)

北原純子画

縛られた妻 (早川新二郎・作)

滝れい子画

巫女屋敷の責絵巻 (岡田咲子・作)

滝れい子画

読切傑作責小説

拷問 (特高刑事の惨虐行為)

片矢 薫

賭博 (淫奔マダム狂騒曲)

二俣志津子

巫女屋敷の責絵巻

岡田 咲子

老いらくの恋異聞

復讐のドラマ

鬼兵衛刺青異譚

吸血女流画家

ある奇術師の恋

惨虐戦慄の徴用女工

遊女葦水の最期

囚衣

奴隷妻

悪魔と口紅

悪女

縛られた妻

廊の灯影

MとS

責苦

記録係

赤に憑かれた男

榛ノ木参一

片矢 薫

二俣志津子

岡田 咲子

吉丘 垣根

片矢 薫

片矢 薫

古川 裕子

片矢 薫

桂 牧次郎

岡田 咲子

早川新二郎

片矢 薫

岡田 咲子

竹谷 十三

岡田 咲子

上村秀久雄

「責小説特集号」は主として昭和二十七年に発行しました本誌の中から悦虐作品として好評を得ました作品二十篇を選び出し全部新しく挿画を描いて再録したものであります。いずれも力作揃いばかりで、この特集号一冊によって昭和二十七年発行の本誌の主要な作品を網羅していることになりました。八葉の口絵は内容から取材して、滝れい子氏、北原純子氏の二人を煩して描いて頂いた力作ばかりですから、これだけ独立しても十分に観賞価値のあるものと思えます。

緊縛映画研究

磔シーンの役割

奈加田 須磨尾

映画の上で、悲惨な、苛酷な刑罰をとりあつかうからには、重要な意義を持つていゝことと推察しよう。ことに力の弱い女性を十字架上に雁字搦目に縛りつけ、僅かの自由さえも束縛してナブリ殺しにするには、よほどの大きな理由が必要なわけだ。女性の最も美しい時——それは縛られている時。その縛られた女性のうちで最も美しいものこそ磔にされている女性だ——という持論を、おそらく、永久に変えることのない私の意見として、映画に使用される磔シーンが、いかに観衆の感情をとらえ一つ方向に導くかということとを、人間誰しも持ち合わせる「あわれみ」という欠陥？に便乗して劇構成の盛りあがり効果的であると答えましょう。

では過去製作された映画では女性の磔シーンは、どのような役割をつとめて来たでしようか。

快傑鉄仮面（月丘千秋）では恋人の振袖美弥太郎をたずねて、わざ／＼飛弾の山中まで来たこの女目明しを、山の一族達は秘密をさぐる者と誤解して磔の火焙りの上に弓の的にしようとするのです。幸い救いの手があり事件は一息に解決して行きます。

怪傑黒頭巾（田代百合子）では幻想場面中使用されます。捕われの黒頭巾から悪人達が秘密をかき出そうと、彼の妹三葉達を磔にかけて黒頭巾を責めるが応じないので、遂には三葉達を刺し磔してしまふ。そこで黒頭巾の夢がさめて身の危険を悟ります。

青銅の基督（香川京子、山田五十鈴）

あの感激的なラストシーンをいままら紹介の必要はありますまい。一人の清純な乙女は宗教のために、いま一人の遊女は恋する男のために、理由こそ違え、共に十字架上の露とさえるのです。彼女達を火焙りにする憤煙たちこめた刑場のロングで映画が終ります。

流賊黒馬隊（西条鮎子）二つの山の均衡した勢力を持つ豪族の争いに便乗して、両者の領土を手中に収めんと図る悪代官が、悪事露見して仕方なく豪族達を倒すため、彼等をおびき出す因に、その妹を捕えて磔にかけ、二人の豪族は力を合せて悪代官を倒し両者は和解する。

怨霊佐倉大騒動（花井蘭子）御承知の佐倉惣五郎の妻。罪人として当然の処刑を受けるわけだが、この映画の観せ場で、悲惨な場面をタツプり時間をかけて観る者の同情をさそう。

闇太郎変化（美山れい子）邪教探索の命を受けた吾妻一兵が、逆に邪教徒達にはかられ穴倉にとじこめられる。やがてその穴倉へ磔柱に縛られた娘が吊り下げられる。それを救った一兵が娘の口から邪教徒達の秘密の鍵を握る冒頭シーン。

笛吹童子（田代百合子）敵の牢に捕われている命の恩人を救けようと、けなげにも牢に忍び込んだ八重が、逆に捕わって磔刑にさ

れようとする。突然、幻術師霧の小次郎が刑場から彼女をさらって救われる。この映画の重要人物である霧の小次郎を登場させるために用いられている。

慶安秘帖（不明） これはタイトル・バツクだが、近松物語（新人）の劇中のそれと同様に、映画の主人公達の未来を暗示させている。

妖蛇の魔殿（松浦築枝） 冒頭に落城した城主の奥方として処刑される。一緒に処刑されるはずだった少年の自雷也は幻術師に救われ、この父母の悲惨な最期が忘れられず仇討する。

怪傑耶茶坊（南寿美子） 耶茶坊の友人の恋人だが、悪代官の横恋慕に従がわぬため十字架に縛られ火焙りにされるところを耶茶坊に救われる。耶茶坊が悪代官をも倒して解決する。

七つの誓（千原しのぶ） カラコジヤ王国の桜姫は天下を騒がす悪女だと、実はその家臣の七人の勇士をおびき出す囹に磔の火焙りにされようとする。はたして七勇士現われさらに味方を得て悪人達を倒し事件解決のはこびとなる。

乱れ白菊（山鳩くるみ） これまた、まだら頭巾をおびき出すために磔にされる。敵方だった恋仇が味方に廻ったため救われ、將軍暗殺の非難を捨てて愛人共におちのびて行く。

く。

銀蛇呪文（紫千代） 父親の昔、おかしな罪のむくい復讐の犠牲者として、絞殺された上に墓地で釘付けの磔にされる。これを発見した黒門町の伝七親分が、同じ場で出会った上役の行動に不審を抱いて探索を開始する。

天馬小太郎（中村玉緒） 城を奪われ隣国の許婚者のもとへ逃がれようとする娘だが悪人達に捕われ、秘宝の有り家を記した地図を求めるために、これを持っている天馬小太郎をおびき出す囹として火焙りにされようとする。駆けつけた小太郎が忍術で悪人達を倒して救い出し解決する。

鬼面龍騎隊（円山栄子） これも悪人達にとつて大敵である左馬之助をおびき出す囹として悪領主が、左馬之介の許婚者の小夜を火焙にする。しかし悪領主は小夜に恋慕しているから左馬之助が出現すると小夜を城内に連れ去ってしまう。左馬之介は般若弓四郎に救われ新しい味方を得ることになる。

稲妻小天狗（丘さとみ、松浦築枝） 留守中に隣国の悪人達に城を奪われた衛守右馬之介の妹と母、磔にされアワヤ一刺という時に幻術師の右馬之介が帰って来て救われ、悪人達を倒して解決する。

以上、私の観ている十五本の映画のうちで半数以上の八本までがクライマックス・シー

ンに使われています。

「青銅の基督」「怨霊佐倉大騒動」のように刑に服し、その凄惨美を持ってラストとするようなものは別として、ほとんどは勧善懲悪で解決するようです。お芝居は正義が必ず勝つはずなのです。それなのに、その正しいはずの、しかも何の抵抗力も持たない女を磔の極刑にかけるとすると、誰だって早く助けてやれば良いのに、と思うでしょう。映画はその感情をとらえて製作します。そして女がそのあわれな磔に、一刻でも長く縛られているほど観衆は強い刺激をうけます。一寸御覧なさい。クライマックスに磔を使った八本の作品中で、槍突きの刑に比べて火焙りの刑が多いのも、その時間的観念から来たものです。そうでしょう、槍突きの刑だったら例え一槍でも彼女達の脇腹へ刺り、白磁の肌から一筋の血潮でも流れ出るようなことが有ればもう救いはないのです。ところが火焙の刑には、例え火傷をしても、トドメの致命傷をうけるまでにはタツブリ時間が必要です。そういう点でクライマックスの盛り上に磔の火焙りがもちいられるのだと私は想像しています。

ところで、違った方法として、劇の進行上女を磔にするもの——そう私の観たものうちでは、「怪傑黒頭巾」「闇太郎変化」「妖蛇の魔殿」「近松物語」「慶安秘

帖」「鬼面龍騎隊」「銀蛇呪文」など

については、どのようなことが云えるでしょう。クライマックスシーンの場合、その多くが処刑寸前に救われたのと逆に、この劇進行のために使われる女の磔刑は、ほとんどが殺されてしまいます。というのは、ここで彼女達が救われては物語の内容をあまりにも安易にしてしまうからです。「近松物語」や「慶安秘帖」のように当然のむくいを受け

たもの。「妖蛇の魔殿」や「銀蛇呪文」のような犠牲者。「怪傑黒頭巾」のような幻想場面。いずれにしてもこれらは理由の何であるにかかわらず、むごたしく殺されることによって観衆を興奮へ導いて行くのです。その残酷な仕うちを受ける彼女達には同情しながら、不思議に救われなくても仕方ないと割切れるのは何故でしょうか。それはきつと時間的にも短いためでしょう。

たった一つの例外として「鬼面龍騎隊」があります。悪人達も最初から殺さないことを前提において彼女を磔に縛り、火焙りにするのです。時間もかなり長く、クライマックスシーンに似かよった場面でした。

結論としてはラスト・シーンにしろ、途中シーンにしろ女優が磔にされる画面があるということ、映画の劇効果を高めるために、非常に利用度が高いということです。そこで

つい最近読んだばかりのオール読物新年号から

「乱世群盗伝」 五味康祐作

その冒頭にある敵將の意に従がわぬために磔刑にされる萬姫の悲劇を映画化出来ないものかと考えてみました。

城の追手門等の広場に設けられた二十間四方の竹矢来に囲まれた刑場の中。黒山のよ

の一角を、うつろに眺めている。

やがて柱下に二人の刑吏が槍を手に左右に分れた。処刑執行——二本の槍は、一度二度しごきをかけられ、カチリ、と萬姫の目の前で交叉した。恐怖をよぶ見せ槍である。萬姫の口から悲鳴に似た低く糸のように細いうめき声がもれて来る槍を見まいと懸命に空を仰ぐ、そのいじらしさは、武將の家に生れた宿命に敗けまいとする最後の努力なのだ。

二本の槍は意地悪くゆっくりと刑吏の手に手繰り寄せられると、ねらいを萬姫のビク／＼と瞬時のいとまもなく猛撃する脇腹に向って繰り出された。……

書けばきりの無いことです。ただ私としては、この処刑シーンを是非ともくり込んで、この惨劇あるが故に進行して行く「乱世群盗伝」の映画化をどこかの会社で考えていただけないだろうかと期待もし、要望もしています。そして、まだ磔に縛られてない可憐な女優のうちから、例えば東映なら大川恵子、松町弘子あたり、松竹なら伊吹友木子か雪代敬子大映の浦路洋子日活の稲垣美穂子東宝の扇千景新東宝の北沢典子といったタイプの女優が選ばれることを望んでいるのです。それが私のイメージなのです。

E・G クラブ

撮 影 会 報 告

泉 か よ 子

編集長様

私共、同好者のささやかな集いに悦ぶクラブという命名をしていただきましてありがとうございます。これまで全く無名の集いでありましたが、これからE・Gクラブと呼ぶことになりました。

お蔭でE・Gクラブは、毎月のしく催されて居ります。それというのもメンバーが真面目な方々ばかりで、よくルールを守って決して過激に陥ったり、猥らになったりせぬようお互いに自制しているからであります。

近頃流行の、シスターボーイやブラザーガールのような異常者は例外として、通常一般の女性には異性からおしせまられることに期待をもつものであります。男性もまた脅えもたえる異性に、一層美しさを感じるものであります。よう。「縛る」といわれれば婦人は必ず「私は何も悪いことをしていない」といいますが、悪いことをしていないのに縛られる事こそ、若い肢体をもつ女性の当然受けるべき美の洗礼であります。日本映画の女優さん達は、大スターも新進のニューフェイスも媚目を受けない人は皆無といつてよいでしょう。

男性のたくましい手につかまれて、抵抗のすべもなく後ろ手にねじあげられる脆さ。ぎりぎりどきどきつけられる鎖の冷たさ。身もた

えする度に肌に喰い込む縛めの痛さ。口をこじあけて喰まされた狼狽の悲しさ。女に生まれた歓喜をさえ覚えます。

○ 夏の例会は太陽が武蔵野に傾く頃、樹木の繁みも涼しげなG邸で開かれました。集まる会員は思い思いの軽装で、みな一様にサングラスをつけて居ります。氏名は例によって仮名で、今日は男性が一宮・二川・三船・四倉・五島・六郷・七尾・八田・九条・十村・十一谷の諸氏、女性には三人で、紅・緑・紫と命名されました。いつもと違って、今日は会食をあとにして遊戯にかかりました。今日の趣好は撮影コンクールであります。以前に申し上げました通り、私共のE・Gクラブでは個人の秘密及び信用保持のために、写真を撮ることは一切禁止になっていますが、今日は特別例外で、縛られた女の写真コンクールをしようというのです。

最初の企画は、鎖の女王を選ぶ美人コンテストでありましたが、さて、婦人の誰が選ばれても後味が悪いことになるので、結局、同一人を大勢でさまざまに撮影して写真の優劣を競うということになったのです。

広間に仮設スタジオを設けまして、カメラマンは十一谷氏、照明と進行係がミス紫、モデルはミス緑とミス紅の二人です。ミス紫は監視係をも兼ねています。これは、男子会員

の中に万一にも不心得な人がいて、コンクリート用原板以外に余分の撮影を行わないか、どうかを監視するわけでありました。

ミス緑とミス紅は、モデルの仕度にかかりました。ミス緑は、濃紺のウーリイナイロンの水着、ワンピースで肩に吊紐がついています。裾は極く短いダブル、靴はパンプスのハイヒール、コンテストの水着審査の姿です。

ミス紅は、純白のナイロンのワンピースでノンスリーブ、胸のあたりにブラジャーが透

けてみえます。流行の短スカートの形のない足が薄い肌色のストッキングに包まれてのびています。華奢なハイヒール。ダイヤのネックレスを首に巻き、両耳にドロップ型のイヤリングを吊り下げ、白いレースの薄い手袋をはめて、美しい令嬢の外出姿です。

男性側から水着はセパレートのビキニ型、ワンピースは脱いでブラジャーとガーターベルト、パンライスの下着姿にしてみたいと要求があつたのですが、婦人の反対で、ただ今申すような姿となつたわけです。ミス紫は、どんな姿でも撮影は嫌で、照明係、進行係を受持ちました。

十一谷氏は撮影のベテランでありますので撮影、現像、焼付一切を担当されました。

競技のルールは、男性方がミス紅とミス緑の緊縛写真を一枚宛好きなポーズで撮って、これを全員で鑑賞し互選して入賞をきめるわけです。緊縛用具は太鎖、細鎖、手錠、足錠革具、紐、縄等用意してありますが、その他どんな品を持参して来ても、よいことになっています。

嵌口具は白布、黒布、革製嵌口具、三種類用意してあります。前回に申上げました通り革製嵌口具は婦人会員にそれぞれ専用の品が常備してあります。私の嵌口具にはPと刻してあります。いつかのミス・パールのときの記念です。

撮影順序

一、ミス紅 模範撮影十一谷氏

一宮氏・二川氏・三船氏・四倉氏・五島氏・六郷氏・七尾氏・八田氏・九条氏・十村氏の順。

二、ミス緑 六郷氏から始めて十村氏へ一宮氏から始めて五島氏でおわり。

広間の仮設スタジオは厚いカーテンをめぐらし小さな台を設けてあります。カメラの両脇にライトが二台、用意万端整っています。「こんなに大勢でみていらしちや、私いやだわ」

たじろぐミス紅を、だましすかすようにして台にあげると、十一谷氏は鎖を出して素早



く彼女の手にまきつけました。

「ハイ、そちらの手も」

両手を前で縛ると、胸のあたりを軽く抱くようなポーズをとらせました。サングラスをかけたままで、ややうつむき加減に、スラリとしたミス紅にピッタリしたワンピースが新鮮な美しさです。ライトが点灯されるとネックレス、イヤリングがキラキラと輝きます。

「もう少し顔をあげて、ハイ」

シャッターが切られました。

「この要領でやっていただきます。ではまず一宮氏から始めて下さい。あの方方は客間でくつろいでビールでもおはじめ下さい」

○

客間で男性方は、ビールをのみなから罪のない雑談に興じました。ミス緑は水着の上にコートを羽織って座に連なり、ビールをついであげたりしました。

「どうだい、いいポーズを考えついたかい」

「うん、どんな写真ができるか楽しみだな」

「君はまた十八番のハリツケかい？」

「いやいや、そうとは限らんさ。今は言えない、作品をみて感心するがいい」

「眼かくしか猿轡かどちらかで、顔を半分かくさなければいけないという規則は、こまるな。表情がなくちや写真は生きない」

「だけどそれは仕方がないさ。おい君の番だぜ、早くいけよ」

「では、お先へ」

「どうだ、うまくとれたかい？」

「うん素晴らしいぞ。一等賞はもらった」

「一等は僕だ。君には二等をやる」

「勝手なことを言うな。ところで緑さん、今日はあなたを天井から逆さに吊ってあげますから、そのつもりでいらっしやい」

「あら、そんなひどいこと私いやですわ」

「せいぜい三分間の辛抱ですよ」

「いやいや私、ぜったいいいやよ。ねえ、おねがい。そんなひどいことしないで……」

○

おしやべりをしている間に、次々とスタジオに入ったり出たりして、直ぐ小一時間たちました。

「ミス緑、どうぞ。あなたの番よ」

「アラ、もうそんな？、ハ―イ今行きます。では皆様、どうぞお手柔かに、あまりひどいことなさないでね」

○

仮設スタジオに入りますと、正面のモデル台の上で、ミス紅が十村氏に縛めを解いてもらっているところでした。

「疲れたでしょう。辛かった？」

「ええ少し、でも素敵よ。緑も頑張れ」

「ミス紅、ごくろう様でした。では、かわってミス緑、お化粧よくて？では台に昇ってちようだい」

ミス紫は、映画の監督さんのようにテキパキすすめます。ミス紅と十村氏が退くと、入れかわりに六郷氏が入ってきました。この方が最初に私を写す人です。

「緑ちゃん、コートをぬいで。ハイ、ではミスター六郷、どうぞ」

「そこへ坐って下さい。ええ、靴をはいたままです。身体をもう少し左にむけて、そうです。腰をおとして下さい」

私はカメラに斜めに向って坐りました。ハイヒールをはいたままです。

「両手をうしろにまわして下さい。はい、この鎖のはしをもって下さい。しっかりと」

胸の上から二の腕にかけて、二筋の銀鎖が巻きつけられました。その先を手早く手首にからむと、正面からは銀鎖で二巻き縛られた姿です。鼻から口にかけて黒布で覆われました。猿轡です。アッ、サングラスを外されました。猿轡で大きく顔下半部を包めば、サングラスを外してもよいことになっています。

「ライト、どうぞ」

パツと眩しい光が照射しました。思わず眼をつぶります。

「もう少し顔をあげて。もう少しこちらをむいて。そう、ちよつとその足を外に」

六郷氏は、私の左の足を少し外に引きました。

「顔をあげて。ハイ、シャッター」

カチリ、十一谷氏は黙々と機械を操作して
います。ライトを消しました。

「御苦労様でした」

銀鎖を握って立上りますと、ミス紫がガ
ゼで肌の汗を抑えて下さいました。

次は七尾氏、柱に立縛り。

後手にして胸の上から鎖を二筋かけること
は前と同様ですが、七尾氏は本当に縛ってし
まいました。それから猿轡の黒布を外して、
代りに白布で口鼻を覆いました。猿轡を取
かえる際に、私の顔を全部御覧になりました。
悪い方です。ここで公表します。

足は縛らず自然に立ったままでですが、足の
位置が定まらず、揃えさせたり、位置をかえ

たり色々なさいました。

七尾氏が、やっとすんで鎖を解こうとする
と、八田氏が止めました。

「ああ、そのままで結構です」私は、ずっと
柱に縛られたままです。

「その足をこういう風にひらいて下さい。も
う少し」八田氏はかがんで私の足首をつかみ
左右にひらかせようとしています。左足首を鎖で
床に固定されました。次に右足首をずっと右
へ引いて同じように鎖で床に固定されまし
た。両足を大きくひらかせられて恥しい姿で
す。もたえると手首の鎖が肌に喰ひ込みます。

眼隠しをされました。黒い紗でありますの
でおぼろげに見えます。外から私を見ても、



黒い眼隠しとしか見えないでしょ
う。それから猿轡の白布を外されま
した。

「ライト」

「ア、ちよつとまって」

ミス紫が台上に上ると、私の口紅
を直して下さいました。先程の猿轡
で口紅が剥けたのでしよう。両手両
足を縛られたままで口紅を直しても
らうのは異常な感じでした。

「ありがとう、ミス紫。それから水
着のスカートを引いてネ」

「エエ、いいわ」

ミス紫は、私の水着のスカートを
下に引いて下さいました。けれども、もとも
と短かい形ばかりのスカートですから、覆う
べくもなく恥しい姿のままでカメラのレンズ
に曝されました。

その次の九条氏は壁の際で把手をまわすと
いつの間にか仕掛たのでしよう、天井からする
すると鎖が下りてきました。鎖の先端には吊
金物がついています。

「両手を揃えて前に出して……」

両手を揃えて前に出すと、カチリと両手に
手錠を嵌められました。この手錠は、幅の広
いもので四纏程の幅があり、外側は鉄のクロ
ームメッキですが、内側、つまり肌のあたる
ところにはゴムが貼ってあって、手首の肌を

傷つけないようになっていきます。左右の手首は環で、幅三程の狭さにつながっています。手首の環を、天井から下ってきた吊金物に嵌めて外れないようにされました。

眼隠しを、きつと締め直されました。

きりきりと壁の把手が廻されますと鎖が巻上ってやがて手首がそろそろ上に引上げられます。ライトが照射されました。

きりきり、把手の廻転は止みません。

「あ……」ハイヒールの踵が床を離れました。

爪先丈で身体を支えています。

「ああ！」爪先が床を離れました。完全に手首丈で吊下げられました。手首の痛いこと。

「ハイ」といったら、シヤッターを切って下さい。」

少し下げられましたので、辛うじて爪先が台につきました。

「ああ」「ハイッ」

撮影が済んで吊りをゆるめられると、思わずよろめきました。

「痛かったですか、すみません。でも、お蔭で素晴らしいのとれました。」九条氏が手錠の鍵を外しかけますところへ、十村氏が入ってきました。

「あ、手錠はそのままにしておいて下さい」

「そうですか、ではこれが鍵です」

鍵を渡すと九条氏は退場しました。十村氏は、私も台上に立たせたまま外そうとします。

ん。ああ、また私は吊下げられるのでしょうか？

「ミス紫、ミス緑の汗を、ふいてあげて下さい。」

手錠を外して下されば自分でふけますのにわざと外して下さらない意地悪サン！

十村氏は小腕に抱えた包みを開くと、中から輪のようなものを取り出しました。黒い紗の眼隠しを透してよく見ますと、それは金属で作った幅四程くらいの楕円形の輪で、丁度女のウエスト位の太さで、一端に蝶番がついて開閉できるようになっています。りり？

果して十村氏はその金属の輪を私の細腰に嵌めました……カチリと錠のかかる音。輪の太さは私のウエストにピッタリで、寸法を測って製作したようです。腰錠の前に環がついていて、そこへ手錠の環を繋がれました。後にも鎖がつけられてこれは長く床をはい床の環に固定されました。

黒い眼隠し、中世の姫君が処刑される——そんな気持ちにフツなりました。

十村氏が腰錠を外して去ると、十分間休憩です。

「どう、疲れた？」

「ううん、何ともないわ。それより貴女、大変でしょう。たてつけの照明、進行係は」

「面白いわ」

「紅さん、どうでしたの？」

「すごい縛られ方よ。皆さん、わざとスカートをまくるようになって縛るのよ。」

「まあ、これから先に、あたしの番にはひどい人居て？」

「そうね、〇〇氏かしら。」

「まあ、いやだわ」

○

十一谷氏に呼ばれてスタヂオに戻ると、一宮氏がお待ちかねでした。

一宮氏は細い鎖で後手に縛ると、胸も腰も膝から足首までぐるぐる巻きに縛りあげて、棒のようになった身体を毛皮の上に転がしました。むき出しの肌に毛皮の痛いこと。口には革製嵌口具をがっちり噛まされて……。

二川氏は背後に十字柱をたてて十文字に縛りましたが、どうも形が悪いといって改めてY字型に縛り直しされました。ライトが胸から腕のあたりを灼きつくように照射します。恥かしいこと。黒色の布で眼かくしされていても顔がほてりました。

三船氏は後姿を撮られました。後手に重ねた手首に丁寧に鎖をまきつけ、結目には鍵をかけて……。黒布の猿轡は結目がよい形にならないといって、嵌口具にかえました。でもそのときに私の顔を見ようとなさらない、三船氏は紳士です。

撮影がすんでから鎖の結び目が容易に解けずこまりました。

四倉氏は両手錠の右手にだけ手錠を嵌めて、左手の分は開放したままでぶら下っています。

後の壁に手錠・足錠・大小の鎖・嵌口具・鞭等が一面に吊り下げてあって、その前に立ちすくんでいる姿です。両手で胸をおさえるポーズをとりますと、先程からの激動とライトの熱で、汗はしつとりと水着を湿らして身体が線が一層はつきり露わになっています。恥しさと恐ろしさに立ちすくむ姿を、フィルムに焼付けられました。

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略面の添布をお願いします。

(編集部)

いよいよ最後は五島氏。カメラに向かって横向き、座姿勢、後手に両手錠、両足を前に揃えて足錠。手錠・足錠にはいずれも鎖がついていて床の環に繋いであります。従って立上ることは勿論のこと、足をちぢめることも上体を前に傾けることも出来ません。口は白布で猿轡を噛ませられました。

天井から鎖が下りてきました。顔のすぐ先に吊金具が口をあけています。然し、これは別にどういふということはなく、次の折檻を想像させるアクセサリイでありました。「ハイ、本番あがり。御苦労さまでした」

撮影が全部すむと、大急ぎで現像焼付して随分早くできるのでびっくりしました。これを一同で鑑賞し採点しました。

始めて見る我が身の縛られた様々の姿の写真を眺めることは、ミス紅も私もシヨックでありました。各人が採点した合計点で入賞をきめました。

ミス紅の緊縛姿第一位 六郷氏作品

洋装のまま座り姿、後手縛りブラウスからブラジャーが透けて見える上に銀鎖が二巻き。ハイヒールをはいたまま座っている左足首に足錠―鎖で床の環に固定、スカート乱れてストッキングの上端、ガーターベルトの止具がのぞいている。黒布猿轡。

同第二位

九条氏作品

両手錠、天井より鎖で吊る。両足ハイヒール爪先立、両足首足錠。白布猿轡、背後より撮影。仰向いた髪形、ストッキングの背線が印象的。

同第三位

五島氏作品

私のときと同じ縛り方です。膝を立てて縛られているので、ストッキングは勿論、ガーターベルトもあらわに見えます。

これを一位に推す人もありましたが、スカートの形が少し不自然だという人もあり、結局三位となりました。

ミス緑の緊縛姿、一位二位三位もきまりました。授賞式、乾盃、愉しさに時のうつるのも忘れた夏の夜であります。

編集長様

ミス緑の緊縛姿、一位二位三位をあててごらんあそばせ。いかがですか？

暑さに向う折から呉々も御身おいと下さいます。次の会合が終りましたら、その御報告をまたお便りします。

さようなら。

×

×

◆風俗資料◆

歌舞伎にあらわれた禪美

菅 良 太

江戸文化の爛熟期である文化・文政を頂点として繁栄した江戸歌舞伎は、鶴屋南北や梅田治助のような、頽廃美とエロチシズム作者によって一そう拍車をかけられた。責場・濡

場・殺し場のような刺激的場面を必ず盛り込んで、太平にやや飽きた大江戸の人の心を、苛烈な刺激によって充たそうとした。女形を使つてのエロチシズムの発散については、幾度か歌舞伎研究家によって論じられているので、立役や二枚目の演ずる男性のエロチシズムについて演じるにあたつて、禪美にしばつて問題の焦点を置く事にする。越中禪は水野越前守の天保の改革だともいい、細川越中守の発案ともいわれているが、六尺禪を節約して三尺で事足るようにしたもので、この頃すでに存在していたが、芝居に現れるものはずべて六尺禪を用いているのは、やはりそこに一種の男性美の表現があったからであらう

か。きりりと緊め上げた禪美は、如何なる時代にも美が感じられるが、まして人気役者によつて用いられたものは、男女を問わず喝采されたものであらう。

(一)白禪について 白禪は何といつても禪のオーソドックスなるもので、第一に清潔感といさぎよさがある。「忍逢春雪解」の入谷の三千歳の寮に雪の夜を忍んで来る直侍は、袷を尻からげにし清元の名調子「冴え返る春の寒さにふる雨の……」という浄瑠璃の文句とともに花道に出て、見得を切るあたり、尻からげにした間から、ちらりと覗いた白の前下りは美の極みである。又「色彩刈豆」土橋のかさねに出てくる興右エ門の黒羽二重の下からのぞく白い素足と禪、「明鳥」の浦里雪責の場に、黒堀を越えてくる時次郎の禪など、白の魅力はかぎりない。「与話情浮名横櫛」玄治店の

強請の場の与三郎が「お富久しぶりだなあ」と股を開いてあぐらをかく処の禪は、かなり露わに見える。この場、源左エ門に颯り斬りにされた傷が、内股に×型にあるのが見えるのはいたいたしいが又、魅力でもある。内股の傷は、いかにも性的刑罰を暗示していて面白い。弁天小僧も緋縮緬の蹴出しを捲ると、純白な禪が見えるのは異様な魅力である。歌舞伎には裸になる場面は少いが「菅原伝授手習鑑」の「道明寺」の水奴が花道で着物を脱ぎ、六尺一つの裸になる場面がある。この役は軽い役のようで、いつも人気俳優が演じているのは、こうしたもうけ場面があるからであらう。黙阿弥の「夢市蔵」という、あまりやらない芝居で、市蔵の自分が悪侍の邸に捕われ六尺禪一本にされ縛られ、折助に割竹で打たれる場面があり、今の左団次が六代目、生前の頃やったが、男の責場として印象に残る場面だった。新派で時々やる鏡花の「通夜物語」で丁山華魁とその愛人玉川清とが強請に行く処で、純情な清が、もじもじしていると丁山が「あぐらをかくんだよ。何だね、だらしない。それでも男かい」というと、清が「六尺禪をしていらあ」と答える。すると丁山が「六尺がゆるんでいたら、丁山が暇をつかわす」という、興味ある科白のやりとりがあり、柳永二郎と花柳章太郎の

意気がびったり合った芝居があったが、禪問答だけに一そう面白かった。

(二) 赤禪について

文化・文政の伊達を誇つ

ていた頃。緋縮緬の禪を極めて裾をまくり、大路を濶歩していた町奴などいたそうだが芝居に出てくるのは先ず歌舞伎十八番の「助六」である。花道で傘の振りをして大きく開いた股の間から赤い下りが見えるのはいかにも伊達男という感じがする。本舞台で意休に足で煙管を挟み飲ませようとする時、床几の上に片足を上げるが、この処でも赤禪の効果は大きい。後での股ぐりの場面も、くぐる人達の頭に赤い前下りが触わるのは、一寸したマゾ気分であり、通人が扇子で煽いでくぐる処など、ますますマゾ的である。赤禪で何といっても魅力ある狂言は「夏祭浪花鑑」の団七である。住吉鳥居前で釣船の三婦から赤禪をもらって、それを床屋の中で緊め替えて、悪侍の手をねじ上げて出てくる姿は、誰がやっても水際立った男ぶりである。団七に禪をやった三婦が、花道にかかって尻をからげようと

して、前を捲りかけて禪のないことに気づき、裾を下す演技は面白いが、吉右エ門の父の歌六は、怪妙洒脱の至芸であったという。いよいよ長町の殺し場になり団七の茶の弁慶格子浴衣が脱げて、緋縮緬の禪一つの姿で刀を肩にしての見得は有名だが、この芝居ほど禪を効果的に用いたものは少い。俱利伽羅紋々の団七が、髪を散ばらにしての儀兵次との立廻りは、どす黒い蓮池と、黒塚と、すべて黒一色にした中に、団七の白い逞しい肉体と赤い禪は、たしかに歌舞伎図絵である。「白浪五人男」の勢揃の場面、五人の中で南郷力丸だけ赤禪であることを注意していない人が多いらしい。南郷は五人の中で最も男性的な役で他の四人が手拭を肩に掛けているのに対して、南郷だけは首に巻きつけているという、一人だけ変った性格のある役であるが、最後の見得の時に、裾を大きく捲って赤禪を見せるのも、いかにも男らしくて面白い。その他「助六」に出てくる福山のかつぎは、赤禪の上に福山という紺の法被をきているが、白い肌と赤と紺の色彩の対照は素晴らしい。「はばかりながら六尺の大幅だ」という科白もある。

(三) 黄色の禪

黄色は大体、ちやい場（喜劇的な場面）の道化役に多い。南北の「お染

の七役」に出てくる、丁稚が急死したのを棺から引出して裸にし、臍の上に艾をのせて灸をすえる場面がある。丁稚は、黄色の禪の前下りを長くしている。喜劇的な場面であるにもかかわらず、いささかマゾ的で残酷な場面である。とどのつまり、丁稚は熱さのために息を吹き返すのであるが、黄

色の禪の前をだらりと垂した、おかしみのある科白をいいながら引込んで行く。この他帳尻のバレた番頭が、布子姿で暇を出される場面がよく世話狂言にあるが、必ず黄色の禪をしている。六代目の踊「鳥羽絵」の番頭は浅黄の股引をはいているが、あれなども黄色の禪で出たら鼠とたわむれる場面でも鼠が禪の端をくわえたりして一寸「大津絵」の座頭の禪を犬がくわえるように面白い。効果があるので今後改めたい。

四 浅黄の禪

正確にいうと浅黄の禪という

ものはないが、浅黄がかかった色の柄のある禪を使う芝居がある。「鈴ヶ森」に出てくる雲助や「ひらがな盛衰記」の逆櫓の場に出てくる漁師など、浅黄の剃身紋を使うのが例になっている。「矢口の渡」の頓兵衛も、浅黄を用いている。

以上、気の付いた儘を述べたが、江戸時代の風俗としての禪の使用が、パンツ・猿股を常用する現代にも舞台の上で存在し、更にそれを回顧する人々によって現在でも六尺禪が常用されているのは、伝統を尊重する日本人の一つの風俗的な特徴かも知れない。

この一文が、同好の方の目にとまり、御批判を頂けるだけでなく、更に新しい資料の提供を受けることが出来れば、これに越した幸いはない。

(終)



麦の収穫が終ると、彦造は毎日山の上の開墾に出掛けて行った。おたねも彦造に従って鋤を担いで出て行った。

或る日

「開墾も九分通り出来たので、今日はお京を連れて行って見せてやろう」

と云って京子を促した。

「尾根へ上ると、日本海が見えて、とても気

持ちが良いよ」

と、おたねも口を添えた。

「京子は、そうした分水嶺には行った事がないので、どんな所だろうとひそかに期待しながら、背負い籠に昼飯の用具を入れて二人の後に従った。戸口を出る時に、
「おたね。むこうにはないから、あれを持って行こう」

三條卓史 作並絵

と部屋の間を指さした。そこには朱色の衣紋竹が二本壁に立てかけてあった。それは今では京子とおたねの責めの遊びに、無くてはならない必須の道具になっていた。

「今日はお京に、備後と出雲の国境で、天女の舞を舞わせてやろう」

と、からかいながら彦造は地下足袋を穿いた。

谷川を縫うようにして登ってゆくと道が次第にけわしくなつて、山路に馴れない京子は兎もすれば、彦造とおたねから遅れ勝ちになった。

「おたね。お京を帯で引つ張ってやれよ」

と先頭を歩いていった彦造が、振り返って云うと、

「仕様がないうえ。京さん、あたしが曳いて上げるから早く此処まで登っておいで」

と云いながら、傍の石に腰を下した。

京子が喘ぎながら、おたねの休んでいる処まで登ってゆくと、

「なんだ、汗でびっしりじゃアないの。さあ、衿を拡げて胸をお拭き」

おたねはそう云って、姉さん冠りの手拭を

頭から外してお京に与えた。

「すみません」

京子は呼吸を大きくしながら、紺の着物の衿を大きく開いて胸から腋の下の方まで万遍なく拭いた。汗を拭いたあとの肌に、山の風がすーっと当って、何とも云えない清々しさであった。と突然、彦造が、

「お京。今日は今迄よりもっと変った、面白い責めをするが、いいだろうナ」

良いも悪いもない、どんなにされても京子は、彦造の意の儘になるより外に仕方がないのだ。苦しい息の根も止まるほどに責められて、それでいてその苦痛の足掻きの底に何とも名状のし難い甘美な情感があつて、彦造から暫らく責められないでいると、却って心淋しく自分から責められたいような気分になつてくる近頃の京子であつた。

彼女は返事の代りに頷^{うなづ}きいて、

「えゝ」と小さな声で答えた。この会話は京子の脳神経をキューンと刺激して、彼女は思わず眼を瞑った。

「お前さん。そりや責めているんか、慰んでいるんかい？」

おたねが急に嫉妬まじりの声で云つたので京子は反射的に彦造の顔から視線をそらした。

「おたね。変な口を利かないで早くお京を曳く支度をするがいい」

「細綱はどこにあるの？」

「お京の背中の中だ。綱は肌へ着けるんだぜ、いいか」

「判っているよ。上へずらないように、撞木^{しゅもく}結びにしてやるよ」

「あんまりきつくすると歩けないぜ」

「まかしておいて……」

のけ反り気味に傾いている京子の背の籠から、一束の細綱を取り出したおたねは、京子の前にしやがんでその綱を捌いた。

「あつ、義姉さん。あたし歩きますから、そんなのやめて……」

「まあいいさ。そんなに尻込みしないで、じつとしておいでよ」

京子は、これからおたねによって曳かれようとする自分の奇怪な姿を想像して、思わず顔を赤くしながら頻りに謝まつたが、おたねは

「なぜ、おとなしくしないんだい」

と云いながら、京子の紺の着物の上から彼女の太股を、いやという程つねった。

「きやッ。い、いたいッ」

「お京。大きな声をするな。森の鼻が眼を覚ますぜ」

彦造は指先で、京子の可愛い鼻柱をつまんで捻じ上げた。

「フエーッ」

京子は彦造とおたねの二人に、明るい朝の

山道で責められて、笛の音のような悲鳴をあげて身悶えた。

京子が鼻責めに喘いでいる隙に、おたねは京子の腰に細綱を廻してきつちりと結び止め余った綱をするすると前へ引き出した。

「用意は出来たよ、お前さん。この綱の端はお前さんが持つのかい？」

「どれ、どんな工合だ」

彦造は、おたねから綱の端を受取ると、馬の手綱を絞るようにびーんと引いた。

やつと鼻責を解かれて、急いで衿を合せていた京子は、急に前へのめりそうな腰の衝撃に驚いて、思わず、

「あッ」

と小さく叫んで、本能的に両手で裾前を押えた。

「ハハハハ、こりや面白い猿廻しだ。この綱はお前の胸で曳い行くがいいぜ」

彦造は愉快そうに大声を立てゝ笑いながらおたねの胸元をぐいと両手ではだけ、その綱を彼女の胸の真中に当てゝきりゝと背中で締めて結び止めた。

「お前さん、こんなにきつく締めては、いっそ、あたしが苦しくって歩けやしないじゃないか」

「なアに、道はあとわずかだ。少しは辛抱しなよ」

そう云いながら彦造は、股引のポケットか

ら別の細紐を取り出して、おたねと京子が、二人を繋いだ綱に自由に触れないように、おたねの両手を後手に縛り、京子は左右の手を別々に肩から腋へ担いでいる籠の、担ぎ縄へ腕を折り曲げて縛りつけた。

「さア、大分道草を食った。そろ／＼出掛けようぜ」

彦造はそう云うと、独りで鍬を担いで先に立って歩き出した。

振り仰ぐと、晴れ渡った初夏の山頂に真白い雲が浮んで、どこからか「チツ、チツ」と小鳥の啼き声が聞えて来る。踏み分けて登る岩の間に、山つつじの花が今を盛りと咲きこぼれている。

「おーい」

彦造が立ち止って、変な恰好でよちよちと登って来るおたねと京子に声をかけると、その声が向うの谷間に届いて「おーい」と遠くから刎ね返って来る。下ではおたねが、

「京さん、もっと早くお歩きよ。お前さんの体重で、あたしの胸がこんなにくびれているんだよ」

岩や木の根の多い凸凹の細道を歩くために帯が弛んで裾が乱れて、白い脛が覗いていて夢遊病者か白痴のようなのだらしない着物のこなしを、両手を後ろに縛られているので直しようもない。

一足々々踏みしめて登るおたねの背から、

三メートル程の長さの綱が京子の腰を引いている。

京子が前を登るおたねに接近した時には、綱がたるんでいるが、おたねが進んで反対に京子が遅れた時には、ぴんと張った綱に引張られて腰の重心がくずれてよろめいた。京子は耐えられないような恥かしさを感じた。

——こんな浅間しい恰好を、もし人に見られたらどうしよう。山の奥の奥の、月に一度も人に逢わない深山ではあるけれど、ひよつとして樵夫か旅の人にでも出会ったら籠を担いで姉さん冠りをして、紺の着物の裾を短かく着た女の腰から綱で曳かれていくみじめな姿を、どんな眼で見らるだろう——

そんな事を考えながら京子が片足を岩に掛けた途端、綱がピンと張って、危く転びそうになった。そして、ぐいッとした肌にくたえる衝撃に、京子は息を弾ませながら、

「義姉さん、お願い……もっとゆっくり歩いて……」

と訴えた。

「ハハハハ。二人とも良い恰好だな。ほら、もうすぐだよ。さア、ここから二人を俺が曳いてやろう」

傾斜の強い岩肌の細道を登り切ると、そこはなだらかな草地の高原になっていた。彦造はその境目で二人を待っていた。

「あゝ、疲れた。少し休ませて」

さすがのおたねも、額に汗を滲ませて其処へ腰を下そうとした。

「どうせ休むなら、向うへ着いてゆっくりした方がいい。ここからは歩き良いのだから、もう一息の辛抱だ」

彦造はそう云いながら、おたねの前はだけになっっている扱帯を解いた。

「あら、お前さん。あたしにもするのかわえ？」

「うん、二人曳きだよ。」

「あまりきつくしないでね」

さすがに、おたねも小さな声でそう云うとぽつと頬を染めた。

彦造は、おたねが京子にしたと同じ様におたねの腰を縛り、扱帯の端を鍬と一緒に肩に担いだ。

「さあ、歩け」

町で子供達が遊ぶ汽車遊びのように、京子の腰からおたねの胸へ、さらにおたねの腰から彦造の肩へと緊縛の綱が連なって牽かれてゆく様は、丁度イタリツクのmの字を人間で作ったようである。

今度は、おたねがたまらなかった。

「京さん。もっと早く……お前さん待って……」

おたねは、ぎりぎりに縛られた胸を後ろに曳かれ、腰を前へ牽かれるので、身体の均衡を失って、兎もすれば仰向けさまに倒れそうになった。

やがて視界がひらけて、北には延々とした出雲の広野の向うに、宍道湖と中の海が絵のように泛んで見えた。東には連峯を圧して伯耆大山がくつきりと中天に偉容を現わしその中腹を帯のように白雲が巻いている。南には備後の山脈が幾重にも連なつて、朝の太陽の中に静まっている。見はるかす高原には猫の子一匹の姿もなく、あるはたゞ大自らの静寂のみであつた。

「どうだ、お京。素晴らしい景色だろう」

「まあ、とても素敵。あたし、こんな広々とした景色を見るのは初めてですわ」

開墾地に着いて、綱を解かれた京子とおたねは、額に手を当て、晴れやかな四方の風景を見廻した。

「ここが切り開いた畑だ」

彦造は先に立って、とろとろと十数歩下りた処へ二人を連れて行った。其処には一町以上もある平地の雑草を刈り土を掻き起して石や灌木の根



を掘り取って蕎麦が蒔いてあつた。若緑色のつや／＼しい蕎麦の葉が爽やかな風に揺れて一齊にそよいでいた。

その畑の隅に一本の楓の木があつて、その傍に丸木造りの小屋が建っている。彦造が鋸と釘とで素人細工に造つたもので、中には粗末ながら手製の長い机と腰掛けも三つあつた。

「あんまり感心しなくても良いのよ。この小屋は彦造が京さんとあたしを責めるために作つたんだから」

おたねはそう云つて、小屋の中の道具を指さした。

「そうだ。ほら、あそこの隅に立て掛けてある十字架は、裏手の穴に立てる様になっている。その横のは木馬だ。それから、天井を見る。梁に取り付けてある滑車でお前達は吊られるのだ。柱のあちこちにある鉄の環は、お前たちの肌を緊める役をする。そのほかこの机も椅子も、戸外に造りつけてある柱や柵や、さま

く、な施設もみんなそうだ。俺はここでおたねとお京を、あらゆる方法で責めて、徹底的に責められる喜びに泣く女に仕込んでやろうと思っているんだ」

彦造は真剣な色を顔に表わして、そう二人に云った。

「京さん、こわいよ。彦造は真面目なんだから」

おたねは、京子を脅すように云った。おたねは勿論、彦造に責められる事を望んでおり、彼女の被虐症も大分進んでいたが、それに較べると京子は、まだく初心であった。

たゞ京子の場合、彦造以外に滅多に異性に接することのない山奥に住む日常の生活から、何時の間にか彦造に仄かな愛情を感じるようになっていた。しかし、そこには厳然とした妻という立場のおたねがおり、そのおたねを無視して自分が彦造に愛情を求めることは女として不倫の行為であり、且つそれほど積極性のある性格でもなかった。彦造が彼女に時折加える責めの触手によって、僅かに自分を慰めていた。であるから京子には責められる苦痛そのものが歓喜ではなくて、責めそのものは堪えがたい苦しさであるが、神経を揺すぶる異性の体臭が彼女の心を妖しく掻き立てるのであった。

「さあ、一通り見学が済んだら、先刻の見晴しの良い高原で、軽い運動をして来よう。お

たねもお京も、着物は、この小屋へ脱いで来いよ」

彦造はそう云うと、衣紋竹と何本かの細綱を提げて出て行った。おたねは素早くさり、と肌から着物を下らせて、黒いパンツ一枚になった。京子はおじくしてしていると、

「京さん早くお脱ぎよ。ホホホ、あたしの前でそんなに顔を赤くしなくてもいいよ。まあ、湯文字姿でも良いだろうよ」

「義兄さんは裸になれって云ってたけど、叱られやしないかしら」

「どうせ彦造に、好きなようにされるんだから構やしないだろう……さあ、お出でよ」

おたねは、腰にピッタリ合ったメリヤスのパンツ。京子は、桃色の腰巻一つという姿で小屋を出た。澄み切った青空に白いちぎれ雲が片々と浮んで、まぶしいような太陽が輝いていた。

備後の山々と日本海の見える高原の草原には、彦造が煙草を吸いながら二人を待っていた。

「おそかったじやないか」

彦造は待兼ねたと云わんばかりして、二人を後手に縛った。

「こんなに展けた場所で、遠くの方からでも丸見えじやアないの」

「誰も見て居りはせんよ。また人が見たって構わんじやアないか。他人様に迷惑のかかる

事をしているんじやあるまいし、俺達は自由な天地で浩然の気を養おうとしているんだ。

いいか、これから二人は、向うに見える一本松の元を廻って帰って来るんだ、よいか競走だぜ。遅れた方には罰を加える——そら、ようい、どん」

中国山脈の山嶺の高原に、若い女が二人、両手を結えられて、髪を風になびかせながら走っている。

彦造はごろりと草の上に寝そべって、面白そうに眼で二人の姿を追っていた。

やがて胸を波打たせ、息を弾ませながら京子が帰って来た。おねは自分おくれれている。

「おーい、早く走れ。もっと、もっと」

彦造は、おたねを促した。彦造は、わざとおたねが息苦しくなるように、京子よりきつく縛っておいたのだ。おたねが、額に汗を浮かべながら帰って来ると、

「お前の負けだぜ。いいか、この紐を解いてやるから、其処へ四つ這いになれ」

と、休む間も与えなかった。

「うんと肱を伸ばして腰を高く、そうだ。お京、おまえその衣紋竹で、おたねの尻をぶつんだ。力一パイぶつんだぜ」

「あらッ、義兄さん。あたし、義姉さんを打つなんて……」

「俺の云う事をきくんだ」

「だって」

「ぶたないかッ」

「ああ……義姉さん。かんにんして」

京子は及び腰になりながら、眼をつむって衣紋竹を振り下した。

「駄目だな、そんな恰好じゃ……もうよい。俺がやる」

彦造は京子を横へ押しやると、衣紋竹を振り上げて、おたねの尻を斜め後ろから発止と打った。

「ひえッ」

おたねは、ガバと肱を折って大地に俯伏して、まるで蛙をぶつつけたようになった。

「なんだ、これ位で立てないのか」

おたねは草を掴んで、必死で再び尻を持上げると、

「やッ」

と云う声と共に、ピシッと激しい第二の棒が飛んで来た。

「ああッ」

べたんと身体を大地に投げ出して、身体をのたうたせるおたね。

「義兄さんッ、もう許してあげて」

京子は、三度目の棒を振り上げた彦造の腕に縋って哀願した。

「ふん、まあ次ぎの競争もあるから、罰はこれ位にしておくか」

そう云って、衣紋竹をボンと傍へ投げ出して腰を下した。

「義姉さん、痛む？」

京子は、俯伏せになって身体を波打たせている、おたねの耳許で囁いた。

「いいよ、暫らくこの儘にしといて」

陽に蒸された草いきれが、おたねの鼻に快よく匂っていた。

「さあ、次ぎはお前達が小学校の運動会でやった綱引きだ。二人共立って——」

おたねが京子に勞わられながら立ち上り、肩を並べて立つと、彦造は二メートル余りの細綱を二本取り出して二人に渡した。

「その綱でお前達の腹を括るんだ。綱は真中を使っちゃいけないぜ。片っ方の端は長く垂らして置け」

「これでいいの？」

おたねが、結んだ綱をちよつと上げて彦造に見せると、

「なアんだ、弛んでしまっているじやアないか、この位に緊めるんだ」

彦造はそう云いながら、もじもじしている京子の手から綱を取ると、彼女の腰巻の上から臍のあたりを真一文字にきっちりと緊めて前で結び止めた。そして、

「お京はこっちだ」

と脇腹を押すようにして、おたねの後へ背中合せに立たせ、

「二人とも、手を後に廻しな」

と云って、京子とおたねをそれ／＼後手に

縛り上げた。そして二人の腹から垂れ下って草の上に尾を曳いている綱の端を取ると、二本の綱を固く結んだ。そうして置いて今度は附近の草むらから、二本の枯れ枝を取って来て三メートル位宛離れた地上に突き立てた。

「さア、これで綱引きの用意は出来た。頑張つて、あの枯れ枝の処まで引っ張って行った方が勝だ。いいかい、負けた方は、例によって罰を喰わせるぜ。さア、引き方始めッ。い、ち、にい、さん」

彦造の掛け声で、二人は二、三步踏み出した。目標の枯れ枝は二人のすぐ眼の前にあった。そして、ほんの一と踏ん張りで其処まで行けそうであつたが、二人ともそう思つて力を入れているので、一歩前へ進む事が容易でない。

おたねも京子も肩を落し、前のめりになつて呼吸を弾ませた。

「なアんだ、ちつとも動かないじやないか、それッ、二人とも、元気を出して、よいしょッ、よいしょッ」

彦造は拍子を取りながら、おたねと京子の間にビーンと張っている綱の中程を、衣紋竹でボン／＼叩いた。

白日の高原で、遅ましい一人の男の中に、二人の若い女が半裸の姿で綱引きに呼吸を弾ませているさまは、まるで木霊の精が戯れているようであつた。

初めのうちは力が伯仲して二人共動かなかったが、何と云っても畑で鍛えたおたねと、町育ちの京子とでは比較にならない。ずるずると後ろざまに曳かれて、やがて最後の一步をおたねが、ぐんと引いて、枯れ枝の傍へ足を着けた途端、

「あゝッ」

と曳かれた反動で、京子は後ろざまに引つ繰り返ってしまった。京子の完全な敗北である。

「よし、勝負はきまった。お京の負けだな」

そう云いながら彦造は、おたねの後ろ手を解いた。そしておたねに向って、

「お前の腹の綱を解いて肩に担げ。その綱でお京をそのまゝ後ろざまに肩から曳くんだ。そして俺が前からお京に罰を加える」

そう云って、傍の二本の衣紋竹を取り上げた。

「あゝ、義姉さん。引かないで……」

おたねの肩に曳かれる綱の衝撃に、京子は爪足立って上体を反らした。その反った胸に二本の衣紋竹を横に押し当てて、ぐいッと挟んで締めつけると、

「ふエーッ」

と妖しい悲鳴をあげ、上体を左右に激しく振って、その責めから逃れようと必死に藻掻いたが、彦造は、

「どうだ。罰もまた楽し、だろう」

と、からからように云いながら緊めては弛め、又前より一きわ力を籠めて締めつけた。

「おたね、そのまゝ屈めよ」

「重いよ、京さんは」

「俺が助けてやる」

おたねは京子の腰綱を肩で引いたまゝ、そろ／＼と腰をかかめていった。彦造は胸を挟んだ。二本の棒で、京子の上体が起き上らないように押え込んだ。

「うエーッ、や、やめてッ」

腰綱一本で宙に吊り上げられようとする肉体の苦痛に、京子は爪先で立って喚いたが、

「おたねにおんぶして貰うんだ。騒ぐな」

と云いながら、彦造は京子の踵を持って押し上げると、おたねは一寸よろめいたが、やがて完全に京子を前かゝみに背に乗せた恰好になった。

彦造は、おたねが肩から引いている綱をそのまゝ、おたねの胸から京子の胸へぐると廻して、京子がおたねの背中から滑り落ちないように繋ぎ止めた。そして、

「おたねは両手をついておれ」

と云って、彼女を四ツ這いにさせた。

「お京ッ、足を上げろ」

「あゝ、ゆるして……」

お京は、四ツ這いになったおたねの背中へ仰向けに縛られて、眩しい太陽を全身に浴びながら、備後の山と出雲の村落と、日本海の

見える晴れ／＼しい場所で、あからさまに責められようとしているのだ。彼女は彦造に必死に哀願したが、

「駄目だッ、云う通りにしろ」

「お願い……」

「上げないか、おいッ」

彦造が、いら立って衣紋竹を振り上げた。

「ああッ」

京子が絶望に似た叫びをあげて、両の足を斜め上にスッと伸ばした。澄み渡った紺碧の空にすんなりした脚線が美しく浮び上った。

「そうだ。じつとそうしているんだ。もうい」と云うまで、足を降しちやいけないうぜ」

彦造はそういいながら、哀れな姿の二人の周囲を、ゆっくりと一巡した。形の良い唇を噛み締めて、後手の不自由な肢態で、必死に重心をとり乍ら、両足を伸ばしている京子、その下でズッシリと重い体重を背に受けて、懸命になって四肢を踏張っているおたね、彦造にはこの白肌の重ね餅が、何よりも美しく感じられるのだった。お京の胸でコンモリとした双丘が苦悶を現して、大きく喘いでいる、それはまるで、それ自体が独立した生物の様である。

ビシッとして衣紋竹が、足を高く上げている京子の胸に鳴った。

「ひエーッ」

京子の悲鳴と共に、宙に伸びている二本の

私の女性下着

コレクション

小野

猛

云う迄もなく私は女性下着マニアだが、最近女性下着の記事がめっきり減った様に思われるので、マニヤ各位の奮起を促す意

味で私のコレクションを一寸紹介してみよう。御希望の向きがあらば御覧に入れてもいい。

先ず枚数からいうと、ブラジャー十三枚、コルセット十二枚、ガーター・ベルト八枚、ウエスト・ニッパ三枚、スリッパ十八枚、キヤミソール八枚、ベチコート十枚、フレイヤー・パンティ十二枚、パンティ（フリー）は実に六十四枚、メンス・バンド三枚、ネグリジエ三枚、合計一五四枚となっている。

先日、部屋中に何本かの紐を縦横に張渡して、手持のフアンデーション、ランジェリー等を全部吊してみたが、実に壮観の極みであった。色といえはあらゆる色が揃っているし、生地が違ったものや型が進歩したりすると直ぐ買って来た訳だから、経済的に多少余裕があるとはいふものの、価格に見積れば大変なものである。私だっ

足がぶる／＼と痙攣した。彦造は京子の白く輝やく足に憑かれたように、何度も彼女の胸へ衣紋竹を振り下した。その度に京子は、妖しい悲鳴をあげて絶叫し身悶えした。

「そら／＼足が下りる。足を下ろすとその足が折れるぞ」

「ウエーン」と京子は、胸の痛みをこらえながら必死で又、足を上げた。

ピシッと今度は、竹がおたねを打った。京

子と交互に打ち続けた。京子の重みと激しい打撃に耐えかねた、おたねは

「ううッ」

と叫ぶと、其処へべったりと這いつくばってしまった。

「意久地のない奴だ」

彦造はそう云うと、低くなった京子の上へ地下足袋のまま片足をのせた。

おたねの背中へ後手縛りで乗せられ、腹の

上を彦造に踏みつけられた京子は、もう悲鳴をあげる気力もなく眼を瞑り、わずかに頸を左右に振って、彦造の果てしもない責めに身を委せていた。

おたねは、京子と彦造の二人の重圧に喘ぎつつも、この次に自分に加えられる彦造の責めを秘かに希いながら、じっと草の匂いを嗅いでいた。

どこかで蟬が、じじーツと鳴いていた。

応は紳士用の下着も揃えてはいるが、それはよそ行き用のもので普段は殆んど使用した事がない。ワイシャツの下はすべて婦人用のものを着用している。それも白や淡いピンクなどよりも、真紅のものが好みなのだから困りものである。

盛装したい気持ちになった時は、正式にブラジャー、コルセットから始めて、ブリーフとパンティ、最後にスリッパとくるが全部、赤系統でないと気が済まない。併し普段はガーター・ベルトにパンティ、スリッパだけで済ましている。パンティも普通の七色ではなく、物語つき（例えば日曜はお休みの日と云うので、寝ている刺繍が美しくつけてある）のを愛用するが、どうしても赤のものを多用してしまう。生地からいえばナイロン製品が圧倒的に多いが、今評判のオーロラ・カラーのパンティとスリッパは圧巻で、同好の士には是非見せて上げたい。カスリ織で、色々な糸を織り込み虹の様に変化のある色をつくり上げ、上に何を着ても下に同系統の色があるので映りが良い処がミソなのだが、一寸高価なのが玉にキズ。

私は何時も思うのだが、女性達は下着を夏向きと冬向きとに別けて、やれスリーマ

ー、やれ何とかシャツと心配しているが、夏冬でそんな差をつけないで、簡単に済ませる習慣をつけたら、どうだと云う事である。

私の体験からすれば、東京近在だったら真冬でも上に着るものさえ調節すれば、下はスリッパだけでも案外平気なものである。一度に薄着をしようとする風邪を引くが、徐々に馴らして行けばいいのであって、色々なシャツを買わずにその費用を、パンティやブラジャー、スリッパなどに廻して上等なものを買った方が健康にも良いし、自分でも楽しいのではないかと思う。この点についてライターの犬内順子さんも私と同様な事を述べておられた。

下着は勿論、誰にも見せるものでもないから、男でも一寸注意さえすれば滅多に人に気付かれるものではない。男性にアッピールする様な、女性専用の派手なものを始終身につけていると云う自己意識は仲々捨て難いし、誰にも見えない処におしやれしているという気持ち、何かひどく身分不相応に贅沢を愉しんでいると云った様な気持は一寸マニヤでなければ理解して戴けまい。暑くなると冬のように盛装出来なくなるのは淋しいが、夜、部屋へ這入れれば、パンティとスリッパだけの姿でいられるのだから相殺である。勿論斯うした事は、妻の協力な

しでは何時迄も人に知られずには済まないが、その点妻も良く理解してくれている。

読者には煩しいかも知れないが今、私の愛用しているものを列挙してみると、ブラジャーはスリ・イン・ワンで、これはブラジャー、ウエスト・ニッパ、ガーター・ベルトの三役を兼ねたもので、キヤップには薄手のパットを縫い込み、前身頃に花柄のナイロン・タフタ、後身頃には弾力性のあるナイロン・ゴムを使用した華麗なもので、若々しいシースなドレス・アッブに好適と思われるものである。

コルセットでは、フロント・パネル型のパワーネット・コルセットが好きで、これは強靱な網状ゴムを使用したもので、ハイ・ウエストになっているから、ニッパの役目も兼ねているのだらうと思われる。

ガーター・ベルトは、生地はナイロン・タフタに可憐な小花の三色刺繍をあしらったもので、ピンクの糸レースで縁取りし、前身頃は中央に優美なナイロン・レースの施したもので七吋あり、三本のボーンによって腹部を心地よく押えている。これは初めのうちこそ少々苦しかったが、慣れてくるとこれなしでは僅かの間もいらなくなってしまう。

シユミーズでは、ラバニットが好きだ。

これは柔い総ゴム製だから、どんな体型にでもびったりし、ソフトな緊縛感を楽しむ事が出来る。

スリッパは後中心にスリットのあるタイト型で、アセテート・トリコットを主材料とした真紅のものを常用しているが、キヤップにはナイロン・トリコットに刺繍があり、裾には広巾のナイロン・ブリーツをあしらったもので、ステテコの代用になっているが、ズボンの下から脚に絡みつく感触が爽やかで、穿心地の良いものである。

ネグリジエは、薄紫のアセテート・デシで清楚な感じを出したものを妻が、ナイロン・トリコットの胸元に豪華なトリミングを施したピンク色を私が着用しているが非常に暖かく、夏になったら恐らく暑くてやり切れまいと思われる。

最後にブリーフとパンティだが、これは前にも述べた様に、豪華な刺繍のある真紅のナイロンものの以外余り用いた事はないが生ナイロン（ナイロン・レースに使っている完全透明なもの）の赤がどうしても入手出来なかった時、白を染めたのだが、その時ひどく嬉しかった事を覚えている。これは露出趣味の人なら知らぬ事だが、男が使用した場合、どうもグロテスクな感じを免れない。またキヤロットも時々着用してい

るが、これは凄く短く股の繰り上った、一見三角褌としか見えない様な、脇などそこそ五種位しかないものだが、強く上に引上げると心地良く引締って嬉しいものだ。

また私が紳士用ブリーフを買った時、トリコットのものには既に相当きつい裾ゴムが入っていたのに安心して、直ぐ様、殆んどの婦人用パンティのそれを、脱ぐとクッキリ跡のつく様なきついものに代えてしまった。時々指で弾いては満足している訳なのだが、ロマンチックな夢を刺戟して結構嬉しいものである。

フレイヤー・パンティは、総ナイロン・レースの豪華なもので七色あって実に美しいが、妻がひどく気に入ってしまつて、専ら妻の愛用する処となっている。

これ等のものだけで、ダンス一本そっくりあるが、パンティとスリッパだけは妻と共用である。他のものは、妻も一応は着てみたものの、サイズが合わないもので、別を持つ事になった訳である。妻は、またひどい発汗性なので、下着だけは毎日代えなければ気が済まず、私も少くとも三日目には取り代えるから、下着の洗濯は私の受持ちになっている関係上、これも仲々大変な、併し嬉しい仕事の一つになっている。

また、私は仕事の関係で外出が多いので一カ月のうちには、少くとも都内の各デパートを一巡出来るから、その折々に、新規なものがあれば買求めてくるのが非常に楽しみになっているのだが、最近では増加の能率がめっきり落ちてしまった。

合計、一五四枚の下着は、全部私が妻にとの名目で随分羞しい思いを我慢して、三年間に亘って買蒐めたものだが、それだけに夫々皆楽しい思い出がある。我慢ではないが、先ず美人の部類に入る妻の体臭を、思いきり吸い込んだ下着がダンスに一杯。マニヤの垂涎ものだろうと秘かに優越を感じている。

結論とすれば、私は決して汚物嗜好症ではないので、不潔な真似もせず、また此の蒐集癖の為に浮気する気も起らない私を、妻は反って喜んでゐる様だ。

男性でありなが、女性の下着に執着することは、世間的に観て確かに異常ではある。けれど、社会に害を及ぼさず、他人に少しも迷惑をかけずに、自分の性向を慰め満足し、然も、家庭円満の一助にもなるのだから聊かも恥じる点はないと自負している。

(おわり)

◎ 本誌百号突破記念『懸賞募集原稿』入選作品 ◎

身悶える妖精

路 加 比 利

夕日に映えるミモザの花

昔、ゾンネ公の国境に程近い、クラウデル山脈の麓に羊飼の一家がのどかな毎日を送っていた。その一人娘ゼルミーの可愛らしさは特別だった。ヴェッセル湖の水より澄んだ蒼い瞳、グミの実のように赤い唇、真珠の玉を並べたような歯、豊かな胸、細い胴、男の心を悩ます腰、かもしかのような見事な脚、「夕日に映えるミモザの花」と近在の若者達がほめそやす柔らかな金色の長い髪、何処かの国の王女様が間違って現われたように全くもったいない程、素晴らしい娘だった。

若者達が、こぞって彼女の気に入りそうな贈物をかかえて日参す

るのも無理は無かった。だがなぜか此頃、娘はいくらちやほやされても、どんな素敵なものを持っても見向きもしなくなって仕舞った。「将を射んとせば馬を射よ」とのたとえのように、娘の親の御気嫌を取り結ぶ者も多かった。母親は口ぐせのように、

「ゼルミー、お前も年頃だし、そろ／＼結婚しなくちやいけないよ。誰が好きなんだい。お前の気に入る人の所へ嫁って良いんだよ」と云うのだったが、娘はその度に桜色の頬をバラ色に変えて、こそ／＼と逃げて行って仕舞うのだった。

娘の胸に秘められたいとしい殿御、それは近所の若者達では無かった。丁度一年前の今頃、やはりミモザの花が黄金色に咲きこぼれている時の事だった。草摘みに行った娘は、前の草原の彼方に馬を

飛ばせている一人の騎士の姿を見附けた。

「又、狩でもしているのかしら」

娘が立ち上ると、馬上の人も彼女の姿に気が附いたと見え、手綱を取り直すと、一散に娘の方に馬を馳らせて来るのだった。

「ここは何処じや、娘さんや」

忽ち近ずいた騎士は、馬からとび降りて娘に声を掛けた。

今を盛りと咲き誇る、ミモザの花より美しい輝く衣裳を身に纏った若い騎士の姿に、娘は頬を染めて口ごもった。

「こ、此処はゾンネ公領地の国境で御座います」

「ああ、左様か。わたしは隣のグルテン王国のものじやが、狩の途中で道に迷ったらしい。どちらに参ればよろしいか教えて下され、可愛い娘さんや」

娘はます／＼赤くなりながら、細いしなやかな指で遙か彼方の高い岡を差した。とろ／＼と燃える赤い太陽が今まさに沈まんとし、その岡の頂きをあざやかに彩っていた。

「あの岡の向う側がお国ですわ」

「ああ、左様か。それは有難う。所で、このあたりに水を頂ける処はありますか。僕にはぐれて、大変喉が乾いて居りますが……」

娘は、たずさえていた葡萄酒をさし出した。

「もし、こんなものでよろしければ」

騎士は、それをさも美味しそうに飲み干すと

「いや、有難う。お蔭で助かった。これは心ばかりの品じや、受取って下され」

と云いながら、自分の指環を抜き取り、無理に娘の手に握らせ、もう紫色にかすみのかかった岡の方に馬を走らせて行くのだった。

「可愛らしい娘さんや、又お会い出来る日を楽しみにな」

ゼルミーは、自分の手の平に残された指環を、しっかりと握ったまま、だん／＼遠ざかって行くその後姿を、いつまでも見送って

いた。

その時から娘は、人が変わったように、村の若者達に、そっけ無くなつて仕舞つた。

今日も溜息ばかりついている娘の様子を心配した母親が、しつこく縁談をすすめたので、とう／＼ゼルミーは怒り出し母親に悪態をついた。厳しい母親は早速、娘を膝の上に押えつけ、小さい子供に罰を加えるように、ペティコートを捲り上げ、櫛の棒でお尻に仕置を加えたので、彼女は泣きながら森の中に逃げ込んで行った。

大きな木の根元に一人腰を降ろした娘は、一年前の事を思い出し、あの指環を手の平の上に見詰めながら又、一しきり溜息をつき涙を流すのだった。

夕闇が森の中にただよっても、娘は腰を上げようともしなかった。ふくろうが無気味な声で鳴き出し、ざわ／＼と夜風が梢を鳴らした。もう鼻をつままれても解らない程の暗闇が娘を押し包んだ。と突然、暗い森の奥の方がポ／＼と青白く光り出した。娘はそれを見てハッと息をのんだ。恐怖にズーンと背筋が痺れ冷汗が流れた。さすがに娘は慌てて逃げ出そうとしたが、どうした事か、金縛りにでも会ったように身動きも出来なかった。

妖 精 の 悲 願

その光ったものは幹の間をフワ／＼と飛びながら近ずき、娘の目の前にフワリと停まった。螢のように輝く衣を着けた美しい妖精の姿に娘は目を見張った。

「ゼルミー、驚かせてごめんなさい」

その妖精な鈴を振るような声で云った。

「……」

「あなたは悩んでいらっしやるのね。可哀そうに。私は昨日、蜘蛛の巣にかかっているのを助けて頂いた螢の精です。あなたの胸の中

は私に手を取るように解ります。けれど、その恋だけは諦めなさいね」

ゼルミーはやつと心が静まって、その妖精の姿を見詰めた。そう云われれば、昨日の夕方目の前で蜘蛛の網に飛び込んだ螢を何の気なしに糸を切つて放してやつた事を思い出した。

「あなたの欲しいものは何でも差し上げます。だから、あの方の事だけは忘れて下さいね」

娘は首を振った。

「いいえ、駄目です。私だって忘れようと努力しましたわ。それでも益々胸が締めつけられるように苦しくなつて来ますの。毎晩あの方の夢を見ますわ。お名前も解らないあの方の夢を……」

娘は又、涙を浮べたが、急にバツと顔を輝かせた。

「今あなたは、私の望みを叶えて下さるとおっしゃったわね！」

「ええ、それは……」

「そんなら、そんならあの方に一目会わせて下さい」

「それは困りますわ。何か他の事を……」

「いいえ、いや、あの方に、お会い出来ない位なら死んだ方が良いでしょう。ねえ、他には何もありません。ね、お願い……」

その娘の言葉に、妖精は見る／＼顔を曇らせて俯向いた。

「それは出来ないわけではありません。けれど、もしそれを叶えて上げると、きつと恐ろしい事になると思うのよ」

恋の虜になった娘は前後の見境も無く、どんな恐ろしい事が起つても良いからと、無理に妖精に頼み込んだ。

「そんなにおっしゃるのなら、叶えて上げてもらいたいわ。けれどその為には、あなたはとつてもつらい思いをなさなければならぬのよ。」

「どんな事でも我慢しますわ」

妖精は淋しくほほえんだ。

「そう、可哀想な方、ではこちらへいらっしやい」

妖精の手が娘の手に触れる同時に、娘の身体はふわりと立ち上り宙に浮び、手を引かれるままに暗い森の奥深く飛んで行くのだった。やがて遙か先の方が一面青白い光を放つて居るのが見え出した。近づくに、其処には何百とも知れぬ妖精が光りを放つ衣を纏つて集まっているのだった。その明るさで、木々の幹や草花までが一様に青白く浮き出して、この世のものとは思われぬ美しい光景だった。その中央にお腕を伏せたような形の光のかたまりがあり、その上に輝く冠をつけた妖精がじつとゼルミーを見つめていた。

「女王様、連れて参りました」

娘の手を放した妖精はそう報告した。

「私の可愛い部下を助けて下さった方、お礼を云いますよ」

女王はゼルミーに向つてそう云つてから、今度は妖精に声を掛けた。

「お前のお連れした方の望みは思いとどまらせて上げなさい。もし叶えて上げるときつとその方も、お前も破滅するよ」

「ええ、私もそんな気がします……」

娘を連れて来た妖精は淋しい顔で答えた。ゼルミーもさすがにその悩ましげな様子に氣附いた。女王は娘に言葉を掛けた。

「それはこう云う事なのです。もしあなたがどうして望みが叶えられたか人間に喋るとその望みが消えるばかりで無く、その妖精も消えなければならぬのです。その上、あなたの望みを叶えてあげても、その為にはあなたは言葉に云えないような忌まわしい目に合わないければならぬ事が私には良く解るのです」

「それならば大丈夫、私は絶対に他人には云いません。たとえどんな目に会つても……」

恋に盲目となつた娘はそう云い切った。いくら女王や、あの親切な妖精が説き聴かせても娘の言葉は変らなかつた。



「それでは叶えて上げます。そんなに強い御決心なら何でも無いでしょうが、あなたは苦しい試練を受けなければなりませんよ」
 「ええ、どんな苦しい事でもきつと我慢しますわ」
 女王が合図すると、先程の妖精が又娘の手を握った。
 「さあ、ゼルミー。私のいる台に上っていらっしやい。けれど一言も口をきいてはいけませんよ」

れ

女王の言葉に娘はうなずいた。妖精に手を引かれるままにゼルミーはその光のかたまりに近ずいた。
 「いいですが、一寸でも声を出したらおしまいですよ」

娘は一步その光の中に足を入れて思わず後に飛び下った。一寸足の先が触れただけなのに頭のしんまで貫き通すような、熱さとも痛さともつかない凄まじい感じがしたのだった。

「あなたがお利巧なら、諦めた方が良くつてよ」

手を引いている妖精が、そつとゼルミーの耳元で囁いた。娘は無言で首を振ると、今度は目を固く閉じ、息をつめてその光の中に飛び込んで行った。言語に絶する苦しさに娘が失神する時、

「望みは叶えられました。」

と云う女王の声を聴いたような気がした。

地下の拷問室

娘がフツと我にかえった時、先ず目に映ったのは毎晩夢に見たあの若い騎士の横顔だった。突然、その顔が娘の方を向き、アツと驚きの声を上げた。

「お、お前は……」

娘も一瞬言葉が出なかった。

「な、何者だ……」

騎士はゼルミーの頭の上から足先まで目を走らせて、もう一度同じ言葉を繰り返すのだった。娘も何と云って良いか解らずに口をパ

ク／＼と動かしながらかたあたりを見廻したが、あまりの恐ろしい光景に思わず息をのんだ。

床も壁も大きな石を並べただけの窓一つない石室で、得態の知れぬ鎖や歯車が壁の松明のあかりに照らし出されていた。騎士の前には大きな台が据えられて居り、若い女が肌も露わに手足を鉄の金具に留められ、せわしく肩で息をしていた。その向うには髭の濃い男が刺青の腕をだらりと下げて、ゼルミーの方をさも恐ろしいものでも見るように口を開いて見つめていた。

「ゆ、幽霊！」

男は引つったような声を立てた。騎士はその声にハッと我にかえつたように剣に手をかけた。

「何物だ、動くな！」

急に恐ろしくなった娘は、身体を震わせて叫んだ。

「あ、怪しい者ではありません。ゼルミーです。ほら、いつか、ゾネ国境でお会いしました……」

騎士は眉をひそめて娘の顔を覗き込んだ。

「丁度、丁度一年程前の事ですわ。森のはずれで、あなたが馬にお乗りになって、確か狩の途中で……」

娘は上ずった声で、自分の事を思い出させようと喋り続けた。

「あの時、あなたに指環を頂きましたわ……ほら、これが、これがあの時頂いた……」

娘は、せわしく手をポケットに入れて、あの指環を取り出そうとした。

「あ……無い……！」

いつも手の先に触れるあの指環が無い！ゼルミーは慌てて、あちらこちらを捜したが、どこにも見当らなかった。騎士はまだじっと娘の顔を見つめながら、一人言のように云うのだった。

「うん、確かに、そんな事があったようだ。昨年、今頃、そうであ

の時、供にはぐれてサブアイアの指環を渡したっけ……」

「アウセンブルグ殿のお知り合いの方でありますか？」

台の向うの髭の男が、何とも解せぬと云う顔つきで尋ねた。

「うん……。見覚があるような無いような。しかし、それよりも、お前は一体どうやってここに來たのだ？」

「それは……」

娘は云い出してからハッと口をつぐんだ。妖精との約束を思い出したからだ。

「どうして、この何重にも鍵の掛ったこの地下室に入って來られたのだ？」

「……」

「して、何の用で來られたのだ？」

ゼルミーは赤くなって俯向いた。いくら何でも娘の口からそれを云う事は出来なかった。髭の男はさも不思議だと云うように、このやりとりを見ていたが

「しかし、どうやってここへ入って來たのだろう……」

と呟いた。騎士もその言葉に、

「本当にそうじや。こら娘。お前は本当に人間か、もしそうなら一体何処にひそんでいたのだ。誰に頼んで入れてもらったのだ」と娘を睨みつけた。

「そ、それは……あの……」

娘は、どきまぎするだけだった。

「怪しい奴じや、動くな！」

騎士に手首を掴まれたゼルミーは、身体をビクリと慄わせて、首筋のあたりまで赤くなった。そのまま部屋の間隔に連れて行かれ、石の壁に押しつけられ、両手を頑丈な金具で留められた。娘はそんな情けない目に会いながらも、夢に見た殿御に手を触れられたと云うだけで胸がうずき、全身が熱くなるのだった。

しかし髭の男が、娘の細い胴を重い鎖で締め上げた時、ゼルミーは始めて自分が飛んでもない立場に追込まれた事に気が附いた。

「どれを付けて置きましょうか？」

髭面の男がそう云いながら、棚の上から木の箱を重そうに降ろした。大小様々の針や棒にそれ／＼十字架のついた器具が乱雑に入れた。刺青の腕はその中から三本の鎖がついた太い棒を引ずり出し、娘のペティコートの裾を握った。

ハッと娘は足を繕り合わせて身を固くする。騎士はその様子を見ていたが、

「始めからそれでは、曲がない。先ず針で良からう……」

と云いながら、自分で箱の中から十字架のついた短い針を取り上げ、娘の襟元を押し上げた。娘は恥かしさと恐ろしさで息を荒くした。その肩先にブスリと針が刺込まれる。

「アッ……」

押し殺した、小さな悲鳴を上げて娘が身をよじる様子を騎士は熱っぽい目で見守った。

この時代この地方でも魔物に魅入られた女が実際に在って様々な悪事を働くと大真面目に信じられて居り、その魔女を捕えた時に十字架の附いたものを肉体に刺し込んで置けば、一切の魔力を失うものと考えられていたのだった。

「こうして置けば逃げ出せまい。さあ、こちらから早く片附けるが良い」

騎士はそう云うと娘に背を向けて、台にくくりつけられた女の方に歩み寄った。

悶える罪の女

台に寝かされた美しい女は、鑑札を持たずに売春をしたため捕えられ忌わしい拷問を受けていたのだった。こうした売春婦は枕を交

した男の数だけ鞭打たれ、一生消える事の無い焼印をそのお尻に押されるのが当時の刑罰だった。

その女は捕えられた晩、始めて街角に立って、たった一人のお客しか無かったのに、そんな筈は無いと責められ、ゼルミーが突然姿を現わして騎士を驚かせた時は丁度、女が苦しまぎれに三十人位だったと口走った所だった。髭の男はその女の髪を乱暴に掴むと声を荒げた。

「三十人と云ったな。それっぽっちの筈は無い。少くとも五十はある筈だ」

「いいえ、とんでも無い。私は始めて今夜、本当に今夜始めて……」

「未だそんな事を云ってやがる」
刺青の腕が台の上にあった恐ろしい形の責道具を取り上げた。女はそれを見ると恐怖の叫び声を上げ、先刻まで散々いじめ抜かれた生々しい記憶に身体を固くした。その責具が柔肌に触れると同時に、女はもう痛ましい叫び声を上げ、身体をそり返らせしっかり金具で留められた足の指をひきつらせるのだった。

ゼルミーは、台の女が美しい顔を歪めて汗と涙を流して苦悶する浅ましい姿を正視出来ずに固く目を閉じて顔をそむけたが、耳を覆う事は出来なかった。

「あっ、あっ、痛い、痛い、……」

「何、散々いい事をしやがったくせに」

「あっ、あっ、あっ……」

余りの痛々しい声に、ゼルミーははっと目を開いて又慌てて閉じた。恐ろしい拷問具、責められる痛ましい肌……、苦しさに慄える白い肉体……。

女の悲鳴と淫らな男の言葉が交叉して延々と続く。

ゼルミーはいくら聴くまいとしても、それがガン／＼と耳に響き、頭に血がのぼり、自分が責められてでもいるように息をつめ、

全身に力を入れて身体をつっぱらせるのだった。

「どうだ。五十人位はいたろう？」

「あっ、あーっ……」

「未だ白を切るな！」

「ひいっ、ひいっ、いました……いいえ、いません……」

「本当の事を云わないなら……」

今にも死にそうな凄まじい声で、女は泣き喚いた。遂に女は叫ん

だ。

「ゆ、許して、い、居ました。居ました。」

悲鳴が止んで、女の激しい息使いが聞えた。

ゼルミーは恐る／＼目を開いた。肩先に刺されて居る針の痛さが

よみがえった。騎士は燃えるような目でこの拷問を見つめていたが

「グルテン国王の名によって、密淫罪により汝を鞭打五十の刑に処

す。尚、附加刑として烙印を押すものとする。ただちに執行する。」

と宣言した。耐えられぬ苦し

さから逃れたいばかりに身に

覚えのない罪を自白した女は、

呻き声を上げながら、髭の男の

手で着ているものを、剥ぎ取ら

れ、今度は俯伏せに台の上に縛

りつけられた。騎士は壁にずら

りと並んで下がって居る恐ろし

い刑具を眺めまわした。細いも

の、太いもの、九本の尾を持つ

た有名なキヤツオブナインティ

ル、先に鉛の玉のついたもの、

結び目のあるもの、ありとあら

ゆる答鞭の類が揃っていた。騎

士はそのうちから太いしなやか

な鞭をはずして、刺青の手に渡

した。数知れぬ囚人達の汗と血

を絞った革が松明に不気味に光

った。

髭の男は二、三度鋭い音をさ

せて素振りを呉れてから、女の



れ

肉ずいた白い背中に発止と打ちおろした。

「一つ……」

女が絶叫すると一緒にゼルミーも悲鳴を上げて胴に巻かれた鎖を鳴らした。続けて二つ三つ……。暫くは肌を打ちたたき痛々しい音と、その度に女の口から迸る、氣も狂わんばかりの叫び声が続いた。

丸い肩先から背中、更に惱ましい太腿からふくらはぎまで鞭打たれ、女は何度か失神し水をぶっかけられて正氣ずき、又鞭打たれるのだった。二十五回の鞭打が済む頃には、女は声もかすれて、打たれる度に身体を慄わせて呻くだけになった。

その哀れな女を、もう一度台の上で仰向けにするのだった。痛々しい背中が下になった途端、女は身を振り絞った。鞭打たれた皮膚が荒い木に直かに当る苦しさは凄まじく、これも一つの刑罰の役目をしていった。そうして豊かな胸に、腰に又二十五回の鞭打が加えられるのだった。五十回の刑罰が終わった時に女は悶える力も失せ果て、台の上にとらりと身体を投げ出したまま、せい／＼と息を切らせていた。その死んだような女をもう一度台の上で、俯伏せにするとゼルミーの目の前の炉に炭を入れ、髭の男が踏躰を踏み出した。

騎士は女が横わっている台の下から一本の鎧を引ずり出し、先を炭火の中につっ込んだ。パツと火花が散り青白い焰が上り、熱氣がゼルミーの頬をカツとほてらせた。

暫くして刺青の腕がそれを抜き出すと、鎧の先はすき透るようにならぬ焦熱していた。だんだんにさめて、黒い色になった時、男はそれをぐいと女の肌押し当てた。

耳を覆わせる地獄の絶叫、女は台の上でえびのようにはね上り悶絶した。

嗜 虐 の 鬼

ゼルミーが胸をこがした騎士は、グルテン王国ではその名を聴いただけで泣く子も黙ると云われた、アウセンブルグ伯その人だった。伯の罪人糾問と処刑は苛酷を極め、それが婦女子でも一切手心は加えられなかった。苦しい拷問に身に覚えのない罪を着せられ、処刑される者も数多かった。

こんな事もあった。ある人妻に恋した男が手ひどくはねつけられたのを恨んで、魔女だと云って密告した。美しいその人妻は忽ち捕えられ、夫の指しか触れた事の無い身体を恐ろしい拷問吏の手で弄り廻され、夫のやさしい腕の代りに冷たく酷い拷問具に抱かれて身悶えさせられた。それでも魔女では無いと云い張った為、法廷でその実証が行われる事になり、大勢の陪審員の目の前に引き出され、手足を一つに縛められて、水槽の中に投げ込まれた。

「魔女は水に入れても沈まない」

と云う迷信を裏づける為、アウセンブルグ伯は水槽に濃い塩水を入れさせて置いた。その為不自由な身体のまま女は大きな水槽の中に浮き上り、頭迷な判事達は彼女を火刑台に送って仕舞った。遠火でじり／＼と灼かれて泣き叫び、鎖を鳴らして悶死した恐ろしい光景は見る人の目に焼きつき、長い間人々はその話をしては身を震わせた。

又ある時、一人の娘に失恋した若者は、その娘が密かに春をひさいでいると告げたので、娘は身に覚えのない罪を自白せよと、日夜責め虐められた。勝気な娘は柔肌を締め上げられねじ上げられ、地獄の責めに転々と身悶えながらも身の潔白を云い張ったが、遂に足の生爪を一枚／＼起されながら、調書に署名した。強情を張った為、その懲罰も一段と凄まじく、考えただけでも身体が熱くなるような恥かしい恰好に縛りつけられて激しく鞭打たれ、焼印を押されたただけでは許されず、浅ましい裸の姿で町はずれの道端に晒され、身体に蜜を塗られ、群がる蠅と蟻に責め操られる苦しさに気が狂ったよ

うに、泣き声とも笑い声ともつかぬ声で呻きながら二昼夜も放置された。

捕われた犠牲が美しい娘だったりとすると、伯は自分自身手を下して責める事もあったが、そのような時は殊に淫虐な事が行われるようだった。何年前か前、宝石店から首飾りを盗んだジブシー娘が捕えられた時、伯は一人、地下の石室に娘を連れ込んだ。何処をどうされているのか知るよしも無かったが、厚い石の扉の外まで娘の喘ぎ、咽び泣く声が高く低く何日も洩れていた。娘が再び拷問室から現われた時、小麦色の胸には丁度首飾をしたように、灼焼した鎖を押し当てられた痛々しい跡がつけられて居た。既に発狂した娘は、その後も誰かが近づくに及んで居るものを全部脱ぎ捨てて、地面の上にのたうち廻って許しを乞うのだった。このようにアウセンブルグ伯は次ぎ／＼と恐ろしい拷問を考え出し、苦しい刑具を發明し、悶え苦しむ女の浅ましい姿を薄笑いさへ浮べて見守るのだった。伯の石室と云っただけで、人々は眉根をひそめ女達は顔色を変えるのだった。

濡れる拷問台

その恐ろしい地下の石室では髭の男が全身を痛々しい鞭跡で覆われ、「淫売」と大きな焼印を押され、死んだようにだらりとした女を抱えて立ち去った。

ゼルミーはおず／＼と目を開き、騎士が目を輝かせて自分を見つめているのに氣附いて慌わてて又、目を伏せた。長いまつ毛がふえて悩ましかった。女に加えられた凄まじい拷問と刑罰を目の当りに見て、その頬に血の氣は失せて居たが、それでも輝かく程美しい乙女の姿だった。

「娘、本当の事を申すのだぞ」

伯は、今まで女が寝かされていた拷問台にちらと目を走らせて、

娘に声を掛けた。その台は激しい仕置に女が濡らしたのか、ぬら／＼と怪しく光っていた。

「娘御、そなたはどうやってここに入って来たのじゃ？」

「そ、それは申し上げられません。ただ、あなた様に一目お会いしたくて……」

伯は奇妙な顔をして娘の頸に手を掛けて顔を覗き込んだ。

「それならば、尚の事じや、そのわけを話して下され。そなたは確かに、忽然とこの部屋に現われたのじや。そなたこそ、本当の魔法使に違い無い」

「いいえ、私はそんなものでは御座いません。ただ……」

「その魔法をわしに教えて下され、どのような望みもかなえて進ぜるから」

「それは……」

娘は、どうしてもそれを云う事は出来なかった。とう／＼伯は怒りの焰を目の奥に燃やした。

「おだやかに訊ねても云わぬとならば致し方無い。訊くようにして訊いて見る」

娘は忽ち着て居るものを剥ぎ取られ、先程の女のように台の上に寝かされた。

「あつ、許して、私は怪しい者ではありません……そんな……」

伯は先刻の女が泣き叫んで許しを乞うた、あのおぞましい責道具を取り上げた。それこそ、どんな莫連女もその苦しさに耐えられず必ず泥を吐くと云われた、言語に絶する残虐な責具だった。

「あつ、い、痛い……痛っ……」

焼けるような痛みが背筋を貫いた。

「く、苦しい、クッ、クックッ……」

氣も狂わんばかりの苦しさにゼルミーは悶えた。

「あつ……あなたにお会いしたくて……あつ……許して、……本当

に、それだけ……イタ……イタアッ、アッ、アッ……」

息つく暇も無く襲って来る苦しさに喘ぎながらも娘は、切れ／＼に愛の言葉を口走ったが、あまりの苦しさに娘はフツと気が遠くなつた。

「どうして、ここに参った？」

「あつ、云います、云います……、やめて、……やめて、……」

悩乱した娘は叫ぶ。フツと痛みが遠のいた。

「それは……」

「うん、それは」

思わず妖精が……と口に走りそうになつて、娘はハツと気がついた。

「……」

「早く申せ」

又、伯の指が動く。

「あつ、いや、いや、……く、苦しい、……」

「申さぬか？」

「ヒイーツ、イツ、イツ、……」

又残酷な責が繰返される。どのくらい経ったのか、遂に娘は全身に膏汗を流して悶絶した。

気が附いた時、娘は自分の肌に



数本の鎖と責具を繋ぎ合わせた忌わしい拷問具を取りつけられているのを見た。要所要所を巧みに責めつけるように出来たこの器具は鎖で一つに纏められ天井の滑車から下ったロープに結ばれていた。

「許して、……ただあなたの……」

伯が壁の把手を廻すと太いロープはギリ／＼と捲き取られ、見る／＼床に俯伏した娘の身体は引きおこされ棒立ちになり、やがてゆらりと宙吊りに白い足が床から離れた。

「ウ、ウッ……」

忽ち肌に喰込んで来る責具の痛さに、娘は歯を喰いしぼり足の指をひきつらせた。羞恥が消えて、恐怖と苦痛に娘は戦慄した。

一分……二分。じり／＼と苦痛がつおり、耐えられずに身をよじる。ユラリと身体がゆれて、ロープがきしみ激しい痛さが頭の芯に突き刺さった。

「ヒイーツ、……」

身悶えれば身悶える程、その度に責具は柔肌に喰い込んで来る。

「ギヤーツ、……ギヤーツ……」

娘は悲しい殿御の前と云う事も忘れ果て、猫が絞め殺されるような声を出して、泣き喚きながら身悶えた。

伯は静かに把手を緩めた。ズル／＼と

床の上に足がついた娘は、全身をわな／＼と戦慄させ息を切らせていた。責具の間からはみ出した乳首が血を吹きそうに痛々しかった。

「どうじやな娘、まだ強情を張るのか？」

「あ、許して、どうしてもそのわけは云えません……」

又ギリ／＼とロープが鳴って、娘は爪先立ち先程のおぞましい苦しさに身を虐まれた。先刻程急激では無かったが、緩慢にしかし休み無く……

娘の白い身体に脂汗がブツ／＼と吹き出し責具の喰い込んだ乳房や、お尻が真赤に腫れ上って来た。今度はどんなに悲鳴を上げても、身悶えても許してもらえなかった。

「どうじや、白状するか……」

伯は痛々しく充血した娘の肌を血走った目で見つめていた。遂に娘は朦朧とした意識の中で叫んだ

「妖精に頼んで……」

突然、何か爆発でもしたような凄まじい音響を聴いたような気がして、娘は目の前が真暗になった。

妖 精 の 死

もや／＼と黒い煙の渦巻く中から、ボンヤリと光ったものが現われた。妖精……。先刻娘の手を引いたあの美しい妖精が恐怖に顔を歪め、髪を乱して必死に身悶えていた。その腕に銀色に輝く縄が一本からみついている。

二本……三本……。見る間に身体中雁字がらめに縛り上げられた妖精は、足を上にブラリと逆さまに吊り下った。

と針のような毛の生えた真黒な怪物の腕が、妖精の身体を驚づかみにした。

「アーツ」

ゼルミーは夢とも現ともつかぬその光景に、思わず声を上げてハツと気がついた。

朝日が木々の梢を照らし、さわやかな風が娘の金髪をなぶった。小鳥のさえずりが聞える。娘は、林の中に寝ころんでいる自分に気がついて、思わず目をこすった。

「夢だったのかしら……」

呟やいて思わず眉をしかめ、肩先の痛みで眉をしかめた。娘はそこに十字架のついた針が未だ刺し込まれて血が滲んでいるのを見た。ハツと気がつくと、目の前に大きな蜘蛛の巣が朝露を宝石のように輝かせて張られて居り、中程に黒い大きな女郎蜘蛛が手を張っていた。その手の所に蜘蛛糸につつまれた蜚が一匹死んでぶら下がったまま、くる／＼と廻っていた。そしてゼルミーの左手はやはりあの指環をしっかりと握りしめているのだった。

(終)

◎本誌百号突破記念懸賞原稿募集について

本誌通刊第百号突破記念として「懸賞原稿」の募集を広告しましたところ、早速多数の愛読者の方々から御応募を頂き、編集部一同心から感謝いたしております。先月号では入選作品第一回発表として花巻京太郎氏の「お町の最期」を掲載しましたところ好評を得まして、大いに心強く思っております。引続き今月号では路加比利氏の「身悶える妖精」を掲載いたしました故、皆さまの御批判を仰ぎたいと存じます。只今、手元に保留してあります入選候補作品も次々と誌上を飾ってゆきたいと思いますが、入選作品多数の際は、特別号を臨時に増刊いたしますから、何卒奮って御応募下さるよう、心から御待ちいたしております。

△編集部△

十月号 (復刊第十九号)

瀧れい子画集……………瀧れい子・画

演出……………沼牧
正高

一揮亭続記……………内田武男
白人の娘のこと……………樺田荒吉

△創作▽鞭とナイフ……………青葉 模一
お伊勢参り

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

強盗事件に関する新聞記事……南 時夫
 女將と女装の種々責……岸本 青柳
 マヤの黄昏……山川 和男
 ある夢想家の手帖……沼 正三
 マゾヒズムのいさな……黒田 史朗
 マニア通信……宝塚三夫
 魔教団NO.8……土路 草一
 初姿縛られた女優……大河原樹珠
 読者通信……

○四月号（復刊第二十六号）【定価二百円】

口絵

「狼ガ島に捕われた令嬢」瀧 れい子
 縛られた女優たち……阿部 秀
 （危し伊達六十二万石）北沢典子
 （若き日の千葉周作）高木悠子
 （力闘空手打ち第三部）園ゆき子
 面集 屋根裏の秘密室……四馬 孝南
 和装縛り 赤い扱帯……花坂 道子
 緊縛写真「早春賦」……本誌写真部
 洋画「スチール」二題……編集部 選
 米画「ジャワへの順風」肉の嬢人形」

「捕われた令嬢」……水沢 雅美
 十三人目の奴隷……夢原 狂介
 切腹難感とその種々相……須藤 律夫
 私に訴える 愚者の言……貴山 茂
 創作 被虐供養……青葉 模一
 家畜人ヤブー……沼 正三
 ある夢想家の手帖から……沼 正三
 日本印象記 外人の見た女腹切南方 純
 忙中閑お慰み読本……牧 高志
 縛り舞踊放談の巻——

私のアイデア 磔縛り七態……奈加 朗
 時代小説 縄恋草紙……海野 繁郎
 マゾヒズムへのいさな……黒田 史多
 創作 紅山彦……三条 卓史
 最近の時代劇の縛り映画……嵯峨美也子
 棒を使用した女体拘束……久留木 栄
 シナリオとその周囲……黒河 徹也

大映「おけさ鴉」	近藤恵美子	大映「遊侠五人男」	中村玉緒	責絵浴室のPLAY	杉原虹児画	特写真「腰元折檻」	村井知可子	縛り写真「囚衣の女」	大塚啓子嬢	縛り戯画下り藤と坐禪草	南村俊平画	或る御殿女中の「拷問記」	九雅猛比古	話の屑籠	辻村隆	黒田史朗氏に寄せる	原忠正	創作「黒い霧の中で」	黒田史郎	ナースの浣腸日記	岩村美智子	女体風俗(さよならの巻)	牧高志	条痕(じようこん)	榎村奏	誘拐されゆく美少女の詩	菅合はるみ	夕陽に散る華(後篇)	藤山秀緒	私が拾ったアブの種々相	とやま	創作「運命の少女」	鏑峨紀世	創作「紅山彦(四)」	三条卓史	切腹幻想曲	佐藤すみ子	創作「一月明に泣く」	河村操	私のイメージ 憧れの女性	近藤一	研究発表 切腹風土記	壬生三郎	残酷なる女性達	森本愛造	女斗美短歌	土俵四股平	子供の時 浣腸	池田喜代子	古典にみられる男責について	菅良太	懸賞募集原稿入選作品	西田佐代美	創作 お町の最後	花巻京太郎	断層の女	辻村隆	美容病院(完結篇)	久留木栄隆	再びビーチボールの魅力	佐田春雄	緊縛映画連報とその雑感	藤木仙治	魔教団NO8(その五)	土路草一	マゾヒズム百景	馬場好男	今月の縛られた女優達	大河原珠樹	沼正三たより「手帖速報欄」	沼正三	読者通信	
----------	-------	-----------	------	-----------	-------	-----------	-------	------------	-------	-------------	-------	--------------	-------	------	-----	-----------	-----	------------	------	----------	-------	--------------	-----	-----------	-----	-------------	-------	------------	------	-------------	-----	-----------	------	------------	------	-------	-------	------------	-----	--------------	-----	------------	------	---------	------	-------	-------	---------	-------	---------------	-----	------------	-------	----------	-------	------	-----	-----------	-------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	---------	------	------------	-------	---------------	-----	------	--

『妖虫は夜にうごめく』

辻 村 隆

—

ゲイバー『ロッキン』のシスターボーイ、矢野信吾は、夢幻の昏迷から漸やく醒めた。偏頭痛の激しい痛みで顔をしかめて、静かに瞼を開く——。視界は闇。身動きも出来ず、今自分が何者かによって、手足を縛られて狭苦しい場所に押し込められている事に徐々に気付いた。肌にじかに喰い込む縄の痛みは裸の為であろうか——。

だ。信吾は「呀っ！」と声を立て様として、口中一杯につめられた布に舌根をからませ、「ムム」と呻いた。唇を割ってしめつけられた猿轡は、縛られた信吾の自由を完全に奪っていた、

朦朧と『ロッキン』での記憶が、彼の脳裡に蘇がえりつつある、

夕暮れ見馴れぬ客であつたが、さも狂々しげなこの道の通人を装おっていたのに、ついうかうかと心を許して、ジンフィズを奨められる儘、一息に呑み乾して——。

うつつに、その客に抱かれて車中に運ばれた。それからどこをどう走つたのか——。

客は黒眼鏡の庇ベリーの、この種の酒場には不似合の若いなよなよしい男だったが……

信吾はフト現実に帰つた。闇を通して、漆黒に馴れた眼に、微かに一条の光が差し込んでいるのに気付いたからだ。

不自由な体をうごめかせて光に近附く——首筋や額にフンワリと絡みつき、遮ぎるのは絹の感触だった。そうだ、ロッカーに閉じ込められたのか俺は——。

信吾は嗅覚を働かせて、この狭隘な個所に女の体臭と、ウビガンの芳香を感じとった。光の洩れるのは鍵穴からであつた。寸取虫の様にジリジリと光に眼を吸い寄せて行く——

異様な二つの生きもののあられもない姿。
彼の心臓は早鐘のように躍り出した。
途端に女の視線がサッと信吾の覗く鍵穴に注がれる——ニツと物狂ほしい笑みを投げかけて、鍵穴にヒタと眼を吸いつけた信吾の臉を射る様に、半ば嘲笑う様に下唇をグイと突出して秋波を投げてよこした。

微かな信吾の移動を、女は早くも察しているに違いなかった。
女は信吾の眼を意識して、棄ててあった衣服を纏って行く。
信吾は再び啞然とした。何故なれば、その衣服こそ、信吾が纏っていたものに外ならなからだ。彼から剥ぎとったものをそっくり身につけ終って、女は正面きって信吾の視線



の前にすんなりと立つ——。
彼は三度驚愕した。その姿、顔かたち、背恰好、すべてが余りにも普段、鏡に写す自分の姿に相似していたからである。
も一人の自分が、俺をみつめている。——。云い様のない錯誤に捉われて、彼は思わず眼をつぶる——。
細身のマンボズボンにジヤンパーコート、小粋なネクタイ。全く、これは誰が見ても彼の分身に違いなかった。
こうして、世にも奇妙な女性と信吾が、鍵穴を隔てて無言の対決をしている間、もう一人この妖しい雰囲気包まれた部屋に居る筈の男は、地の底からにじみ出る様な、物憂いうめき声を挙げてフロアに転がっている。
た。いや、それは男の自発的行為に出たものでなく、女によって転がされていたと云った方がふさわしい。
女は信吾に合図する様に、視線を投げて寄越すと、これ見よがしに、パンプスの爪先に力を籠めて、男の顔をふみにじる——。
声にならぬうめきが男の口から洩れて、彼はゴロリと横転する。遅ましく肉のしまった

四十年配の男にしては、カラキシ意気地がない。信吾の視線は漸やく部屋の明るさに馴れて、女から視線を移して、男の哀れな姿を凝視する。信吾自身、現在おかれた緊縛の身を忘れて、男の異様な肢態で縛られた姿に思わず息を呑む。

左脚首と左手首。右脚首と右手首がそれぞれ密着して縛りつけられ、どちらにも五、六貫はあろうと云う丸い分銅が結びつけられている。男は立つことはおろか、這うことすらも叶わず、ゴロゴロと重い分銅を曳ずらせてフロアにうごめているのであった。

肩から腰——そして腰にかけて桃色にのたうつ縦横の筋は、男のかたわらに投げ出されてある革靴によって、既に数限りなく、鞭打たれた事をありありと示していた。

男は鞭打ちを甘受したのか———そうに違いないと信吾は考えた。

諸々として、女のなすが儘になっている男は、物憂いうめき声を断続させ乍らも、鞭打たれ、虐げられる事に喜びを感じているのだらう。彼の『ロッケン』に通う客の中に、この様な、鞭打ってくれる女王を渴望する客も交っている事を、信吾は話の端々から薄々知っていた。と、すれば、この男も或いは自分から望んで鞭打たれ、女の靴脚でふみにじられる事に、無上の悦楽を感じているのではなからうか——。こうした信吾の推察を裏書き

するかの様に、女は何か口早に男に叫んだ——。

ノロノロと男は両手でフロアを押しやる様にして、一寸一寸ベッドの端ににじり寄ってくる。待ち構えた様に、女は男の首に真鍮の輪を嵌める。キラキラと金色に輝やく細身の鎖が男の首輪とベッドを繋ぐ——。

女は男の顔が無雑作に持ち上げると、スッポリと黒頭巾を頭に蔽せて、首の辺りでホック止めする。男の頭部は一個の黒いフットボールの様に完全に外界と視野を遮ぎられて、おとなしく微動だにせず、ベッドの端に転がっている。それを見届けて、女がロッカーに近寄る。外からの掛金が外される。呀っと思つた瞬間、信吾の体は、ドサリとロッカーからフロアに転がり出た。

俺は厭だ！ 鞭打ちは勘弁してくれ！ 信吾はもの云えぬ口で叫んでいた。

女はしばし、妖艶な笑みをたたえて、信吾を見下す。パンプスの先でボンと彼の頭を小突く。ピクツとして彼は宙に浮いた縛られた両脚を空間に躍らせる——。

既に信吾の魂は天外を飛んで、余りにも激しい刺激のあふりで生きた心地もなかった。女の手が握られる。徐々にそれが振り上げられて——一曳、ビシリと空を切つて信吾の体すれすれにフロアを叩く——。

——御免よう——、許してくれ……

モグモグと眼に涙を浮べて、信吾は哀願する。突然、女は唖れたカラカラ声で大きく哄笑した。

二

濛々と渦巻く紫煙——、ラヴァー・カム・バック・トウ・ミー、が物憂く仄暗い喧噪の中に流れている。

ソファの片隅のあちこちに、異様な恋が囁やかれ、ゲイハンターがラバーを掻き抱いて口説く、ここはゲイバー『ロッケン』だ——。

矢野信吾は、その爛れた愛慾の渦の中を巧みに泳いでいた。

「今夜の信ちゃんんは特別に綺麗じゃないか」
信吾の馴染の逢阪氏は、通りすがりの信吾の手をグイと引寄せて、ソファに添わせる。

「ネエ、いいだろう。今夜十一時、いつもの処で……」

「え……？」

「何さ、おとぼけで……分ってるだろ——」
「……………」

矢野信吾は、いや、あの妖しい部屋で、巧みに信吾を、麻薬を酒に混ぜておびき寄せ、彼とすり交った女、生駒コマ子は、もう大丈夫と思つた。馴染客の逢阪氏すら見分けのつかぬ今は、どんなに振舞つても絶対見破れるおそれはないだらう。張った乳を極度に強く締め上げ、万端の整いをすませて現われたゴ

マ子である。幸い声はガラガラ声で、これをセーブすると丁度優しい男の声になる。刈り上げて額にバラリと垂らした髪も、計画的なものだった。

逢阪氏を適当にあやし乍ら、コマ子は例の場所の聞き出しにかかった。

「だって、あそこ、感じ悪いんでしょ。オジサマ……」

「失礼しちやうネ、信ちやんは……『Kホテル』は人がジロジロ見てて厭だから『みどり荘』に変えようと云ったの、信ちやんじやないか——」

「ああ、『みどり荘』のこと、あそこならいいわよ。ネエー、オジサマの車にのせていて——」

「いいともさ……」

ストリートでぐいぐいやる逢阪氏は、最早やかなり酔が廻っている様子である。既に信吾とは一二度の関係ではないらしいと、コマ子は察した。酔いにかまかせて又しても逢阪氏の指が、しっこくコマ子にまとわりついてくる。

——今に、驚くな……

コマ子は心の中でニヤリとする。

大都会のどまん中に妖しい雰囲気撒きちらせて、異常な恋人同志は、いつしか一人消え、又一人と減って行く。

ネオンが消えて、時折、遠慮し勝ちのクラ



SANPEI

クシヨンが『ロッケン』の表を通り過ぎる頃コマ子と逢阪氏は纏れる様にその裏口から現われた。

酔いと、今宵の狐奇をのせて、逢阪氏のキ

ヤデラックは、深夜の阪神国道をひた走りに疾走する。信号は既に消えていて、時速は七五キロ——。

甲子園のマンモス球場が大きく闇に浮び上

つて、昼の巨神戦の、あの熱狂が嘘の様である。激しいキシミの音が闇に尾を曳いて車は止まる——

『みどり荘』である。針は午前〇時。

信吾の使う、キスミフアンデーに粧おって紅も薄い。

通された洋間——。

いきなり抱きしめて、唇を寄せようとしてくる逢阪氏を巧みにかわして、

「ねえ、今夜一寸変った遊びしてみない、オジサマ——」とコマ子は甘えかる。

逢阪氏とて、何れは粹人だ。

「いいさ、云って御覧……」

「アタシがオジサマの自由を奪って、オジサマを好きな様にするの。それからオジサマがアタシの自由を奪って、アタシを好きな様にするの。面白いでしょ」

「フーム、変っていて面白いよ。じゃ先ず、アタシが自由を奪われるワケだな——」

「だから、アタシの云う通りしてよ。いい……。じゃ、向うを向いて手を後ろに廻すのよ——」

コマ子は易々諾々の逢阪氏を、素早くガウソンの紐で後手に縛り上げる。どっかとあぐらをかいた彼の両足を組んだ儘、これも縛る。自由を奪われても逢阪氏は、これから始まるコマ子の鞭には、夢にも気がつかない。

こうしておいて、コマ子の態度はガラリと

変った。

いきなり逢阪氏の、半ば薄くなった髪の毛を引っ掴むと、その儘ドタリと仰向けに倒し、啞々と驚く彼の口中へ、彼自身着けていた靴下を俄破と押し込む。水虫のむれた匂いのするので猿轡をかます。

驚愕に呆然となる逢阪氏の面前で、コマ子はスルスルと衣服をかなぐり捨てて、

輝やく白磁の裸身——。手には隠し持ってきた革鞭がしっかと握られている。

信吾がいつの間にか女であった事に、逢阪氏は愈々驚く、と同時に又、女である事に、心の何処かで一抹の安堵感を感じる。

盛り上った乳房を弾ませて、一閃、鞭はヒョウと逢阪氏の肩を弛止と打つ——。

二振り、三振り、見る見るぜい肉にみみず腫れが走って、声にならぬ奇妙なうめき声を発して、彼の体は芋虫の様に右に左に揺れる。

コマ子は今宵の、初めての「見知らぬ男とのスリル」がたまらなく愉快である。

馴れ過ぎた飼犬の、夜毎鞭打たれに通ってくる、泉龍彦にコマ子は飽きがきていた。

苦悶と悦楽に、奇妙に錯綜する。脚下の逢阪氏を、新らしい飼犬にしつける為、息を弾ませて、鞭を振り乍ら、その時フト彼女は部屋に残して来た泉氏と信吾の、二人の身に思いをはせた——。

三

三面鏡に、コマ子の姿が出来上って映っている——。ルーシユを濃く曳き、アイシヤドゥに眉をぼかして、縦から見ても、横から見てもコマ子自身の姿に外ならなかった。パットを入れた胸は快よく張って、一度女になりたいと希う信吾の願望は叶って、黒いナイトドレスの艶やかな肢態に、ひとしきり彼は自己満足に陥っていた。日頃手入れのよい爪先に桃色のマニキュアをして、彼はそつと爪に唇を触れた。

信吾に委された泉氏の肉体を、どうすればよいか、彼は唯々迷う許りである——。

あの男らしい逞ましい肉体に、彼は到底、コマ子の様に鞭の雨を降らせ得なかった——

恐る恐る彼はコマ子の寝室へととって帰す。彼女の出て行き掛けに分銅を外された泉氏は、革手錠のみの姿で、温和しく飼いならされた飼犬の如く、ベッドの端に首輪で繋がれて、主人の戻るのを待っていた。

今をときめく、泉興産の若手専務である事を、信吾は勿論知らない。

オズオズと彼に近寄ると、鞭打たれて桃色に腫れ上った肉体に眉をしかめ、さも痛々しそうに、ためらった後

「お痛くない?……」

そんな優しい声をかけた。驚いた様に泉氏

は顔を上げる。かつてコマ子からついぞ聞いた事のない言葉だ。見る見る彼の静かな白哲の顔に血が昇ってくる。反って激しい屈辱を感じたからだ。彼にとってはコマ子は絶対的な女王の存在であった。鞭打たれ、足の指先を吸い、彼女の芳醇なネクタールに酔う時、彼はコマ子の膝下に伏して、固く固く奴隷の誓いを立てるのだった。

荒々しく兇暴に、動物の様に扱うコマ子に彼は無限の愛情を感じていた。

今、優しい言葉をかけられ、オズオズと見る彼女に、泉氏は単なる女を感じ、そうすると、現在の自分のみじめな姿が、この上もなく彼の自己嫌悪を誘った。

突然、泉氏は巨人ゴーレムが怒り出した時のように、湧然と身内に男の誇りを感じ出してグッと立上ると、繊細な金鎖はわけもなくブツリと首輪の許で切断して、彼は立上った姿の儘で、猛然と彼女に身体ごとぶちつけて行った——。

「手錠を解け！ 首輪を外せ！——」

泉氏は咆哮する。信吾は恐怖に震え乍ら、云われる儘に、馴れぬ手付で革手錠を外し、首輪をとった。ゲイボーイの習性は、時として突然的に、この様な男らしい逞ましさに魅入られるらしい。心の変異が信吾に、泉氏を一瞬、何者にも勝る勇者の凛々しい姿に映ったのである。

泉氏は変貌した彼女の挙作に、半信半疑の眼を据える。併し、彼女は眼を伏せて飽迄弱々しい。俺はこんな女に奴隷となつてかしづいたのか——。

泉氏は段々に怒りを醗酵させる。哀れみを乞う女の眼——。

突——、泉氏は彼女に躍りかかった。絡んでフロアに倒れる。信吾は轟と泉氏の首に両手を巻きつけて、精一杯の愛情の発露を試みる。「偶然が生んだ私の拾った恋だ……」

信吾は、今頃『ロッケン』で泳ぐコマ子に感謝し乍ら、泉氏の胸にヒタと顔を埋めて、コマ子の存在をきれぎれに脳裡に去来させていた。

午前〇時の針が夜光時計の十二の字に重なって、机上のオルゴール時計が、奇妙にも、今頃、『ジブシーの月』のワルツの調べを静かに奏で始めた——。

四

又しても都会の喧噪——。紫煙と洋酒と、異常なる雰囲気——。『ロッケン』

複雑な表情で、逢阪氏がドアを押して人いさきれの中に潜り込んでくる。

視線で信吾を探す。

二人のソファ——。

「非道いよ信ちゃん——。四日前の名譽の傷跡がこれこの通り——」

まくり上げた氏の二の腕に、紫褐色の齒痕——。

「体中ズキズキ。でもサ。あの気持耐らないよ——。今夜どう？」

「……………」

紫煙と洋酒……奇妙な錯誤。

信吾は信吾だったからである——。それで……。夢見る様に彼は、泉氏の逞ましい肉体に思いをはせていた——。

五

突然、ドアが開く——。コマ子はよく眠っていた。軽くいびきを立てて……。

泉氏はあの夜の、変事に心は躍っている。勇敢になつてゐるんだ。

いきなりコマ子の蒲団の上に蔽いかぶさり唇を求めようとする。瞬間コマ子の手が氏の頬に飛ぶ。併し彼は躊躇しない。素早くスタンドが消えて……。

悲鳴と暗斗——。それもやがて静かになつて……。

窓辺から差し込む月光に、マントルピースに投げ出された首輪がキラキラと金色に夜の光をまきちらしていた。

午前〇時——。ジブシーの月が静かに鳴り渡ると、白い手が伸びてすぐ止つて——

静寂の中に、月光が二人の影をくっきりと写し出していた。



読者通信

六月号について雑感二三。口絵では「双丘」と題する愛川悦子嬢の縛りがズバ抜けてよかった。表情に憂いがあり（特に瞳の素晴しさ！）豊艶な肉体は不思議と清純な美感をそそります。姿態、写真の出来上り共に満点、写真部近來の大傑作でしょう。ただ口絵が縛り一辺倒なのは再考してもらいたいです。記事では、佐藤すみ子氏の「春浅き日に——文江の切腹——」が興味をひきました。どぎつい表現を殊更避けて、淡々たる筆の運びの中に、二十二になる女の体臭をむんむんさせながら血の海をのたうち回る姿を描き出し、おられます。目だたないが香りのある、いかなれば鈴蘭のような風

情のある佳作というべきでしょう。毎度挿画の注文で気がひけるのですが、牧高志や三条卓史氏の自作自画は一種独特な風格を備え誠に結構なものです。その他の挿画はどうもお座なりの感が強く気に入りません。若き日の伊藤晴雨画伯のように斯道に打込んだ人の出現を待望してやみません。（神奈川 南方純）

○ 小生は復刊号以来の貴誌の愛読者です。旧刊発行の頃は残念ながら存じておりませんでした。古本屋という古本屋を漁っては大部分古い分も集めました。然しどこを探しても手に入らない号もあります。復刊号は毎月、その豊富な貴画や記事に深く満足して愛読しております。尚、私は大の流腸ファンです。で、七月号の「女体流腸風景十二態」や「流腸連続フォト」という広告の流腸という文字を見ただけでも、心臓がドキドキと高鳴るのを覚えます。確かに、同じ流腸という文字にしても他で見たのと貴誌で見たのでは天地雲泥の差があります。貴誌での流腸という文字はたしかに生きています。七月号で池田喜代子さまの「子供時の流腸」、とても楽しく拝見

させて頂きました。今後共、長短に拘らず流腸の記事を毎月掲載して下さるようお願いいたします。（静岡 吉沢カオル）

○ 私は映画スターの香川京子が好きです。私のイメージとして香川京子が世田谷か杉並かその辺のお屋敷町で夜いきなり横からビストルをつきつけられてハイヤーに乗せられる。彼女の大きな服は恐怖に一そう大きく見開かれる。そして誘拐団の本拠に連れ込まれた京子は両手をしばり上げられる。口

◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他についてお返事いたします。（返信料同封下さい）

く締めつけられる。両脚もきびしく縛られる。彼女の肉づきのよい脚が両足揃えてギツチリと縛られる。あの美しい肌——ストッキングをピッタリ穿いた両脚にビッシリと縄が喰い込む。そしてブラウスのボタンが引きちぎられ、胸から腕に縄がかけられてころがされ

明子、北原三枝。（浦田 紀夫）

○ 女切腹に関する三組の写真、正に落手しました。中でも、えつがが一番よく、モデルさんの表情、切口の画き方など真実を思わせ、実感が出ています。点、感心しました。ただ何となくおかしいので、どこかぬけたところがあると思つてよく見ると、右手の刀の握り方が反対であるのに気がつきました。力の関係から考えて当然、小指の腹が内側に向いて下腹に当たってはいなくてはならぬ。そうでなければ左下腹から右に引

く訳には行かないと思ひますが如何ですか。これがこの写真に今一歩不自然さを感じしめるのではないでしようか。次にお願ひが有りますが、出来れば何時かの機会にこのモデルさんで天然色写真をとつて貰えないだろうかという事。次に何時か原桐咲代のペンネームの画が数回出ましたが、あの画で写真が出来ないであらうか。出来れば三色刷位で、原色が出た画が発表出来ないものだろうかという事です。これに対して御一考頂ければ幸いでありませう。小生の私見によれば、緊縛は或る程度の危険性をはらみます。何故ならば、これは相手の合意なしにでも強行される恐れがありますから、反社会的になり易いとも考えられます。しかし女切腹に対する嗜好は、それが女性自身であれば最悪の場合でも自殺となり、他人に迷惑をかけるにしても危害は及ぼしません男性の場合ですと、相手の女性に切腹を強要する恐れがあるとして、小生自身の経験によれば、相手の同意は事実上、封建社会ならいざ知らず、現在に於ては得られない筈もなく、又それが得られない限り、それは永久に観念の上の事で終り決してそれが一般のサディ

ズムの如く、女性の同意なくして強制する方向にはむかないと思うからであります。男性の女性切腹愛好の中には、多分に精神的な女性の自己に対する献身、積極的な女性自身の気持のない以上、決して一歩も出る気持が起きないという事が十分に云い得ると思ひます。たまたま切腹愛好の男女が出会つた時、現実にこれが実行される事も或は起り得るでしょうが、それにしてもそれは完全に当事者間の完全な同意の上に立つた場合のみで、反社会的とは云い切れない筈です。以上、つまらない事を書きましたが、この意味で到底実行し得ない画空事に終る以上、もつともつと想像力をたくましくしたこの種の文章なり、絵画なり写真なりを、雑誌とは別に準備して頂ければ同好の士を喜ばせる事になると思ひます。創刊以来の女性切腹の記事と写真、画を集めて単行本になさるだけでもして頂ければと望んで居ります。

(岐阜 K・N生)

七月号の「囚衣の女」は読者待望のものでした。モデルに美しい長髪の女性を選んだのも成功でした。ただ難を云えば、眼など少々

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』(略号)

(かん)

四馬孝画 ○伸し責 ○浣腸責 ○苦悶のホルセツト

大中判印画紙焼付 三枚一組 四百円

きつ過ぎる感じで、女囚の哀れさが出なかつたこと。花坂、愛川嬢などが適当だつたのではないでしようか。又、無理に膝をまくつたり胸をはだけたりすることもなかつたのではありませんか。むしろ端正な姿、きちんとした着衣が囚人の哀れさを示すと思ひます。緋はもつと太目のもの、或は二重にするのが惨たらしさが出てよいでしょう。銃殺される女囚が、胸にハート型の標的をつけられ、唇に一輪の花をくわえて処刑されようとする処を、ぜひ美しいモデルによつて発表して頂きたいと思ひます。又、斬首、絞首(身体を吊らなくても、首に太縄をかけて絞首を示す)などを発表して下さい。死刑にはやはり目隠しをさせる方が実感が溢れましよう。又、囚衣を着て色々な本繩の掛け方を示す

(O生)

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』(略号)

(なみ)

四馬孝画 ○胃の洗滌 ○ヒマシ油責

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

しばらく御無沙汰致しました。毎月この欄の投稿は微笑ましくなる程、諸君の威勢のいい掛声は、本の中から皆さんの声が聞えてくるようだ。実に愉快で楽しい。緊縛映画研究が盛んに発表されてきて非常に嬉しい。私が出る幕でなさそうである。色々の方が書いて居られるが、大河原珠樹氏の通信研究は良心的であり、実際に詳しく好感を持つ。名古屋の岩谷氏が書いてあつた「牢獄の姫君」の円山榮子は間違つて居りますから、大河原氏に代つて代弁します。山東照子です。七月号で辻村隆氏の「話の屑籠」は、ゼスチャアたつぷりで映画界をついているので話題になるでしよう。全く面白い書

きつぷりで、話のつなぎ合せの実に巧みなのは驚きますね。辻村氏が云われているように最近の新東宝の緊縛映画は非常に目覚ましいものがあり(内容は別だが)封切作品の大半は緊縛映画にしろられていることは注目値するものがある。躍進新東宝のために、今月号は特に選んでスチールを提供して見ました。次に、私は皆さんのように上手く批評は出来ないが私流に七月号の感想を述べます。四馬孝氏の「一本足の窄衣」は、美女の鼻を見ていると、こちらまで痛くなってくるような。胸のほだけた革紐のアイデアも実際奇抜だ。「縛られた女優たち」の鬼面龍騎隊の岡山栄子の弓折れの責め場はお見事! 田辺啓二氏の手腕を買う(星美智子とは誤り、上の写真)表情と画面の構図の撮り方がウマイ。星美智子のパツチリした目! アップもとても美しい。映画関係の方と一目でわかる。阿部秀氏の作品は少し低調だが、毎月の提供の労をねぎらいましょう。杉原虹児氏の「浴室のPLAY」はSマニアにとって全身がしびれるような巧みな描き方である。「腰元折檻」の辻村隆氏の構成はいつもながら素晴らしい。モデルさ

んが時代劇向きでないのが惜しい。四葉の写真の内、吊し責めの写真は痛々しくてよろしい。マユゲをうまく書かないと不自然でいけない。素顔の方が返って美しいモデルさんではないだろうか。「囚衣の女」新人の大塚啓子嬢のボリウムと髪長の長いのが魅力的である。紐を強く縛ってあつてポーズとしては仲々よろしい。三葉の写真の内、あおむけになつてゐるポーズは、乳房と云いカメラの撮り方と云い申分なし。動物と少女を主題としたドロテスな風変りな取組みは、奇巧に新鮮美を大いに与えましょう。(楓月太郎)

七月号を拝見して、非常に喜ばしく思いました。口絵の素晴らしい「一本足の窄衣」——四馬兄の革の拘束服の魅力は、いまさらの事でも御座いませうが今回は特に特に……。次の「縛られた女優達」いずれも鮮明で、かつシャッター・チャンスもよし。但し右上の「星美智子」は、岡山栄子の誤り。「囚衣の女」は囚の誤りと思ひますが? は小生の待ちわびていたもの。白衣に黒繩のコントラストの美しさ。縛りは本調しかも緊縛感の強さ。股間縛りに

◎新人モデル嬢新作緊縛姿態集

光沢純黒調印画紙(9センチ×13センチ)焼付

新人モデル嬢の中、三人の得意のポーズを選んでここに提供いたします。

愛川悦子嬢の巻

★ベッド変型縛り(略号1) 四枚一組 三〇〇円

ベッド上に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバチックな全裸のポーズは輝くライトに映えて豊かなアクリションをふりまいてゆく。

★全裸強烈縛り(略号2) 四枚一組 三〇〇円

山里離れた温泉宿の一室、硝子窓から洩れる夕陽に照らし出されて縛られた裸身は妖しくゆらめく。

大塚啓子嬢の巻

★股間縛り(略号3) 六枚一組 四〇〇円

まで細心の注意を払いマニヤとして敬服のいたり。モデルの表情、胸をはだけさせた演出ともにダツとイカされた。近來の傑作でしよう。辻村兄の「話の屠籠」中にこの時に写したという笑田先生の。

その美を誇る啓子嬢の肌にひしひしと喰い込む縄目、緊縛マニアの方々に捧げる垂涎万丈の作品。

★全裸縛り(略号4) 五枚一組 三五〇円

豊満な柔肌の全身に喰い入る麻縄の醸し出す妖しい美しさ

田中芳代嬢の巻

★セーラー服縛り(略号5) 五枚一組 三五〇円

可憐な表情、巧みなポーズ、セーラー服をまどつて縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまざなし

★股間しばり(略号6) 四枚一組 三〇〇円

ここに又、新しいモデル嬢の股間しばりをアルバムにお加え下さい。

はりつけ、そらばせ責のフォートも是非是非みせていただきた集号「待遠しいことです。私談になります、近藤一さまに読者通信にて小生のアイデアに

過分のおほめをいただき感謝致しております。それから同じく読者通信中で名古屋の岩谷さまへ、大河原珠樹兄の「縛られた女優たち」の中で、牢獄の姫君の山東昭子、四山栄子ではと御質問でしたが四山栄子は同映画ではラスト近く大砲製作所の水汲娘で出演しておりました。彼女は第三部「天空の白馬」で女問者の正体を現わして活躍します。ですから山東昭子に間違ひありません。彼女の出演映画は「謎の蛇姫屋敷」近く封切られる「驚城の花嫁」などあります。十五才のホープです。

(奈加多須磨尾)

長い旅からいま帰って参りました。待ちに待った七月号を手にとるのさえ悩ましい思いです。五月号につづいて私の拙い作品がのっています。此の「夕陽に散る華」は映画の「戦雲アジアの女王」から思いついたのですが、その為か、今度のさしえは高倉みゆきさんの扮装と寸分違わぬりしい切腹姿、カーキ色の乗馬ズボン、黒革の長靴で乗馬ズボンの前をガバツと開き、苦痛を泳えながら行儀正しく腹を裂いて行く美千代です。その苦痛にゆがむ美貌には、

どこことなく大好きな高倉みゆきさんの倣えのばれて。今日は久々にこれから乗馬に参ります。新しい乗馬服——乗馬倶楽部の中に奇巧の読者がおられたら、きつと一目で私とおわかりになるわ——「夕陽に散る華」の美千代とそっくりの軍服スタイルに身を固めて、馬に誇り、新しい女体切腹の構想をねることにします。終りにいつも私の拙い作品をおほめ下さったり励まして下さる近藤一様、秀緒は御期待に背かぬよう、がんばります。

(藤山秀緒)

最近、男性同志の責めの記事やフォトの少いことは何ともさびしい限りです。もともと多く男性責めの記事を御願ひ致します。青葉慎一様「病者の獄」等、楽しく愛読させて頂いて来たのに何故御止めになるのですか、全く残念なことです。是非再び御執筆願ひします。岡山K・S生様、貴兄は自縛をなさっていられるとの事、何とぞ自縛の方法を教えて下さい、御願ひ致します。兵庫の凡様、私は男子同性愛者で、少しM傾向の者です。同志の友人として意見の交換を致し度く、御便り頂きたく思います。千葉百生様、徳川中期のお百に関する記事拝見致し、お百の出てくる書物の名称を御教え下されば幸いです。(東京山本五郎)

○

七月号に幼稚なる私の黒人奴隷女の画を希望する一文が掲載され感激に堪えません。顧みると、私は奇巧発刊来「奴隷加虐」「残酷なる女性達……(各黒奴篇)」沼正三氏の各「手帖」「家畜人ヤブー」等の文献及び「豹」「笥のあと」等の素晴らしい口絵を愛読してきたのでした。しかし、最近の口絵に四馬孝氏の秀麗なる黒皮責めの足長女が載つても(これには感謝しています)尙、足長の黒人女が載らないのは淋しい限りです。歴史上、法律的、社会的、道徳的に正当である。(二)その歴史たるや花咲くロマンスの白人支配の極彩色である。(三)白人が黒人奴隷女を有用しても心理的に緊張がない。アフリカの野生、又はアメリカで混血した足長の黒奴女を、私は白人紳士となつて、思い切り虐めたい。同好の方のお便り待ちます。

(A生)

○

杉俊夫様へ御呼びかけがありがとうございました。私のような趣味の人は居られないことと少々失望して居りましたが、似たような趣味を御持ちだとのこと、心強い限りです。発表出来るようなイメージではありませんが、御言葉に甘えて下手な文を少々……。大阪の某所に〇〇脱腸院と云うのがあります。脱腸療器、胃下垂療器、脱肛療器、子宮脱療器、製作としてあります。いつも前を通る毎に思うのですが、何と素晴らしい商売?かとうらやましい限りです。いづれも相当な患者が行つて居る様ですが各人の患部に合せて製作して居る様です。私も残念乍ら現在脱腸が全治して居りますので行くことは出来ません。以前なら作つて貰うことも出来たのにと思つて居ります。私がこの仕事をして居ると想像すれば、各人の症例写真を取

女体禪美の緊縛

(9×13センチ) 印画紙焼付

五枚一組 四百円

略号(こん1)

女体の禪美フォト

(9×13センチ) 印画紙焼付

二枚一組 二百円

略号(こん2)

◎浣腸連続フオート◎

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

長らく浣腸フオートの作成を中止しておりましたが、同好者有志の御希望により、ここに久方ぶりに十二枚連続フオートを完成分譲することになりました。マニア垂涎の硝子製浣腸器、エネ

マシリンジ、イルリガートル、いちじく浣腸等を駆使して女体浣腸の雰囲気をついに醸し出しました。何卒絶版にならぬうち御申込のほどを。

モデル：愛川悦子嬢

つたり色々の脱腸帯や其の他の療器を思うさま作ってやりたい等と空想して居ります。全く私の好みはビツタリのことな仕事に就けたら、何と云う幸いかと思います。たとえ一週間でも僕って貰えぬものか等と空想して居ります。幼男には比較的多く見られる脱腸も、大きくなる程、少くなり中々見る機会がありませんが、幼児には大體、三、四十人に一人位の割合で脱腸の子がある様です。又、脱腸帯をしているのは三人に一人位よりない様です。脱腸帯は殆んどがゴム製を使用して居ります。先日十五、六才の子が、この脱腸帯をして居るのを見ましたが、なかなか良いものです。(野原美喜夫)

○

久振りの土俵四股平氏の登場は女斗美フアンの私にとって、この上もない贈物でした。カットの取組む二人の禪一つの女性図は、三十二年一月号の京洛生による「大奥裸女血斗」以来の女性禪姿の画でした。実に久振りの女性禪美図絵でしたが、少々小さく、期待はずれの感もありました。今後は、もう少し迫力のある図柄を望みます。私は禪一つの女性の格闘こそ女斗美の真髓と信じています。他の衣裳では、この美は半減します。例えばパンティとか腰巻、湯もじの類では駄目。京洛生氏の「大奥裸女血斗」も成程、女斗美の一つの形かも知れませんが、私にとっ

ては血みどろな斗いは余り好みません。やはり双方共、何の武器も持たず裸体で組合つて勝負を争つて欲しいものです。血みどろの斗いは余りにも悲惨です。しかし無惨の美を毀してはいけません。しかし無惨の美を好まれる方には、一つの注目されるべきアイデアでしょう。日本製の女性の禪姿には、小生も京洛生と同様なあこがれを持っていました。私は、水も滴る島田雷の女性二人が、一人の男を中に争い、組打ちをして勝負をつける可く相斗い、遂に双方共、疲れ果て倒れるまでを、一つの組画として発表されるんことを願います。艶やかな二人の髪が乱れ、遂には双方勝負のつかぬまま倒れ伏してしまふ図柄を想像しては楽しんでいました。フアンの方々の中で、私のアイデアを生かして下さる方がありましたら、本欄で御便り下さい。

(大阪 英山生)

○

初めて、お便り致します。小生まだ若いS傾向の男性です。若い美少女(高校生位)を縛ってみたいと思うのですが、そんな女性が出来ると言う器用な顔ではないので目下、空想で自分を慰めています。僕の好きな苛め方は、クスグ

リ責めとか、ハナワを使用しての苛めです。また、制服の高校生に大きなオムツカバーをさせ、ハナのハナワに革紐をつけて虐める。そんな空想で夜、床に入ってから、一時間余り過しています。誰か若い女性で僕の相手になって頂けませんか、京都の菅雅子さん、如何ですか？それから編集部に少々御願ひ。近頃、全然僕の好きなオムツカバーや鼻輪等の記事がありませんね。是非お願い致します。空想にまかせて、こんな縛り方は如何ですか？(一)小三角責め、女のハナにハナワを通す。適当な長さのツリ糸で一方の乳首を縛る。ツリ糸の一端をハナワに通して強くしぼり、別の方の乳首を縛る。小さな三角が出来る。(二)大三角責め、ハナにハナワを通す。両脚の先端を一米位開いて一本の棒に固定する。夫々、両脚の外側に棒を縛りつける。次に一方の足首を細紐で縛り、ハナワの中を通し、顔が膝につく位に強く引きしぼって他の方の足首に縛る。以上ですがどうでしょう。よく乳首を縛る絵がありますが、縛られる位に大きいかと思います。写真など見ると不可能な様な気がしますか。

(大阪 佐藤一郎)

○ 岐阜の若柳キミコ様、長らく御無沙汰致しました。貴方の三角フンドシ愛好クラブも、ますますお盛んの事を聞き嬉しく思い、それに負けじと私たちの生活合理化クラブも一生懸命会員を集める一方新作を研究し一週間に一度発表会を開いております。私たちもかつては三角ふんどしをしめて見ました。確かに気持がよく、暖かい日などこれをして会員で出かけた山にキャンプに行ったりしています。貴女のおっしゃる通り三角ふんどしは、もはや男だけでなく立派に女性のショーツやパンティの一種になった様です。私たちのグループも貴女のグループに負けぬ様、新作を研究しておりますが私たちは三角ふんどしでなく、生活合理化クラブで生活に無駄なくする為、下着の機能性、及び外出時間の事を考え、小水等パンティを脱がずに簡単に出来る様なものをどしどし作り会員にはかせ、意見等を聞き改良等もして一週間に一度の会合には自品を使用して、その機能合理性を会員の前で発表しています。作品は全部自分で作るのではありません。私たちが初めに目につけたのは男性用のキル

ターとショーツであるブリーフである。市販されている男性用ブリーフ等を買って求め、これをこれ以上、機能的にする為、もっと短かく股を切りこみ上部も少し切り、レース等もものによりつけますと大変、機能的で男女どちらにも使用でき、はいても快感をあげられます。生地は男物でもメリヤスの極くうす物か、トリコット、レーヨン等が一番良らしいでしょう。又、男物だけでなく女性用のブリーフパンティ等を男女両用に改良しました。これは男性会員に大変喜ばれました。近ごろは、もうスピード時代ですから、いらぬ時間を節約する為、貴女の会でもこれを研究して普及させて下さい。この品を、私たち会員ではブリーチと云っています。ブリーフのブリーチとパンティのブリーチをとったものです。では貴女のグループの繁栄をお祈り致します。

(東京 富永洋子)

○ 私は女性同志の女斗やサド、マゾ、レスボス等には、美しさを感じます。その他には全然興味がありません。女性の被縛姿などは大好物であります。このような結論に到達すると、ヒョットすると

私はサジストかも知れません。又フェチシストでもありそうです。マゾ的要素も全くない訳でもなさそうであります。分析すればする程、何が何だか判らなくなっている程、何故か判らなくなっている程、何故か判らなくなっている程、これは当然であると勝手に思い込んで、自分を無理矢理納得させているような始末であります。兎も角も、確実なる事は、私が女性の

女体緊縛フォト	
G組 大中判印紙画焼付	
1枚 一三〇円	
5枚 六〇〇円	
10枚 一〇〇〇円	(送共)
G1 鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)	
G2 股間縛正面 (高瀬 忍)	
G3 海老晒し (萩千恵子)	
G4 羞紅の椅子 (菅登紀子)	
G5 量感の帯 (伊吹真佐子)	
G6 アイデア (萩千恵子)	
G7 叫喚の森 (伊吹真佐子)	
G8 全裸目隠し (村田那美子)	
G9 優すがた (花坂道子)	
G10 開股一番 (萩千恵子)	
E組 (9×13cm印画紙焼付)	
ES1 ヌード緊縛集 (佐賀)	
ES2 三枚一組 全裸悦唐集 (須川)	二〇〇円
ES3 四枚一組 臀 羞 (佐賀)	二五〇円
ES4 三枚一組 酒宴の弄者 (佐賀)	二〇〇円
ES5 二枚一組 脱がされる娘 (須川)	一五〇円
ES6 五枚一組 五枚一寸前 (佐賀)	三〇〇円
ES7 二枚一組 あわや寸前 (佐賀)	一五〇円
ES8 剥れたズロース (佐賀)	三〇〇円
ES9 五枚一組 乙女のすべて (花坂)	四〇〇円
ES10 七枚一組 女学生の縛り (須川)	一五〇円
ES11 二枚一組 緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)	一五〇円
ES12 六枚一組	三五〇円

◎女体切腹フオト◎

(略号こし)

「腰元自刃」

村井知可子嬢

大中判印画紙焼付
六枚一組 八百円

一生、私の頭の中においてのみ、自由な姿体をとつてくれる女性を構成して自らを慰めるより仕方ないと思つておられます。そう言う方も案外多いと思います。ともあれ私が現在最も求めているのは、マゾ的な女性であります。そんな方と精神的な交際ができれば素晴らしいと思つておられます。お互いのアブ的要素をさらけ出し、つつまじ話し合い、理解できる異性の出現は恐らく私の人生の方向を変えるのではないかとすら思いますが、然し一步退いて考え直すと、仮令マゾ女性と結婚したとしても、お互いに死ぬまで我々はその異常な欲望を心の片隅におし隠して、そ知らぬ顔で、正常人として生存を続けるに違いない事を覚り、何故か淋しい感慨につきまとわれています。

(真崎伸一)

藤山様はじめ切腹グループの方々、如何お過しでしょう。しばらく御無沙汰して居りますが「曼陀羅図絵」の法谷です。最近、素晴

しい女性切腹の絵巻が次々とくりひろげられていますが、ただ数の少ないのがまことに残念ですね。藤山様、私はあなたのあのフアンです。貴方の書かれたいくつもの凄惨な腹裂きの描写は、私を震わせてしまふようです。三十年四月の「飛行服」で始めて目にした貴女の陶酔的な文章に、私の心はどんなにか躍つたことでしょう。つづいて、稽古着姿の自刃に見られる「ドロリと喰み出すまゝに存分に切り廻す」古式の作法。更に「女武者自刃」、こんな素晴らしい切腹絵巻がどこにあるでしょう。書かれてある貴女の……いいえ、雪路や志津の呻き声さえ聞えてくるようです。「探險服姿の女腹切」は私も前に考えていたテーマでしたが、大きな手からも零れる程に切りひらかれた腹腔から、ズルズルと引き出された腸の美しさ無慈悲さは、恐らく貴女の数多い作品の中でも、最も好きなものの一つです。切れぬ刀で腹を裂いて行く「女スパイ」も素晴らしい。そして貴女の

一種の告白の中にあるような簡潔な描写、たとえば、歌手美智一乗馬服姿、林の中に馬を捨てて正十字腹、抉腸、抽出、というようになものにも無限の夢を抱くことが出来ます。どうかこれからも益々素晴らしい切腹の秘帖を書きつづけて行つて下さい。私の「曼陀羅図絵」もストップしたままですが、その中に書き出して見ましょう。今の処、二回位は男の切腹を書き最後は美しい女性の切腹で終るつもりなのですが、本当は貴女に書いて頂きたい位のものです。御連絡の方法がないのは、まことに残念ですが……私の以前書いた「切腹曼陀羅図絵」お読みになつたでしょうか。あの頃は中康氏、田谷氏の研究から「女腹切八景」などという秀れたものがありました。最近、これ等の方々の活躍が少いのは誠に残念ですが、藤山様と並んで青山氏の近作「落日婦士道」「愁風連」何れも凄惨な中にも、

あどけない少女らしさが溢れて秀れたものと感服しています。藤山様始め皆様の御健康をお祈りして居ります。(法谷四郎)

○

久保利子様、お便り嬉しく拝見させて頂きました。小生もかなり以前から、猟奇的な記事や画等を見ると、何か訳の判らぬ興奮に襲われて、種々の空想に耽り満足して居りましたが、最近では次第にそれ等のことが進んで来て、今では立派にサディスト?として読者諸兄の末席を汚させて頂いて居ります。小生も、貴女と同じように心から話し合つたりする友もなく又、ブレイ等をする機会にも接しませんでした。しかし、それ等の悩みを、いささかなりとも満ちてくれる奇巧を、唯一の慰めとして過して参りました。此の際、小生と良く似た点に興味を感じて居られる貴女と、日頃、押えに押えたアブノーマルな気持を思いきり話

女体切腹風景十二態

(9×13センチ)印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

従来の女体切腹写真の分譲打切りに伴い、マニアの要望により、新しいモデル嬢を煩して新しい感覚によって作成した十二態です。

し合いたいと存じます。貴女の自由を束縛して、小生のサディストとしての夢をかなえて頂ければ、どんなに素晴らしいことなのでしょう。又、同好の士が集って思ひ思いの夢や体験等を、誰にも気がねなく放談出来る機会も得られれば、まことに有意義な素敵な時間を過せることでしよう。

(小泉吾郎)

誌上に、座談会開催の予告を発見し一瞬、喜びに胸を弾ませた。しかし次の瞬間、私は失望のどん底に突き落された。私はソドミアのみによる座談会だと早合点した愛読者といえども、ソドミア以外の人は、私にとって縁なき衆生の

あると云つても過言ではない。それだけに、同志の人々を誌上に散見する時は、私はその人達に肉身以上の愛着を感じる。しかし、一口に同志といつても、ペデあり、ウールありで、それぞれに好みも多種多様で、これ又、いくつかの世界に分れることと思うが、要するに男同志の親しき気安さで、何でも打開けられるという点で共通している。私は是非、ソドミアによる座談会の開かれる機運の至るのを鶴首して待つてゐる者である。そうした気持の底には、終生を共にし愛情を分かち得る相手を得たことを夢のような望みを抱いてゐることを白状せざるを得ない。歯に衣を着せないで云うならば座談会、即ち

実写
写真

磔

(ハリツケ)

三態

略号(はり)

モデル 大塚啓子嬢 大中判印画紙焼付 三枚一組四百円

両手を左右に横木に縛られて身動きの出来ない身体を宙にハリツケられたサジスチックなポーズ。高々と柱に浮き上つて可憐な足首には麻縄がひしひしと喰い込んでゐる。全体重が縄目に掛つて「痛い、痛い」と言つ

て泣き喚く囚女を、そのまゝに放置して表情の変化を余すところなくキャッチした十数枚の中から特に雰囲気の出たものを三ポーズ選んだ。正真正銘の柱に十字型にハリツケた今迄試みられなかった作品。是非一組を。

体
女 浣腸風景十二態

(9×13センチ)印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

さきに発表した浣腸連続フオート(ちよ)の好評に刺激され更に変つた趣向をとり入れ、新しいモデル嬢によって新作を試みました。

ち集団見合となることを望ましい。小生のつましい空想である最後に青葉嶺一氏が誌上から姿を消される由、一抹の寂しさを覚える。新しい氏の作品の登場を心から祈つて止まない。氏の御自愛を心から祈るや切なり。

(兵庫・凡生)

○

内田氏の「小僧と禪」は、一揮一墨以来の私の好きな読物でした。自分の小僧時代にも矢張り、禪と尻の割れる股引を強制的に着せられたことは、今でも忘れられませんが。しやがんだり、あぐらをかけば禪がまる見えになる股引。しかし小僧時代には、嫌でならなかった禪と股引は、今では私より離すことの出来ない着衣です。毎日、六尺禪をして股引、半纏、これが平常着です。六尺禪愛好者は相当おられますが、昔ながらの尻の割れる股引を愛用しておられる方が

おられましたら、お便り下さい。内田様、是非共、文通お願い致します。今夏、七月お盆休みを利用して、小郡まで行くつもりです。お目にかかれたらと思います。

(豊橋市船渡局止 角田新一)

○

六月号のK誌、大層結構と存じます。特に巻頭の春浅き日に「文江の切腹」の本文、挿絵共に絶品だと思います。今回は私が満洲で終戦時、実見しました女性切腹の事実を御知らせ致し度く存じます。昭和二十年の七月、満洲の東部国境の駐留地より、私は百名程の戦友と共に新京に新設の歩兵部隊に転属となりましたが、着京後、直ちにソ軍の参戦となりました。新京にあつた関東軍の司令部は直ちに何処かへ移転したが、市民の連絡手配を怠つた為、新京に在留の邦人間の心理的な動揺は物凄く、日

本軍は戦わずして敗るとでも云う程の影響を与えました。加うるに国境守備の部隊は、余りにも粗末な兵備であり、到底ソ軍の機械化部隊の敵ではなかった為、防備線は直ちに突破され、ソ軍は急速に新京に迫つたのです。私達は新京で最後の抵抗線を形成すべく、市内の要所に設けられた戦車壕を塞として戦うべく壕の完成に努力していましたが、多分、八月十日頃でしたか、市内の某部隊に連絡に出され任務が終つて帰途につきました。途中、市内の広場には、非常動員された四十才位から十七八才位までの人々が、手に手に、或は日本刀、竹槍、棍棒の先にナイフ、出刃包丁等をつけたもの等を、思い思いの武器にして実に悲壮な状景でした。中隊に降りつくと隊長は、私達を前にして「皆の命は私が貰つた。ソ軍は急速に進撃して、今や新京の南方の白城子まで来ている。明朝は恐らく此の地点に襲撃するであらう。諸君は私の下で潔く死んで貰い度い」と訓示しましたが、私には「ははあ私も明朝は死ぬのだな、わざわざ内地から満州まで死に来たようなものだな」と云う位の考えの外、別に感懐は動かさなかつたもので

ず。やがて陣地に帰ると、皆と一緒になつて、そこは満州の公社の社宅街だったので、各家に分宿させてもらひ皆、寝てしまひました。翌朝、点呼を取つていますと、社宅の奥さんが四、五人走つて来て大声で呼びますので二、三人の兵隊が走つて行きましたが、私は丁度、用事もあつたし、別に気にも止めず行きませんでした。しかし、しばらくして「社宅の奥さんが自殺した」と云うので、直に出かけて見ると、窓に近く火鉢の傍で、未だ三十前と思われる女の人が、手にしつかりと短刀を持つて小机に上半身をもたれかかつてと云うよりは、しがみつくような恰好で死んでいます。上半身は裸体となり、下半身、太腿の部分は座蒲団を二枚敷いて、腹一文字に一寸程、斜に切上つて、割けた切口からは腸が露出して畳の上に溢れ、血はあちこちに跳ねて、血の痕手形等を残し、見るも無惨な様でした。腸の露出した状況は、不思議な位おしらかなものです。余り気持のよいものではありませんでした。その後、二、三度自殺した人の屍体を見ました。その女性、夫を召集に取られた処にソ軍の参戦となり、二人の子供を抱

え途方にくれ自殺を選んだものだらうとの事です。

(福岡 千原桐男)

大変、御無沙汰致して居りますが、御誌も休みもなく発刊されておられ、私共愛読者としては大変嬉しく思つております。さて、小生は、御誌が一時姿を見せられなくなりましたので、休刊になつてしまつたのかと、ガツカリしてしまい、一時は食事を思うように食べられなくなつてしまひました。そうした時、先々月の或る日、本

誌の五月号を発見致しました時の嬉しさ、その時の気持は、今でも忘れられません。そして一晩で読んではしまひました。それは野良犬が食物を貰つた時のように、ガツガツとして居りました。読物の素晴らしさ。赤いベチコート、魔教圈NO8、紅山彦、十三人目の奴隷等々、何を読んでも、どれもこれも本当に素晴らしい。又、杉原虹児氏の乳首責、小生は今までもどれほど、こんな乳房責を待ちこがれたことでしょう。筆にも言葉にもあらわしませんでした。何とぞ末永

最新作

女体緊縛写真

花坂道子嬢全裸緊縛集

大中判印画紙焼付、

十枚一組 八百円

可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことのない花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。(略号はな1)

◎花坂道子嬢

股間縛り集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。(略号はな2)

◎以上二集二十枚にて

千五百円

くいつまでもいつまでも続けて発行して下さい。乳房賣も、もつともつと載せて下さい。

(逗子 Y・E生)

北斗生様、お便りありがとうございます。ございました。同好の方々が増えてきましたことを嬉しく思います。京洛生様、南方純様を始めとして、生首礼讃、趣味の一員に加えて頂きましてことを感謝いたします。私の「生首礼讃」の趣味の根源は「女斗美」を発展させたものであります。従って私は、無惨絵マニアであると共に、女斗美ファン、女性御美礼讃者でもあります。京洛生様の小品「大奥裸女血斗」を拝見致して、京洛生様も私と同様な傾向であると拝察致しますが、

花坂道子嬢 優美姿態緊縛選

純黒調大中判印画紙焼付 (タテ十八糎 ヨコ十三糎)

花坂道子嬢全裸緊縛集 (はなはな2) の大好評により更に素晴しい作品の発表を強く要望されていきましたので、ここに前二作とは変わった新しい観

点から狙いをつけた作品を提供いたします。

★ヌード縛り (略号はな3) 二枚一組 三百円

★股間縛り (略号はな4) 二枚一組 三百円

間違つて居りましたら御許し下さい。最初、私は女武者同志の「斗い」を以て「女斗美」趣味に入り、その後、女相撲を知るに及んで、その方へ移つて行つたのです。そして現在では、女性の御美に異常な憧れを持つに至つたのです。特に日本製の裸女が、雪もあざむくばかりの純肌、燃えるような緋縮緬の襦をキリリシヤンと締め込んだ姿態に、限りない憧憬を抱いて居ります。そして、この美しい渾一つの裸女群が一度血に狂つて、凄惨な修羅場を展開する京洛生氏の「大奥裸女血斗」が出るに至つて、私の理想は満されたのであります。しかし、この大奥裸女血斗が無惨絵のシリーズ物のアイディアとして書かれてゐるのに、挿

面がやや簡単になつていた嫌いが無いでもありません。五枚——十枚位の組面にまとめて頂ければ、非常に結構です。若し、この企画が実現して誌上なり代理部分護品なりに次の場面にまとめたらいと思ひます。(一)小太刀、薙刀、七首等、各々の得物を持つて斬合う裸女群像。髪は、まだ乱れるに至つていない。斬り倒された渾一つの裸女が二三、地上に横たわつてゐる。(二)肩を、ざっくり割られて、のけぞる裸女(二十才位)の斜後姿。そして、それを斬り殺した裸女(二十二、三才)の姿。(三)泉水の中で、水しぶきを上げて組打つ二人の裸女(二十才位)髪はすっかり崩れてゐる。手には、それぞれ七首、又は鎧通しを持つてゐる。(四)泉水のほとり、薙刀で肩より袈裟がけに斬られ、泉水の中へ、のけぞり落ちんとする裸女水の中には、一人の裸女が乳を扶ぐられて、こと切れて浮んでゐる。そして薙刀を振り下した裸女の後姿。(五)組んずはぐれつ揉み合う二人の裸女。(六)年増女と二十二、三才位の女。(七)若い女が組敷かれ乳房を抉ぐられてゐる。(八)同じ年頃の女に組敷かれた年増。腹を真一文字に切り裂かれて、咽喉を掻き

切られてゐる。(九)首をもて遊び、血のしたたる七首を持ち、相手の裸女の尻に片足をかけた裸女の立姿(和製サロメの図)。(十)相手の裸女を斬り殺したが、脇腹に深傷を負つて乳房を抉つて自刃する裸女(二十才位)。辺りには裸女の屍が散乱してゐる。(十一)生き残つた者はない修羅場の血の海の中に横たわる、裸女の屍の山。京都、K・N生様、同感の至りです。今後、女斗美記事が増えるように、お互に努力致しますよう。同好の方々に京洛生様、北斗生様、南方純様、始め皆様の御健闘を祈り、筆をおきます。(K・K生)

誌上を借りて菅雅子さんに御連絡を希望する者です。K・K誌は創刊当初から、折に触れて愛読して居りますが、通信をするのは今回が初めてです。先ずは編集者に敬意を表します。近頃の社会情勢では、到底、以前のような編集は大変だと思ひます。人間は、誰しも生活の重荷を忘れたい時があります。現実の冷さがやりきれない時、人間はどうするでしょう。人を殺したり、酒に溺溺出来る人は幸福な人です。理性がこのよう

次号(九月号)の本誌は七月下旬発売です

ことを許してくれぬならば、その人は夢の中に逃避するしか仕方ありません。想像の世界なれば、誰もがサド侯爵や暴君ネロにもなつて、自分に好ましく無いものを苛めてくれますからね。だが一人の人間のイメージなぞの知れたもの、絶えず新しい刺激を求め、此の世界では、陳腐なもの、直ちに飽きられます。此の泉の源としてのK誌の使命は大きなものです。さて、菅さん、小生も一度適当な女性と(勿論マゾヒスト)交際して見たいと思つて居つて居たのですが、今までその機会がありませんでした。一介の勤人では必要な金もなく、また金で自由になる女なんて余りにも味気ないですものね。やはりこれはプレイなので、両方で納得がいかなければ永続するものではありません。また拘すべき味わいもないと思ひます。小生も男ばかりの三人兄弟の末っ子として、貴女と同じように兄達を年令が離れてゐるために比較的孤独に育ちました。少年後期より乱歩、谷崎、等の悪魔主義的小説を興味深く読み乍ら

大人となりました。そして、すでに三十五才、人生の半ばを過ぎました。何と味気ないことでしょう。人間だれしも、いじめたい、いじめられたいと云う願望があります。だが、これは恥しいことなので、誰にでも話せることではありせん。それがお互に云いあえる友達があつたら、これはどんなに楽しいことでしょう。一度、お逢ひして御互の気持の疏通を計りたいと思ひます。但し小生、雑学は大分修めましたが、系統だった古典文学の資料蒐集なんてのは苦手で、から御勘弁の程を。貴女の可愛らしいマゾを小生は希うのです。現実にはプレイ出来なくとも、想像の世界だけ小生と貴女とで楽しい一刻を過すのも、また良き人生の一頁だと思ひませんか。御連絡を期待します。(京都 C・M生)

○ 東京の渡辺様、久保様、見田様、A生様、皆様お元気ですか。最近この読者通信にも同好の方々の投稿が増して来て、大変嬉しく存じます。毎月、K誌が送られて来るの

を楽しみにして居るのですが、毎月のように男性ソドミのM・S小説が少く、おつきりしている一人です。小生の如く新潟に住んで居りますと、なかなか同好の方と会う機会もなく、K誌のみが只一つの慰めなのです。是非、一ヶ月に三篇位は男性ソドミのマゾ、サド小説を載せて下さい。小生は時折東京に出張で上京することがあります。若し、よろしかったら小生の体を提供致します。思う存分に格下下さい。上京の際、御指定の処へ参ります。裸の肌にキリキリと喰ひ込む縄、逆に吊られる様が目に浮んで、夜も眠られぬ日もあります。是非、同好の方のお便りをお待ちして居ります。尚、新潟の北海生様、男性で宜敷かつたら一度御連絡下さい。(新潟 山本)

○ 太陽の季節到来の折、ニニクを誇るK誌の面目を輝かしいものとするため、是非お奨めしたいのが別冊「男性特集」の刊行です。男子専科ではないが、最近の雑誌週刊誌はピンからキリまで「男の世界」を挿入しています。それも流行のG・ボーイ物でなく、例えば「男色宮本武蔵(五味康介)」

「猿飛変型(小田仁四郎)」の如き面目躍如たるものです。それ等は観光新聞小説「とことんやれ」に長期連載された挿画の「権の美侍」を彷彿とさせる壮快さ、ズバリで温気がありません。最近、女流で筋肉マード専門の写真家が銀座で作品を公示している始末です。タイムリー、又は緊要一番、往年の小説「男色の海」の感覚を盛った当誌の存在価値を十二分に発揮、主張せる新企画を望むものです。今こそ時宜を得た、憚るところ何一つない出版界の現状であり、世の風潮も又、それを要求しているものと確信する次第です。(原 俊行)

○ 「奇タ」と親しむ様になつてから久しくなりますが、お便りするのにはこれが最初です。初信そうそう不平ばかり並べたてる破目になりそう、いささか気がひけますが思い切つて言わせていたたく事にします。小生は、いささか絵心があるせいか、「奇タ」の口絵、挿絵について常に注意してゐるので、六月号を見て、その挿絵が一変したのに驚きました。こうやって変えられて見ると雑誌の性格いや、作品の性格まで変つてしま

つた様に思えるからです。我々は知らず知らずの中に挿絵の美女の運命に一喜一憂していたわけで、画家が変わると従来の主人公まで違つた人間になつた様に思えて何かそぐわない気持ちになるでしょう。ですから、第一のお願いは、出来る限り一つの作品の挿絵は始終一人の画家にお願いしたいという事です。それから、これは度々読者通信の欄でも指摘されている事です、矢張り挿絵は内容に忠実にしてほしい。そうしてもらわないと、これ又、頭の中を駆けめぐり空想が停滞してしまうからです。挿絵はすべからず、本文を助けて読者の空想（或は夢想といつた方がよいかも知れません）を助けるものであつてほしいわけです。六月号について見ますと大体に於て非常に忠実に、内心ホクホクしていたのですが、ああ、私の最も期待する「魔教團NO8」に到つてたちまち、天上から奈落の底に突き落された気持ちになりました。美加子は、本文によりますと「衣は片鱗さえも許されなかつた」等なのに絵では慈悲深い画家の手でパソツを許されているではありませんか。従来のMK氏の絵が忠実であつただけに、ここでこんな点で

私の気持ちをブチこわされてしまふ本当に髪をかきむしりたい気持ちでした。お願いですから、無慈悲かも知れませんが（サディストに慈悲は必要でしょうか？）美加子のパソツを来月号から引き剥いて下さい。美容病院に入院中の悩める美女愛子も、ちゃんと裸になつておとなしくしているではありませんか。それから、ついでにもう一つお願いは、美加子をいじめめる人の顔もどうか書き添えてほしいという事です。MK氏の絵がそうであつた様に——。でないと貧弱な私の空想は発展しないのです。私は持論（？）から云つて、絵そのもののの中にドラマを見たいのです。MK氏のそれは、やや私の気持ちを満たしてくれていたのですが——「パカに美加子につらく当るんじゃないか？」とおつしやるのですか？ええ、そうですとも、私は彼女を愛しているんですから。愛が深ければ深い程、その女性を隠えさせたいというのが、サディストの宿命なのですから——。読者の皆さん。いや、サディストをもつて任じていられる読者の皆さん。私の願ひはパカけていってほしいのか？いや諸手を挙げてサンセイだ——とおつしやるのでしよう。な

らば、私のこの悲願にせいせい御声援下さる様、伏して（他人にヒレ伏すのはサディストの面目にかかわるかな？）お願い致します。
妄言多謝
(C・C)

○

青葉慎一様、緊揮愛男様、この欄にてお便りを載きました。文通をとお話で、こちらからもお願い致しますが、実は僕は、ある公職についている縁で、都会ならともかく狭い地方のため世間の眼がうるさく、紙上に住所を発表する事が出来ませんので、お許しをいただきたいと思います。殊に青葉様のような斯道の権威の方と御交際を願えたなら、どんなに楽しい事かと想像しておりますが、以上のような事で、当分一人でK誌の皆様の記事だけを楽しみに見て暮したいと思つています。ソドミアというのは本当は孤独で、自分の肉体だけを愛していくものだと思ひ信じておられます。僕の住んでいる房州の漁村は気候に恵まれていない、冬でも防寒具をつけないで温かさなので、六月頃からは裸体で暮しています。裸の地方は外房で白浜から女良、太見（仁右門島）地方で、縄を揮代りに使うのは、

古老の話によりますと船玉様に対する信仰で、結びという古代の美朴な信仰から来たものです。折口信夫博士の古代研究にもこの事が詳述されていますが、船玉様は非常に女性を忌み嫌つて清浄な男子を好むそうで、女性が乗ると漁船はシケを食つたり、難儀を見るとの事で、女性は一切近づけません。又舳の綺麗な童貞の青年一人乗船すると、この危険を避けられたり大漁になったりするそうです。そこでその青年はその船では大切にされるそうです。乗船する時は禪をつけていますが、沖に出て漁になりますと舳が血で汚れるためもあり、又清浄を意味して裸になるそうです。勿論、海上でもあり、男同士の世界ですから羞恥感はいくありません。然し、この場合も同性同士の交渉はタブーであつて船玉様に対する敬虔な態度は船が着くまで厳守するそうです。そんな習慣から平素河岸でも裸でいる事が多いのだらうと思ひますが、不思議と清らかな光景です。もう一つの理由は、もし難船した時に腰に縄を結んであれば、そこに手をかけて救出する事が容易だからだという事です。僕は田舎者でカメラのようなものは持つていません

(千葉県 室壮介)

(西宮 Y・T生)

(青森 Y・T 生)

(大阪 男子刺青生)